

## 2章

# シナノにおける新来文化の受容



# シナノで須恵器が用いられ始めた頃

## 1 はじめに

以前、関東地方の須恵器について書いたことがある（文献1）。また、その後長野県内の須恵器についても同様な視点でまとめたことがある（文献2・3）。その当時と現在の初期須恵器・古式須恵器（文献4）の出土件数をくらべると、その資料の増加に目を見はるものがある。長野県内においても例外ではなく、千曲川や天竜川の各水系を中心にその貴重な資料がみられ、シナノの性格をあらわすような出土状況を示している（第1図）。

今回扱う資料は土師器編年という和泉期から鬼高期にかけての5世紀中頃から6世紀代を中心とし、須恵器が出土した住居跡（集落）・古墳・祭祀跡・生産跡のそれぞれについてふれてみることにした。小論を書くにあたっては、須恵器の型式観については、田辺昭三氏（文献5）の業績によるところとし、また、土師器の型式観については、杉原荘介氏（文献6）による業績にその大枠をよることとした。

## 2 住居跡出土の須恵器

住居跡から出土する初期須恵器・古式須恵器の出土状況については、大阪府陶邑古窯跡群周辺地域や各地方窯周辺地域において多くの出土状況がみられ、単純に考えて、生産地域から距離が遠くなるにつれてその量は減少にむかうといえる。また畿内においても集落内からの出土をみるものの、とくに初期須恵器については溝や土壇内からの出土例が多い（文献7）。

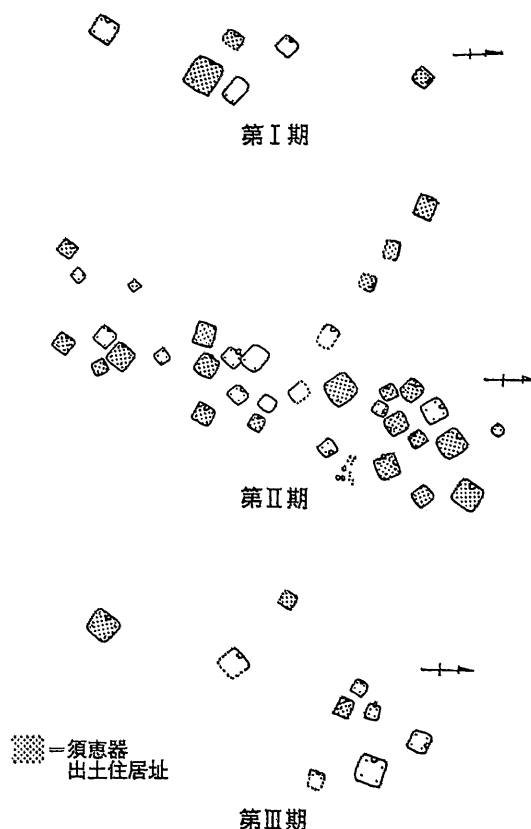
東国に位置するシナノにおける住居跡出土の須恵器については、関東地方の群馬県（上毛野国）・埼玉県（武蔵国）・千葉県（上総国）などのような総体的な量はみられないが、特筆すべき点は、南信地域の飯田・下伊那地域や北信地域の善光寺平南域の限られた集落内から初期須恵器・古式須恵器の出土がみられることである。以下、県内におけるいくつかの調査事例を参考にしながら、その性格について考えてみたい。

飯田市天伯B遺跡・山岸遺跡は切石遺跡群に属し、それぞれ遺跡名は異なるものの、松川右岸沿いに細長く続く段丘上に位置し、同一遺跡と考えられ、ここでは一遺跡として扱うこととする（文献8・9）。天伯B・山岸遺跡ではカマドを有する鬼高期の住居跡が63軒（天伯B = 30・山岸 = 33）確認されており、各住居跡の時間差を第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期とわけられている。第Ⅰ期のものは6軒（天伯B = 1・山岸 = 5）で須恵器が出土したものは3軒、第Ⅱ期のものは39軒（天伯B = 13・山岸 = 21）で須恵器が出土したものは22軒あり、第Ⅲ期のものは9軒（天伯B = 6・山岸 = 2）で須恵器の出土したものは7軒であった。（第1図）この集落の特徴は、土師器の高杯の出土率が高いこと、そして特に天伯B地域では石製模造品の出土の多いことが指摘できる。鬼高式土器とともに出土

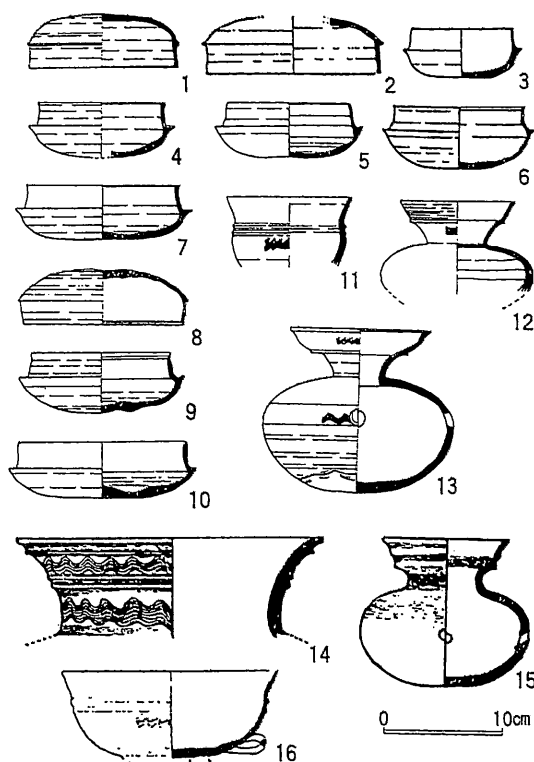
した須恵器の型式については、Ⅰ期・Ⅱ期ともにTK208からTK23型式の時期でおさえられるものであろう。

須恵器を出土した住居跡の規模については、Ⅰ期の山岸16号住居跡(4.3×6.7m)や山岸21号住居跡(6.7×6.7m)では須恵器の出土はなく、山岸36号住居跡(8.7×9.0m)からは須恵器が出土している。Ⅱ期については天伯B2号住居跡(7.0×6.6m)や天伯B5号住居跡(4.3×4.4m)から須恵器が出土しており、逆に天伯B32号住居跡(6.0×6.0m)ではその出土はみられない状況である。このように一概には大型住居跡に須恵器の所有がみられるものではない。しかし傾向として、特にⅡ期を中心に一辺が4m以下の住居跡では、須恵器の出土がみられないものが多い。天伯B・山岸遺跡の性格については前記のごとく東国集落では類例の少ない状況を呈している。この時期、東国においてこれだけの須恵器が一集落内に存在しえたものは、埼玉県児玉町のミカド遺跡(文献10)や後張遺跡(文献11)といくつかを数えるにすぎない。ミカド遺跡や後張遺跡については、その近接地域に在地の初期須恵器・古式須恵器窯の存在が考えられている。

天伯B・山岸遺跡はその地理的条件から東海地方の須恵器生産との繋がりが考えられるが、大阪府陶邑古窯産と考えられる須恵器が多く搬入されている。天竜川水系による拠点集落でありえたための入手であったのか、あるいは当地域の他遺跡出土須恵器とも関係してくるが、飯田・下伊那地域に早い時期の在地生産が想定されるのであろうか(第2図1～



第1図 天伯B・山岸遺跡須恵器出土住居跡 (文献2より)



1～13=天伯B・山岸遺跡 14～16=中原遺跡

第2図 住居跡出土須恵器1 (文献2より)

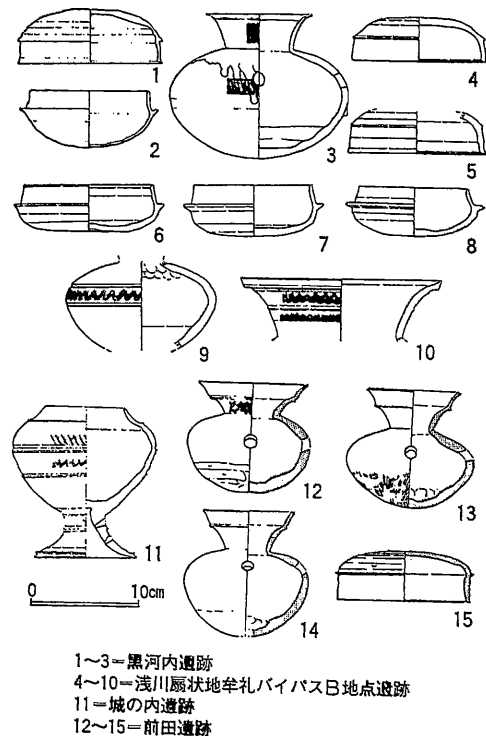


13)。

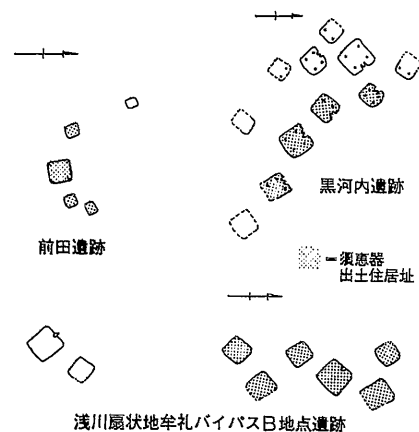
下伊那郡阿智村の中原遺跡（文献12・13）では、古墳時代の住居跡13軒のうちカマドを持ちえず、また土器の諸特徴から和泉期とされる住居跡3軒から初期須恵器が出土している。H-13号住居跡からは甕が、H-11号住居跡からは甕が出土しており、H-13号住居跡からは把手付無蓋高杯が出土している。またH-10号住居跡からは、須恵器を模倣したと考えられる甕が出土している。これらの須恵器はTK208型式と考えられる（第2図14～16）。

飯田市黒河内遺跡（文献14）では、カマドを有する鬼高期の住居跡が11軒検出されているが、そのうち4軒で須恵器が出土している（第4図）。このうち5号住居跡ではTK208型式からTK23型式と考えられる甕出土しており、また10号住居跡からはTK23型式あるいはTK47型式の時期とされる杯蓋と杯身が出土している。この10号住居跡出土の杯身内面にはスタンプ痕が残り、これは大阪府陶邑古窯跡群例ではMT15型式からTK10型式の段階に認められるものであることから、陶邑生産のものではないことが示唆される。また住居跡の規模については、3号住居跡のように小型（3.65×3.0m）の住居跡からも須恵器が出土している。これらの須恵器は陶邑のものとは異なり、東濃における生産品の可能性が示されているが、天伯B・山岸遺跡同様、在地生産の可能性も考えられる（第3図1～3）。

飯田市恒川遺跡群からも注目すべき資料が出土している。当遺跡群内の田中2号住居跡より杯蓋・杯身が、また倉垣外70号住居跡からは把手付無蓋高杯、恒川A遺跡より樽形・甕・甕・有蓋短頸壺の蓋が出土している。いずれもTK216型式・ON46型式・(TK208)型式のものであり、これ以外にも初期須恵器・古式須恵器といわれるものが数多く出土している。この中で『恒川遺跡群出土の初期須恵器の中には、畿内的でないものが含まれており、陶邑窯ではない初期須恵器の産地とな



第3図 住居跡出土須恵器2（文献2より）



第4図 各遺跡による須恵器出土住居跡（文献2より）

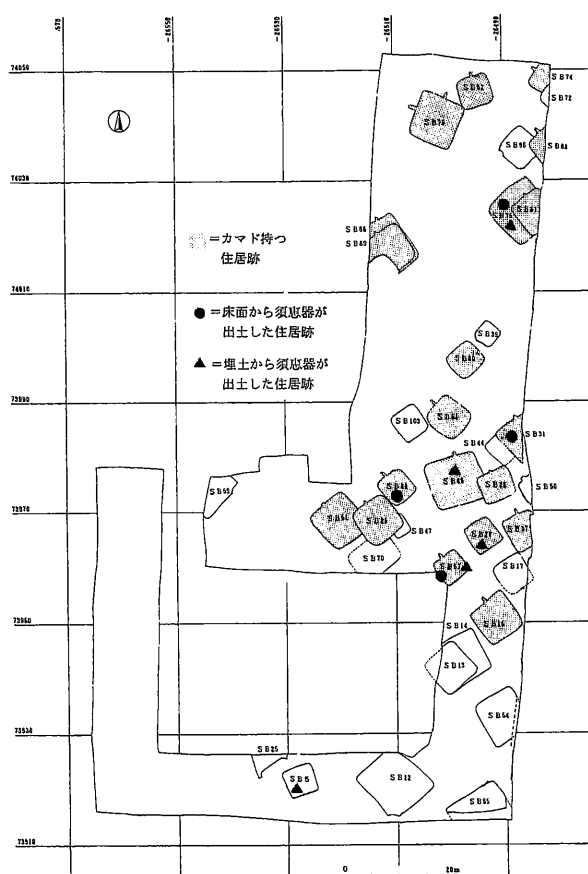
ると伊那谷では地理的位置から、尾張東山窯が産地として想定できる（文献 15）。しかし「（尾張、伊勢を中心とする東海地域の須恵器産の初段階では）少なくとも各窯の生産が特定の古墳などへの供給を計るために成立したことは疑えず、不特定の広範な地域への供給を目的としたものではない」という中村浩氏の指摘もあり尾張窯産とも決めがたい。したがってここでは、恒川遺跡群の初期須恵器は、畿内と東海の両方の地域から持ち込まれた可能性があることを指摘するにとどめたい。』としている（文献 16）。

飯田・下伊那地域では、切石遺跡群や恒川遺跡群に初期・古式須恵器が集落からまとまりをもって出土しているが、周辺古墳との関連については考察できるまでには至っていない（文献 17）。

次に北信地域はどのような状況であろうか。

長野市の浅川扇状地遺跡群の牟礼バイパス遺跡ではB地点より和泉期から鬼高期にかけての住居跡が8軒確認され、そのうち6軒よりTK216型式・TK208型式を中心とする須恵器が出土している（第4図）。またこのうち15号住居跡・16号住居跡から石製模造品（有孔円板・勾玉・剣形）が出土している。これらの住居跡はそれぞれカマドを付設するものとしないものがあり、また土器個々については和泉式土器的な特徴を残すものがある反面、わずかに模倣杯や模倣甕を中心にした鬼高式土器的な特徴を示すものなどが混在しており、まさしく和泉期から鬼高期への移行期の集落といえる。この調査は幅16mの調査区によるもので、もし当集落を面的にとらえれば、より多くの好資料を得られたかと考えられる。出土住居跡の規模については、14号住居跡（5.1×5.2m）や3号住居跡（7.7×7.1m）では須恵器が出土しているものの、17号住居跡（7.3×7.6m）からは出土していない。集落の全体像を確認したものではないが、一概に須恵器が大型住居跡にのみ発見されうるといえる集落ではなさそうである（第3図4～10）（文献 18）。

本村東沖遺跡ではTK208型式からTK47型式の須恵器（杯身7・杯蓋2・高杯2・壺6・はそう2・鉢1・器台1・甕10ほか甕片など）が出土している。当該時期の竪穴住居跡は38軒調



第5図 本村東沖遺跡須恵器出土住居跡と  
カマド付設住居跡（文献 19 より作図）

査され、この内 SB15 竪穴住居跡貯蔵穴から杯身 1 点、SB30 竪穴住居跡床面から杯 1 点、SB31 竪穴住居跡床面から杯 1 点が出土し、それぞれ TK208 型式～TK23 型式と考えられている。他の須恵器については埋土中他からの出土である（文献 19）。これらの須恵器は陶邑窯産須恵器に類似しているものの、飯島哲也氏のように在地窯である松ノ山窯跡との関連をさぐりながら在地窯産の可能性を考えようとする（文献 20）一方、風間栄一氏は長野市地附山古墳群上池ノ平 2 号墳出土須恵器との対比から、①胎土に白色砂粒を多量に含む、②色調は特徴的な青灰白色を呈する、③焼成は軟質傾向である、④黒色斑点状のいわゆる「ガス抜け」が明瞭に観察できる、⑤回転ヘラ削り調整は非常に粗い、という特徴が観察できるし、これらの特徴が本村東沖遺跡や近隣の下宇木遺跡、三輪遺跡、吉田古屋敷遺跡出土須恵器にもみられることから「浅川型須恵器」とし、陶邑窯跡に類似した松ノ山窯跡製品とは異なり、尾張地域の影響下に成立した特定の生産地のものとした（文献 21）。

また本村東沖遺跡では半数の 19 軒にカマドが付設され、間仕切り構造遺構も伴っていた。カマドの付設については TK208 型式段階が考えられ、シナノで最も早くカマドが付設されたムラの一つと考えられる（文献 19）（第 5 図）。

このことを考えれば、早い段階での須恵器の使用やカマドの使用など、新来文化をいち早く積極的に受け入れたムラであったと考えられる。

本村東沖遺跡を含め牟礼バイパス B 地点遺跡など、浅川扇状地地域はシナノでも早い段階で新来文化を受け入れた地域であったと考えられる。このことを善光寺平南域で考えるならば、大室古墳群などでみられる積石塚古墳や合掌形石室などの構築にも関連する事象とも考えられる。

千曲市城の内遺跡では把手付有脚有蓋短頸壺が出土している。当遺跡は竪穴住居跡 19 軒・祭祀遺構 1 基が確認されているが、その詳細については不明である。しかし木下亘氏による検討によれば、「…城の内遺跡出土土師器のうち、第一様式としてまとめられたものに伴った可能性が高いといえるだろう」とし、「…この様にみた場合 10・15・18 号の住居址の時期に伴う可能性が一番高いといえるだろう」としている（文献 22）。このようにその時期や出土遺構について検討されているが、何よりも当遺跡よりこのような土器が出土していることが当地域の性格を考えさせられるうえで好資料であり、また当遺跡周辺においても類似資料の出土がみられるようである。当資料は県内における初期須恵器が搬入される以前あるいは近接した時期のものといえよう（第 3 図 11）。

次に東信地域の資料についてみると、北佐久郡御代田町前田遺跡（文献 23）では和泉期から鬼高期にかけての住居跡が 11 軒確認され、その時期差によってⅠ・Ⅱ・Ⅲ期とわけられている。Ⅰ期とは住居跡にまだカマドが付設されていない時期のものである。Ⅰ期の住居跡 5 軒中 4 軒から TK208 型式と考えられる初期須恵器が出土している（第 4 図）。また須恵器を伴った住居跡中最大規模の H-61 号住居跡（8.1 × 8.3 m）からは石製模造品（有孔円板）が出土している。Ⅱ期とはカマドと炉を付設している住居跡を含み、

まさしく炉からカマドへの移行期のものであるといえる。Ⅱ期の住居跡からは須恵器は検出されていない。土師器についてはⅠ期・Ⅱ期ともに模倣杯等を含まず、和泉式土器の様相を残すものである。このようなことを考えあわせると、Ⅰ期は和泉期最終末に位置し、Ⅱ期以降から鬼高期の開始と考えてよからう（第3図12～15）。

佐久市舞台場遺跡（文献24）では、鬼高期とされる住居跡が10軒確認され、そのうち2軒から須恵器が出土している。H-23号住居跡からは把手付甕が出土しており、H-25号住居跡からは杯身が出土している。この杯身についてはTK73型式と考えられ、把手付甕もさほど時間を隔てない頃のものと考えられる。それぞれの住居跡にカマドが伴っていたかについては攪乱によって不明である。しかし当地域でこのような須恵器が用いられていた事実は重要である。

佐久市大井城遺跡（文献25）のH2号住居跡（6.85×7.70m）からは、TK208型式からTK23型式と考えられる杯蓋4点・杯身1点が一括で出土している。この住居跡はカマドを有する鬼高期のものであるが、土師器個々には和泉式土器の様相を残すものがある。住居跡の規模については大型住居に属するものであるといえよう。

以上、初期須恵器・古式須恵器を出土する住居跡（集落）のいくつかをみてみた。これらの資料から考えられるいくつかを述べてみたい。まず須恵器の入り方については、周知のとおり天竜川水系及び東山道の入口ともいえる伊那谷に須恵器が集中している状況がみられる。そして東山道は北上していくわけであるが、一概に東山道に沿った出土傾向を示しているともいいがたく、幹線道と生活空間への須恵器供給先は一概に同一とはならない可能性も考えられる。また須恵器出土の集落跡や住居跡については、特に天伯B・山岸遺跡、牟礼バイパス遺跡B地点、本村東沖遺跡や前田遺跡などのように初期須恵器や古式須恵器の入り方の割合が他周辺集落と極端にちがいをみせており、その性格のちがいを感じさせられる。おそらくは各地域における在地中・（小）首長の存在を考えさせられる集落であり、各地域の拠点集落であったであろうと考えられる。また数少ない須恵器を持ちえた集落内での住居跡については、その各集落内の中核的な存在であったであろうことを考えさせられる。これに関連して住居跡の規模についてみると、天伯B・山岸遺跡のように多くの須恵器の供給がみられる所では大型住居跡への集中は規則的にはみられないが、全体的な傾向としては、平均面積よりも大きな住居跡にその出土がみられ、また前田遺跡や大井城遺跡のように集落によっては他住居跡よりも大型の住居跡からの出土がみられる（文献1・2・3）。須恵器所有＝大型住居跡として考え、単に大型住居跡に集落内での優位性を見出すのであれば、やはりそれはある一定の所有者＝中核的存在者（地域における小首長＝新しい支配者層）を想像するしかないであろう。また大型住居跡が集落内での公的空間として利用され、住居空間そのものが集落内における中核的存在であるとしたならば、そこに所有されていた須恵器は集落内での公的所有物であった可能性も考えられよう。

先に述べた拠点集落内ではさらに検討を要するが、他の一般集落において、ある一定の

所有者の存在を考えた場合に5世紀後半からみられる群集墳の発生の中に、須恵器を所有した人々の存在が見出せるのではあるまいか。そして、特に東国においてはこの初期須恵器・古式須恵器の時期だからこそ、須恵器所有＝群集墳の発生＝古代社会における新たな階層分化（新しい支配者層の成長）を見出せるのではあるまいか。

### 3 古墳出土の須恵器

東国において初期須恵器・古式須恵器が出土した古墳として最も顕著なものは、115文字の銘文が刻まれた鉄剣を出土し有名となった埼玉県稲荷山古墳であろう（文献26）。この稲荷山古墳出土の須恵器は「伝稲荷山古墳くびれ部出土」とするものであるが、有蓋高杯・蓋・甕などが出土しておりTK23型式からTK47型式に属するものとされている。また千葉県稲荷台1号墳からの出土資料として、銘文の刻まれた鉄剣と須恵器が出土している（文献27）。稲荷山古墳同様、鉄剣は埋葬施設からの出土であり、須恵器は外表土器群からの出土のようである。須恵器の型式はTK208型式に属するものであり、稲荷山古墳よりは早い時期のものであった。長野県内の古墳における須恵器の用いられ方はどのような状況であろうか。

まず南信地域からみると、飯田市石子原古墳（文献28）は南北19.2m、東西18.6m、高さ1.75mの円墳である。4基の墓壙があったが、そのうち2基は破壊を受けていたようである。第1主体部は箱式石棺、第3主体部は割竹形木棺のようなものであり、残りの第2・第4主体部の2基は掘り込み部分のみの確認であった。周溝からはⅡ期の提瓶（岐阜・愛知産）が出土しており、第2墓壙内からは蓋付広口壺が鹿角製刀子や土師器の甕とともに出土している。時期的にはTK47型式からMT15型式頃の所産と考えたい。

伊那市阿原古墳（文献29）は南北15m、東西10m、高さ2mの円墳である。埋葬施設は粘土床で直刀や鉄鏃が出土している。須恵器は墳丘裾部の葺石帯内からはそうが2点出土している。須恵器の型式についてはTK23型式と考えられる。

飯田市畦地1号墳（文献30）は南北19.8m、東西15m、高さ3～5mをはかる円墳である。埋葬施設は横穴式石室で長方形を呈しながら奥壁でわずかにL字形をなすものである。出土遺物は石室内より銀製垂飾付長鎖式耳飾・玉類・金環・馬具・武器等に土師器や須恵器も出土しており、副葬されていた。須恵器についての詳細は不明であるが、耳飾からその年代を考えるならば5世紀末葉頃を中心とする時期と考えられ、この頃早くも横穴式石室が導入され、また土器類も副葬化されていたことになり、このような例では早い頃のものといえる。また墳丘周辺からも土師器・須恵器・埴輪片が出土している。

飯田市井ヅエ1号墳（文献31）は直径16.4mを測る円墳であり葺石中より須恵器・土師器が出土している。須恵器は広口短頸壺・小型壺・甕・長頸壺であり、土師器は杯・高杯であった。また副葬品として剣・鉄鏃類が出土している。

井ヅエ2号墳（文献31）は直径13mを測る円墳である。遺物は周溝内より須恵器の杯身・杯蓋が出土している。

飯田市ツカノコシ古墳（文献 31）は直径 16.5 m を測る円墳で、遺物は須恵器・土師器・直刀・剣等が出土している。出土須恵器は広口壺・甕・杯身で、そのうち広口壺は「…きわめてその成作技法が雑であり、一見して地元産の須恵器であることがわかる」とされ、在地生産の可能性を示唆されている。

諏訪市一時坂古墳（文献 32）は直径 20 m の円墳もしくは隅丸の方墳であり、埋葬施設は木棺直葬がほぼ北向きに 4 から 5 基並列していた。副葬品としては直刀・鉄剣・鉄鏃・玉類がある。須恵器・土師器はそのほとんどが周溝内からの出土であり、7 つの土器集中部分に分けられる。（第 6-1・2・3 図）このうち 3 ヶ所で特に須恵器・土師器が整然と配列状態で検出され、それぞれが多少の差異はあるものの、基本的には土師器の高杯が 4 個ずつ列に並べられており、高杯の上に土師器の杯・碗・甕・短頸壺、須恵器の杯身・杯蓋・甕がのせられて出土した。高杯にのせられていないものでは土師器壺、須恵器甕・有蓋高杯などであった。須恵器の型式は TK208 型式から TK23 型式のものであり東海産的な様相のものも含まれているようにも考えられる。土師器は鬼高式土器といえよう。5 世紀



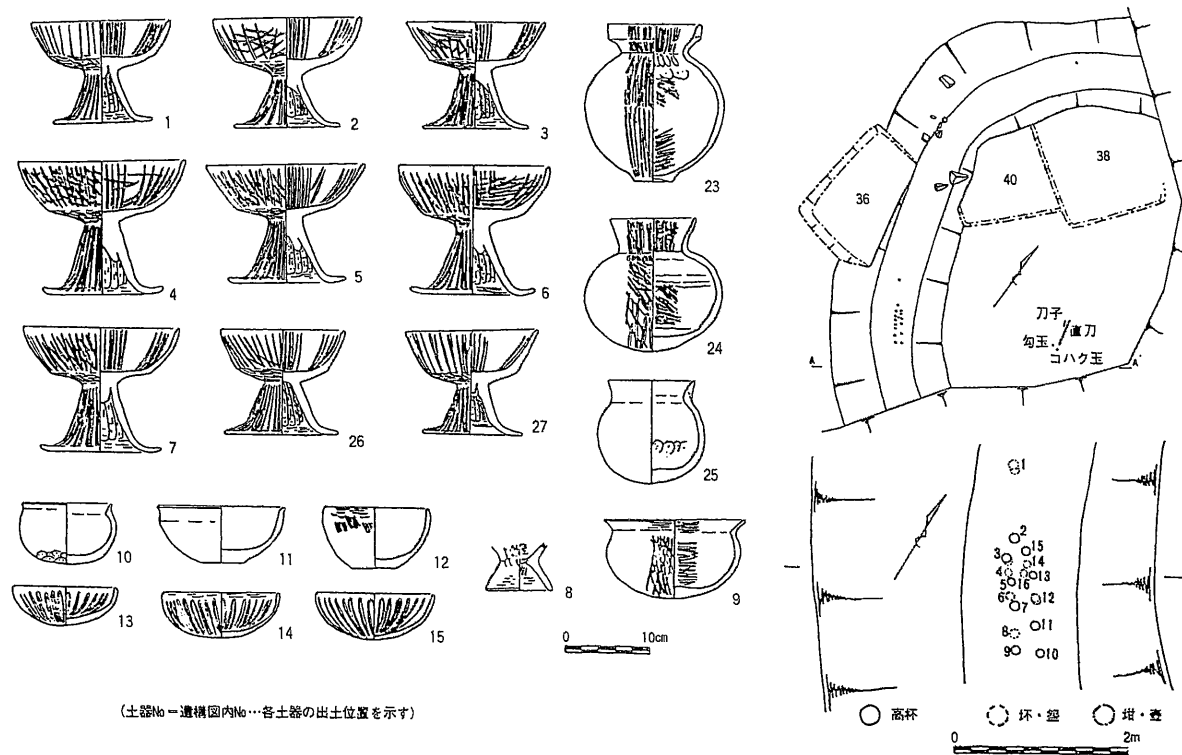
第 6-1 図 一時坂古墳遠景（文献 32 より）



第 6-2 図 一時坂古墳近景と墓前祭祀跡（文献 32 より）



第 6-3 図 一時坂古墳墓前祭祀状況（文献 32 より）



第7図 諏訪市本城1号墳周溝内土師器出土状況 (文献33より)

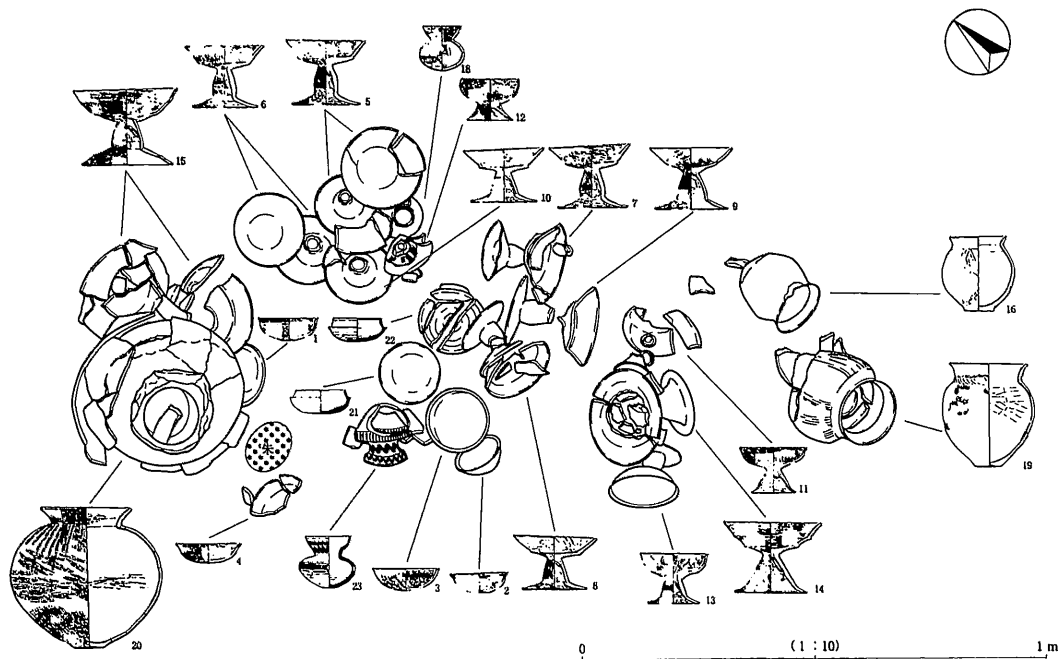
後半に須恵器と土師器を用いて整然と墓前祭祀が行われたことがうかがえる良好な資料である。

諏訪市本城1号墳(文献33)は直径12mの円墳である。埋葬施設は木簡直葬と推定され、直刀・刀子が出土している。須恵器の出土はないものの、周溝内より土師器の高杯9点が2列に並べられ、その上に杯・盤・埴・壺などをのせ、供献用土器として並べられた箇所が確認されている。土師器の型式は和泉式土器といえよう(第7図)。

諏訪市本城2号墳(文献33)はほぼ直径16mの円墳と考えられる。2号墳は周溝内からの遺物のみであり、土師器甕3点・高杯2点、須恵器大型甕が1点がある。土師器の高杯は和泉式土器と考えられ、須恵器はTK208型式と考えられる。

中信地域については、若干時期が下がるが、穂高町有明古墳群・松本市中山古墳群例についてみてみたい。穂高町有明古墳群においては、祝塚古墳(文献34・35)から長脚二段透し有蓋高杯が副葬品として出土しており、土師器や馬具・直刀・金環・玉類・金鍍金菱形鉄製装飾品がともに出土している。この須恵器はTK43型式に属するものであると考えられる。当古墳に墳丘は半壊し現在では径11.5m、高さ0.8mの円墳となっている。埋葬施設は横穴式石室であるが、その残存はわずかである。また、犬養塚古墳や魏磯城窟古墳からも石室内より須恵器が出土している。

松本市中山古墳群の柏木古墳(文献36)は径17m、高さ1mの円墳で、埋葬施設は横穴式石室である。副葬品は玄室最奥部から玉類・金環・直刀・馬具・須恵器提瓶が、玄室南東隅から須恵器有蓋高杯・有蓋高杯蓋・壺・提瓶、土師器高杯・はそう・手捏ねによる



第8図 篠ノ井遺跡群（主）長野上田線塩崎バイパス地点 SZ004（高畑4号墳）周溝内土器出土状況  
（文献37より）

皿、ほか直刀・鉄鏃・馬具・金環が出土している。また他に羨道口付近に須恵器有蓋高杯・有蓋高杯蓋・金環等が散在していたようである。須恵器の型式についてはTK10型式に属するものと考えられる。有明古墳群よりは一段階早い時期に土器の副葬化が開始されたようである。

次に北信地域についてみると、篠ノ井遺跡群（（主）長野上田線塩崎バイパス地点）では、5世紀代の古墳周溝への土器を用いた祭祀行為が発見された。

その中で注目されるのが、SZ001（高畑1号墳）、SZ003（高畑3号墳）、SZ004（高畑4号墳）、SZ0029（高畑29号墳）である（第8図）。

SZ001（高畑1号墳）には須恵器杯身が1点、SZ003（高畑3号墳）には須恵器高杯が1点、SZ004（高畑4号墳）には須恵器杯身2点・甕1点が用いられていた。SZ001（高畑1号墳）の須恵器杯身は単独での出土であり、SZ003（高畑3号墳）では1列・2列と土器が並べられ土師器は逆位で発見されたが、須恵器高杯は2列目に用いられ逆位ではなく完形で発見された。このことから土師器と須恵器の取り扱いが異なっていたと考えられている。調査担当者の風間栄一氏は「二列の高杯は列ごとに器形や調整方法が同じ高杯によって構成され、混在しないという特徴を持っている。これは列をなして配置された土器群が意図的に選別されていたことを示している。つまり配列以前に使用単位がこの列に反映されている可能性が想起され、それが同一箇所に配置されるという廃棄パターンを示す良好な状況と評価できるであろう」とした。

またSZ004（高畑4号墳）は5群に土器が配されていた。それぞれの土器の個体数は1群4点・2群5点・3群8点・4群3点・5群2点であり須恵器3点は3群から発見され、



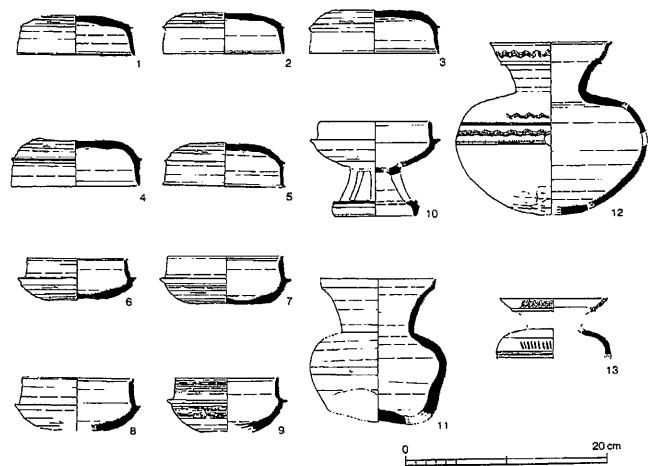
杯身2点は伏せられて発見され、甕1点は壊れて発見された。須恵器甕については意図的に破碎を受けた可能性が指摘されている。

SZ0029（高畑29号墳）は狐塚古墳同様土師器のみの使用であった（文献37）。

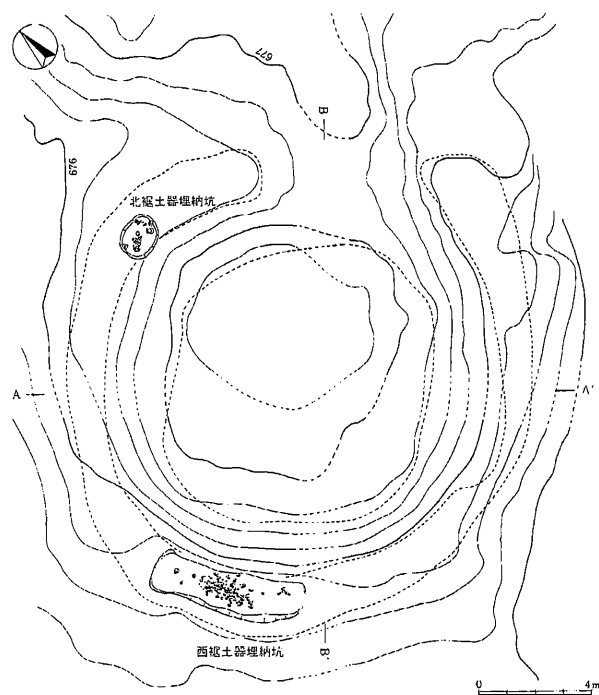
大室古墳群第168号墳の調査成果では、図示できた須恵器は杯蓋5点・杯身4点・有蓋高杯1点・はそう2点・広口壺1点・甕5点の18点であり、この他甕等破片がある。土師器は高杯・高杯蓋・杯・はそう・壺を中心に破片が多数出土している（文献38）（第9図）。

出土須恵器を分析した草野潤平氏は、杯蓋の形態的特徴から、愛知県猿投窯を中心とする尾張地域との関連性を指摘した。また胎土や色調、形態的特徴にバラエティーがあることから、複数の生産地製品が混在したとし、尾張地域の未発見の窯あるいは尾張地域の影響を受けた生産地の製品である可能性を指摘した。そして蓋杯の特徴から尾張地域の東山11号窯段階に位置づけられるとしながらも、城山2・3号窯に見られる特徴をもつものもあることから、城山2・3号窯から東山11号窯段階にかけての時期とし、陶邑古窯跡群でいうTK23型式に併行するものとした。甕についても尾張地域との関連がうかがえるとし、高杯やはそうについては全体的な共通性から陶邑古窯跡群との関連性も指摘したうえで、須恵器の入手経路は、蓋杯や甕などの尾張系製品と高杯やはそうなど陶邑系製品が混在していることを指摘した。

大室第168号墳の築造時期については、大型はそうなどTK208型式と考えられるものも含まれるが、TK23型式併行期のものが主体となることから、TK23型式期であろうと



第9図 長野市大室古墳群第168号墳出土須恵器  
（文献38より）



第10図 長野市地附山古墳群上池ノ平第2号墳  
土器埋納坑（文献40より）

した（文献 39）。

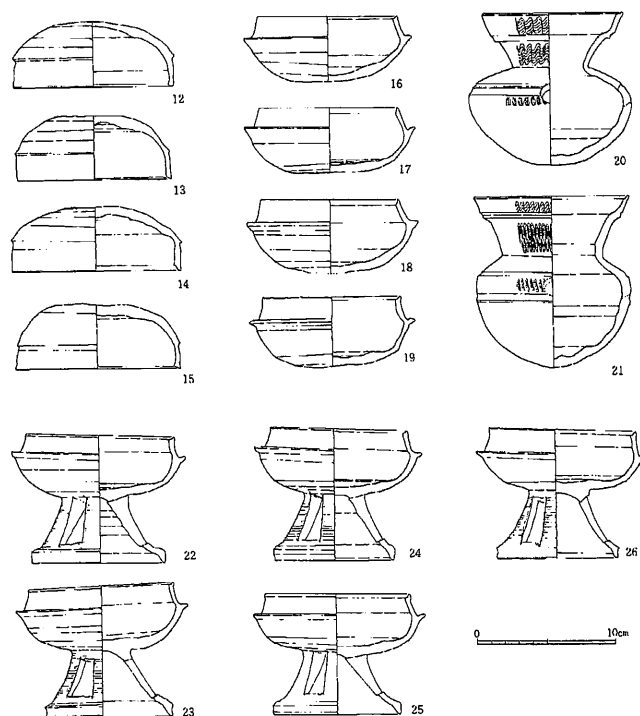
地附山古墳群は上池ノ平 1 号墳から 5 号墳の 5 基からなる古墳群で、1 号墳 1 号石室・3 号墳石室・5 号墳石室は合掌形石室である。

上池ノ平 2 号墳では、墳丘裾 2 箇所土器埋納遺構が発見され、北裾土器埋納遺構は長径 3.0 m、短径 1.3 m のやや楕円形を呈し、土師器高杯 9 点・埴 1 点がほぼ完形で埋納されていた。また西裾土器埋納遺構は長辺 5.6 m、短辺 1.5 m の隅丸長方形を呈し、TK47 型式を主体とする須恵器杯身 4 点・杯蓋 4 点・有蓋高杯 5 点・はそう 2 点の計 15 点が完形で、土師器高杯ほか破片で 50 点以上が埋納されていた（第 10・11 図）。また上池ノ平 3 号墳では墳丘斜面や裾から、TK23 型式を主体とする須恵器杯身・杯蓋・有蓋高杯・有蓋高杯蓋・甕・高杯が 40 点以上出土している。3 号墳での須恵器については、祭祀行為を行った後の状況とも考えられる。

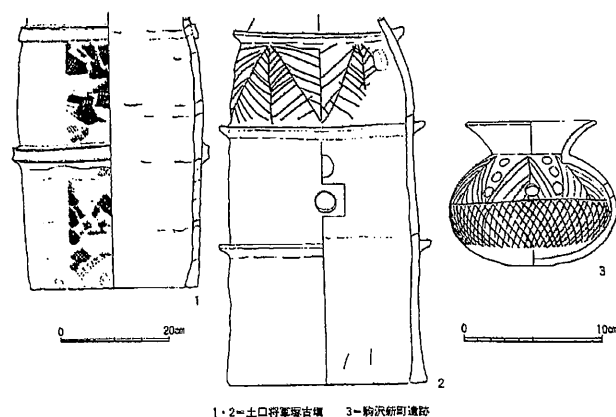
両古墳で発見された須恵器は、TK208 型式から TK47 型式の様相を示すものを含み、土器の胎土や様相が近接する本村東沖遺跡出土須恵器に類似すること、当該期での限られたムラへの須恵器入手状況を考えると、本村東沖遺跡のムラと当古墳群との関連が想定できる（文献 40）。

さらに本村東沖遺跡で紹介した 2 号墳出土須恵器の分析から、「浅川型須恵器」とする一群がみられることから、浅川型須恵器を当地で使用した集団は古墳築造集団であり、さらに外部との接点を有した在地集団との考え方もある（文献 21）。

また須恵器の扱い方を考えれば、



第 11 図 長野市地附山古墳群上池ノ平第 2 号墳出土須恵器  
（文献 40 より）



第 12 図 叩き目のある埴輪・鋸歯文のある埴輪と土師器  
（文献 2 より）

当古墳群での須恵器の埋納行為や廃棄行為は、当該期の土師器とは異なった希少価値としての須恵器への扱い方がうかがえる。

埼玉県稲荷山古墳や諏訪市一時坂古墳・諏訪市本城1号墳と時期的にも、また古墳への埋納状況も類似している。

長野市土口將軍塚古墳（文献41）は全長67.7mの前方後円墳である。当古墳資料は伝土口將軍塚古墳資料として朝鮮陶質土器と考えられる短脚有蓋高杯とその蓋がある。また本墳出土の大半の円筒埴輪に平行叩き目と格子叩き目が施されていた。（第12図1・2）これは須恵器生産の初期段階の工人達が埴輪成作に何らかの関与をしていたと考えられるものであろう。このような叩き目を埴輪に施した類似資料は、埼玉県本庄市公家卿塚古墳・埼玉県児玉町金鑽神社古墳・同生野山將軍塚古墳が近接する地域で見られる（文献42）。また叩き目以外では逆矢バネ形の線刻が施されており、形象埴輪の楕形埴輪や須恵器の鋸歯文との繋がりを考えさせられる。土口將軍塚古墳の周辺には陶質土器や初期須恵器が他地域にくらべ多くみられ、タタキ目をもった埴輪の存在（生産を含め）と無関係ではあるまい。この種の埴輪について関川尚功氏は「畿内の埴輪窯において埴輪と初期須恵器との併焼例が少なくないことについて、古墳の造営を機に集められた多方面にわたる工人集団のなかで、須恵器工人と埴輪工人が技術交流を行ったのではないか」（文献7）とした。

千曲市森將軍塚古墳（文献43・44）はその築造を4世紀後半と考えられている前方後円墳であるが、墳麓より有蓋高杯（TK208型式に属する）・把手付杯（TK216型式に属する）・甕（TK73型式に属する）が出土しており後世に埋納されたものである。

千曲市森2号墳（文献43・44）は径18m、高さ3mの円墳であり組合式箱形石棺を持ち円筒埴輪列を有していた。出土遺物は土師器の杯・碗・高杯・甕・壺と須恵器の無蓋高杯・甕・二重甕・器台・甕があり、無蓋高杯・甕（それぞれTK23型式に属する）は土師器とともに遺物群として存在したものであり、周溝内より出土したものには二重甕・器台（ともにTK216型式に属する）・甕（TK73型式に属する）があった。

千曲市一重山古墳群御岳神社古墳（文献45）出土の須恵器はTK208からTK23形式に属すると考えられる無蓋高杯である。採集地点はわずかに盛り上がりを見せており一重山古墳群中の小円墳であったと考えられ、墳丘上かあるいは周溝内からの出土であろうと考えられる。

中野市金鎧山古墳（文献46・47）は東西17m、高さ2.6mを測り合掌形石室を有する土石混合の広義の積石塚古墳である。出土遺物には五鈴鏡・珠文鏡・環鈴・玉類・貝輪・剣・刀子・直刀・鉄鏃・斧頭・鋸身・馬具・土師器・須恵器がある。土師器や須恵器は石室に近い所より出土しており、土師器には高杯脚部破片、須恵器には把手付無蓋高杯・杯身・杯蓋・二重はそう・はそう・器台・有蓋壺・広口壺が出土しているようであるが、詳細については不明な点が多い。

中野市紫岩古墳（文献48）は径19m、高さ4mを測る土石混合の円墳である。石室は輪郭がわかる程度の残存であった。出土遺物は剣・直刀・槍・石突・鉄鏃・小札・鎌・

斧・ガラス玉類・土師器・須恵器であった。土師器は椀・高杯、須恵器は無蓋高杯が出土しているが、これらの土器類は石室外からの出土である。また須恵器の無蓋高杯については陶邑ではみあたらないものである。

東信地域については佐久市北西ノ久保遺跡の14号周溝・15号周溝についてみてみたい。

佐久市北西ノ久保遺跡14号周溝（円墳）（文献49）は墳丘・埋葬施設ともに削平されており詳細については不明な点が多い。須恵器については甕が周溝内より出土しておりTK216型式と考えられる。周溝覆土中に浮いた状況で出土したものであることから、墳丘に供献されていたものとも考えられる。

同15号周溝（円墳）（文献49）は墳丘9.28mを測る。遺物は土師器・須恵器・金属器が出土している。出土した須恵器の甕については周溝内から発見され、TK23型式からTK47型式に属するものである。14号周溝出土の甕、15号周溝出土の甕は胎土分析の結果、ともに陶邑産のものとされている。

このように長野県内の古墳については初期須恵器・古式須恵器の段階においては葬送儀礼に用いたり供献土器として用いられていた。北本城古墳や畦地1号墳では、横穴式石室の導入とともに土師器・須恵器が副葬化され、石子原古墳・柏木古墳・祝塚古墳においては土師器や須恵器が埋葬施設に副葬されていた。関東地方においては「…群馬県のごく一部をのぞいて初期須恵器・古式須恵器の段階、年代的には6世紀初頭までの古墳での葬送儀礼や祭祀に用いられたようで…」（文献1）あり、長野県内でも6世紀に入り土器の副葬化が指摘できる。横穴式石室の普及・浸透と併行して石室への副葬化が進むこととなる。須恵器の型式ではMT15型式からMT10型式の頃であり、6世紀前半から中頃の時期には古墳への埋葬認識の変化が徐々にあらわれる。西日本においては土器（須恵器）を副葬化する様相が早い時期にみられ、好例としては藤井寺市野中古墳（文献50・51）・加古川市印南野2号墳（文献52）・加古川市カンヌ塚古墳（文献52）・姫路市宮山古墳（文献52・53）・笠岡市七ツ塚古墳（文献52）などをあげることができる。特に野中古墳では埋葬施設への副葬と、墳頂部からの出土がみられ、七ツ塚古墳においては須恵器を副葬するための副室を設けていた。長野県内での初期・古式須恵器の段階には一時坂古墳・本城1号墳例のように周溝内に整然と並べられて用られ、阿原古墳・森将軍塚古墳・森2号墳・金鎧山古墳などのように墳丘や石室付近へ用いられる墓前祭祀や供献土器として用いられるものであった。硬質で灰色を呈した新しい土器が用いられ始めたり、横穴式石室の導入等の朝鮮半島そのものの新しい文化の流入をみたにもかかわらず、それまでの土師器を副葬品化しない伝統が須恵器移入後もしばらくは続いたのである。

古墳における須恵器所有については、初期須恵器（陶質土器を含む）の段階においてはその地域における在地中首長層の存在を考え、中央との係わりや繋がりの中で須恵器を入手しえたり、また在地生産を試みたものと考えられる。これが古式須恵器の段階になると、もちろんその所有には中首長層の存在がありうるが、それに加え群集墳の発生にもかかわる小首長層（新しい支配者層）の台頭をみることとなり、須恵器の入手が行われる。そし

てこれが6世紀前半、特に中頃になるとさらにその需要層が広がり供給量も供給体制も広がって行くこととなる。長野県内においては、6世紀代の出土資料については現実的に少ない状況である。

シナノでの須恵器出土の実体について、木下亘氏は「善光寺平域で注目すべき点は、須恵器導入に相前後し、舶載陶質土器の出土が知られる点であろう。」(文献54)とし、また「善光平域に、松ノ山窯が成立した事情は極めて重要な意味が含まれている。このようにみた場合、当該地域では松ノ山窯成立以前より初期須恵器の検出事例が多く認められ、更に陶質土器をも需要している様子が看取できる。これらは、当該地域の古墳時代における政治的卓越を示す…」(文献54)とした。

#### 4 祭祀遺跡出土の須恵器

長野市四ツ屋遺跡・長野市駒沢新町遺跡・中野市新井大ロフ遺跡・千曲市羽場堀之内遺跡・坂城町青木下遺跡・丸子町鳥羽山洞穴遺跡についてふれてみたい。祭祀遺跡としてはとりあつかわねばならないものに阿智村神坂峠遺跡例があげられるが、この時期の遺物に関して詳細不明のため今回はとり取り扱わないこととした。

長野市四ツ屋遺跡(文献55)では、円筒埴輪列を伴った円形周溝が検出され、その内側から土師器の甕・高杯、須恵器(陶質土器か)の把手付杯が出土している。

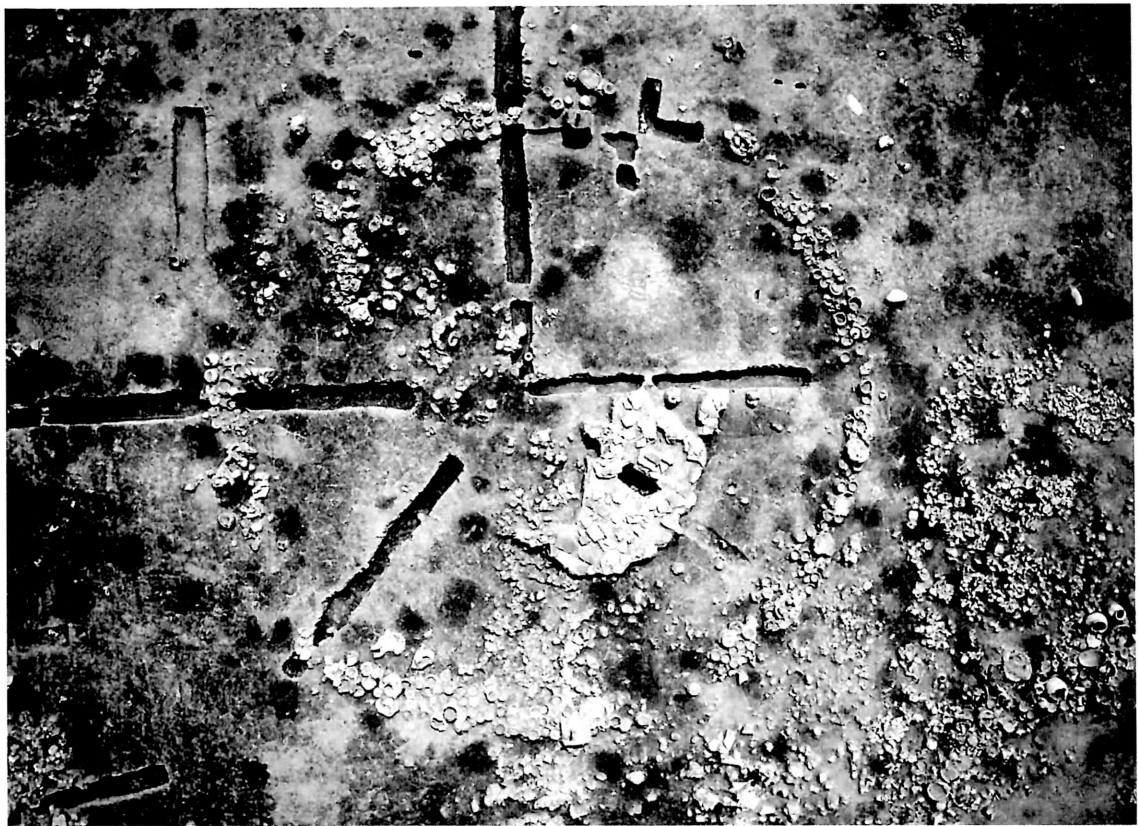
長野市駒沢新町遺跡(文献56)からは、当遺跡最大規模を有する1号祭祀跡より土師器の甕が2点出土している。初期・古式須恵器の報告はされていないものの、この甕2点のうち1点はとても興味深い資料となっている。この甕は体部に鋸歯文をもち須恵器生産開始期の甕を模倣したものと考えられている(第12図3)。この甕の時期については初期須恵器の年代に求められ、またその時期を共伴土器に求めるのであるならば和泉式土器後半期の時期と考えられる。

この甕の鋸歯文については土口將軍塚古墳出土の円筒埴輪に共通性がもとめられまいか(第12図1・2)。この頃当地域に陶質土器が持ち込まれるが、持ち込んだ人々が渡来系、あるいは初期・古式須恵器生産に関与した人々であるならば当然これらの文様・図柄を知りえたはずである。いまだ発見されていない初期・古式須恵器生産を考えさせられる資料といえよう。

中野市新井大ロフ遺跡(文献57・58)は夜間瀬川の氾濫の影響によって明確な遺構は検出されていないが、出土遺物より祭祀遺跡と考えられている。出土遺物は石製模造品とともに土師器が多数検出され、その中には多数の高杯や甕が含まれている。須恵器では杯身・甕が出土している。土師器の型式については和泉式土器後半期のものであり、また須恵器についてはTK23型式に属するものと考えられる。

千曲市羽場堀之内遺跡(文献59)からは東西幅3mほどの第2集石といわれる遺構からTK23型式と思われる杯蓋と甕が出土している。

埴科郡坂城町青木下遺跡では5世紀末葉から7世紀前半にかけて、特に6世紀代を中心



第 13 図 坂城町青木下遺跡 Ut 5 土器出土状況写真 (文献 60 より)

とする土器・玉類を用いた祭祀跡が発見された(第 13 図)。祭祀跡は土器の集積跡の遺物出土状況により以下の 3 パターンがあるとした。

- I 土器の出土が散在してはいるが、集積址を構成している。
- II 土器が小さな纏まり(ブロック状)を持ち、集積址となったもの。
- III 土器が環状・孤状などのように大きな纏まりをもった集積址となったもの。

とし、約 1,500m<sup>2</sup>の中に約 5,000 個体の土器が集中していた。また、

パターン I には、Ut 1、Ut 8、Ut 10、Ut 11、Ut 20、Ut 30 の 6 箇所。

パターン II には、Ut 7、Ut 13、Ut 15、Ut 17、Ut 28 の 5 箇所。

パターン III には、Ut 2、Ut 3、Ut 4、Ut 5、Ut 6、Ut 9、Ut 12、  
Ut 21、Ut 22、Ut 29 の 10 箇所。

の以上 20 箇所が発見された。

各祭祀行為を行った土器集積址には 5 世紀末葉からの土師器は用いられていたものの、須恵器については 6 世紀に入ってからの使用と考えられる。ただしここで用いられた須恵器は陶邑産や東海産の須恵器とは特徴が異なり産地は不明である(文献 60)。またこの調査までに長野県内で発見された 6 世紀代の須恵器の数をはるかに越える須恵器の発見となり、意図的に須恵器の大量使用をおこなった可能性も考えられ、シナノでの 6 世紀代の須恵器の需要や供給の問題を提議することともなった。

丸子町鳥羽山洞穴遺跡（文献 61・62）からは初期須恵器、あるいは陶質土器と考えられる二重寛・把手付碗・小型寛・大型壺が出土している。小型寛・大型壺は ON46 型式から TK208 型式に属すると考えられる。そして国内の窯や朝鮮半島からの出土のない二重寛や国内窯でみられる棒状の把手ではなく板状の把手を有する把手付碗はともに器面は黒灰色を呈し光沢をおび胎土はともに鉄色に焼きしまったものであり、国内産のものと考えられるよりは舶載品と考えた方がよさそうな土器である。

鳥羽山洞穴は長期にわたる特別葬所・祭祀遺跡であり、このような遺構にこれらの須恵器や陶質土器が伴ったことは洞穴の性格を考える上でたいへん重要なことであろう。

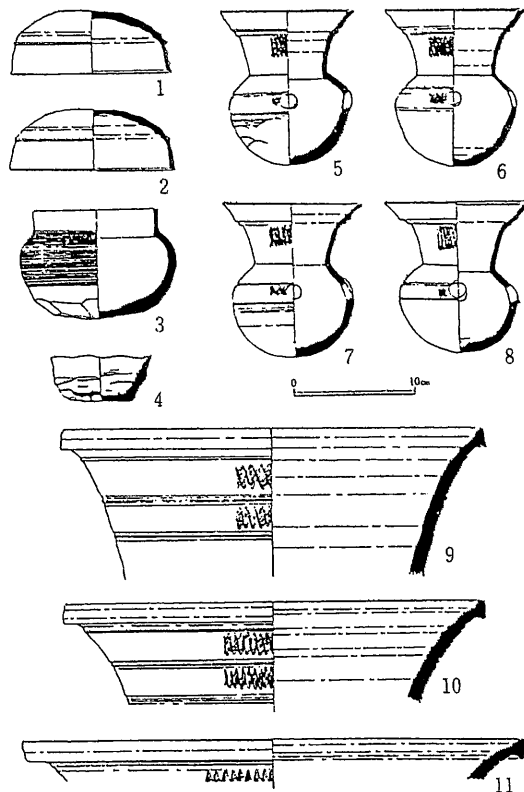
以上祭祀遺跡の事例をみてみたが、これら祭祀で用いられた須恵器や陶質土器は当初から祭祀用の容器としての性格を持っていたのであろうか。あるいは稀少品としての須恵器や陶質土器を結果的に祭祀に用いたのか。入手し得た集団によりその認識は様々であったのであろうか。

また初期須恵器・古式須恵器・陶質土器については大和政権との繋がりの中で各地域における祭祀行為を中核的に行いえた人々が入手し、祭祀行為を行ったものと考えられ、この祭祀行為を中核的に行いえた人々とは各地域における在地首長層たちであったと考えられる。

## 5 長野県内の須恵器生産

長野県内の須恵器生産についてはいくつかの報告がみられる。しかしそのほとんどが 7 世紀以降のものでありその中心は 8 世紀から 9 世紀にかけてのものといえる。そのような中、長野市松ノ山窯跡の報告があり、6 世紀前半代の須恵器生産窯跡とされ、これまでのところでは県内最古とされている。

長野市松ノ山窯跡は農道拡幅工事の際に発見され（文献 63・64）、須恵器甕片・はそう・短頸壺・杯蓋・手づくね土器が出土している。甕以外はすべて完形品であり、手づくね土器以外は還元焰焼成ではなく酸化焰焼成による赤褐色となっている。型式的には TK47 型式から MT15 型式で 6 世紀初頭から前半頃と考えられている。また形態上、陶器製品に類似性が求められ陶器窯工



第 14 図 松ノ山窯跡出土須恵器（文献 3 より）  
（4 は手づくね土器）

人によって須恵器生産が行われたと考えられている（第14図）。

長野県内における5・6世紀代の須恵器窯については現在のところ発見されているのは松ノ山窯だけであるが、これまでみてきた集落跡・古墳・祭祀遺跡などの須恵器出土例をみると、松ノ山窯以前に操業した窯の存在が考えられる。集落跡では下伊那地域の天伯B・山岸遺跡、善光寺平の本村東沖遺跡や牟礼バイパスB地点を含む浅川扇状地遺跡群、さらには地附山古墳群での出土須恵器の特徴を考えると、生産地周辺以外での集落内や古墳から多くの須恵器が出土する例は特に東国においては異例であり、このような例は埼玉県児玉町のミカド遺跡がある。ミカド遺跡ではその胎土・型式に加え、不良な製品等を含め多くの須恵器の出土をみていることから周辺地域に生産窯の存在が考えられており、下伊那地域や善光寺平南域にも在地窯の存在の可能性が考えられる。

下伊那地域はシナノの玄関口にあたり重要な地域であったことは伊那谷における古墳の分布や出土遺物によってうかがえ、中央政権との繋がりの中で在地首長層の台頭がありこの首長層による地方窯の招致・生産が行われた可能性が考えられる。

また善光寺平では四ツ屋遺跡や城の内遺跡、そして森將軍塚古墳・森2号墳・本村東沖・浅川扇状地遺跡群・地附山古墳群の例でもわかるように現在の千曲市や長野市域に陶質土器や初期須恵器・古式須恵器が集中している。また土口將軍塚古墳出土の鋸歯文の刻まれた埴輪、駒沢新町遺跡出土の鋸歯文の刻まれた甕の存在（第12図3）や松ノ山窯跡の存在を考えあわせると初期須恵器の製作技術を知りえた人々の存在が浮かび上がってくる。ただし伊那谷における須恵器の出土状況や生産に関わる当時の社会背景とは異なるものの、松ノ山窯に先行する窯の存在は十分に考えられる。

大阪府陶邑古窯址群の調査以来、須恵器生産については陶邑一元論的な評価をされてきたが、ここ数年来の初期須恵器段階での地方窯発見、あるいは地方窯存在の可能性が考えられる資料の増加に伴って初期須恵器の段階ではそれぞれ特定地域における地方窯が操業したと考えられる。そしてそれぞれの地方窯が長期操業されなかったのは、各地方窯を持ちえた各地域が陶邑を統括していた大和政権下に組み込まれて行く過程の結果と考えられる。

このような評価をふまえ伊那谷や善光寺平での状況を考えると、伊那谷では初期須恵器段階には陶邑産須恵器を中心に当地域における首長層集落へ持ち込まれるが、その後大和政権における中央集権組織に組み込まれ繋がりを密にしながら在地窯の成立となり、当地域の首長層集落へ供給されたと考えられる。また善光寺平では陶質土器や陶邑産初期須恵器が持ち込まれるが、やがて初期須恵器段階で独自の在地窯の操業を行いながらも大和政権の集権組織に組み込まれ、陶邑産須恵器を中心とする須恵器が供給され、やがては松ノ山窯の操業を行うものの、短期間で操業を終えてしまうこととなる。

これまで中部高地や関東・東北地方での須恵器生産は畿内やその周辺地域、そして東海地域にくらべかなり遅れて開始されたものであろうと考えられてきた。

大阪府陶邑窯は5世紀前葉に操業が開始されたであろうが、北部九州を始めとする西日本各地はもちろん東日本でも地方窯とされるものの中には5世紀中葉から6世紀初頭頃ま



で須恵器生産の可能性のある窯跡が発見されている。代表的な例としては愛知県（尾張国）東山窯・城山窯、静岡県（遠江国）有玉西窯、三重県（伊勢国）久居窯・小杉大谷窯、石川県（能登国）鳥居窯、宮城県（陸奥国）大蓮寺窯ほかいくつかがあげられ、窯の存在を示す遺跡として埼玉県（武蔵国）ミカド遺跡をあげることができる。これらの窯跡から出土する須恵器はそれぞれの特徴を示しながらも型式的には陶邑における TK216 型式から TK47 型式までの各段階のいずれかであり、畿内から東海地方・中部地方への窯の存在を追ってみると、特に初期・古式須恵器を生産した窯跡が前期から中期にかけての古墳が分布しえた地域か、あるいは古代東海道、東山道などの主要道に近接した地域に存在することがうかがえる。このように 4・5 世紀代に大和政権とある一定の間隔をもって繋がりを持ちえた在地首長たちは始めはその関係の中で独自の須恵器生産の開始をみるところもあったが、5 世紀中葉以降の新たな中央集権化に伴いほとんどの地方窯では生産が中断した。しかし 6 世紀後半以降の大和政権との新たな繋がりの中で再び地方窯の操業が行われたと考えられる。シナノの各地域もそのような社会状況に内包されていたものといえる。

## 6 まとめにかえて

以上、住居跡出土の須恵器、古墳出土の須恵器、祭祀遺跡出土の須恵器、そして長野県内における須恵器生産をみてきたが、初期須恵器の段階にシナノの拠点地域に陶質土器や須恵器が持ち込まれ、拠点地域における中核的存在であった中・小首長層（集落）への所有となった。このことはすでに筆者が指摘しているが（文献 2・3）、初期須恵器から古式須恵器への移行期段階には拠点地域において生産が開始されたと考えられ、もちろん搬入品も多く存在したと考える。

次の古式須恵器の段階になっても拠点地域への供給は変わらなかったが、その需要と供給は前段階にくらべ増し、その供給についても中・小首長層（集落）へとさらに広まりをみせていく。

初期須恵器から古式須恵器へと移行しようとする頃までの時期に限っていえることは、拠点集落へは須恵器のみならず馬具やカマドほかの新来文化が受け入れられ、生活習慣等に大きな変化がみられる。そのような中古墳祭祀には須恵器に限られた状況で用いられることから、この頃の須恵器は単にモノではなく政治的な社会背景の中で重要な存在価値を担っていたものと考えられる（文献 1・2・3・20・21・54）。

土師器との関係では、天伯 B・山岸遺跡、黒河内遺跡、本村東沖遺跡、大井城遺跡では TK208 型式から TK23 型式の須恵器がカマドを伴う住居跡から鬼高式土器的特徴を示す土師器と伴出しており、また牟礼バイパス遺跡 B 地点においては TK216 型式から TK208 型式の須恵器がカマドを伴う住居跡から和泉式土器的特徴や鬼高式土器的特徴を示す土師器と伴出している。古墳では一時坂古墳より TK208 型式から TK23 型式の須恵器が鬼高式土器と、地附山古墳群池の平 2 号墳からは TK23 型式から TK47 形式の須恵器が鬼高式土器とともに出土している。これらから土器の諸特徴については多少の混在はみられて当

然であるが、和泉期から鬼高期への移行期は早いところで TK208 型式から TK23 型式への移行期に始まり、5 世紀後半とする第 3 四半期から第 4 四半期への移行期であったと考えられる。

#### 参考文献

- 1 西山克己「関東地方における須恵器出現期の様相」『駿台史学』第 64 号 駿台史学会 1985 年
- 2 西山克己「信濃国で須恵器が用いられ始めた頃」『信濃』第 40 巻第 4 号 信濃史学会 1988 年
- 3 西山克己「信州における須恵器出現の頃」『考古学ジャーナル』No.316 ニューサイエンス社 1990 年
- 4 田辺昭三「須恵器・4」『日本美術工芸』第 391 号 日本美術工芸社 1981 年  
田辺氏は従来古式須恵器と総称されていたものを、第 I 期の中で特に TK73 型式・TK216 型式・TK208 型式のものについて「初期須恵器」とされた。これを受けて小論では TK23 型式・TK47 型式のものを「古式須恵器」とした。
- 5 田辺昭三・平安学園考古クラブ『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ 1966 年
- 6 杉原莊介・中山淳子「土師器」『新版考古学講座』5 雄山閣 1955 年
- 7 関川尚功「奈良県下出土の初期須恵器」『考古学論攷』第 10 冊 奈良県橿原考古学研究所 1984 年
- 8 長野県教育委員会『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』阿智・飯田・宮田地区 1971 年
- 9 長野県教育委員会『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』下伊那郡鼎町その 2 1975 年
- 10 児玉町教育委員会「ミカド遺跡」『金屋遺跡群 児玉町文化財調査報告書』第 2 集 1983 年
- 11 埼玉県埋蔵文化財調査事業団『後張 II 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告』第 2 6 集 1983 年
- 12 大沢和夫・宮沢恒之 他「長野県下伊那郡阿智村中原遺跡調査報告」『長野県考古学会誌』第 6 号 長野県考古学会 1969 年
- 13 長野県立阿智高等学校・中原遺跡調査会『中原遺跡』1977 年
- 14 下伊那郡鼎町教育委員会『鼎町黒河内遺跡発掘調査報告書』1984 年
- 15 小平和夫「下伊那出土の初期須恵器その 1 - 飯田市座光寺恒川遺跡群出土の初期須恵器 -」『埋文雑記帳』5 1984 年
- 16 中村 浩「須恵器生産の諸段階 地方窯成立に関する一考察」『考古学雑誌』第 6 7 巻第 1 号 日本考古学会 1981 年
- 17 山下誠一「飯田盆地における古墳時代前・中期集落の動向」『飯田市美術博物館研究紀要』第 13 号 飯田市美術博物館 2003 年
- 18 長野市教育委員会・長野市遺跡調査会『浅川扇状地遺跡群 - 牟礼バイパス B・C・D 地点 - 長野市の埋蔵文化財』第 17 集 1986 年
- 19 千野 浩 他『本村東沖遺跡』長野市教育委員会 1993 年
- 20 飯島哲也 他「第 5 章 考察 4 本村東沖遺跡出土の古式須恵器について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会 1993 年
- 21 風間栄一「長野市地附山古墳上池ノ平 2 号墳出土の須恵器」『信濃』第 50 巻 7 号 信濃史学会 1998 年
- 22 木下 亘「更埴市城の内遺跡出土の陶質土器について」『信濃』第 37 巻第 4 号 信濃史学会 1985 年
- 23 御代田町教育委員会『鑄師屋遺跡群 前田遺跡』1987 年
- 24 佐久市教育委員会『舞台場』1981 年
- 25 佐久市教育委員会『大井城跡（黒岩城跡）』1986 年
- 26 埼玉県教育委員会『埼玉稲荷山古墳』1980 年
- 27 市原市『稲荷台 1 号古墳出土の「王賜」銘鉄剣概要発表要旨』1988 年
- 28 長野県教育委員会『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』飯田市地内その 2 1973 年

- 29 下平秀夫「伊那市富県阿原古墳発掘調査報告書」『長野県考古学会誌』第14号 長野県考古学会 1972年
- 30 今村善興「畦地1号古墳」『長野県史』考古資料編全一卷(三) 主要遺跡 南信 長野県史刊行会 1983年
- 31 飯田市教育委員会『小池・宮城・神送塚』 1974年
- 32 諏訪市教育委員会『一時坂』 1988年
- 33 長野県教育委員会『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』諏訪市その3 1975年
- 34 河西清光・松尾昌彦「穂高古墳群」『長野県史』考古資料編全一卷(三) 主要遺跡 中信 長野県史刊行会 1983年
- 35 岩崎卓也 他「有明古墳群の再調査」『信濃』第35巻第11号 信濃史学会 1983年
- 36 桐原 健「中山古墳群」『長野県史』考古資料編全一卷(三) 主要遺跡 中信 長野県史刊行会 1983年
- 37 風間栄一 他『篠ノ井遺跡群(6)』 長野市教育委員会 2007年
- 38 小林三郎・大塚初重・石川日出志・佐々木憲一・草野潤平 編『信濃大室積石塚古墳群の研究』Ⅲ 明治大学考古学研究室 2008年
- 39 草野潤平「大室第168号墳出土須恵器の基礎的検討」『信濃大室積石塚古墳群の研究』Ⅲ 明治大学考古学研究室 2008年
- 40 青木和明 他『地附山古墳群』 長野市教育委員会 1988年
- 41 青木和明「土口将軍塚古墳出土土器の編年的位置」『長野県史跡土口将軍塚古墳 重要遺跡確認調査』 長野市教育委員会・更埴市教育委員会 1987年
- 42 山根洋子「叩きの埴輪」『長野県史跡土口将軍塚古墳 重要遺跡確認調査』 更埴市教育委員会・更埴市教育委員会 1987年
- 43 更埴市教育委員会『森将軍塚古墳 保存整備事業第6年次発掘調査概要』 1986年
- 44 更埴市教育委員会『史跡 森将軍塚古墳』 1992年
- 45 小林重義「更埴市一重山発見の須恵器」『長野県考古学会誌』第7号 長野県考古学会 1968年
- 46 佐藤信之「金鎧山古墳」『第8回三県シンポジウム 東国における古式須恵器をめぐる諸問題』 千曲川水系古代文化研究所 他 1987年
- 47 土屋 積「金鎧山古墳」『長野県史』考古資料編全一卷(二) 主要遺跡 北・東信 長野県史刊行会 1982年
- 48 檀原長則「紫岩古墳」『長野県史』考古資料編全一卷(二) 主要遺跡 北・東信 長野県史刊行会 1982年
- 49 佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財調査センター『北西の久保ー南部台地上の調査ー』 1989年
- 50 北野耕平 他「河内野中古墳の研究ー野中古墳発掘調査報告」『大阪大学文学国史研究室研究報告』第2冊 大阪大学文学国史研究室 1976年
- 51 北野耕平「資料紹介 野中古墳」『日本陶磁の源流 須恵器出現の謎を探る』 柏書房 1984年
- 52 植野浩三「西日本の初期須恵器 三ッ城古墳の須恵器を中心として」『奈良大学紀要』第9号 奈良大学 1980年
- 53 姫路市文化財保護協会『宮山古墳第2次発掘調査概要』 1973年
- 54 木下 亘「3 長野県下出土の古式須恵器概観」『史跡 森将軍塚古墳』 更埴市教育委員会 1992年
- 55 矢口忠良「四ッ屋遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷(二) 主要遺跡 北・東信 長野県史刊行会 1982年
- 56 笹沢 浩「駒沢新町遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷(二) 主要遺跡 北・東信 長野県史刊行会 1982年
- 57 金井汲次「大ロク遺跡」『長野県考古学会誌』第10号 長野県考古学会 1971年

- 58 金井汲次「新井大ロフ遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷（二）主要遺跡 北・東信 長野県史刊行会 1982 年
- 59 上山田町教育委員会『羽場堀之内遺跡』 1984 年
- 60 助川朋広 他『青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ』坂城町教育委員会 他 2007 年
- 61 永峯光一「鳥羽山洞穴古墳時代葬所の初期須恵器」『中部高地の考古学』長野県考古学会 1978 年
- 62 永峯光一「鳥羽山洞穴遺跡」『長野県史』考古資料編全一卷（二）主要遺跡 北・東信 長野県史刊行会 1982 年
- 63 笹沢 浩・原田勝美「長野県下出土の須恵器」（上）・（下）『信濃』第 26 卷 9・11 号 信濃史学会 1974 年
- 64 笹沢 浩「松ノ山窯址」『長野県史』考古資料編全一卷（二）主要遺跡 北・東信 長野県史刊行会 1982 年

# 下伊那地域の古墳時代における新来文化の受容

## 1 はじめに

歴史の画期と言うものは、数万年前の先土器時代においても、あるいは1万年あまり続いた縄文時代においても見られ、ましてや弥生時代においては、日本人の食文化の基礎を築くこととなる稲作の伝来と言う大きな画期を見ることとなり、さらにはこれを受けて、農耕を基礎とした経済的基盤の充実による日本国家の形成という大きな画期として古墳時代を迎えることとなる。

日本列島では先土器時代以来、大陸や朝鮮半島と人や物を通しての文化交流が絶えず行われて来たが、古墳時代に至っては大陸や朝鮮半島からの新来文化の受容の波を大きく二時期に分けることができる。東国古墳時代におけるその一つは今回の視点となる5世紀中頃から6世紀代にかけてのことであり、その内容は馬の飼育と活用・須恵器生産と使用・日常使用する土器組成の変化・カマドの構築と使用・金銅製品の使用・横穴式石室の受容と埋葬観念の変化などがあげられ、もう一つは7世紀代における律令国家誕生前夜の頃と言えよう。

当論では下伊那地域における5世紀中頃から6世紀代における新来文化の受容状況を簡単にまとめてみたいと考える。

## 2 新来文化受容期の土器

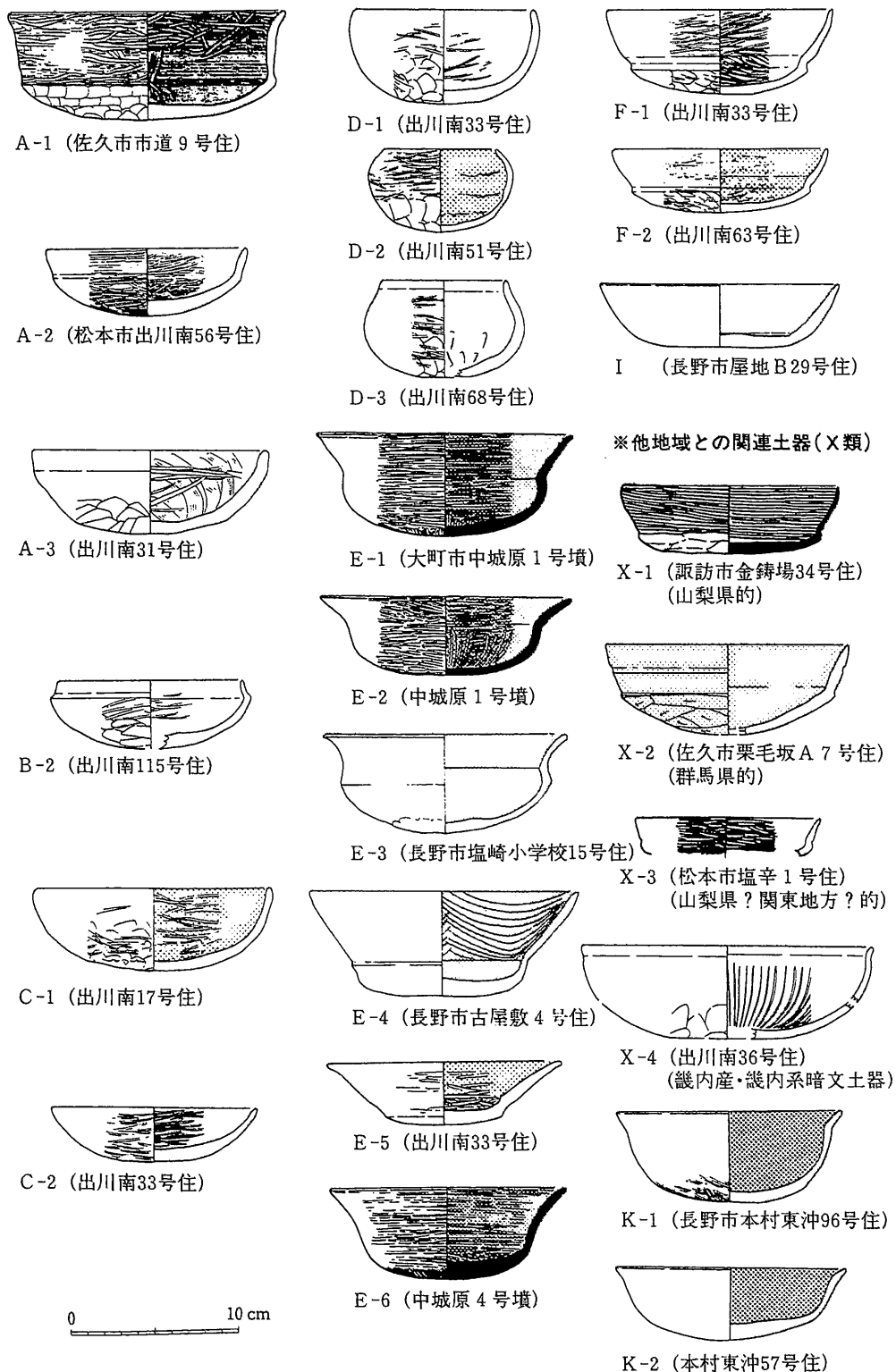
当論を進めるにあたり、5世紀中頃から6世紀代にかけての基準となる編年案を示してみたい。これまで下伊那地域における当時期の土器編年を試みたものとして、1974年の今村善興氏（文献1）、1986年の山下誠一氏（文献2）、1991年の小平和夫氏（文献3）、1995年の西山克己（文献4）、1998年の山下誠一氏（文献5）、1999年の山下誠一氏（文献6）、2003年山下誠一氏（文献7）がある。

当論では、下伊那地域の中で土器の推移に大きな違いはないと考えるが、あえて天竜川を挟んで、東を竜東地域（第2図-①）、西を竜西地域（第2図-②）として分けて編年図を作成した。

また土器の器種分類については、第1図を基準とした。

1期＝カマドの出現、須恵器が確実に用いられ始める。当時期の集落内において、カマドを付設する住居と炉を付設する住居が見られ、また須恵器については多い所で集落内の約3分の1以上の住居に須恵器が搬入される。

土器様相について、土師器は小型丸底壺がなくなり、カマドに甕をかけることからの長胴化が始まる。また前段階に現れた杯の割合はまだ少なく、高杯の割合が多い。須恵器はTK73・TK216・TK208型式を含む。



第1図 土師器の器種分類表

土師器甕は長胴化。杯は半球状のものと、口縁端部をわずかに摘まむように外反させるもの、平底で鉢状のものが見られる。また杯内面への黒色処理化が極々わずかに見られる。高杯については杯部底に稜線を持ち、下部広がりエンタシス状で、脚底部がしっかり外反し長脚のものが主流となる。

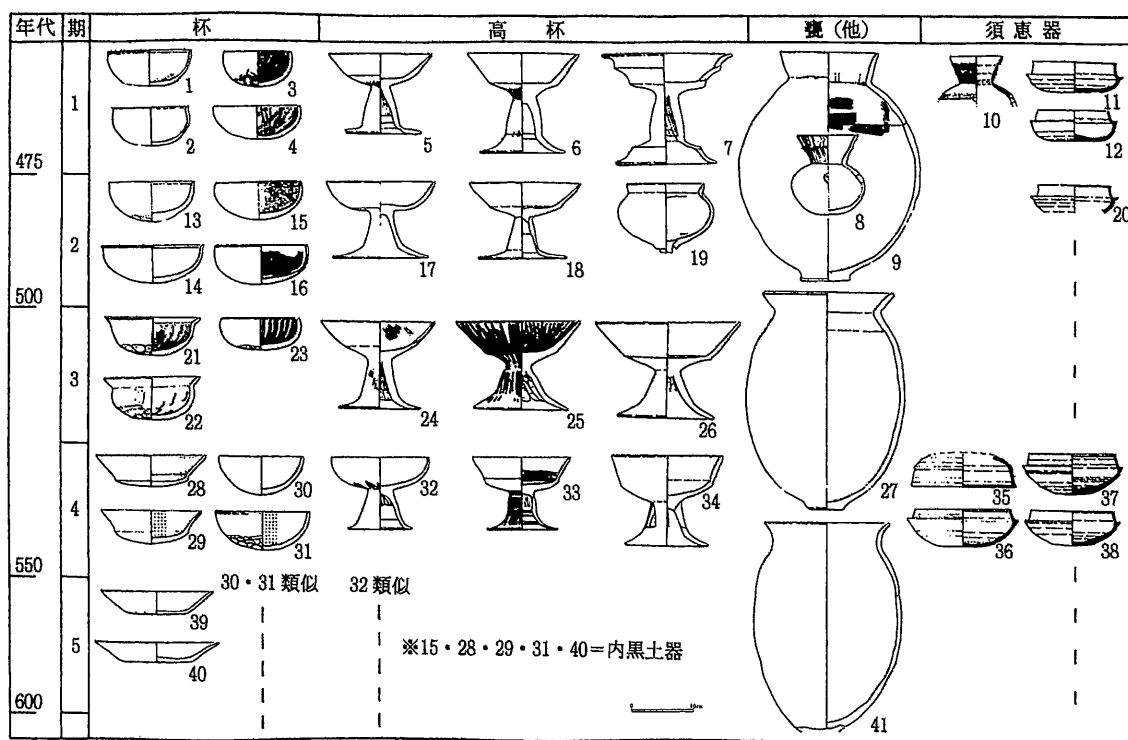
時期＝5世紀第3四半期から5世紀第4四半期前半頃（須恵器 TK208 期）

〈図版資料：1・8・10＝丸山遺跡2号住居跡（文献39）、2・12＝恒川遺跡群田中倉垣外遺跡138号住居跡（文献40）、3・4＝殿原遺跡70号住居跡（文献14）、5・6・7＝恒川遺跡群田中倉垣外遺跡16号住居跡（文献40）、9＝兼田遺跡2号住居跡（文献41）、11＝天伯B遺跡2号住居跡（文献10）、42～50＝細新遺跡60号住居（文献42）〉

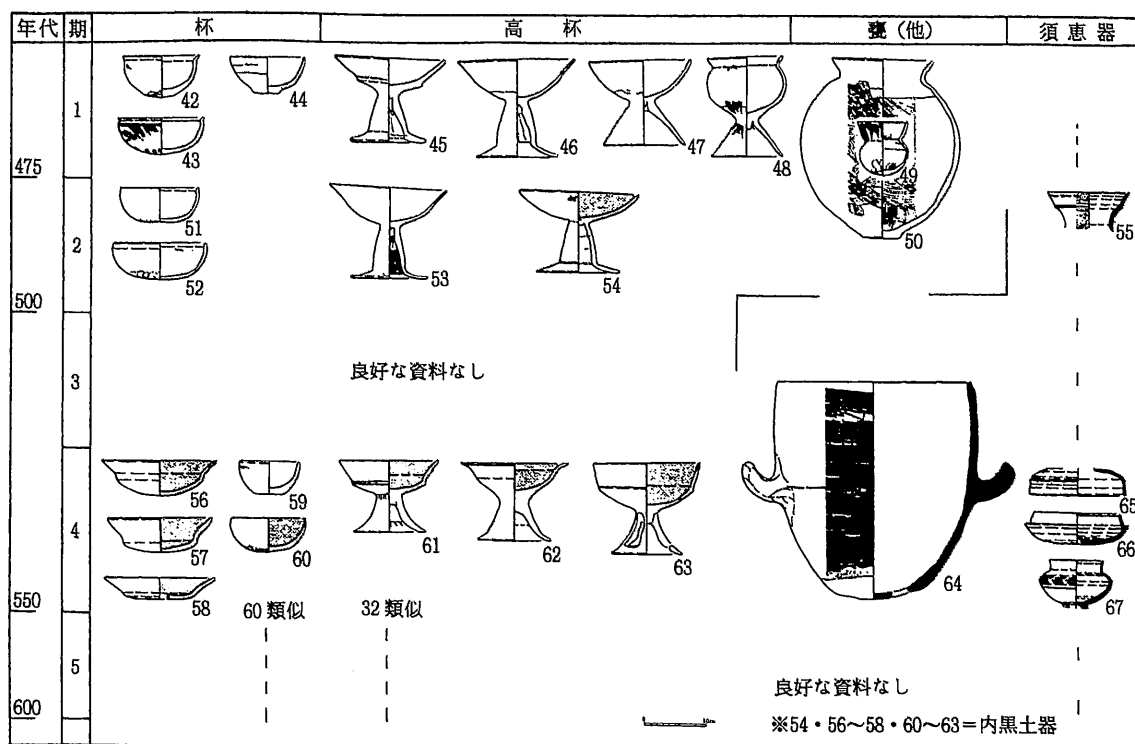
2期＝古墳への副葬品として金銅製品が用いられ始める。カマドを付設する住居の割合が増加するが、いまだ炉を付設する住居が見られる。須恵器についてはさらに多くの住居に搬入される。

土器様相について、土師器は甕のさらなる長胴化。杯の割合が急増し、高杯の割合が急減する。須恵器は TK208・TK23 型式を含む。

土師器甕は長胴化。杯は1期同様であるが、口縁端部の外反がわずかに大きくなるものも現れ、口縁端部を外反させるものの割合が増加する。高杯については杯部底に稜線を持つものが減少し、また杯部が1期よりも浅くなる傾向となる。杯



第2図－① 新来文化受容期の竜西地域の土器編年（S＝1/10）



第2図-② 新来文化受容期の竜東地域の土器編年 (S = 1/10)

や高杯の杯部内面への黒色処理化が一般的始まる。

時期 = 5 世紀第 4 四半期後半頃 (須恵器 TK23 期)

〈図版資料：13・17 = 殿原遺跡 88 号住居跡 (文献 14)、14・16・19 = 前の原遺跡 26 号住居跡 (文献 15)、15 = 内山遺跡 10 号住居跡 (文献 43)、18 = 前の原遺跡 28 号住居跡 (文献 15)、20 = 柳添遺跡 2 号住居跡 (文献 44)、51・52 = 細新遺跡 58 号住居跡、53 = 細新遺跡 9 号住居跡、54 = 細新遺跡 53 号住居跡、55 = 細新遺跡 10 号住居跡 (文献 42)〉

3 期 = 古墳への埋葬施設として、横穴式石室が採用され始める。カマドを付設する住居の割合がさらに増加するが、いまだ炉を付設する住居が見られる。須恵器については 2 期と同程度の住居への搬入が見られる。

土器様相について、土師器は杯の割合がさらに増加し、高杯の割合がさらに減少する。須恵器は TK23・TK47 型式を含む。

土師器杯は 1 期以来の器種 (C-1) に加え、口縁端部の外反がさらに大きくなるもの (K-1、2) も現れ、口縁端部を外反させるものの割合が増加する。高杯については杯部の割りに短脚化するものも見られる。また脚は三角錐状に広がるようになる。杯や高杯の杯部内面への黒色処理化が急増する。

時期 = 6 世紀第 1 四半期前半頃 (須恵器 TK47 期)・西山・伊那後期 1 期 (文献 4) (当論 = シナノの 6 世紀・7 世紀の土器様相)

〈図版資料：21～27 = 新屋敷遺跡 76 号住居跡 (文献 45)〉



4期＝古墳への埋葬施設として、横穴式石室が普及する。カマドを付設する住居のみとなる。須恵器については集落内での使用は3期と同程度か、減少傾向を示す。

土器様相について、土師器は杯の割合がさらに増し、高杯の割合がさらに減少する。須恵器はMT15・TK10型式を含む。

土師器杯は1期以来（C－1）の器種に加え、杯中央部から口縁部にかけて大きく外反し、外反基部内外面に稜線をもつもの（E－4）や、杯底部付近から口縁部にかけて大きく外反し、外反基部内外面に稜線をもつもの（E－5）が加わる。高杯については杯部の割りに短脚となり三角錐状に脚が広がるようになり、杯部が浅い半球状となるものが主体となる出発点となる。また脚に透かしをつける須恵器高杯の模倣したものが現れ、短脚透かしや長脚透かしのものが見られる。杯や高杯杯部内面への黒色処理化がさらに増す。

時期＝6世紀第1四半期後半頃から6世紀第3四半期前半頃（須恵器MT15・TK10期）・西山・伊那後期2期（文献4）（当論＝シナノの6世紀・7世紀の土器様相）

〈図版資料：28・30・34・37・38＝柳添遺跡1号住居跡（文献44）、29・31・32・33＝天伯B遺跡22号住居跡、35・36＝天伯B遺跡3号住居跡（文献10）、56～63＝細新遺跡2号住居跡、64＝細新遺跡18号住居跡、65＝細新遺跡4号住居跡、66＝細新遺跡12号住居跡、67＝細新遺跡7号住居跡（文献42）〉

5期＝横穴式石室への副葬品の中に須恵器を中心とする土器が加わる。須恵器については集落内での使用は4期と同程度か、減少傾向を示すと考えられる。

土器様相について、土師器は杯の割合がさらに増し、高杯の割合がさらに減少すると考えられる。須恵器は新たに瓶類や壺類などが加わり器種が増す。MT43・TK209型式を含む。

土師器の様相は4期と類似か。出土資料が少なく詳細については不明。

時期＝6世紀第3四半期後半頃から6世紀第4四半期頃（MT43・TK209期）

〈図版資料：39・40・41＝久井遺跡2号住居跡（文献46）〉

以上、新来文化受容期の土器様相を示したが、5期については資料の制約から詳細については不明である。（第2図－①、②参照）

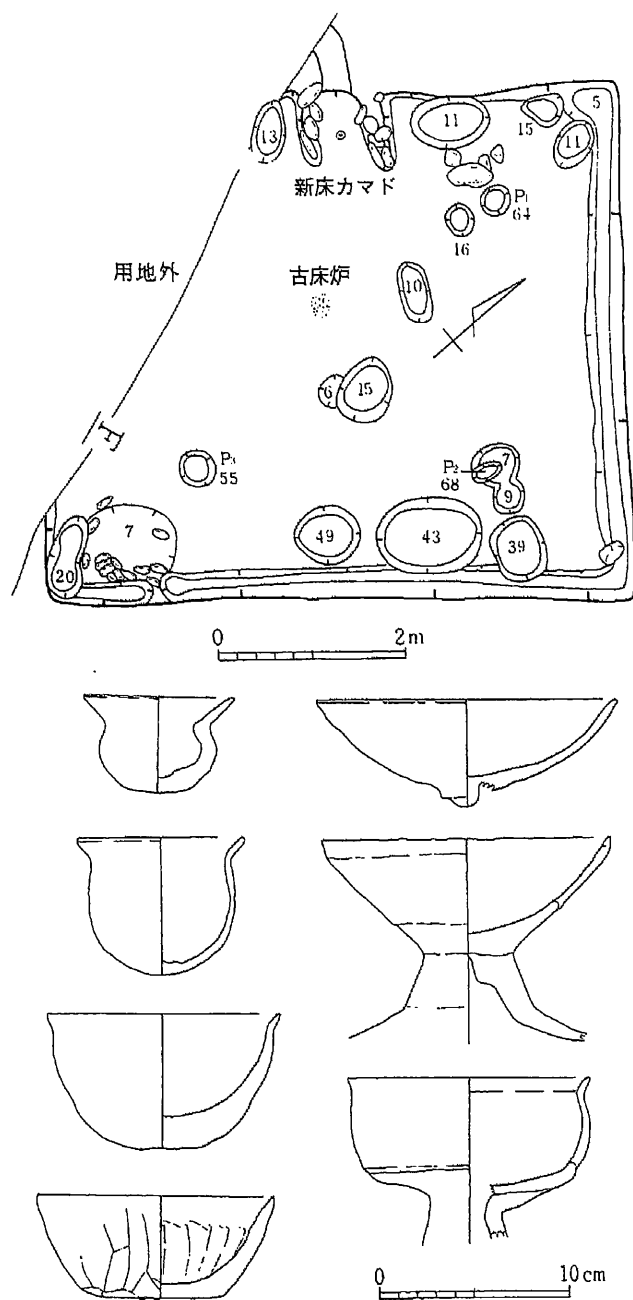
なお当論1期は山下・Ⅳ段階（文献5・6）。2期は山下・Ⅴ段階（文献5・6）。3期は西山・伊那後期1期（文献4）（当論＝シナノの6世紀・7世紀の土器様相）、山下・Ⅵ段階（文献6）。4期は西山・伊那後期2期（文献4）（当論＝シナノの6世紀・7世紀の土器様相）。と同時期と考える。

### 3 カマドの採用と間仕切り

長野県内のカマドの出現については、すでに筆者（文献8）が明らかにしたように、善光寺平においても、下伊那地域においても、早い所では須恵器TK208型式、年代的には

5世紀第3四半期から第4四半期の移行期頃、すなわち当論での1期には確実に付設され始めたようであるが、シナノの集落全体に波及するには6世紀に入らねば実現しない。ここではあらためて下伊那地域の遺跡について見てみたいと思う。カマドを早い段階で多く取り入れた遺跡として、飯田市天伯B遺跡・山岸遺跡をあげることができよう。両遺跡はそれぞれ遺跡名は異なるものの、松川右岸沿いに細長く続く同一段丘上に位置する集落遺跡である。ここではカマドが付設される住居跡が63件（天伯B＝30軒・山岸＝33軒）確認され、このうち1期あるいは2期と考えられる住居跡は45軒ほど見られる。集落全体に早い段階でカマドが付設された特筆すべき遺跡であり、当地域における5世紀後半から6世紀前半にかけての拠点集落であったと考えられる（文献8・9・10）。次に天伯B・山岸遺跡同様に当地域においていち早くカマドを取り入れ、カマド構造が良好な資料として、飯田市小垣外遺跡をあげることができる。小垣外遺跡ではやはり1期と考えられる25号住居跡と26号住居跡にカマドが付設され、これらのカマドは共通して石を芯材に用いてまわりを土（粘土）で覆う構造をしている（文献11）。さらに一住居内で炉からカマドへの移行を示す

住居跡も確認されている。飯田市龍江大平遺跡では1期に該当すると考えられる3号住居跡から、2枚（2時期）の床面が検出され、初めの床には炉が付設され、作り替えられた後の床にはカマドが付設されていた（第3図）（文献12）。このような例は善光寺平における千曲市屋代遺跡群においても見られ、1期と考えられるSB5136号住居跡では同一床面に炉とカマドが併設されていた（文献13）。両資料とも炉からカマドへの移行を示す代



第3図 カマドと炉を伴う住居  
龍江大平遺跡3号住居跡と出土遺物  
(文献12より)

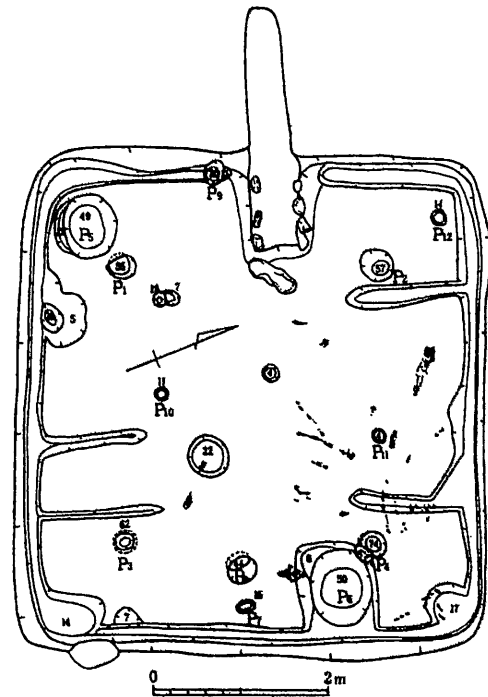
表的な事例と言えよう。下伊那地域においても1期の段階でカマドを付設する住居が現れる。しかしその数は当時期の集落数、あるいは住居数からすればごく僅かなものであり、おそらくは当地へ派遣された渡来人、あるいはその末裔、あるいは在地豪族層で新来文化を積極的に摂取した人々の住居であったと考えられる。

カマドの構造については、ここにあげた資料以外でも、1期あるいは直後に構築される他のカマドの構造をみても、石を芯材に用いてまわりを土（粘土）で覆う構造をしていることから、下伊那地域に初めて伝えられたカマドは石芯粘土構造のものであったようであり、芯に用いる石の大きさや形状、あるいは並べ方などにはいくつかのバリエーションがあるようである。

それでは間仕切りを持つ住居についてはどうであろうか。ここで言う間仕切り遺構とは、住居床面に壁から柱穴にかけて浅い溝を掘り、その溝に間仕切り材を据えたと考えられるものを言う。

下伊那地域でも点々といくつか確認されているが、その中でも特に良好な資料として2期と考えられる飯田市殿原遺跡88号住居跡（第4図）（文献14）や前の原26号住居跡（文献15）をあげることができる。この間仕切り遺構については、善光寺平では長野市本村東沖遺跡で多くみられる（文献16）。本村東沖遺跡では1期と考えられる住居にカマドが付設され、これらの住居跡からは地元で生産されたとも考えられる須恵器が出土し、また調査された住居跡の約半数から間仕切り遺構が確認されている。このようなことから渡来系の人々やその末裔、あるいは新来文化を積極的に摂取した在地豪族層を中心とする集落とも考えられ、このような例は善光寺平の他の遺跡ではほとんど確認されていない。

このようにここでいう間仕切り構造はカマドとともに家屋構造の一つとして同じ時期に伝えられたものと考えられる。



第4図 簡仕切りを持つ住居殿原遺跡  
88号住居跡（文献14より）

#### 4 下伊那の新来文化受容期の馬

現在、シナノ（長野県）において確実に最も古い馬の存在は、長野市篠ノ井遺跡群のSK6042土壌から出土した4世紀後半の馬の歯から考えられる馬の存在である（文献17・18）。

この発見と相前後して山梨県甲府市塩部遺跡の方形周溝墓からも同時期の馬の歯が確認

され（文献19）、中部高地においてはすでに4世紀後半には馬が存在したことがわかってきている。しかしこの馬はどのような目的で人間と接していたかについてはいまだ不明な点が多く、今後の類似例の出土に期待が寄せられる。

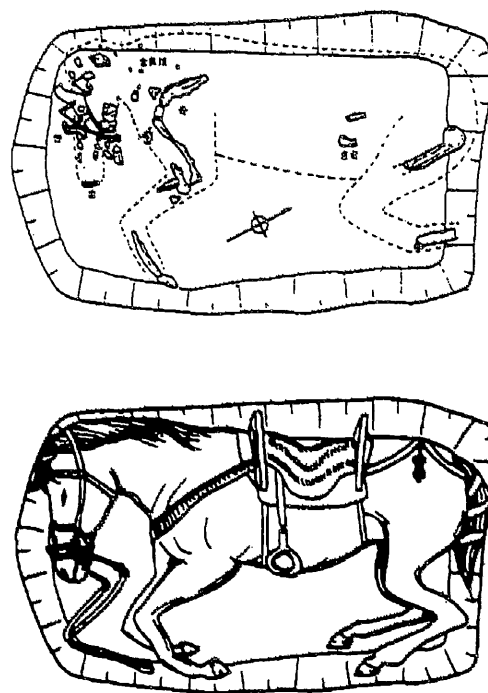
それでは伊那谷の馬の存在はどのようなものなのであろうか。シナノでは日本全国から出土している馬具の2割以上が出土しており、またこの内の3割以上が飯田市を中心とする伊那谷南部に集中していることはよく知られているところである（文献20）。

また、さらに注目したいのが1期や2期とする5世紀後半に、飯田市座光寺・上郷・松尾と言った3地域に28例もの馬の墓（埋葬）が確認されており（文献21・22）、これまで日本全国で確実に馬の墓と考えられている資料数は60数例に過ぎず、下伊那地域以外での発見例を見渡してみると熊本県に20例ほどが集中し（文献23）、残りが他地域に散在している状況である。いずれにしても全国での発見数の半分近くが下伊那地域において確認されていることは非常に注目しなければならないことである。

このような馬具の出土に注目し、東国舎人との関係で論じた岡安光彦氏の論考や（文献20・24）、科野国造と馬の生産や管理を論じた桐原健氏の論考（文献25）は注目すべきものであり、近年では長野県内の馬具の集成からシナノや伊那谷の馬文化を探ろうとした渋谷恵美子氏の仕事も見逃せない（文献26）。また馬の埋葬に注目した論考としては木下政利氏（文献27）、吉川豊氏（文献28）、小林正春氏（文献29）、さらには全国的視野からの力作である桃崎祐輔氏の業績をあげることができよう（文献30）。さらに最近では小林正春氏（文献21）や山下誠一氏（文献22）、岡田正彦（文献31）によって、下伊那地域における馬の埋葬例の集成が行われている。

この馬を埋葬する行為は5世紀初頭に東北アジア諸民族から高句麗を経て、新羅や伽耶諸国に伝えられ、日本には5世紀中頃から後半にかけて伝えられたと考えられているが、これらの馬の埋葬は、基本的には死者の埋葬に伴う殉葬と考えられている（文献32）。

日本国内の状況を簡単に見てみるならば、南は宮崎から北は青森にまで古墳時代における馬の殉葬例は見られるものの、5世紀後半代と言う限られた時期に、一地域の古墳（周溝墓）周溝内・周溝内土壙・周溝近接土壙と言った類似方法で殉葬が行われていること、



第5図 新井原遺跡4号土坑復原案（文献30より）

さらには一部に馬具を装着したまま殉葬している例が見られることは、熊本県でも類似した傾向が見られるが（文献 23）、下伊那の大きな特色であることはまちがいない。さらに馬を殉葬する風習は朝鮮半島を経由して日本に伝えられたことは先にも述べたが、新羅や加耶における殉葬例では馬具などは付けず、その多くが裸馬のままでの殉葬であることが確認されている。

下伊那地域の 28 例の内、新井原遺跡 4 号土坑墓より馬の骨・歯とともに 5 世紀第 4 四半期頃と考えられる f 字形鏡板付轡・剣菱形杏葉・飾鋌・貴金具が出土し（第 5 図）（文献 28・29・30）、茶柄山古墳群馬の墓 10 からは馬の下顎骨の下部より 5 世紀後半頃の鉄製輪金具と三環鈴が出土している（文献 28・29）。また新井原 2 号墳周溝内土壙 3 基から馬の歯が見つかり、同周溝内から 5 世紀第 3 四半期頃のものと考えられる木芯鉄板張輪鍔が出土し（文献 28・29）、物見塚古墳周溝からは馬の歯とやはり 5 世紀第 3 四半期頃の鍔轡が出土し、装着されていた状況が想定されている（文献 28・29）。

以上 4 例中、特に新井原遺跡 4 号土坑墓、茶柄山古墳群馬の墓 10 においては確実に馬具装着飾馬であることが確認できることから、日本に馬の殉葬を伝えたであろう加耶地域とは異なった殉葬方法を行ったことについては、今後論究すべき課題であろう。

ここであえてその意味について考えるならば、馬の殉葬を伴う古墳や周溝墓の埋葬者は、当時、鉄と馬をより多く入手、保有することは、軍備的優位な立場におかれることから、畿内大和政権にとっては重要な任務であったことから、軍馬の調達を目的とした大和政権の指示のもとに派遣された馬生産に秀でた新来文化を担った人々（渡来人・渡来系の人々・他地域の人々）、あるいは貴重品でもあった馬にあでやかな馬具を装着させて殉葬させたことは、その主体墓に埋葬された人物との寵愛関係あるいは威信を示すための行為であったと考えられることから、当地域の政治的・経済的効果を向上させる大きな手段となる馬生産に関わり、新来文化を積極的に摂取しようとした在地有力豪族層の墓とも考えられるが、以上見てきたように 5 世紀後半代に入り、新たな文化の波が大きく押し寄せて来た時期であることを考えれば、畿内大和政権の指示のもと、馬生産に関わって当地に派遣された渡来系の人々の墓であり、倭人化することにより威信財としての馬具を装着させたままでの殉葬を試みたとも考えられる。またこの末裔達の一部が馬生産に関わる主導権を握ることにより有力在地豪族層化し、高岡 1 号墳や北本城古墳のような横穴式石室を持つ前方後円墳を築造した可能性を指摘しておきたい。

最後に、1998 年 12 月 28 日の朝日新聞夕刊に、飯田市宮垣外遺跡出土の馬骨の骨格から、木曾馬に類似していた馬であろうとの記事が載せられた（文献 34）。興味深い分析結果であり、より多くの下伊那地域出土の馬の骨や歯の分析結果に期待したいものである。さらに 4 世紀後半の篠ノ井遺跡群出土の馬の歯、5 世紀後半の下伊那地域出土の馬の骨や歯、県内の 6 世紀や 7 世紀の馬の墓や集落・古墳出土の馬の骨や歯の分析を通して、古墳時代馬の馬種や系譜が明らかにされることに期待したい。

## 5 古墳と集落について

先に紹介した2003年の山下氏の論考については、土器編年とは別に重要な所見を残している。一つは「飯田盆地の古墳時代中期には外来勢力による集落がみられると考えた。これは、5世紀後半に際だった数が調査されている馬の埋葬からみて、馬の飼育の技術を持った渡来系集団によるものといえる（文献35）。飯田盆地にある朝鮮半島からの渡来系遺物（文献36）や溝口の塚古墳の被葬者が渡来系の形質を持つことも傍証となる（文献37）。さらに、渡来系集団と在地集落が一体する中で、大きな勢力となった集団があることも考えられる。こうした集団が飯田盆地の古墳築造に関わったことは疑いない。」また「…飯田盆地に古墳が一斉に築造され始める古墳時代中期に、馬の飼育の技術を持った渡来系集団に関わった集落が誕生し、古墳築造にも大きな役割を果たしたと考えた。…」と述べられている。しかし「（古墳時代の）個々の集落と古墳群を結びつけることはできなかった。」と課題も指摘されている。筆者も当論を書くにあたり、飯田市内を中心に下伊那地域の古墳・古墳群と集落の立地についての検討をおこなった。しかし善光寺平における川柳将軍塚古墳＝石川条里遺跡＝篠ノ井遺跡群や大室古墳群＝川田条里遺跡＝榎田遺跡などのように当時の景観を検討しうる材料は確認できなかった。ただし、清正寺古墳を築造するにあたり、当地に所在した5世紀後半の集落を移転させて古墳を築造した状況が発掘調査で検証されている（文献38）。この事実が当地における今後の古墳・古墳群と集落との関係を検証する重要なヒントになるかもしれない。いずれにしても善光寺平と下伊那地域は地形が異なるため、古墳・古墳群と集落の景観も異なることも予想される。

### 参考文献

- 1 今村善興「3、天伯B・山岸遺跡のまとめ」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－下伊那郡鼎町その2・天伯A－』長野県教育委員会 他 1975年
- 2 山下誠一「V 土器編年」『恒川遺跡群』飯田市教育委員会 1986年
- 3 小平和夫「第3編 第1章農業社会の発展－古墳時代－」『下伊那誌』第1巻 下伊那誌編集会 1991年
- 4 西山克己 他「信州の6世紀・7世紀の土器様相」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会 1995年
- 5 山下誠一「飯田市域の5世紀の土器」『長野県考古学会古墳時代勉強会資料』長野県考古学会古墳時代勉強会 1998年
- 6 山下誠一「長野県における古墳時代中期の土器様相－屈折脚高坏の出現から消滅までの予察－（4）南信地域の様相」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会 1999年
- 7 山下誠一「飯田盆地における古墳時代前・中期集落の動向」『飯田市美術博物館研究紀要』第13号 飯田市美術博物館 2003年
- 8 西山克己「信濃国で須恵器が用いられ始めた頃」『信濃』第40巻第4号 信濃史学会 1988年
- 9 神村 透 他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－飯田地区－』長野県教育委員会 他 1971年
- 10 今村善興 他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－下伊那郡鼎町その2・天伯A－』長野県教育委員会 他 1975年

- 11 小林正春 他『小垣外・八幡面遺跡』 飯田市教育委員会 他 1988 年
- 12 下平博行 他『龍江大平遺跡』 飯田市教育委員会 1995 年
- 13 水沢教子 他「屋代遺跡群」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』29 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1998 年
- 14 山下誠一 他『殿原遺跡』 飯田市教育委員会 他 1987 年
- 15 馬場保之 他『前の原遺跡』 飯田市教育委員会 他 1990 年
- 16 千野 浩 他『本村東沖遺跡』 長野市教育委員会 1993 年
- 17 茂原信生・櫻井秀雄「篠ノ井遺跡群 成果と課題編 第8節篠ノ井遺跡群出土の動物遺存体」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』22 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1997 年
- 18 西山克己「篠ノ井遺跡群 概要・遺構編 第2章第3節古墳時代前期の遺構」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』22 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1997 年
- 19 村石眞澄「2、塩部遺跡」『山梨考古』第55号 山梨県考古学協会 1995 年
- 20 岡安光彦「馬具副葬古墳と東国舍人騎兵 考古資料と文献史料による総合的分析の試み」『考古学雑誌』第71巻第4号 日本考古学会 1986 年
- 21 小林正春「伊那谷ははたして先進地か」『長野県立歴史館 飯田・下伊那セミナー飯田下伊那の先進性』長野県立歴史館 1998 年
- 22 山下誠一『寺所遺跡』 飯田市教育委員会 1999 年
- 23 島津義昭・高木正文「熊本の古墳」『日本考古学協会 1994 年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会 1994 年
- 24 岡安光彦「東国舍人騎兵の成立と下伊那地方」『伊那』第42巻第6号 伊那史学会 1994 年
- 25 桐原 健「科野国造の馬」『伊那』第42巻第6号 伊那史学会 1994 年
- 26 渋谷恵美子『特別展 伊那谷の馬 科野の馬 -古墳時代における受容と広がり-』飯田市上郷考古博物館 1997 年
- 27 木下政利「古墳時代の埋葬馬小考」『伊那』第40巻第6号 伊那史学会 1992 年
- 28 吉川 豊「飯田市内における随葬馬について」『伊那』第41巻第6号 伊那史学会 1993 年
- 29 小林正春「長野の古墳 -下伊那の古墳時代の埋葬馬」『日本考古学協会 1994 年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会 1994 年
- 30 桃崎祐輔「古墳に伴う牛馬供犠の検討 -日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して-」『古文化談叢』第31集 九州古文化研究会 1993 年
- 31 岡田正彦「南信州の渡来文化 -古墳時代を中心として-」『飯田市美術博物館研究紀要』第16号 飯田市美術博物館 2006 年
- 32 松井 章・神谷正弘「古代の朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺について」『考古学雑誌』第80巻第1号 日本考古学会 1994 年
- 33 今村善興・小林正春「新井原 12 号古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(3) 主要遺跡(中・南信) 長野県史刊行会 1983 年
- 34 朝日新聞社「古代馬の牧場 伊那谷に？」『朝日新聞 12 月 28 日夕刊』 1998 年
- 35 西山克己「下伊那の古墳群形成と伊那郡衙の成立」『長野県の考古学』Ⅱ 長野県埋蔵文化財センター 2002 年
- 36 西山克己「中部高地における新来文化の受容」『第46回埋蔵文化財研究集会 渡来文化の受容と展開 -5世紀における政治的・社会的変化の具体相(2)-』埋蔵文化財研究会 1999 年
- 37 茂原信生 他「溝口の塚古墳から出土した人骨」『溝口の塚古墳』飯田市教育委員会 2001 年
- 38 飯田市教育委員会『久保田遺跡 久保田 1 号古墳 饒魔王塚古墳 その2 古墳編』2003 年
- 39 小林正春 他『丸山遺跡』飯田市教育委員会 他 1988 年
- 40 吉川 豊 他『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』飯田市教育委員会 1988 年
- 41 山下誠一 他『兼田遺跡』下伊那郡上郷町教育委員会 他 1988 年

- 42 吉川金利『細新遺跡Ⅱ』 飯田市教育委員会 他 1998 年
- 43 山下誠一『内山遺跡』 飯田市教育委員会 1998 年
- 44 佐合英治 他『柳添遺跡』 飯田市教育委員会 1992 年
- 45 佐々木嘉和 他『新屋敷遺跡』 飯田市教育委員会 1998 年
- 46 吉川 豊 他『久井遺跡』 飯田市教育委員会 1993 年



# 7世紀前半を中心にシナノで用いられた円筒形土製品

## 1 はじめに

東国において決して多い事例ではないが、7世紀代の竪穴住居のカマド付近から円筒形をした土器（円筒形土器）が発見される。筆者はこの円筒形土器を検討した結果、土器（うつわ）ではなく「円筒形土製品」あるいは「円筒形カマド材」との名称を提案した経過がある（文献1）。長野県内における7世紀代の円筒形土製品の出土例はあまり多くないが、これまでの研究史をふまえつつ、どのようなものであったのか、あらためて探してみたい。

## 2 これまでの研究史概略

研究史の中では、研究経過として「円筒形土器」が用いられてきたので、そのまま「円筒形土器」の名称を使用する。

東国での7世紀代の円筒形土器については、出土例が多くないことから、その研究に係わる論考も多いとは言えない。

その中でも、特に私自身の目にふれたものについて、ここで紹介したい。

この円筒形土器について、カマドとの係わりで記した最初のもは、1968年に刊行された八王子市中田遺跡の報告書の中での岡田淳子氏の論考ではなかろうか（文献2）。

この岡田氏の論考を出発点として、円筒形土器についての論考を紹介したい。

1968（昭和43）年に刊行された八王子市中田遺跡の報告書の中で、岡田氏はE地区4号住居址の所見として、「…円筒形土器が斜めに置かれているのが注目された。位置から判断して煙道に使用されたものと思われるが、整形方法は円筒埴輪のそれと変わりなく全体にクシ目が施文され、底部は横木の上に置かれたような痕跡があり部厚である。焼成胎土とも悪く黄褐色を呈している。口縁部は欠損しているが下部はかなり焼けておりそれに比べて上部（竈から出ている部分）は全く焼けていない。なおススは附着していない。同形態のものは中田遺跡において鬼高期初頭の住居址に類例がみられる…」と述べ、さらに報文のまとめの中で、円筒形土器について、「…4号住居址の竈の上、壁にかかるあたりから、指とササラ状工具で整形した分厚な円筒形土器が出土した…B地区9号・D地区56号・E地区11・16・19号の各住居址から出土しており、これらはすべて竈内およびその近辺において発見されたものであった。…出土位置の共通性から竈の施設の一部として考えることができたのである。E地区4号住居址では当時使用された状態に近い位置で発見されたものと見なされ、その在り方から煙道として考えられるのが最も妥当性があるように思われた。」とした（文献2）。

このように円筒形土器をカマドとの関係でとらえられたことは、これ以降の円筒形土器

を考える上で大きな視点を示したものと言えよう。

1979（昭和 54）年、萩原三雄氏が御坂町郷土遺跡の報文の中で、「円筒形土器について」としてまとめている（文献 3）。

この中で、円筒形土器を A タイプ（＝底のない円筒の土器）と B タイプ（＝底部のあるもの）と分け、その特徴点として、

1、出土地点は、住居址内のカマド内あるいはその付近から出土している。

1、一対となって出土する例がみられる。

1、時期的には鬼高期にはじまって、国分期までみられるが、特に鬼高期に多く見受けられるようである。

1、内部には輪積み痕などを明瞭に残し、整形をそれ程施していないことから、容器としてはとらえにくい。

とし、さらに、これらの諸点から、

1、対となる二個の円筒形土器には器高に長短がある。

1、口縁部形態はそれぞれ異なり、開きぎみなものと、内湾ぎみのものに区別される。

とし、円筒形土器の性格を考える上で非常に重要なポイントを簡潔明瞭に示した。

1981（昭和 56）年、森嶋稔氏は、坂城町北浦遺跡での調査例から、「…この種の土器は、時々坂城地区で見られるが、内面に著しくスス状の炭化物を付着させている例が多く、ある特殊な煮沸器として用いられたか、本例のように底部に穴をあけた後、カマドの支柱として使用されたか、あるいはカマドの煙道として用いられたか興味ある土器である。」と述べている（文献 4）。

1982（昭和 57）年には、猪股喜彦氏が一宮町鞍掛遺跡の発掘調査概報の中で、萩原三雄氏が分類された円筒形土器 A タイプと B タイプをさらに分類され、以下のように述べている（文献 5）。

「一般に円筒形土器には、萩原氏が指摘するように、二種があり、さらに A タイプの底なしのものは二種に分かれる。

① 全く底なしのもので、土管状の筒抜けのもの。

② 底に穿孔し、結果的に底なし状になるもの（底部に多くの木葉痕をとどめ穿孔部はよく整形され孔自体も比較的大きい）。

前者を A－Ⅰ種、後者を A－Ⅱ種とする。少なくとも円筒形土器には以上の三種が認められる。」とした。

さらに円筒形土器の性格についてふれ、A－Ⅰ種については煙道で用いられたものと考えてもよいが、A－Ⅱ種については同様に考えるよりは、底にわざわざ孔を穿つことに意味がこめられていると考えた。

また、鞍掛遺跡 11 号住居跡での調査所見や、東京都多摩ニュータウン No. 426 遺跡 7 号住居跡（文献 6）や No. 540 遺跡 1 号住居跡（文献 7）でのカマド天井部材への土器の転用例から、鞍掛遺跡 11 号住居跡出土の円筒形土器も、転用された可能性も考えられなくな

いことを示唆している。

1990（平成2）年には、矢口忠良氏が長野市屋地遺跡の調査所見から、「…北浦遺跡ではカマドの支脚ではないかと推定し、田中沖遺跡では再火熱を受けた様子がなく、支脚として長すぎるため鰻取り用のウケではないかとの私見している。いずれにしても千曲川中流域に分布する特異な土器である。」と述べている（文献8）。

1993（平成5）年、助川朋広氏が坂城町宮上遺跡の調査所見のまとめとして円筒形土器についてふれている（文献9）。

「…今回とりあげたH3号住居址、H16住居址の他にH4号住居址からは土師質の円筒形土器が出土していて注目される。…本遺跡では、底部の確認できるものはH4号住居址出土のもののみで、一部に木葉痕をとどめ他は欠損されている。その出土状況はカマドの芯材とみられ、天井部・袖部に使用されている状況である。…しかしまだカマドの芯材として製作されたものなのか、あるいは他の目的に製作されたものが、更に転用されたものなのかは不明である。また、他遺跡で見られるものは輪積み痕を残すものに対し、本資料群は巻きあげ成形であるという点にも留意されねばならない。」と述べている。

1995（平成7）年、筆者は長野県内の6世紀、7世紀の土器様相をまとめるにあたって、長野県内出土の円筒形土器についての研究の一端を紹介した（文献10）。

1996（平成8）年、筆者は1995年の円筒形土器への論考をさらに進め、円筒形土器の特徴、用いられた時期、カマドとの関わりについてまとめた。さらに、円筒形土器を検討した結果、土器（うつわ）ではなく「円筒形土製品」あるいは「円筒形カマド材」との名称を提案した（文献1）。

この論考を受けて、1998年に山口耕一氏が「古墳時代後期の円筒形土製品－栃木県下の事例を中心に－」（文献11）、同年に山下歳信氏が「稲荷窪B地点遺跡Ⅳ成果と問題点」（文献12）、2003年に春日真実氏が「越後出土の円筒形土製品・板状土製品について」（文献13）、2009年に宮澤公雄「筒形土製品について」（文献14）などの論考を発表している。

以上、7世紀代を中心に用いられた円筒形土製品に係わる研究を見てきたが、長野県内においては、9世紀に入り再び円筒形の土器が用いられるようになる。

この9世紀代の円筒形の土器の研究について簡単にふれて、研究史の概略を終わりにしたい。研究史としては「円筒形土器」の名称を用いる。

長野県において9世紀代に用いられたと考えられる円筒形土器は、箕輪町中道遺跡40号竪穴住居跡（文献15）や松本市下神遺跡SB8号竪穴住居跡、同SB126号竪穴住居跡、同三の宮遺跡SB32号竪穴住居跡、同SB74号竪穴住居跡（文献16）から出土している。

小平和夫氏によると、「カマドあるいはカマド周辺で出土することが多く、煮炊きに関連して使用されたものと思われ、カマド施設の一部とも考えられる」と述べている（文献16）。

長野県内における7世紀代に用いられた円筒形土製品と9世紀代に用いられた円筒形の

土器との関連については今のところ明確にされていないが、小平氏の考察を参考にすれば、9世紀の円筒形の土器も「円筒形土製品」としてよいかもしれない。

### 3 円筒形土製品の出土状況

この円筒形土製品の出土については山梨県に多く見られるが、多いと言ってもその出土遺跡については数えるほどにすぎない。

その中で円筒形土製品の出土を確認しえたのは、東八代郡一宮町末木地区杭No.282（文献17）、同鞍掛遺跡（文献5）、同御坂町郷土遺跡（文献3）、同二之宮遺跡（文献18）、同姥塚遺跡（文献19）、同石和町松本塚ノ越遺跡（文献20）においてであり、その中でも特に良好な遺跡について紹介したい。

二之宮遺跡では、2号住居跡、58号住居跡、60号住居跡、78号住居跡、247号住居跡、他から出土している。

これらの住居跡を含めて、ほとんどの住居跡に付設されているカマドは、基本的には石を芯材として構築されているものである（文献18）。

姥塚遺跡では、35号住居跡、48号住居跡、51号住居跡、62号住居跡、78号住居跡、81号住居跡、104号住居跡、他から出土しているが、この姥塚遺跡においても二之宮遺跡同様に、これらの住居跡を含め、ほとんどの住居跡において付設されているカマドは、石を芯材として構築されたものである（文献19）。

鞍掛遺跡では、11号住居跡から円筒形土製品が出土しており、猪股喜彦氏はカマドの両袖間に渡した焚口天井部材もしくは天井補強材ではないかと示唆している（文献5）（第2図）。

それでは長野県内ではどうであろうか。

長野県内で確認しえた遺跡は、長野市田中沖遺跡（文献21・22）、同屋地遺跡（文献8）、同榎田遺跡（文献23）、埴科郡坂城町北浦遺跡（文献4）、同宮上遺跡（文献9）、松本市出川南遺跡（文献24）である（第1図）。

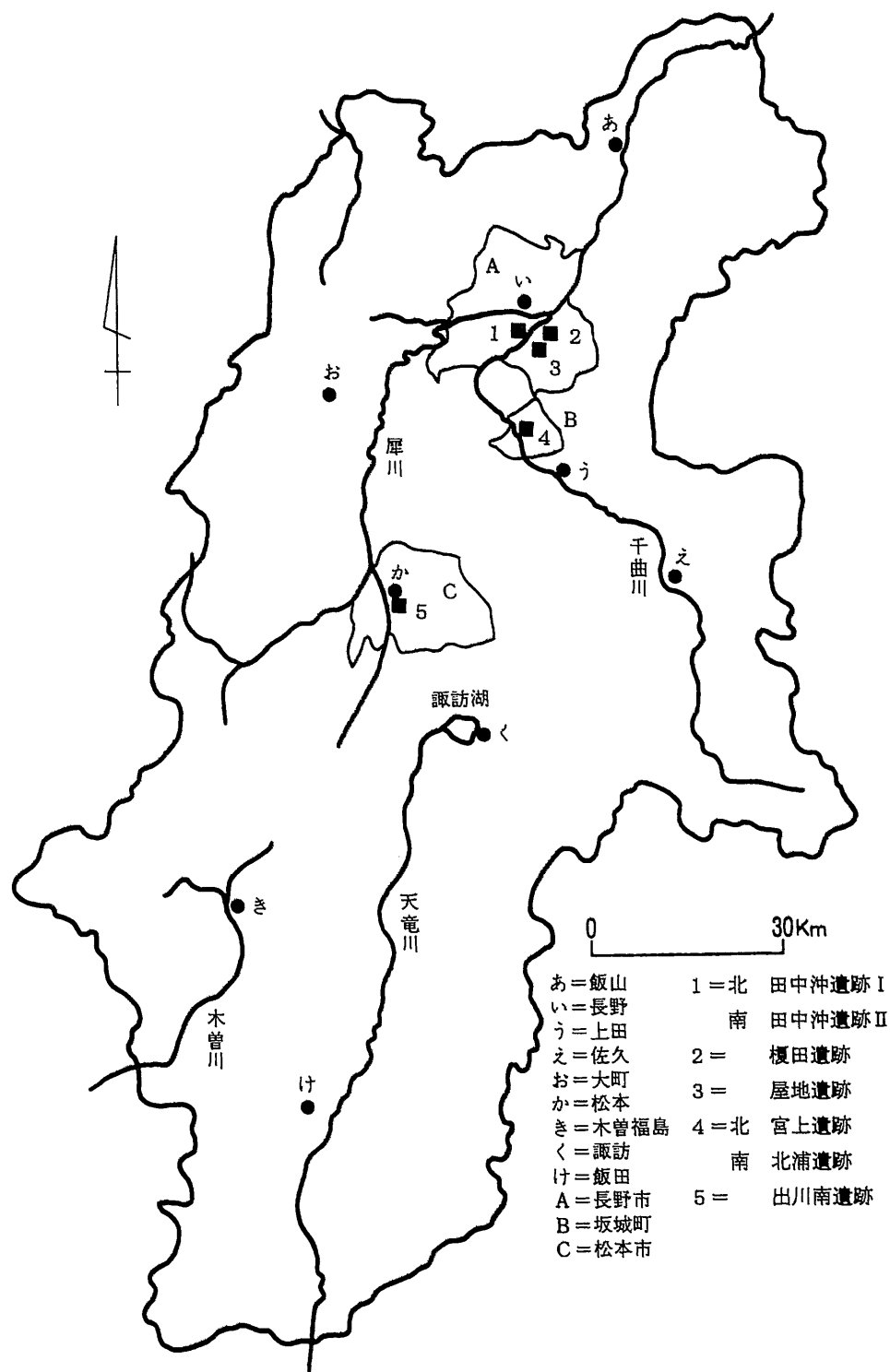
以下、これらの中のいくつかを見てみることにする。

田中沖遺跡では3号竪穴住居跡（第5図1）、44号竪穴住居跡（第5図2）や第2号竪穴住居跡（第5図3・4）、第7号竪穴住居跡（第5図5）、第12号竪穴住居跡（第5図6）などから出土している。

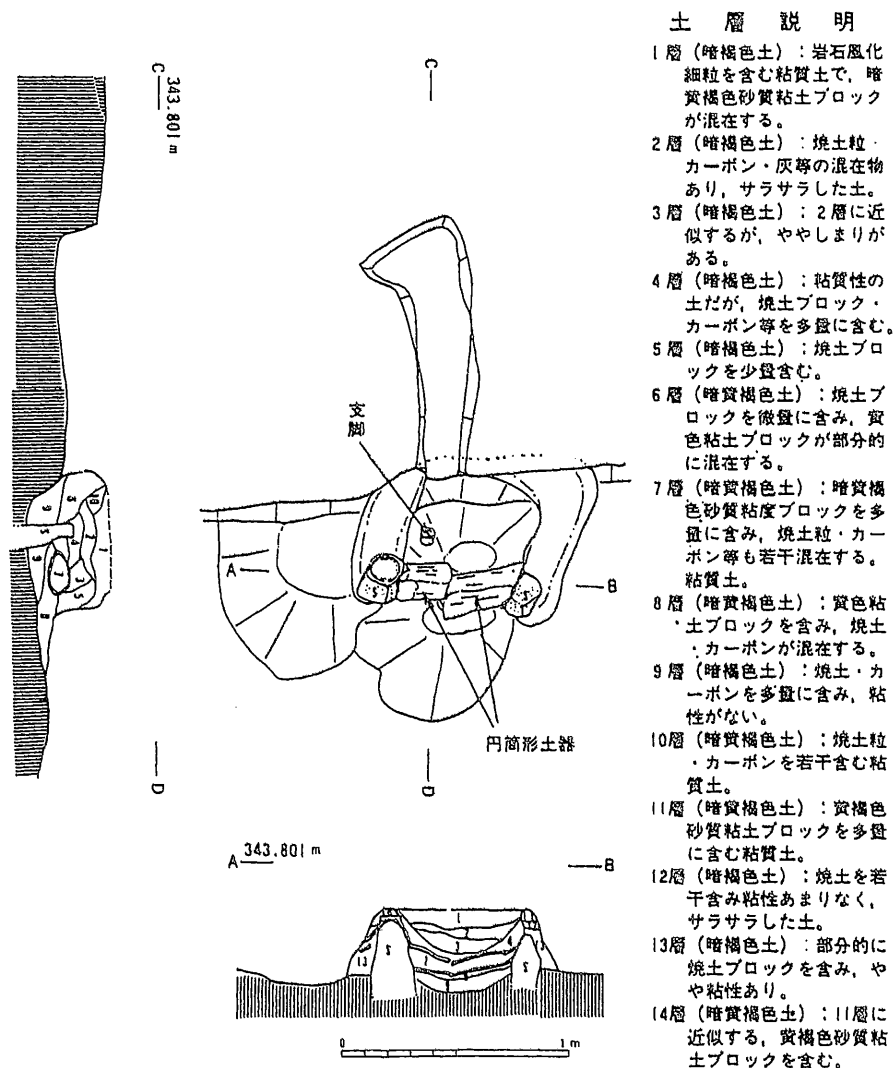
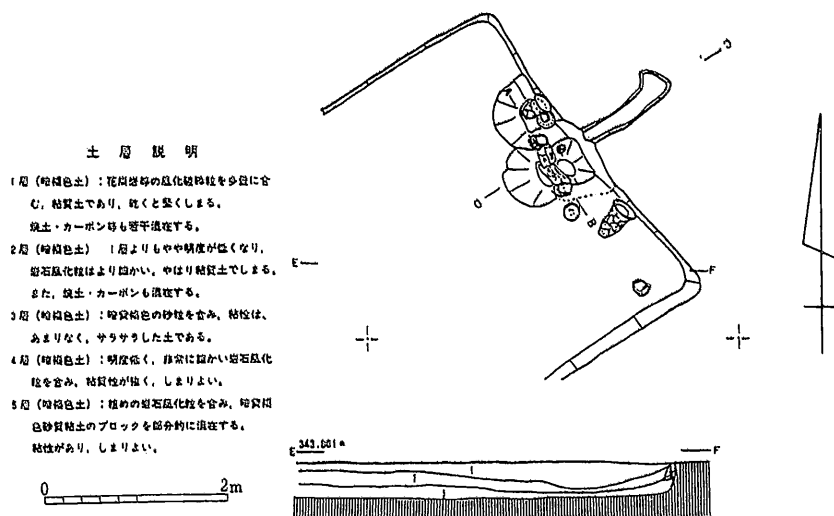
第7号竪穴住居跡では、カマドに用いられた自然石と並行するように円筒形土製品が出土している。また、第12号竪穴住居跡では、カマド前面より円筒形土製品が出土している。

宮上遺跡では、H3号住居跡（第5図10）、H4号住居跡、H16号住居跡（第5図11・12）、から円筒形土製品が出土している。

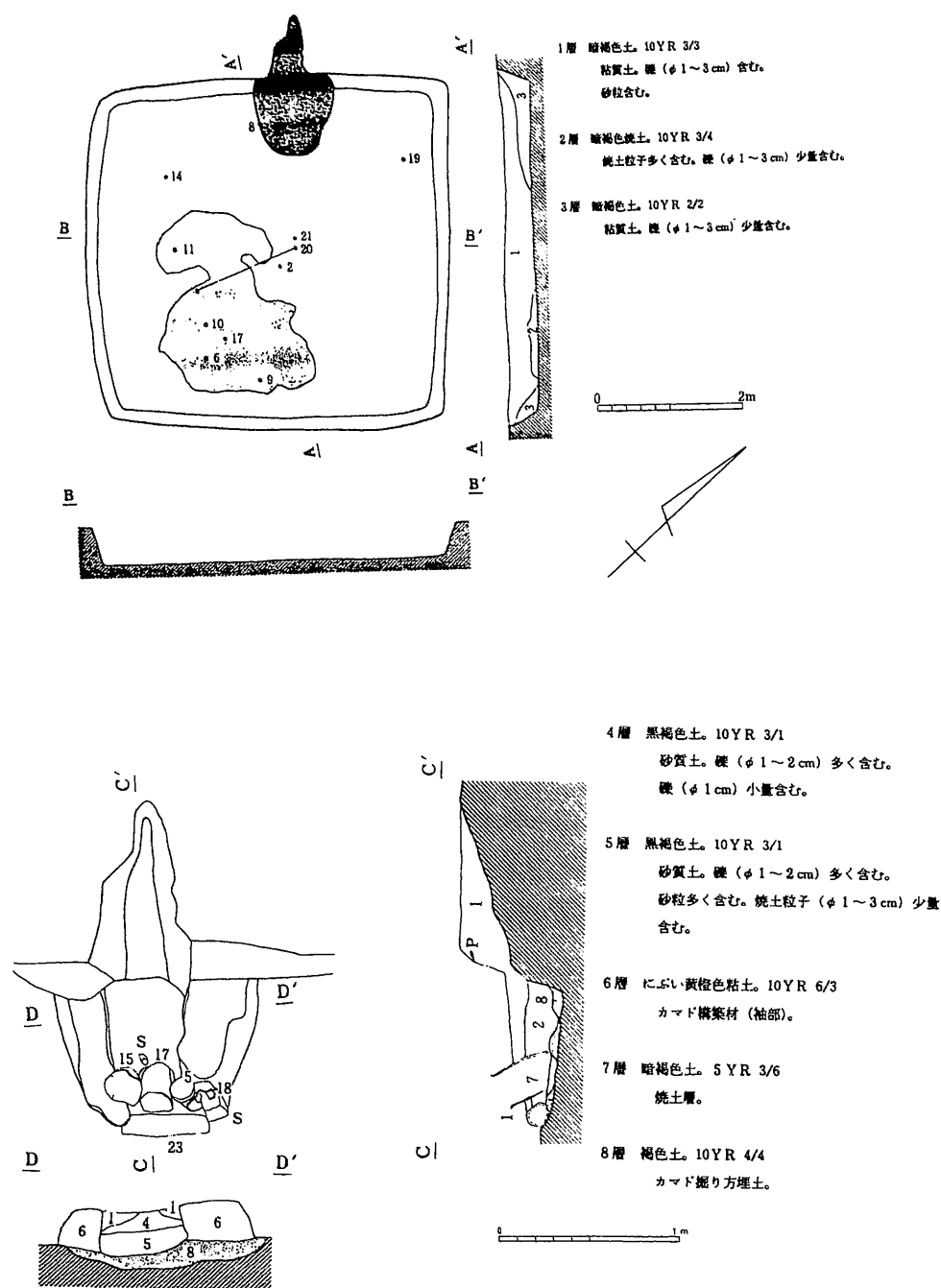
H3号住居跡では、カマドの左右袖部の先端に土師器の長胴甕を補強材として用い、さらにカマド火床部手前に円筒形土製品が横位で出土している。調査者の助川氏は、円筒形土製品をカマド天井部に用いたのであろうことを示唆している（第3図）。



第1図 長野県内における7世紀の円筒形土製品出土分布図 (文献1より一部修正)



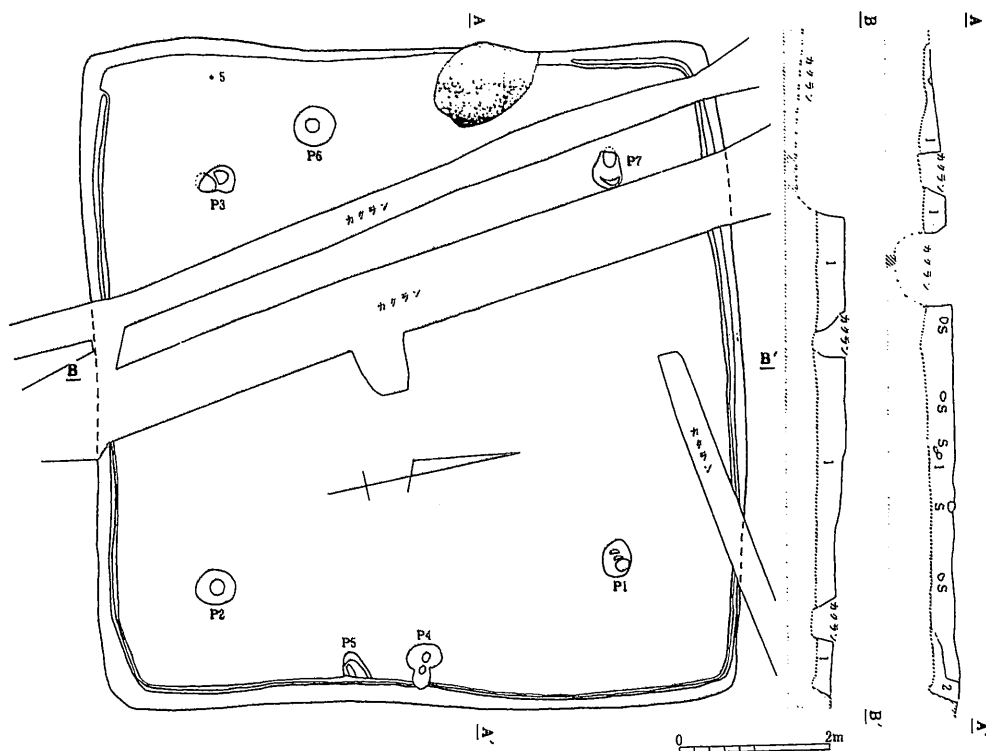
第2図 山梨県一宮町鞍掛遺跡第11号住居跡とカマド（文献5より）



第3図 坂城町宮上遺跡H3号住居跡とカマド (文献9より)

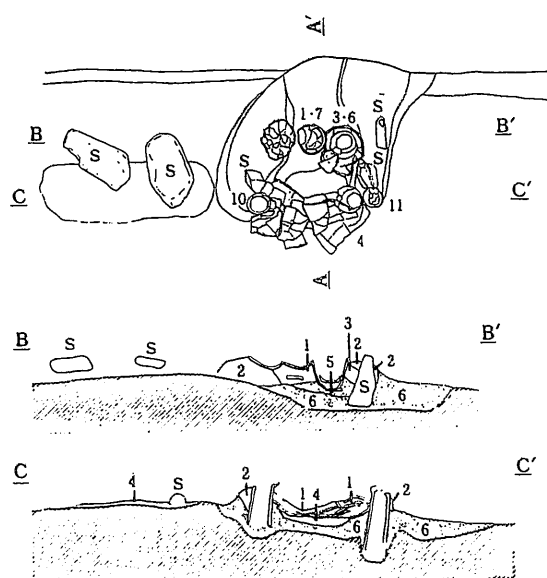
H 16 号住居跡では、カマドの構築材として石と粘土が用いられ、さらに袖部の先端に芯材として円筒形土製品が用いられていた。左袖部では正位に円筒形土製品が用いられ、右袖部では逆位に用いられていたようである (第4図)。

これら宮上遺跡での使用例は、円筒形土製品の性格を考える上でたいへん良好かつ重要な資料と言えよう。



1層 灰褐色土。10YR 2/2  
有磁質土。磁（φ1～5cm）含む。砂粒含む。

2層 褐色土。10YR 2/1  
有磁質土。砂粒含む。磁（φ1～3cm）少量含む。



1層 黒褐色土。10YR 2/3  
砂粒含む。

2層 褐色粘土。10YR 4/4  
カマド構築材（袖部）。  
砂粒含む。

3層 暗褐色粘土。10YR 5/6  
カマド構築材（袖部）。  
砂粒含む。

4層 暗赤褐色土。5YR 3/4

5層 暗褐色土。7.5YR 3/4

6層 暗褐色土。10YR 4/4  
細砂粒含む。

第4図 坂城町宮上遺跡H 16号住居跡とカマド（文献9より）



## 4 円筒形土製品の特徴

研究史概略でもわかるように、円筒形土製品の分類については、萩原三雄氏や猪股喜彦氏の業績は大きい。

ここで改めて円筒形土製品の特徴について見てみたいと思う。

この円筒形土製品の一番の特徴は、円筒形で内面に明瞭に輪積み痕や、巻き上げ痕を残すことであり、これはあえて残されたものであったと考えられる。それは、この土器を‘土器’として用いる目的ではなく、カマド構築材としての‘一土製品（一部品）’として仕上ればよかった、あるいはこのように仕上げる必要があったからであろう。

外面については、あえて輪積み痕を残しながら当時代の土師器甕と同様な技法をもって整形・調整がされている。

それはカマドに用いる土器（土製品）としては、完全に調整された土器よりも熱の伝導率の悪い輪積みを残した土器（土製品）を作ることを目的としたが、製作時、焼成時、そして焼成後に破損することを防ぐために、外面の整形・調整は必要であったであろうことが察せられる。

さて、萩原氏や猪股氏の分類については大筋で異論はないが、長野県内の資料をもとにあらためて分類を考えてみることにする。

まず口縁部形態については、

- 1 = 外に開きぎみのもの。
- 2 = 直立するもの。
- 3 = 内湾ぎみのもの。

なぜこれらに分類できるのか、その製作上の意図はどのようなものであったのであろうか。

カマドの構築材であるとする、その長さ（寸法）はカマドの規模によることとなる。しかし、大きいカマドにあわせて始めから長大な円筒形土製品を作れば、製作・焼成時に破損しやすいため、ある一定の大きさ（口径が約 10cm から 15cm 程度のもので長さ 50cm から 60cm 程度）を限度として作りえたものと考ええる。

また円柱形ではなく空洞の円筒形に作る理由も、焼成時の破損や、あるいはカマド芯材とし、熱による破損を防ぐために土器のような空洞状の円筒形にしたものと考ええる。

そのような製作上、あるいは使用上の制限から、作るのに可能な大きさ以上の円筒形土製品（カマド構築のための部材）をカマドに用いる場合、特に天井部材となろうが、二つの円筒形土製品を組合せて用いることが必要であり、そのために円筒形土製品を組み合わせられるように、当初より雄型ソケット・雌型ソケット状のものを製作したと考えられる。

また底部があるかないかについては、製作上、底を作る必要があったであろうことも察せられるが、使用目的が始めから決められていたことに意図するものであったと考える。

たとえば、

- A = 始めから底部があるもの。

口縁部側が雄型ソケットあるいは雌型ソケットで底部が雄型ソケットとなろう。  
B = 始めから底部がないもの。

口縁部側が雄型ソケットあるいは雌型ソケットであり、その逆（底部らしき方）も雄型ソケットであり雌型ソケットになりえるかも知れない。

また煙道としての用途も目的としていたかも知れない。

C = 製作後、あるいは使用時に底部を破損させ、結果的に底部がなくなったもの。  
これは結果的にはBタイプと同様となろうが、その意図はおそらくカマドを造る時に急きょBタイプとして転用されたものとする。

また単品として、あるいは組み合わせて用いた時に、天井部材または芯材として必要な長さ（寸法上）の調整によって切断された可能性もある。

次に、外面の調整についてはどうか。

円筒形土製品の外面調整については、基本的には輪積み痕をあえて残すようにその上に当時代の土師器の長胴甕と同様な調整技法を施しており、以下のように分類した。

- a = 縦方向のヘラケズリを施すもの。
- b = 縦方向のナデやオサエを施すもの。
- c = 縦方向のハケメを施すもの。

以上である。

これらを各遺跡より出土した第5図内の資料に照らしあわせてみると、

1 = 1 ? a	8 = 1 ? b
2 = ? ? b	9 = 1 A b
3 = ? ? b	10 = 1 ? c
4 = ? ? b	11 = ? A b
5 = 2 A b	12 = ? ? b
6 = 1 A c	13 = 1 ? c
7 = 1 ? c	

となる。

第1表 第5図内土器の出土遺跡と遺構  
(文献1より一部修正)

第5図内No.	出土遺跡と遺構	文献
1	長野市田中沖遺跡3号住居跡	22
2	長野市田中沖遺跡44号住居跡	22
3	長野市田中沖遺跡2号住居跡	21
4	長野市田中沖遺跡2号住居跡	21
5	長野市田中沖遺跡7号住居跡	21
6	長野市田中沖遺跡12号住居跡	21
7	長野市屋地遺跡A9号住居跡	8
8	坂城町北浦遺跡第1号住居跡	4
9	坂城町北浦遺跡第1号住居跡	4
10	坂城町宮上遺跡H3号住居跡	9
11	坂城町宮上遺跡H16号住居跡	9
12	坂城町宮上遺跡H16号住居跡	9
13	松本市出川南遺跡35号住居跡	24

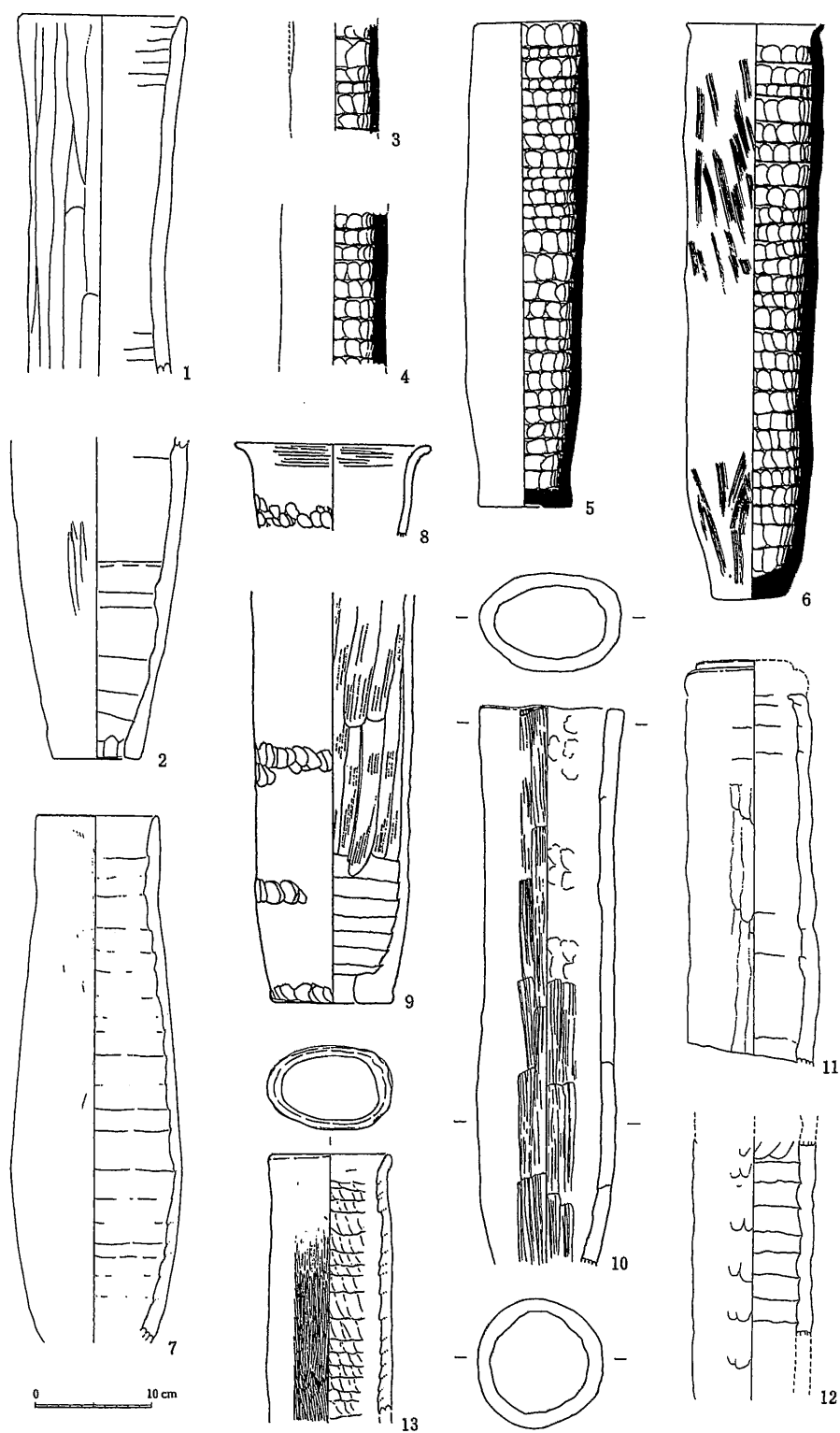
## 5 円筒形土製品が用いられた時期

長野県において円筒形土製品が出現し、主に用いられたのは7世紀代であると考えてはばまちがないであろう。この時期について、地域ごとにみてもいい。

まず長野市域（北信地域）ではどうか。

長野市田中沖遺跡3号住居跡出土の一括資料は善光寺平後期5期から6期の早い頃に位置づけられ（第6図・第2表）、また長野市屋地遺跡A9号住居跡出土の一括資料は善光寺平後期5期（第6図・第2表）に位置づけられる。

次に埴科郡坂城町宮上遺跡はどうか。



第5図 長野県内出土の7世紀代の円筒形土製品 (文献1より)

宮上遺跡は埴科郡なので北信地域の範ちゅうとなるが、出土土師器の様相をみると、佐久平の影響を受けており、佐久平（東信地域）の土器観で

時期を考えた方がよさそうであろうと考えた。

宮上遺跡H 3号住居跡出土の一括資料は、佐久平後期6期の様相（第7図・第2表）と考えられ、またH 16号住居跡出土の一括資料は、佐久平後期5期的様相（第7図・第2表）と考えられ、宮上遺跡では6世紀末葉から7世紀初頭頃に円筒形土製品が持ち込まれ使用された可能性も考えられる。

それでは中信地域はどうだろうか。

松本市出川南遺跡では35号住居跡より円筒形土製品が出土している。35号住居跡の一括資料は、松本平後期4

期の終末から5期にかけての時期（第8図・第2表）に位置づけられよう。

このように見てみると、坂城町宮上遺跡地域（埴科郡域）や松本市出川南遺跡地域（筑摩郡域）では、早ければ6世紀末葉から7世紀初頭頃に円筒形土製品が持ち込まれ使用された可能性も考えられ、その後を受けて、7世紀前半頃に長野市田中沖遺跡地域（更級郡域）に持ち込まれ使用されたようである。この6世紀末葉から7世紀初頭頃に用いられた状況は、山梨県内での状況（文献25）と類似していることがうかがえる。

## 6 カマドとの関わり

長野県内にカマドが持ち込まれ使用され始めるのは、おそらく5世紀の後半代、それも須恵器型式で言うとTK208型式段階であろうと考える（文献26・27）。ただ長野県内において須恵器の用いられ方の特徴として、TK208・TK23・TK47型式の須恵器が混在

第2表 長野県内各地域の6・7世紀の土器時期相対表

（文献1より）

年 代	陶 邑	飛鳥藤原	善・後	佐・後	松・後	南・後	畿・土
5 0 0	TK 2 3		I	I	I	I	
	TK 4 7		1	1	1	伊 1	
	MT 1 5		2	2	2		
	TK 1 0 (MT 8 5)					伊 2	
6 0 0	TK 4 3		3	3	3		
	TK 2 0 9			4		諏 3	
	TK 2 1 7		4		4		
						諏 4	
7 0 0		I	5	5	5		
		II					
	TK 4 6	III	6	6	6	?	
	TK 4 8	IV					
	MT 2 1	V		7			

※善光寺平と松本平は6期の土器様相をもって古墳時代後期の土器様相は終わる。年代では7世紀代となり、8世紀に入り飛鳥IV・Vの土器様相へと変化していく。

※佐久平では、7期の土器様相をもって古墳時代後期の土器様相は終わるようであるが、年代ではやはり7世紀代と考えてよさそうである。しかし、7世紀末ころに飛鳥IV・Vの土器様相へと変化していくようである。

器種 期	杯	高杯	甕	甌	外来(的)	その他
1						
2						
3						
4						
5						
6						

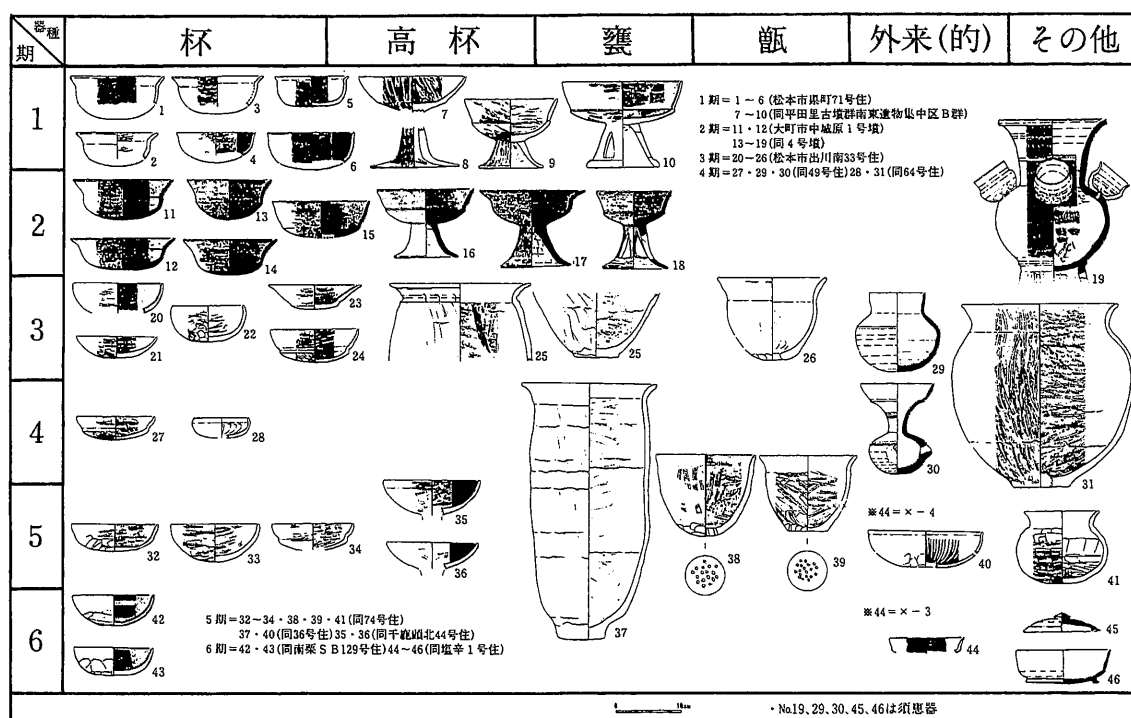
1期 = 1・2・4・6～9 (長野市本村東沖57号住) 3・5 (同梅原小学校7号住)  
 2期 = 10・11 (同三輪1次1号住) 12・13 (本村東沖66号住)  
 3期 = 14・15 (三輪3次14号住)  
 4期 = 16～21・24 (同中俣II 1号住)  
 22・23 (更埴市一丁田S B02号住)  
 5期 = 25～28・30 (長野市附地B 29号住)  
 29 (同市中沖20号住)  
 6期 = 31～33 (同塩崎通群市道松節一小田井神社地点)  
 ・No.24、32、33は須恵器

第6図 北信地域の土師器推移 (文献1より)

器種 期	杯	高杯	甕	甌	外来(的)	その他
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						

1期 = 1～5 (佐久市清水田H 2号住)  
 2期 = 6～9 (同大井城H 9号住) 10 (同H11号住)  
 3期 = 11・15 (小埴市中原4号住)  
 12 (佐久市下壺端H 36号住) 13・14 (同上桜井北H 8号住)  
 4期 = 16～18 (中埴3号住) 19 (佐久市上壺端H 16号住)  
 5期 = 20～23・26 (大井城H 5号住) 24・25・27 (佐久市前田H 33号住)  
 28～31 (同栗毛坂B区117号住)  
 6期 = 32～35 (前田H 103号住)  
 36・37・39・43 (佐久市若宮H 9号住)  
 38・40・41 (栗毛坂B区112号住)  
 42 (小埴市関口B H 34号住)  
 7期 = 44～49 (同竹花38号住)  
 ※ (29・31・40・41 = × - 2)  
 (39・42 = × - 4)  
 ・No.43、49は須恵器

第7図 東信地域の土師器推移 (文献1より)



第8図 中信地域の土師器推移 (文献1より)

して使用されていた状況や、陶器窯での須恵器型式の相前後する特徴を持つ須恵器が存在することを考慮しなければならないが(文献26)それらを考慮してもカマドの導入段階はTK208型式段階(5世紀第3四半期から5世紀第4四半期に移行する頃)の頃であり、TK47型式段階以降に多くのムラに定着していったことがうかがえる。

さて、このカマドの構築にあたっては当初より石を袖部の芯材として用いて、そこに粘土を用いて構築するものと、粘土のみで構築をおこなったものとがあったことが察せられる。

それが早ければ6世紀末葉から7世紀初頭頃にかけての時期に従来の構築方法に加え、円筒形土製品をカマドの天井部材・袖芯材として用い、さらには煙道にも用いるような技術が導入された。

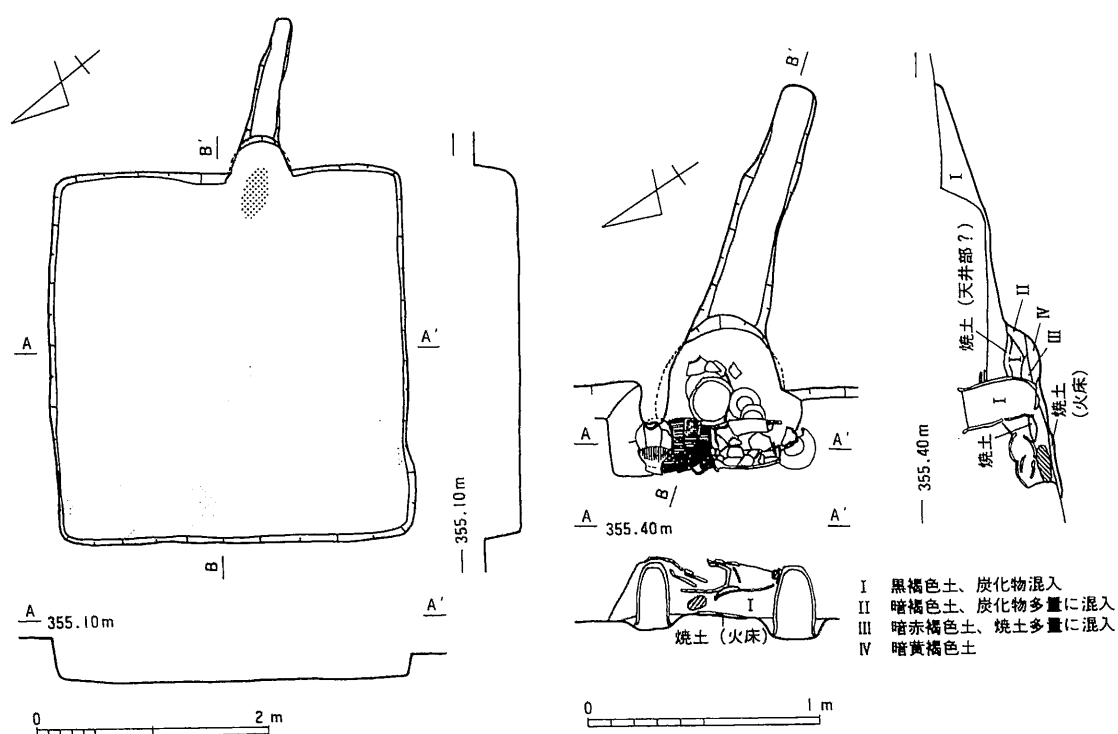
しかし、この技術は7世紀代でも多くのムラや家で用いられることはなく、ごく少数派的なカマド構築方法として姿を消していく。

宮上遺跡H3号住居跡では円筒形土製品がムラに持ち込まれた次の時期にカマドが構築されており、円筒形土製品と土師器の長胴甕と一緒にカマド構築材として使用されている。おそらく、当初カマド構築材として円筒形土製品を用いた人々も当時代の土師器の長胴甕でも充分に円筒形土製品の機能をはたせ

ることを知り、長胴甕の転用を始めたものと考えられる。

円筒形土製品を用いたカマド構築技術の導入以降、限られたムラの住居ではカマド構築の材料として長胴甕を転用することを通常とするようになったものと考えられる。

その結果として、円筒形土製品は消え去り、長胴甕をカマドの構築材とする方法へと転



第9図 千曲市大境遺跡9号住居跡とカマド（文献28より）

換していったものと考えられる。

もはや8世紀にはカマドの構築材（カマドの一部品）としてのみに作られた円筒形土製品はその必要性を失ったのであった。

長胴甕を円筒形土製品同様にカマドに用いる方法は7世紀以降8世紀にも見られるが、千曲市大境遺跡9号住居跡（第9図）はその好例と言えよう（文献28）。

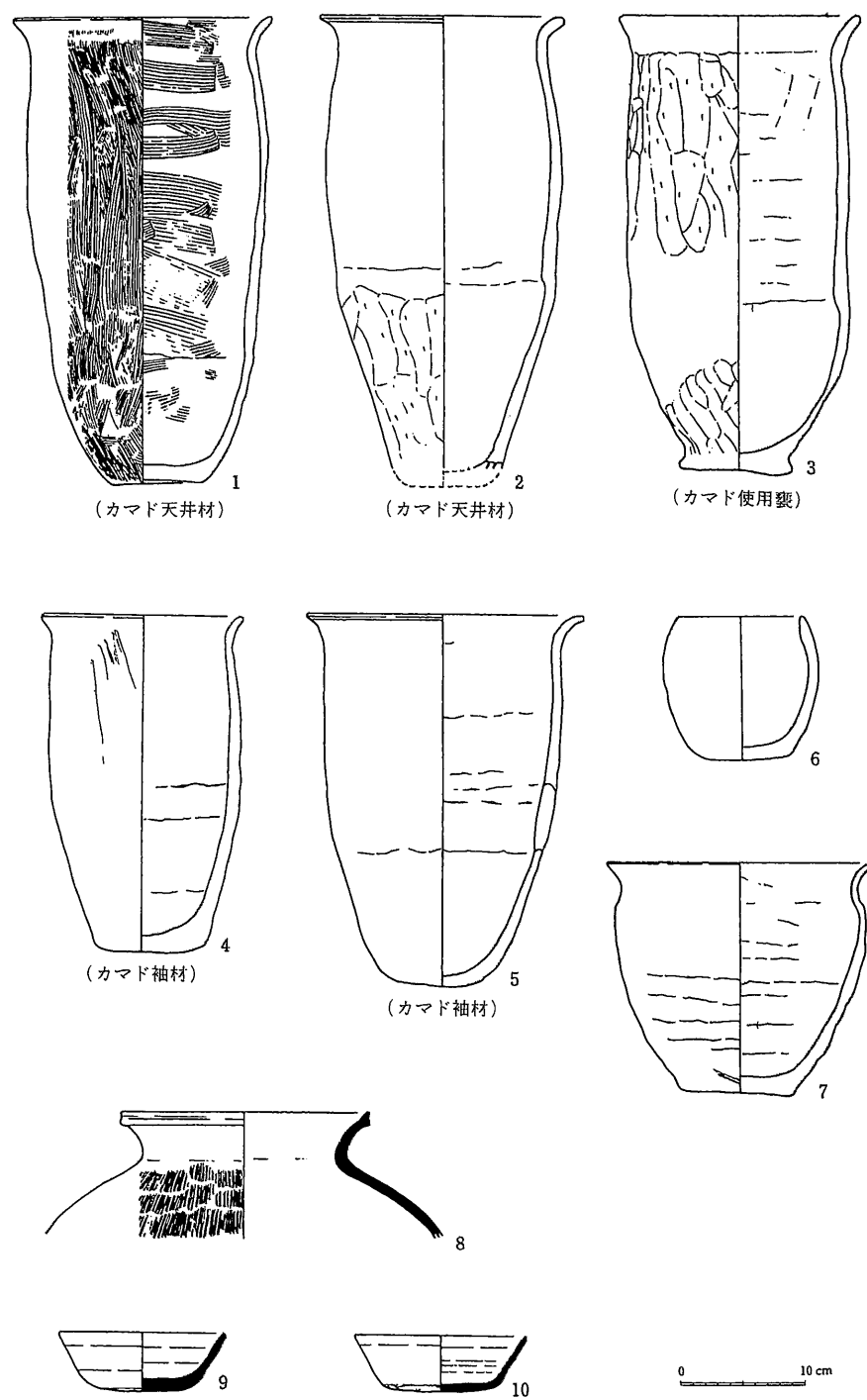
この大境遺跡9号住居跡のカマドでは、長胴甕が左右袖部に各一個体ずつ（第10図4・5）芯材として用いられ、また天井材として長胴甕が二個体（第10図1・2）ソケット状につなげて用いられていた（文献28）。

長胴甕をカマド構築材に用いる方法は、この時期の一般的なカマド構築法ではなく、あくまでも少数派である。

この長胴甕を用いた方法は円筒形土製品を用いた方法と一連のものであり、技術的のみならず、長胴甕を円筒形土製品同様にカマド構築材に用いることにこだわった人々の姿を想像させられる。

もちろん、新たな技術が広まっていくことを思えば、長胴甕をカマド構築材に用いたすべての人々が円筒形土製品を用いた人々と関わりがあったとは思えない。しかし、埴科郡内での宮上遺跡や大境遺跡での事例を考え

れば、大境遺跡9号住居跡のカマドを構築した人々は、当初円筒形土製品をカマド構築に使用した新来文化の伝播を担った渡来系の人々と何らかの関わりを持った在地住民であった可能性が考えられることを指摘しておきたい。



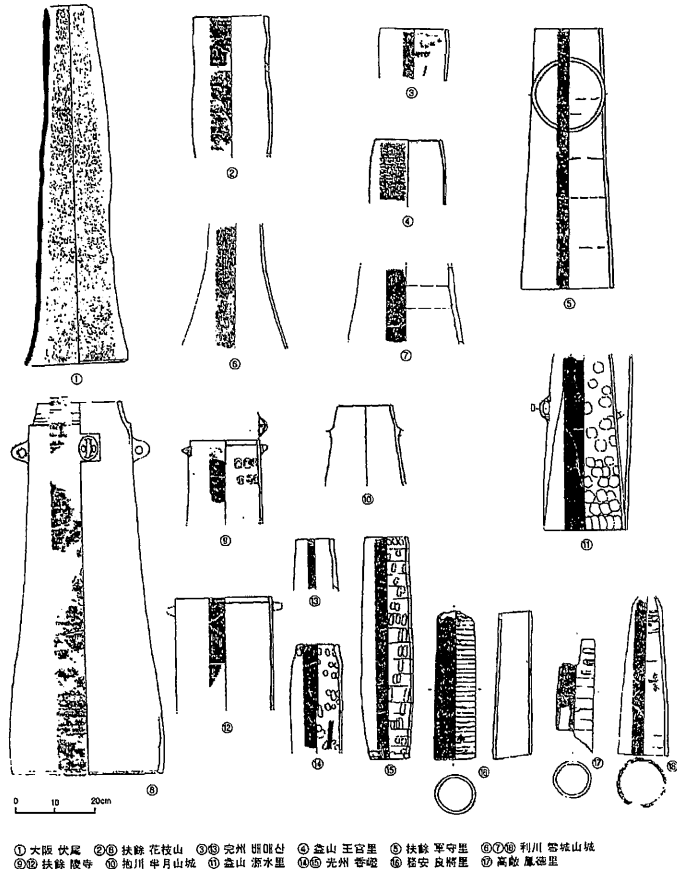
第10図 千曲市大境遺跡9号竪穴住居跡出土土器 (文献28より)



## 7 朝鮮半島での出土例について

1996年の筆者の論考時には（文献1）、長野県内出土の円筒形土製品とは形態を異にするものの大阪府伏尾遺跡出土資料に円筒形の土器を確認し得たが、他資料についての情報は持ち得なかった。ただ当時筆者の脳裏にはカマドとの関係で捉える以上畿内で発見されれば、さらに朝鮮半島との関わりを考える必要があると考え、専修大学土生田純之先生に朝鮮半島での出土事例などを相談した経過がある。そのような経過の中、以下の論文を確認するに至った。

2006（平成18）年に発表された権五榮氏と李亨源氏による「壁柱（大壁）建物研究のために」の中に、「韓半島で現在までに集成された煙筒・煙筒形土製品、あるいは煙家の数は100点を上回る。分布相を見ると北は抱川半月山城、南は全南海岸地域に至る。この範囲外にある資料は江陵安仁里と慶山林堂のものが確認されているだけである。つまり、出土例の圧倒的多数は馬韓－百済圏内ということになる。」（文献29）と述べている（第11図）。



第11図 朝鮮半島出土の円筒形土製品

（左上①のみ大阪府出土）（文献29より）

## 8 円筒形土製品が語ること

さて、この円筒形土製品の性格をもう一度整理してみよう。

時期＝7世紀代に多く用いられ、早ければ6世紀末葉から7世紀初頭頃に用いられはじめた。

分布＝朝鮮半島、特に百済地域で使用されたものである。日本では大阪府や滋賀県で発見例が多くみられる。東国では山梨県東八代郡地域に集中がみられる。長野県では千曲川中流域を中心に、松本平でも確認されている。また新潟県・東京都・群馬県・栃木県でも出土状況や分布状況が紹介されている。

使用＝カマドの構築材として作られ、カマドの天井部材・袖芯材・煙道に用いられた。  
製作＝カマドの芯材等に用いるため、あえて土器に輪積み痕を残した。それは器面を完全に調整し整えた土器よりも、輪積み痕を残した方が熱の伝導率が悪いという理由からであり、カマドに用いるためにあえてこのような筒形で輪積みを残した土器（土製品）として仕上げたものである。

このように山梨県内においても、長野県内においても、その共通性が見いだせた。

さらに分布について考えるならば、山梨県でも長野県でも古墳時代以来、古代に至るまで、多くの古墳や古墳群が造られたり、また国分寺が造られたりする主要な地域であった土地に円筒形土製品の出土が集中する。

長野県内においては、屋地遺跡を始め、円筒形土器を出土するそれぞれのム

ラは、7世紀代に入り新来文化を受け入れることにより新たな古墳文化を形づくる背景を考えさせられるムラ（集落）であると考えられる。

山梨県内で円筒形土製品を使用した人々と長野県内において円筒形土製品を持ち込んで使用した人々は、おそらく同じ地縁的關係で結ぶことのできる人々であり、同じ地域から同じ目的のために派遣された人々であったと考えられる。

この考え方を前提にし、先に示した朝鮮半島での事例から、円筒形土製品を用いてカマドを構築する人々は、先進地域における技術や文化を携え、それぞれのムラに新たな技術や文化を伝播・定着させていった人々であったと考えられる。

彼らは百済から渡来し大和（飛鳥）政権の意図の中で新来文化を用い従事した人々であったであろう。そしてさらに大和（飛鳥）政権の意図の中で新来文化を東国に広めるため派遣され、派遣先のムラで構築され残されたのが、円筒形土製品を用いたカマドであったと考えられる。

当時の信濃国で円筒形土製品を用いた人々が、甲斐国東八代郡で円筒形土製品を用いた人々と非常に強い関係であったと考えられるのも、その出自を同じくすることからであろうと考えられる。

以上から、東京都・山梨県・長野県・栃木県・群馬県・新潟県他で発見された円筒形土製品は、百済から渡来し大和（飛鳥）政権の意図の中で新来文化を東国へ伝え広める目的で派遣され、各地へ移動した人々の痕跡であったと考えられる。

#### 参考文献

- 1 西山克己「7世紀代に用いられた円筒形土器」『長野県考古学会誌』79 長野県考古学会 1996年
- 2 岡田敦子 他「八王子市中田遺跡－古墳時代集落址の調査－」（資料編3）八王子市中田遺跡調査会 1968年
- 3 萩原三雄 他「郷土遺跡」『御坂町の埋蔵文化財』御坂町教育委員会 他 1979年
- 4 森嶋 稔「第四章 古墳時代の坂城 北浦遺跡」『坂城町誌 中巻 歴史編（一）』坂城町誌刊行会 1981年

- 5 猪股喜彦「一宮町鞍掛遺跡発掘調査概報（1）円筒形土器を出土した鬼高期の住居址」『丘陵』第9号 甲斐丘陵考古学研究会 1982年
- 6 鈴木俊成 他「多摩ニュータウンNo.426 遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』－昭和55年度－第3分冊 東京都教育委員会 他 1981年
- 7 比田井克仁 他「多摩ニュータウンNo.540 遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』－昭和55年度－第2分冊 東京都教育委員会 他 1981年
- 8 矢口忠良 他「屋地遺跡」Ⅱ 長野市教育委員会 1990年
- 9 助川朋広「宮上遺跡」Ⅱ 坂城町教育委員会 1993年
- 10 西山克己「信州の6世紀・7世紀の土器様相」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会 1995年
- 11 山口耕一「古墳時代後期の円筒形土製品－栃木県下の事例を中心に－」『研究紀要』第6号（財）栃木県文化振興事業団 他 1998年
- 12 山下歳信「Ⅳ成果と問題点」『稲荷窪B地点遺跡』群馬県勢多郡大胡町教育委員会 1998年
- 13 春日真実「越後出土の円筒形土製品・板状土製品について」『富山大学考古学研究室論集 蜷気楼－秋山進午先生古稀記念－』秋山進午先生の古稀をお祝いする会 2003年
- 14 宮澤公雄「筒形土製品について」『山梨県考古学論集』Ⅵ 山梨県考古学協会 2009年
- 15 片桐孝男 他「中道遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－上伊那郡箕輪町』長野県教育委員会 他 1994年
- 16 小平和夫「総論編－第3章第5節 古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』4 財団法人長野県埋蔵文化財センター 他 1990年
- 17 里村晃一 他「古代甲斐国の考古学調査」（続編）山梨県教育委員会 1994年
- 18 坂本美夫 他「二之宮遺跡」山梨県教育委員会 他 1987年
- 19 末木 建 他「姥塚遺跡 姥塚無名墳」山梨県教育委員会 他 1987年
- 20 瀬田正明 他「松本塚ノ越遺跡」石和町教育委員会 他 1990年
- 21 矢口忠良 他「田中沖遺跡」長野市教育委員会 他 1980年
- 22 矢口忠良「田中沖遺跡」Ⅱ 長野市教育委員会 他 1991年
- 23 広田和穂 他「榎田遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』37 長野県埋蔵文化財センター 他 1999年
- 24 竹原 学 他「松本市出川南遺跡Ⅳ 平田里古墳群」松本市教育委員会 1994年
- 25 森原明廣「山梨県地域における古墳時代後期の土器様相」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会 1995年
- 26 西山克己「信濃国で須恵器が用いられ始めた頃」『信濃』第40巻第4号 信濃史学会 1988年
- 27 西山克己「信州における須恵器出現の頃」『考古学ジャーナル』No.316 ニューサイエンス社 1990年
- 28 佐藤信之「大境遺跡」Ⅳ・Ⅴ 更埴市教育委員会 1994年
- 29 權 五榮・李 亨源（翻訳：平郡達哉・庄田慎矢・山本孝文）「壁柱（大壁）建物研究のために」『第2回日韓集落研究会共同研究会 日韓集落研究の現状と課題（Ⅱ）』日韓集落研究会日本支部 2006年

## 註

坂城町教育委員会の助川朋広氏、千曲市教育委員会の佐藤信之氏にご教示をいただいた。





## 古墳時代から律令時代への展開



# 科野で7世紀代から8世紀代に用いられた暗文土器

## 1 はじめに

7世紀に入ると、飛鳥地域の諸京や藤原京において、金属器を模倣した器（土器）が用いられるようになる。長野県内においても7世紀第2四半期頃より、僅かではあるがこれら都を中心に用いられた器（土器）、特に土師器製の食器（土器）が用いられるようになる。

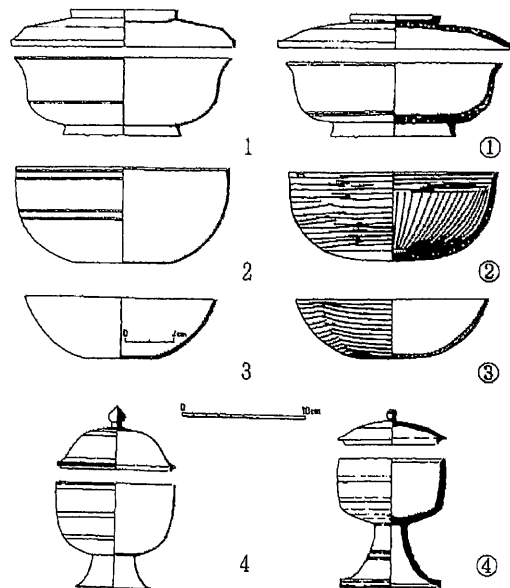
ここ数年の大規模な発掘調査によって資料数は増加したものの、当時日常あたりまえに用いられていた食器（土器）量からすれば、百分の1パーセントにも到底満たない数量である。

これらの食器（土器）の分布傾向から、それが意味することについて簡単にまとめてみたい。

## 2 畿内暗文土器研究の概要

「暗文土器」は、7世紀前半に畿内の飛鳥地域において出現する。土師器の杯・高杯・皿・鉢などの器種に暗文が施される。その暗文土器が出現する経緯については、西弘海氏によって「…六世紀の後半以来、朝鮮三国からわが国に将来された佐波理碗を主とする金属容器の影響を受けてその形態が一変する。土師器の食器では古墳時代以来の無文の杯に代わって、外面をヘラ磨きし、内面を暗文で飾った杯C類が出現し、…中略…器面を暗文・ヘラ磨きで飾った皿・鉢A・杯Bなど古墳時代以来の伝統的な食器には見られなかった新しい器形の食器類が登場することとなる。」と明確にしている（文献1）（第1図）。

また、「暗文」については、「…外面のヘラ磨きや、文様化したヘラ磨きの一種である内面の暗文も、金属器特有の平滑な器面と光沢を模倣した結果とみることができる。」としている（文献1）。



- 1 = 京都府長刀坂古墳 佐波理器（文献31）
- 2 = 群馬県八幡観音塚古墳 佐波理器（文献31）
- 3 = 奈良県正倉院 銀器（文献31）
- 4 = 群馬県八幡観音塚古墳 佐波理台付碗（文献1）
- ① = 大阪府陶邑 KM22 号窯 須恵器杯（文献31）
- ② = 奈良県小墾田宮 SD050 土師器杯C（文献31）
- ③ = 奈良県平城宮 SK820 土師器杯A（文献31）
- ④ = 同 小墾田宮 SD050 中層 須恵器台付碗（文献1）

第1図 金属製容器とそれを模倣した土器

まさに古代仏教文化の影響下に出現した食器（土器）であり、また新たな意識のもとに用いられた暗文技法であると言える。

また、「暗文土器」はこれまでの研究により、遺跡や出土資料の年代を決めるための基本資料ともなっている（第1表）。

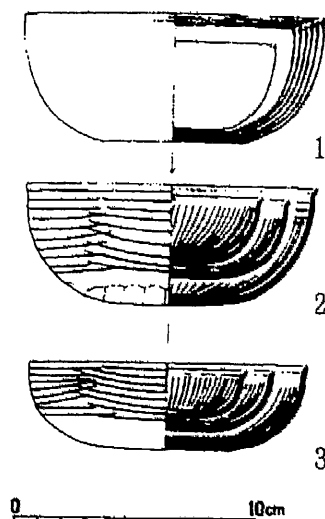
### 3 ここで用いた「暗文土器」の区分表現について

ここで言う「暗文」とは、連弧状・放射状・ラセン状の三種類の文様の組合せが完成し、これと直接的な関係にあるものに限る（第2図）。

このような「暗文土器」は古代仏教文化の影響下で、畿内の飛鳥地方で生まれたが、地方では都から直接持ち込まれたものや、都の土器を忠実に模倣したもの、あるいは在地色の強い土器に「暗文」を施したもの等が使用されている場合が多い。

これらについて、ここでは以下のような分類表現を用いることとした。

- ・畿内産暗文土器＝器形・調整・胎土・暗文から、確実に飛鳥諸京・藤原京・平城京地域で使用された土師器杯などと同一と考えられるもの。
- ・畿内系暗文土器＝畿内産暗文土器とは異なるが、畿内暗文土器を忠実に模倣しているもの。
- ・在地暗文土器＝畿内産や畿内系の暗文土器の影響下のもとに、在地色を強く残しているもの。



1 = 奈良県法隆寺 献納宝物佐波理碗

2 = 奈良県小墾田宮 SD050 上層  
土師器杯C

3 = 奈良県坂田寺跡 SG100 土師器杯C

（1から3 文献1より）

第2図 金属製容器と土師器杯Cの変遷

### 4 長野県内の暗文土器出土の遺跡概要（第2-①・②表、第3図）

#### （1）若宮遺跡 佐久市長土呂（文献2）（第6図-3）

若宮遺跡は小諸市との境界に近い長土呂地籍にあり、周防畑遺跡群に属する。二つの田切に挟まれた丘陵部に立地する。1983年の調査では古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡16軒他が調査されている。

暗文土器は、竪穴住居跡H7（H9出土土器と接合）から畿内産と考えられる飛鳥Ⅱ～Ⅲ期の杯Cが出土しており、H7は調査された竪穴住居跡中最大規模であった。大塚原遺跡他、周辺遺跡からの畿内産・系暗文土器の出土や、県内では比較的早い時期に搬入されていることを考えれば、当遺跡の重要性は見逃せない。



## (2) 樋村遺跡 佐久市平賀（文献3・4）

樋村遺跡は佐久市中心部のやや東南寄りに位置し、内山川と志賀川の複合扇状地にあたる。1985年までに調査された面積は40,000㎡であり、古墳時代後期の竪穴住居跡273軒、奈良時代後半から平安時代の竪穴住居跡14軒他が調査されている。

暗文土器は、畿内産と考えられる飛鳥Ⅳ期の杯CⅢが出土しているが、詳細については不明である。

## (3) 前田遺跡 佐久市小田井（文献5）（第6図-1）

前田遺跡は佐久市北端部の小田井地籍にあり、鑄師屋遺跡群に属し小諸市や御代田町にもおよぶ。1989年までに2市1町（前田遺跡・鑄師屋遺跡＝佐久市、鑄物師屋遺跡＝小諸市、前田遺跡・野火付遺跡・十二遺跡・根岸遺跡＝御代田町）で調査された面積は119,300㎡であり、竪穴住居跡446軒、掘立柱建物跡431棟他が調査されている。鑄師屋遺跡群については、検出遺構や出土遺物から官衙的性格の遺跡ではないかと考えられている。

暗文土器は、竪穴住居跡H58より8世紀第2四半期頃の在地産と考えられる杯1点が出土している。

当地域（大塚原遺跡・若宮遺跡 他）には、飛鳥Ⅱ～Ⅲ期の畿内産・系の杯Cがすでに持ち込まれ、県内では比較的早い時期のものが他地域よりも多く見られる。また8世紀第2四半期頃には在地化した杯が用いられている。

この他、7世紀代の竪穴住居跡H90・H103・H109・H123・H132号から南伊勢産・系と考えられる土師器甕5点が出土している。

## (4) 芝宮遺跡群 佐久市小田井（文献6）

芝宮遺跡群は浅間山南麓末端部の大字小田井地籍にあり、小諸市との市境に位置する。御代田町を含めた2市1町に広がる中原遺跡群、鑄師屋遺跡群、宮ノ反A遺跡群、周防畑遺跡群、長土呂遺跡群、前田遺跡等とともに古墳時代後期から平安時代にかけての遺跡群の一角を形成している。

古墳時代後期から平安時代の集落跡が調査され、竪穴住居跡245軒、掘立柱建物跡約90棟他が調査された。

暗文土器は、竪穴住居跡SB171から畿内産と考えられる飛鳥Ⅱ期の杯Cが1点出土している。また溝跡SD3から畿内産や畿内系と考えられる飛鳥Ⅱ期の杯が埋土中から5点出土している。

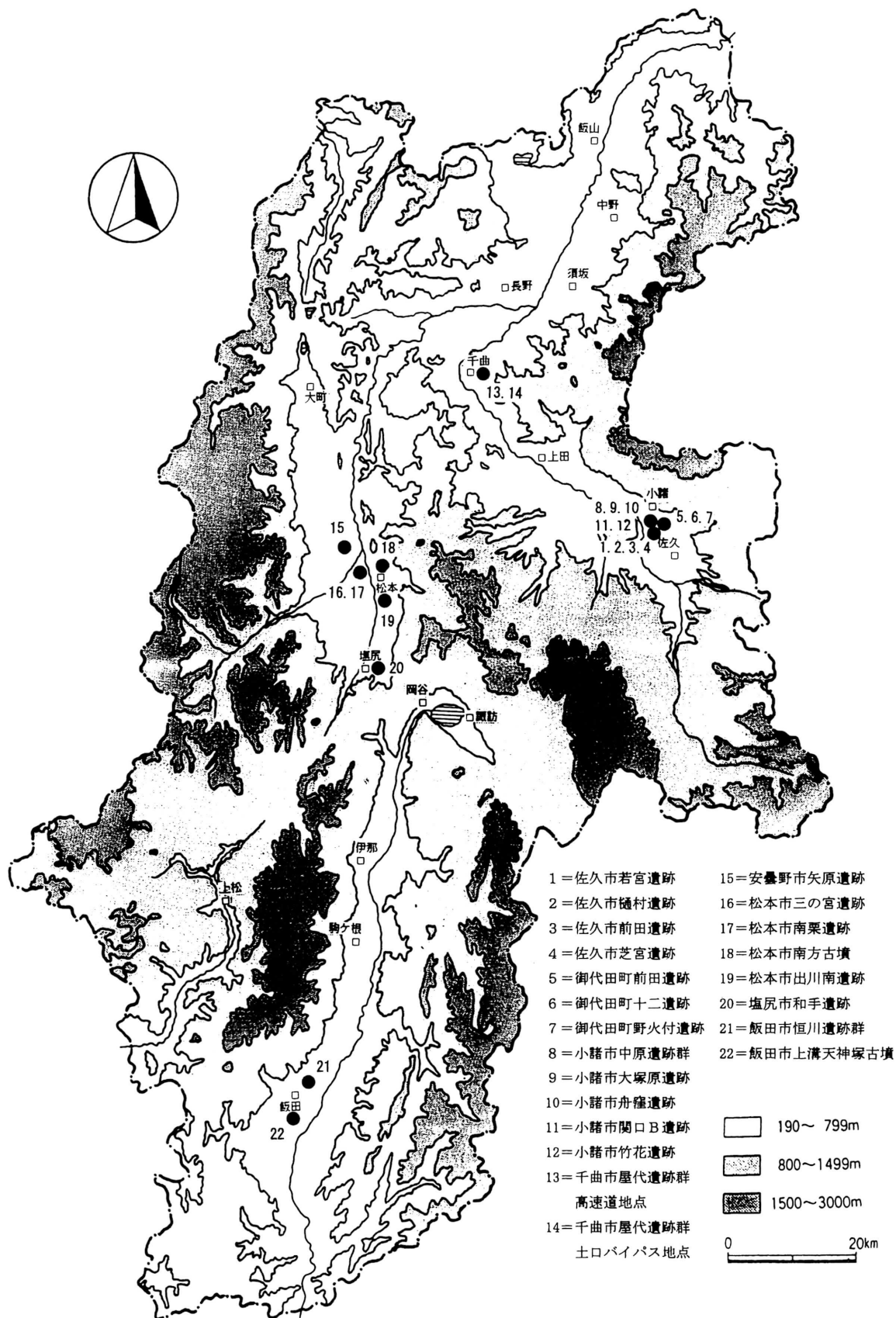
## (5) 前田遺跡 御代田町御代田（文献7）（第8図-1～12）

前田遺跡は御代田町南端部の大字御代田字前田原他地籍にあり、鑄師屋遺跡群に属し小諸市や佐久市にもおよぶ。1989年までに調査された状況は佐久市前田遺跡で示したとおりである。

暗文土器は、8世紀第2四半期頃の在地産と考えられる杯が18点出土している。竪穴住居跡H6号からは、在地暗文土器とともに、内面黒色処理されながらも畿内産・系暗文土器のプロポーシオンを真似た杯1点（第8図12）が出土している。

第1表 都の土器と型式推移表 (文献32より)

年代	都城	型式編年名	遺跡遺構名	備考
600		飛鳥 I	川原寺下層SD02 山田寺下層SD619	法隆寺 607
645	難波宮	飛鳥 II	山田寺整地土 法隆寺若草伽藍SK3561 坂田寺SG100	山田寺 641
650	大津宮	飛鳥 III	石神遺跡SE800	川原寺 653
667		飛鳥 IV	大官大寺下層SE116・SK121 藤原宮SE2355	壬申の乱 672
672			藤原宮SD1901A	大官大寺 677
694	藤原京	飛鳥 V	藤原宮SE1105 藤原宮SD105 下ツ道西側溝SD1900A	
700		平城宮 I	平城京左京三条二坊七・八坪長屋王邸宅跡SD4750	
710		平城宮 II	平城京左京一条三坊十五坪SD485	
740	平城京	平城宮 III	前川遺跡井戸1・井戸2	国分寺発願 739
745	恭仁宮	平城宮 IV	平城宮SK820	
750		平城宮 V	平城宮SK219	大仏開眼 752
784	長岡京	平安宮 I 中	平城宮SK2113 平城京左京八条三坊六坪SE200	
794		平安宮 I 新	平城京左京五条二坊十四坪SE03 平城京左京二条四坊十一坪SE53・SE57 長岡宮北辺官衙城SD19605 同朝堂院北西官衙城SD20620 長岡京左京南一条三坊三町SD8903 同太政官厨家跡SD1301	
800		平安宮 II 古	平安宮内裏外郭SX4・SX9 平安宮左兵衛府SD4	薬子の乱 810 嵯峨院
	平安京		平安宮中務省SK201 平城宮SE311B	
			大覚寺御所跡SD43 平安京左京二条二坊冷然院SD1・SD2 平安京右京三条三坊五町SD19	嵯峨上皇没 842
850			平安京左京七条二坊一町SE64 同二条三坊十三町溝1 平安宮内裏承明門地鎮遺構80	



第3図 長野県内の暗文土器出土遺跡分布図

第2-①表 長野県内の暗文土器出土一覧（北・東信）

遺跡数	遺跡名	所在地	出土遺構	器種	時期	備考
1	若宮遺跡	佐久市字長士呂	竪穴住居跡H 7	杯C	飛鳥Ⅱ	周防畑遺跡群
			竪穴住居跡H 9	杯C	飛鳥Ⅱ	H 7出土と接合
2	樋村遺跡	佐久市大字平賀	不明	杯CⅢ	飛鳥Ⅳ	
3	前田遺跡	佐久市大字小田井	竪穴住居跡H58	杯C?	飛鳥Ⅲ	鋳師屋遺跡群
4	芝宮遺跡群	佐久市大字小田井	竪穴住居跡SB171	杯C	飛鳥Ⅱ	
			溝跡SD 3	杯C	飛鳥Ⅱ	
			溝跡SD 3	杯C	飛鳥Ⅱ	
			溝跡SD 3	杯C	飛鳥Ⅱ	
			溝跡SD 3	杯C	飛鳥Ⅱ	
			溝跡SD 3	杯C	飛鳥Ⅱ	
5	前田遺跡	御代田町大字御代田	竪穴住居跡H 6	杯在地	8世紀第2四半期	鋳師屋遺跡群
			竪穴住居跡H21	杯在地	8世紀第2四半期	当遺跡は官衙
			竪穴住居跡H23	杯在地	8世紀第2四半期	的性格が考え
			竪穴住居跡H41	杯在地	8世紀第2四半期	られている。
			竪穴住居跡H44	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H46	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H48	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H54	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H70	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H87	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H101	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H102	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H103	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H104	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H105	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H113	杯在地	8世紀第2四半期	
			掘立柱建物跡F 53	杯在地	8世紀第2四半期	
			掘立柱建物跡F 72	杯在地	8世紀第2四半期	
6	十二遺跡	御代田町大字御代田	竪穴住居跡H10	杯在地	8世紀第2四半期	鋳師屋遺跡群
			竪穴住居跡H20	杯在地	8世紀第2四半期	内面黒色処理あり
			竪穴住居跡H25	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H37	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H40	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H47	杯在地	8世紀第2四半期	
			竪穴住居跡H67	杯在地	8世紀第2四半期	
7	野火付遺跡	御代田町大字御代田	竪穴住居跡H 2	杯在地	8世紀第2四半期	鋳師屋遺跡群
8	中原遺跡群	小諸市大字御影新田	竪穴住居跡SB31	杯在地	8世紀前半?	
			竪穴住居跡SB67	杯C	飛鳥Ⅱ	
			竪穴住居跡SB127	杯在地	8世紀前半	
			竪穴住居跡SB127	杯在地	8世紀前半	
			竪穴住居跡SB137	杯在地	8世紀前半	
			竪穴住居跡SB137	杯在地	8世紀前半	
9	大塚原遺跡	小諸市大字御影新田	竪穴住居跡第28号	杯C	飛鳥Ⅱ	大塚原遺跡群
10	舟窪遺跡	小諸市大字御影新田	竪穴住居跡第17号	杯C	飛鳥Ⅱ～Ⅲ	宮ノ反A遺跡群
11	関口B遺跡	小諸市森山	竪穴住居跡第34号	杯C	飛鳥Ⅲ?	
12	竹花遺跡	小諸市大字御影新田	竪穴住居跡第54号	杯在地	8世紀前半	宮ノ反A遺跡群
13	屋代遺跡群高速道地点	千曲市大字雨宮	溝跡SD7065	杯C	平城Ⅱ?	初期国府跡?
			竪穴住居跡SB6039	杯C	8世紀前半	
14	屋代遺跡群町浦遺跡	千曲市大字雨宮	グリッド内	杯C?	9世紀前半?	
		北・東信	計=49点	畿内産・系=17点	在地産=32点	

第2-②表 長野県内の暗文土器出土一覧（中・南信）

遺跡数	遺跡名	所在地	出土遺構	器種	時期	備考
15	矢原遺跡	安曇野市矢原	竪穴住居跡8号	杯C	飛鳥Ⅳ	
16	三の宮遺跡	松本市島立	竪穴住居跡SB49	杯A	飛鳥Ⅳ	
			竪穴住居跡SB128	杯A?	飛鳥Ⅳ	
17	南栗遺跡	松本市島立	竪穴住居跡6号	杯C	飛鳥Ⅲ?	
18	南方古墳	松本市里山辺	横穴式石室内	杯C	飛鳥Ⅱ?	石室入口付近
			横穴式石室内	杯C?	飛鳥Ⅱ?	石室入口付近
			横穴式石室内	杯C?	飛鳥Ⅱ?	石室入口付近
19	出川南遺跡	松本市芳野	竪穴住居跡36号	杯C?	飛鳥Ⅱ?	
			竪穴住居跡133号	杯?	飛鳥Ⅳ～Ⅴ	
20	和手遺跡	塩尻市広丘高出	竪穴住居跡第18号	杯C	8世紀前半?	
21	恒川遺跡群	飯田市座光寺	恒川A地籍湿地	杯CⅡ	飛鳥Ⅴ	
			竪穴住居跡第76号	杯AⅡ	飛鳥Ⅴ	
			?	杯AⅡ	飛鳥Ⅴ	
			?	杯AⅡ	飛鳥Ⅴ	
			?	杯皿AⅠ	飛鳥Ⅴ	
			?	杯皿AⅠ	飛鳥Ⅴ	
			?	蓋	飛鳥Ⅴ	
			?	蓋	飛鳥Ⅴ	
22	上溝天神塚古墳	飯田市松尾上溝	横穴式石室内	杯CⅠ	飛鳥Ⅳ～Ⅴ	石室入口付近
		中・南信	計=19点	畿内産・系=19点	在地産=0点	
		長野県内	合計=68点	畿内産・系=36点	在地産=32点	

当地域での畿内産・系暗文土器や在地暗文土器の状況は佐久市前田遺跡で示したとおりである。

#### (6) 十二遺跡 御代田町御代田（文献8）（第8図-13～19）

十二遺跡は御代田町南端部の大字御代田字下十二地籍にあり、鑄師屋遺跡群に属する。1989年までに調査された状況は佐久市前田遺跡・御代田町前田遺跡で示したとおりである。

暗文土器は、8世紀第2四半期頃の在地産と考えられる杯が8点出土している。

当地域での畿内産・系暗文土器や在地暗文土器の状況は佐久市前田遺跡や御代田町前田遺跡で示したとおりである。

#### (7) 野火付遺跡 御代田町御代田（文献9）（第8図-20）

野火付遺跡は御代田町南端部の大字御代田字野火付・前田原地籍にあり、鑄師屋遺跡群に属する。1989年までに調査された状況は佐久市前田遺跡・御代田町前田遺跡・十二遺跡で示したとおりである。

暗文土器は、竪穴住居跡H2から8世紀第2四半期頃の在地産と考えられる杯が1点出土している。

当地域での畿内産・系暗文土器や在地暗文土器の状況は佐久市前田遺跡や御代田町前田遺跡・十二遺跡で示したとおりである。

#### (8) 中原遺跡群 小諸市御影新田（文献10）

中原遺跡群は小諸市東南部、浅間山南麓斜面末端部の大字御影新田地籍に位置する。

佐久市との市境に位置し、また御代田町を含めた2市1町に広がる芝宮遺跡群、鑄師屋

遺跡群、宮ノ反A遺跡群、周防畑遺跡群、長土呂遺跡群、前田遺跡等とともに古墳時代後期から平安時代にかけての遺跡群の一角を形成している。

古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡で、竪穴住居跡 140 軒、掘立柱建物跡 100 棟他が調査された。

暗文土器は、竪穴住居跡 SB67 から畿内系と考えられる飛鳥Ⅱ期の杯Cが1点出土している。また竪穴住居跡 SB31 から1点、SB127 から2点、SB137 から2点、8世紀前半頃の在地産と考えられる杯が出土している。ともに出土状況については不明である。

#### (9) 大塚原遺跡 小諸市御影新田 (文献 11) (第6図-4)

大塚原遺跡は小諸市東南部の大字御影新田字大塚原他地籍にあり、大塚原遺跡群に属する。古墳時代後期の6世紀後半頃から田切地形の台地上に遺跡が広がりを見せるようになる。1991年には古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡が33軒(古墳後期=12、奈良=19、平安=2)、掘立柱建物跡18棟(古墳後期=5、奈良=13)他が調査されている。1990年から1991年にかけて行われた大塚原遺跡、舟窪遺跡、竹花遺跡では古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡は160軒(古墳後期=68、奈良=51、平安=41)、掘立柱建物跡65棟(古墳後期=8、奈良=47、平安=10)他が調査された。鑄師屋遺跡群等との関連が考えられる。

暗文土器は、竪穴住居跡第28号から畿内産と考えられる飛鳥Ⅱ期の杯Cが出土している。舟窪遺跡からも飛鳥Ⅱ期の杯Cが出土しているように、飛鳥Ⅱ期の段階ですでに畿内産暗文土器が当地域に持ち込まれていることは、重要なポイントとなる。

#### (10) 舟窪遺跡 小諸市御影新田 (文献 12) (第6図-2)

舟窪遺跡は小諸市東南部の大字御影新田字舟窪他地籍にあり、宮ノ反遺跡群に属する。古墳時代後期の6世紀後半頃から田切地形の台地上に遺跡が広がりを見せるようになる。1991年には古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡が22軒(古墳後期=12、奈良=7、平安=3)、掘立柱建物跡17棟(古墳後期=3、奈良=14)他が調査されている。1990年から1991年にかけて当地域で行われた調査成果については小諸市大塚原遺跡で示したとおりである。

暗文土器は、竪穴住居跡第17号から畿内産と考えられる飛鳥Ⅱ期の杯Cが出土している。大塚原遺跡での出土同様重要なポイントとなる。

#### (11) 関口B遺跡 小諸市森山 (文献 13) (第6図-5・6)

関口B遺跡は小諸市東南部の大字森山字関口他地籍にある。古墳時代後期の6世紀後半頃から田切地形の台地上に遺跡が広がりを見せるようになる。1989年には古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居跡が38軒(古墳後期=23、奈良=15)、掘立柱建物跡23棟(奈良=23)他が調査されている。同年に調査された関口A遺跡分の遺構を合わせると古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居跡が42軒(古墳後期=23、奈良=19)、掘立柱建物跡36棟(奈良=36)他が調査されている。8世紀前半には掘立柱建物が造られはじめ、8世紀前半から中頃には柵で囲まれた掘立柱建物7棟が造られる。

暗文土器は、堅穴住居跡第 34 号から畿内系の杯 C が 1 点出土している。遺構の年代は 7 世紀前半から中頃と考えられている。この堅穴住居跡第 34 号の住居規模は平均的であるが、非常に多器種の須恵器や多くの鉄製品が出土し、遺物の内容からは特異である。さらに関口 A 遺跡での 8 世紀前半の堅穴住居跡第 4 号からは奈良三彩が出土している（第 6 図 6）。また 8 世紀後半の同第 16 号からは甲斐型杯が出土している。

当遺跡については、大塚原遺跡群や宮ノ反遺跡群、さらには鑄師屋遺跡群との関連を視野に入れる必要がある。

#### (12) 竹花遺跡 小諸市御影新田（文献 14）（第 8 図 - 21）

竹花遺跡は小諸市東南部の大字御影新田字竹花他地籍にあり、宮ノ反遺跡群に属する。古墳時代後期の 6 世紀後半頃から田切地形の台地上に遺跡が広がりを見せるようになる。1990 年から 1991 年にかけて古墳時代後期から平安時代の堅穴住居跡が 105 軒（古墳後期 = 44、奈良 = 25、平安 = 36）、掘立柱建物跡 30 棟（古墳後期 = 20、奈良 = 10）他が調査されている。1990 年から 1991 年にかけて当地域で行われた調査成果については小諸市大塚原遺跡・舟窪遺跡で示したとおりである。

暗文土器は、堅穴住居跡第 54 号から 7 世紀末葉から 8 世紀前半と考えられる在地産の杯が出土している。鑄師屋遺跡群での十二遺跡や前田遺跡出土資料との関連が考えられよう。

さらに南伊勢系（畿内系？）と考えられる土師器甕が 7 世紀末葉から 8 世紀前半の堅穴住居跡第 25 号、7 世紀後半の同第 71 号、7 世紀中頃の同第 107 号から 4 点が出土している。また、8 世紀後半の土抗第 4 号から漆紙文書が出土している。

#### (13) 屋代遺跡群（高速道地点）千曲市雨宮（文献 15）（第 6 図 - 7・8）

屋代遺跡群は千曲市雨宮地籍にあり、千曲川右岸の自然堤防上に立地する。1991 年から 1994 年にかけて古墳時代後期の 7 世紀代から平安時代の堅穴住居跡が 485 軒（古墳後期 = 44、奈良 = 61、平安 = 271、不明）、掘立柱（礎石）建物跡 90 棟（古墳後期 = 13、奈良 = 3、平安 = 51、不明）他が調査されている。千曲市教育委員会による周辺調査での成果を加えればさらに多くの資料蓄積となる。

暗文土器は、堅穴住居跡 SB6039 号から 8 世紀前半から中頃（平城Ⅱ期？）と考えられる畿内系の杯 C？と、溝跡 SD7065 から平城Ⅱ期と考えられる畿内産の杯 C が出土している。また 9 世紀に入ると、屋代遺跡群内や隣接する更埴条里遺跡の一地域から畿内産・系や在地産の暗文土器が 20 点（片）以上出土している。また奈良三彩片が遺構に伴わず出土している。

屋代遺跡群高速道地点からは、7 世紀後半から 9 世紀中頃にかけての木簡が 126 点出土している。これらの木簡の中には、国司から郡司へ送られた「国符」木簡や、郡司から郷（里）長に送られた「郡符」木簡が含まれていた。

#### (14) 屋代遺跡群（土口バイパス地点）千曲市雨宮（文献 16）

屋代遺跡群町浦遺跡は千曲市雨宮地籍にあり、千曲川右岸の自然堤防上に立地する。1998 年から 1999 年にかけて古墳時代後期の 7 世紀代から平安時代の堅穴住居跡が 400 軒

以上、掘立柱建物跡 10 棟他が調査されている。高速道地点と一連の遺跡である。

暗文土器は、検出面から 8 世紀前半頃と考えられる畿内系の杯 C が出土している。また唐三彩も出土している。

(15) 矢原遺跡 安曇野市矢原 (文献 17) (第 6 図 - 9)

矢原遺跡は安曇野市の旧穂高町の矢原地籍にあり、烏川によってつくられた広大な扇状地の最扇端付近に位置する。1987 年の調査では古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡が 11 軒 (古墳後期 = 3、奈良 = 3、平安 = 5)、掘立柱建物跡 1 棟 (平安 = 1) 他が調査されている。

暗文土器は、竪穴住居跡 8 号から畿内産と考えられる飛鳥Ⅳ期の杯 C が 1 点出土している。

この矢原地籍は、古代安曇郡の郡庁所在地に推定されている。また平安時代の安曇郡には四つの郷があったことが知られ、その一つである八原郷は今の矢原であり、平安後期に成立した矢原御厨であろうとも推測されている。

(16) 三の宮遺跡 松本市島立 (文献 18) (第 6 図 - 10・11)

三の宮遺跡は松本市の西方の島立地籍にあり、梓川によって形成された三角州性扇状地上に展開し、奈良井川左岸に位置している。1985 年から 1986 年の調査で古墳時代後期の 7 世紀代から平安時代の竪穴住居跡が 179 軒 (古墳後期 = 19、奈良 = 23、平安 = 130、不明)、掘立柱建物跡 62 棟 (古墳後期 = 2、古墳後期から奈良 = 10、奈良末から平安 = 29 以上、不明) 他が調査されている。

暗文土器は、竪穴住居跡 SB49 から畿内産と考えられる飛鳥Ⅳ期の杯 A が 1 点と、竪穴住居跡 SB128 から畿内産と考えられる飛鳥Ⅳ期の杯 A ? が 1 点出土している。

当遺跡南域には北栗遺跡、南栗遺跡、下神遺跡といった古墳時代後期の 7 世紀から平安時代にかけての大集落遺跡が連なり、7 世紀以降この地が計画的に集落形成されたことがうかがえる。

下神遺跡では 8 世紀末葉頃と考えられる土抗から萬年通寶 3 枚、神功開寶 4 枚、不明 2 枚の計 9 枚が出土し、地鎮行為に用いられたと考えられている。また別地点では奈良三彩の小壺が出土している。

(17) 南栗遺跡 松本市島立 (文献 19) (第 7 図 - 1・2)

南栗遺跡は松本市の西方の島立地籍にあり、梓川によって形成された三角州性扇状地上に展開し、奈良井川左岸に位置している。1985 年から 1986 年の松本市教育委員会の調査で古墳時代後期の 7 世紀代から平安時代の竪穴住居跡が 15 軒 (奈良 = 7、平安 = 8)、掘立柱建物跡 4 棟 (奈良 = 2、不明) 他が調査されている。また長野県埋蔵文化財センターによる 1985 年から 1986 年の高速道関連の調査では古墳時代後期の 7 世紀代から平安時代の竪穴住居跡が 322 軒 (古墳後期 = 35、奈良 = 64、平安 = 223、不明)、掘立柱建物跡 104 棟 (古墳後期 = 15、古墳後期から奈良 = 28、奈良から平安初頭 = 39、不明) 他が調査されている。

暗文土器は、松本市教育委員会が調査した竪穴住居跡第 6 号から畿内産と考えられる飛



鳥Ⅲ期の杯Cが1点出土している。また銅椀（第7図2）が床面下から出土している。

当地域には三の宮遺跡、北栗遺跡、下神遺跡といった古墳時代後期の7世紀から平安時代にかけての大集落遺跡が連なり、三の宮遺跡同様7世紀以降この地が計画的に集落形成されたことがうかがえる。

#### (18) 南方古墳 松本市里山辺（文献20）（第7図-3～8）

南方古墳は松本市の東方里山辺地籍にあり、薄川扇状地の氾濫源の中央にあたる。薄川が西流している。山辺谷が松本盆地に向かって開口する入り口付近に立地する。

南方古墳は径24mの円墳である。石室は横穴式石室であるが破壊されていたため全容はつかめない。現状での規模は石室全長5.4m、幅0.9m、高さ不明であり、羨道全長3.4m、幅1.28m、高さ不明である。

暗文土器は、石室入り口付近から7世紀末葉から8世紀前半と考えられる遺物とともに出土した。畿内産と考えられる飛鳥Ⅱ期の杯Cが1点、畿内系と考えられる杯Cが2点出土している（第4図）。

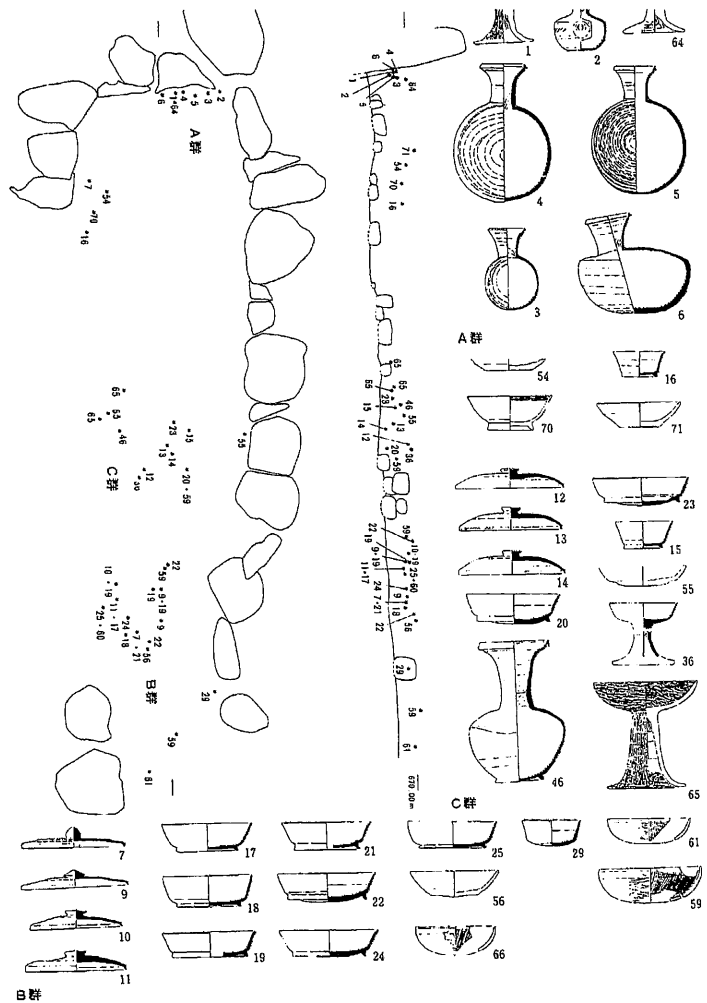
その他の遺物としては、多くの土器類、壺鐙を含む馬具類、直刀、鉄鏃、ガラス製小玉や勾玉、切子玉、白玉、管玉、金環など多くが出土し、またこの中には銅椀2点や承盤も出土している。

南方古墳周辺は、針塚古墳に代表される積石塚古墳が比較的多く構築され、平安時代には渡来系氏族が定住した地として日本後紀延暦18年12月5日の記事に記載されている。

#### (19) 出川南遺跡 松本市芳川平田他（文献21・22）（第6図-12・13）

出川南遺跡は市街地内の芳川平田、出川、芳野、双葉地籍にある。田川扇状地と奈良井川扇状地の交錯した沖積扇状地性堆積の末端部に位置する。

当遺跡範囲は、出川南B遺跡とあわせて南北1kmあまりの広範囲の遺跡となる。1991



第4図 南方古墳での暗文土器他の出土状況（文献20より）

年から1992年の調査で古墳時代後期の竪穴住居跡113軒他が調査されている。また1998年には古墳時代後期の7世紀代から平安時代の竪穴住居跡11軒他が調査されている。

暗文土器は、当集落内では比較的大形の竪穴住居跡第36号から法量的には飛鳥Ⅱ期と考えられる畿内系の杯Cが1点出土している。また大形の竪穴住居跡第133号からは他土器の様相から7世紀後半から8世紀初頭頃と考えられる畿内系の杯1点が出土している。他には銅椀類（第7図6～8）や馬具の轡引手も出土している。

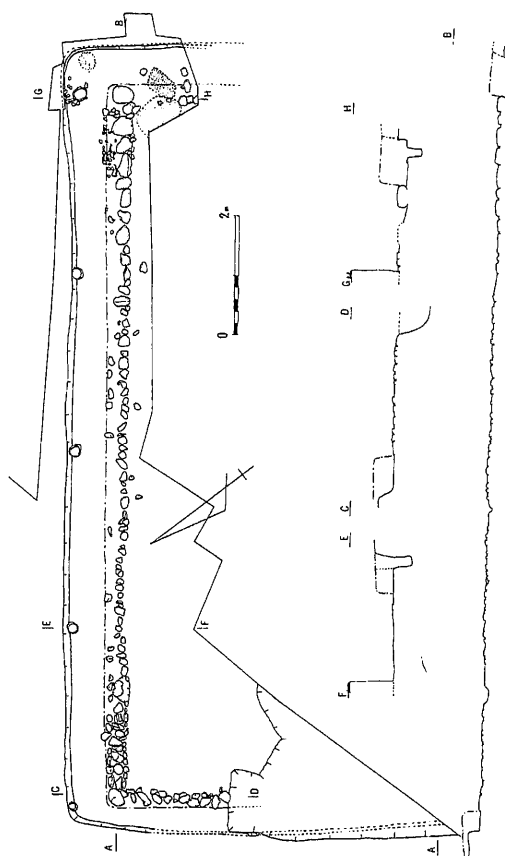
#### (20) 和手遺跡 塩尻市広丘高出（文献23）（第6図－14）

和手遺跡は塩尻市の東方に位置している。東は諏訪盆地へ抜ける塩尻峠へ、西は木曾へ、北は松本へ、南は伊那へ通じる要所となっている。遺跡は桔梗ヶ原平地の東端部に位置し、北へ向かって緩やかに傾斜する田川左岸の河岸段丘上に立地している。1985年から1987年の調査で古墳時代後期の竪穴住居跡113軒他が調査されている。また1998年には古墳時代後期の7世紀代から平安時代の竪穴住居跡24軒（古墳末葉から奈良初頭＝7、奈良前半から中頃＝6、奈良末葉以降＝11）、掘立柱建物跡3棟他が調査されている。

暗文土器は、竪穴住居跡第18号から8世紀前半から中頃（平城Ⅱ期）の畿内系の杯Cが1点出土している。

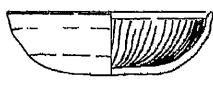
#### (21) 恒川遺跡群 飯田市座光寺（文献4・24・25）（第7図－9～12）

飯田市恒川遺跡群は飯田市北域の座光寺恒川、高岡地籍にある。東山道最大の難所神坂峠を越え、山深い園原から伊那谷段丘に入り、その中でも緩やかな平らが広がる座光寺地域の500m四方に広がる遺跡群である。当地は5世紀後半代の馬の殉葬墓が多く造られ、また高岡1号墳や畦地1号墳などの古墳時代後期の古墳が多く造られている。奈良時代に入るとここに伊那郡衙が置かれることとなる。1976年から行われたバイパス関連の大規模調査以降、数多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認され、それらとともに硯類や畿内産暗文土器が出土し、さらには竪穴住居内から和同開珎銀銭が出土している。また1999年3月には南大島川を境に隣接する下伊那郡高森町武陵地1号墳から富本銭が出土していたことが確認され、さらに同年6月には遺跡群地域から富本銭が発見されていたことも確認された。

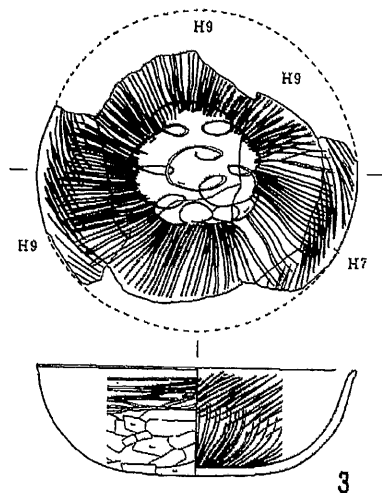


第5図 恒川遺跡群第76号住居跡  
（文献24より）

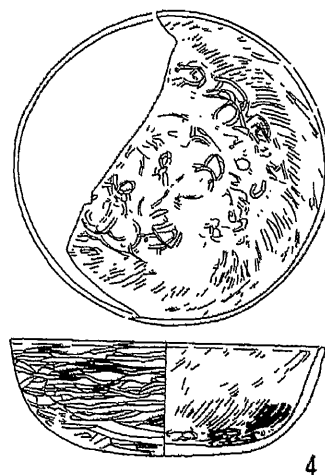
佐久市前田遺跡



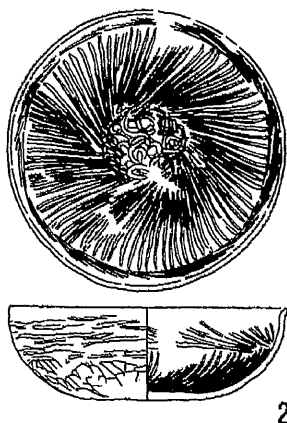
佐久市若宮遺跡



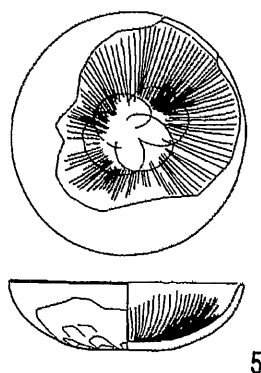
小諸市大塚原遺跡



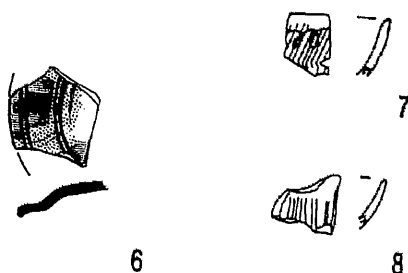
小諸市舟窪遺跡



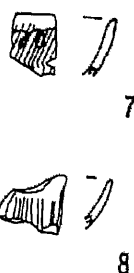
小諸市関口B遺跡



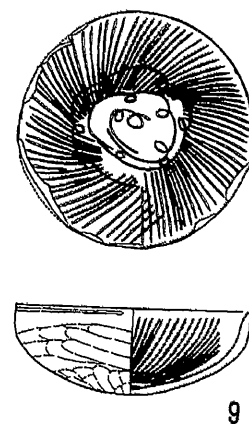
小諸市関口A遺跡



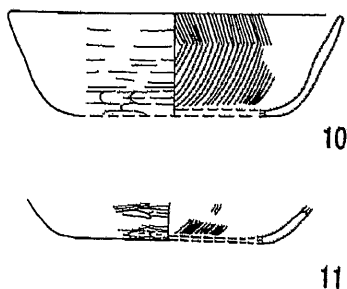
千曲市屋代遺跡群



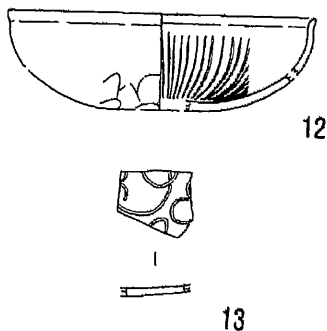
安曇野市矢原遺跡



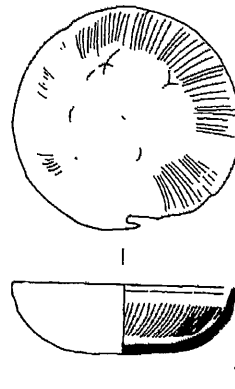
松本市三の宮遺跡



松本市出川南遺跡

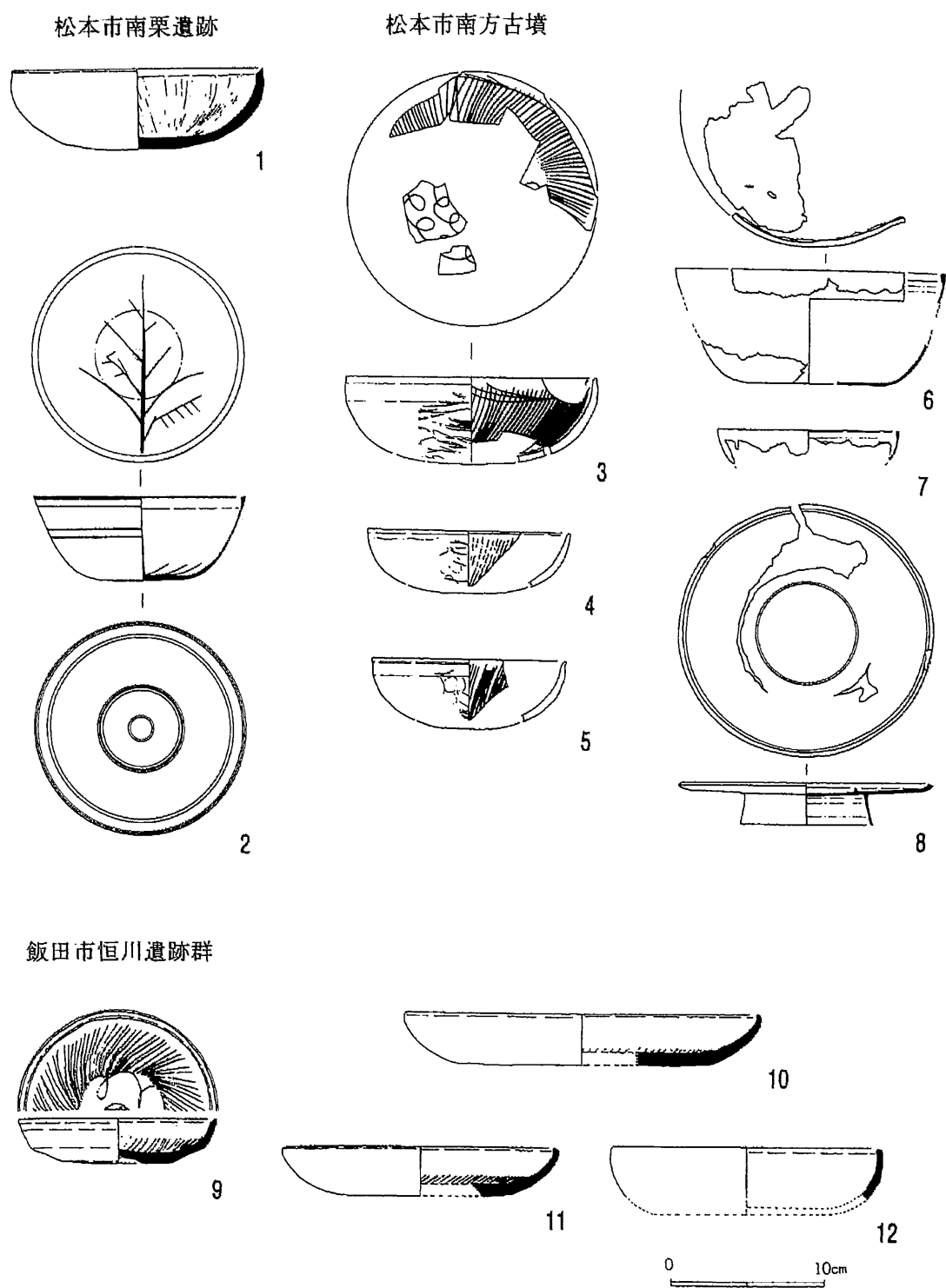


塩尻市和手遺跡



0 10cm

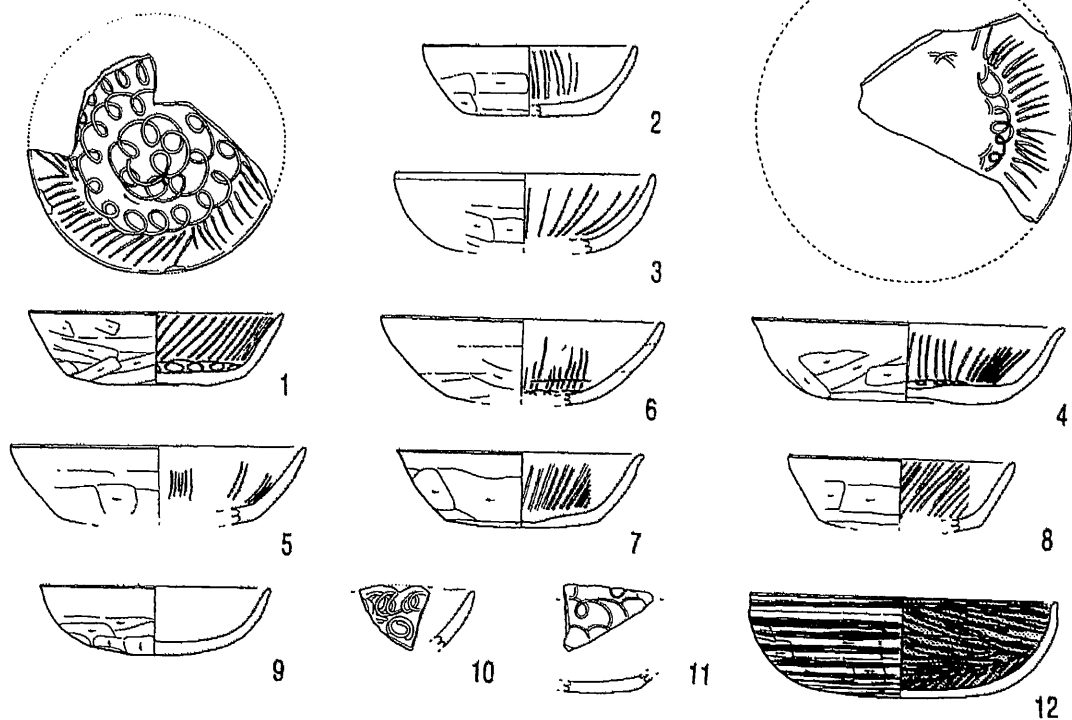
第6図 長野県内出土の畿内産・畿内系暗文土器 (1) (文献 34 より)



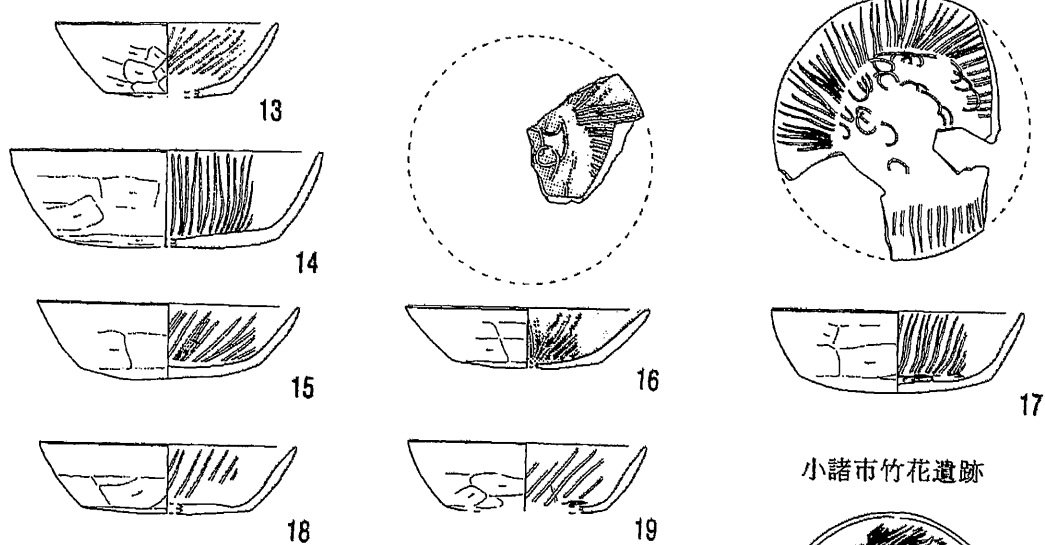
第7図 長野県内出土の畿内産・畿内系暗文土器（2）（文献34より）

暗文土器は、当遺跡群内から畿内産の杯・杯皿・蓋が8個体以上出土している。いずれも飛鳥Ⅴ期段階のものと考えられ、富本銭や和同開珎銀銭はこれらの土器とともに都から派遣された人々、あるいは都での衛士等の役目を終えた在地の人々が持参したものと考えられる。

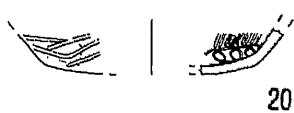
御代田町前田遺跡



御代田町十二遺跡

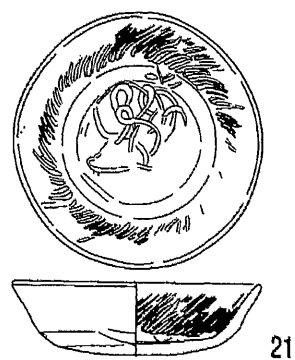


御代田町野火付遺跡



0 10cm

小諸市竹花遺跡



第8図 長野県内出土の在り暗文土器 (文献34より)

恒川A地籍湿地から畿内産の杯CⅡが1点出土し、1辺12mの周壁に沿った石列構造をもった大形竪穴住居跡第76号からは、畿内産の杯AⅡが1点出土している。その他遺跡群内の恒川A地籍を中心に畿内産杯AⅡが2点、杯皿AⅠが2点、蓋が2点出土している(第5図)。

#### (22) 上溝天神塚古墳 飯田市松尾(文献26、33)

上溝天神塚古墳は飯田市のほぼ中央の松尾上溝地籍にある。天竜川にそそぐ松川南岸の河岸段丘上に位置し上溝古墳群に含まれる。5世紀後半には馬の殉葬墓が多く造られ、古墳の密集地ともなっている。

天神塚古墳は全長約60mの前方後円墳である。石室は南南西に開口する無袖式の横穴式石室で、石室全長7.7m、幅2.0m～2.2m、高さは現状で1.8mであり、羨道については原状を保っていないが全長約3.7mと考えられる。

暗文土器は、石室内より畿内産と考えられる杯Cが1点出土している。詳細については不明であるが、当地に飛鳥Ⅴ期段階の畿内産暗文土器が多く搬入されていることを考えれば同時期とも考えられ、後の追葬品と考えられる。

その他の遺物としては、馬具類、大刀の銀製柄頭、ガラス製や金銅製・銀製の玉類などが出土している。

## 4 長野県内での出土状況

長野県内での分析状況をみると、大きく四地域にまとまりのあることがわかる。(第3図・第2-①②表)

長野県内でいち早く畿内産・畿内系暗文土器が搬入されるのは、小諸市・佐久市・御代田町の佐久平における二市一町境地域である。時期は飛鳥Ⅱ期とする7世紀第2四半期頃であり、さらにここでは8世紀第2四半期頃になると、在地暗文土器(註1)が県内他地域に比べ多く用いられるようになる。

これに続くような傾向を示すのが、松本市を中心とする松本平地域である。ここでは佐久平地域同様に飛鳥Ⅱ期の土器が搬入されるが、当地域での7世紀第3四半期頃の集落形成開始の状況や飛鳥Ⅲ・Ⅳ期の土器の出土傾向などを考えれば、7世紀第3・4四半期頃に一つの画期がある。

飛鳥Ⅴ期とする7世紀末葉から8世紀初頭頃になると、飯田市恒川遺跡群で集中的に畿内産暗文土器が見られるようになる。それも他地域とは異なり、器種に杯A・C・杯ⅢA・蓋などが見られバラエティーに富んでいる。単に都の土器を搬入したと言うよりも、都での食生活に対する嗜好が強く感じられる。

この後、8世紀代の資料についてははっきりしない。しかし平城宮Ⅱ期とする8世紀前半頃、さらには9世紀前半頃の都の土器については、千曲市屋代遺跡群や隣接する更埴条里遺跡からまとまって出土している。

以上のように、長野県内での「暗文土器」の出土傾向には、地域差と時間差を読み取る

ことができる。

## 5 長野県内出土の「暗文土器」が意味すること

長野県内で発見された皇朝十二銭（文献 27・28・別論＝信濃国出土の富本銭と皇朝十二銭）や、飯田市座光寺で発見された富本銭や下伊那郡高森町武陵地 1 号墳出土富本銭を含めたこれら銭貨の出土状況と暗文土器の出土状況が同様の傾向を示すことから、これらが示す意味合いに共通の解釈ができる可能性を見いだすことができる。

伊那谷の座光寺地域は、東国への玄関口としても重要な位置にあり、8 世紀前半に設置される伊那郡衙が機能する前段階に、郡衙整備に関わるための都人が活発に往来したことをうかがわせる。恒川遺跡群からは和同開珎銀銭が竪穴住居跡から出土し、平成 10 年には飯田市座光寺地域や下伊那郡高森町武陵地 1 号墳出土資料の中から富本銭が確認されていることを考えれば、これら銭貨は飛鳥Ⅴ期、すなわち 7 世紀末葉から 8 世紀初頭にかけて伊那郡衙整備に関わった都人あるいは都で衛士などを終えた人たちなど、都での生活を経験した人たちが都の食器（畿内産暗文土器）とともに持参したものと考えられる。

善光寺南域の屋代遺跡群を中心とする地域については、初期国府や埴科郡衙の機能（文献 29）を裏付けるような遺物の出土傾向を示している。

松本平では、奈良井川を挟んで 7 世紀後半以降、計画的に大集落が形成されていくが（文献 30）、当時の開拓にともなって都人が往来したことを物語っているようである。

佐久平については、これまで伊那谷地域に対して、漠然ともう一方の東国への玄関口として重要であったとの理解で考えられていたが、暗文土器・銭貨や他遺物、さらには遺構の検出状況から考えて、小諸市・佐久市・御代田町にまたがる遺跡群について、佐久郡衙推定地としての可能性を指摘しておきたい。そして佐久郡衙設置前段階から都との関わりが強く、9 世紀に至るまで重要視されていたと考えられる。

これらの状況を「日本書紀」の記載に照らし合わせてみると、大化元（645）年 8 月から 9 月に東国国司が任命され 8 グループにわかれて東海・東山・北陸の各諸国に派遣されている。国司の構成は長官（従者 9 人）・次官（従者 7 人）・主典（従者 5 人）とし、各国の兵士・武器や人民の調査等を行うため派遣している（文献 35・36）。この時期は暗文土器編年の飛鳥Ⅱ期に相当し、佐久地域での暗文土器の出土傾向を考えたとき、この日本書紀の記載を示すものと考えられ、東国への玄関口である佐久地域において派遣された人々が滞在していた可能性が十分に考えられる。同時に松本市南方古墳の石室入り口付近から 7 世紀末葉から 8 世紀前半と考えられる遺物とともに畿内産と考えられる飛鳥Ⅱ期の杯 C が 1 点、畿内系と考えられる杯 C が 2 点出土している。また飛鳥Ⅱ期の暗文土器が出土していることを考えれば、先の国司派遣の記載や日本書紀の天武 13（684）年 2 月の信濃国に使者が遣わされ地勢調査が行われ、信濃国の地図が献上されている記載。さらに天武 14（685）年冬には信濃に行宮が造られ、信濃行幸のためかとされる記載はシナノ（科野・信濃）での暗文土器の出土の背景を考えさせられる重要な記載と考えられる。日本書紀の

天武13(684)年2月や天武14(685)年冬の記載について、吉川真司氏は「一連の動きから見れば、「信濃京」造営のための行幸であった可能性は否定できない。信濃が特に選ばれたのには、東間温泉での湯治、東国支配の拠点、畿内からの避難先確保といった理由を挙げることができよう。」している(文献37)。

これらのことから、南方古墳での暗文土器の出土状況を考えれば、遅くとも孝徳期以来薄川流域の人々が大和(倭)政権と繋がりを持つ中で、天武期の地勢調査に関わったことが考えられ、南方古墳に埋葬された人物は、天武期のシナノ(科野・信濃)での一連の動向に関わった在地豪族か、都から派遣され科野(信濃)での滞在中に命をおとした人物であったと考えられる。

最後にあらためて記しておかなくてはならないことは、飛鳥Ⅱ期での大化改新以来、新たな国づくりに向けた東国国司の派遣、飛鳥Ⅳ期やⅤ期とする7世紀後半から8世紀初頭、すなわち天武期の信濃地勢調査以来の一連の動向、さらには藤原京建設前夜の頃の日本国中における律令国家建設・整備に関わった様々な動きが見られるが、シナノ(科野・信濃)においても例外ではなく、ここで見てきたように上記四地域(佐久地域、松本地域、飯田地域、千曲地域)で同様な動きが読み取れる。

その中でも下伊那郡の座光寺地域においては、5世紀後半代からの馬生産に関わった在地豪族層や在地化した渡来人の成長による地域振興の成果によって、東国を視野に入れるための最重要拠点となっていた。これを受けて天武・持統期においては、さらに当地域の整備(伊那郡衙設置)に多くの力をそそいだものと言える。

また、それを物語っているのが恒川遺跡群を中心とする座光寺地域から出土した遺構や畿内産暗文土器・富本銭・和同開珎銅銭などの遺物であることを、ここであらためて記しておきたい。

## 註

- 1 群馬県内産暗文土器の系譜と考えられる。

## 参考文献

- 1 西 弘海「土器概説」『特別展観 法隆寺昭和資材帳調査秘宝展図録』 1983年
- 2 小山岳夫『長野県佐久市若宮遺跡発掘調査報告書』 佐久市教育委員会 1984年
- 3 小山岳夫『長野県佐久市樋村遺跡発掘調査報告書』 佐久市教育委員会 1985年
- 4 林部 均「律令国家と畿内産土師器 - 飛鳥・奈良時代の東日本と西日本」『考古学雑誌』第77巻第4号 1992年
- 5 林 幸彦『鑄師屋遺跡群 - 前田遺跡(第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次)発掘調査報告書 -』 佐久市教育委員会 1989年
- 6 藤原直人 他「芝宮遺跡群」『芝宮遺跡群・中原遺跡群』 長野県埋蔵文化財センター 他 1999年
- 7 堤 隆 他『鑄師屋遺跡群 前田遺跡』 御代田町教育委員会 1987年
- 8 堤 隆 他『鑄師屋遺跡群 十二遺跡』 御代田町教育委員会 1988年
- 9 堤 隆 他『鑄師屋遺跡群 野火付遺跡』 御代田町教育委員会 1985年



- 10 藤原直人 他「中原遺跡群」『芝宮遺跡群・中原遺跡群』 長野県埋蔵文化財センター 他 1999 年
- 11 花岡 弘 他「大塚原遺跡」『長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書』  
小諸市教育委員会 1994 年
- 12 花岡 弘 他「舟窪遺跡」『長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書』  
小諸市教育委員会 1994 年
- 13 花岡 弘 他「関口 B 遺跡」『長野県小諸市関口 A・関口 B・下柏原遺跡発掘調査報告書』 小諸市  
教育委員会 1991 年
- 14 花岡 弘 他「竹花遺跡」『長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書』  
小諸市教育委員会 1994 年
- 15 鳥羽英継 他『更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）－古代編－本文』 長野県  
埋蔵文化財センター 他 1999 年
- 16 佐藤信之 他『屋代遺跡群 写真図版編・本文編』 更埴市教育委員会 1999 年・2000 年
- 17 市川隆之 他『穂高町矢原遺跡群』 穂高町教育委員会 1987 年
- 18 小平和夫 他『三の宮遺跡』（助）長野県埋蔵文化財センター 他 1990 年
- 19 神沢晶二郎 他『松本市島立南栗遺跡緊急発掘調査報告書』 松本市教育委員会 1984 年
- 20 直井雅尚 他「南方古墳」『松本市大塚古墳・南方古墳・南方遺跡』 松本市教育委員会 他 1999 年
- 21 関沢 聡 他「出川南遺跡」『松本市出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群』 松本市教育委員会 他 1994 年
- 22 田多井用章 他『出川南遺跡Ⅴ』 松本市教育委員会 他 1999 年
- 23 出河裕典 他『一般国道 20 号線（塩尻バイパス）改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 塩  
尻市教育委員会 他 1988 年
- 24 小林正春「Ⅲ 恒川遺跡群発掘調査概要」『長野県考古学会誌』第 44 号 長野県考古学会 1982 年
- 25 小林正春「恒川遺跡群」『長野県史 考古資料編 全 1 巻（3）主要遺跡（中・南信）』 長野県史刊  
行会 1983 年
- 26 白石太一郎「伊那谷の横穴式石室（1）」『信濃』第 40 巻第 7 号 信濃史学会 1988 年
- 27 西山克己「長野県出土の皇朝十二銭」『長野県埋蔵文化財センター紀要』6 長野県埋蔵文化財セ  
ンター 1998 年
- 28 西山克己「信濃の皇朝十二銭（上）・（下）」『伊那』第 46 巻第 4・6 号 伊那史学会 1998 年
- 29 平川 南 他『長野県屋代遺跡群出土土簡』 長野県埋蔵文化財センター 他 1996 年
- 30 小平和夫「第 4 章 松本盆地：奈良井川西岸地域における古代：中世集落の変遷」『総論編』（助）長  
野県埋蔵文化財センター 他 1990 年
- 31 西 弘海 他「第 V 章 考察 2 土器」『平城宮発掘調査報告Ⅶ』 奈良国立文化財研究所 1976 年
- 32 小森俊寛「概説」『古代の土器 1 都城の土器集成』 古代の土器研究会 1992 年
- 33 飯田市教育委員会『飯田における古墳の出現と展開』 2007 年
- 34 西山克己「古代土師器の生産と流通－畿内産土師器の各地への展開－」『奈良国立文化財研究所  
内特別研究』 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第二調査室 2000 年
- 35 井上光貞 他「日本書紀巻第 25」『日本文学大系 68 日本書紀下』 岩波書店 1965 年
- 36 吉川真司「第 2 章 大化改新 2 改新のプログラム」『飛鳥の都』 岩波書店 2011 年
- 37 吉川真司「第 4 章 律令体制の確立 3 藤原京」『飛鳥の都』 岩波書店 2011 年

# シナノ（信濃）出土の「鹿」を描いた埴輪と土器

～原始・古代からの人々と鹿のかかわり～

## 1 はじめに

「鹿」は、先土器時代より現代に至るまで、様々な形で我々人間と関わりを持ってきた。その反面、現代に至っては、自然の中で鹿を目にすることは少なく、動物園や奈良市の奈良公園にでも行かなければ身近な動物として接することはできないと思えば、山中や近隣畑では鹿の激増による食害が多発していることから、数千頭から数万頭の捕獲を進めるとのことである。また食肉としては日常的に鹿肉を口にすることはない。

そのような中で、現代の発掘調査によって原始・古代における人々と鹿との関わりを考えさせられる資料が発見されている。

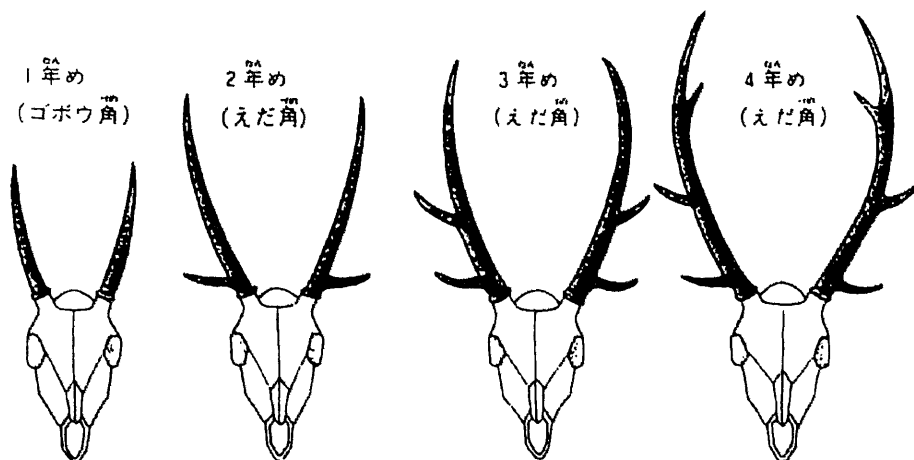
長野県域においても先土器時代以来、鹿の角や骨が発見されているが、今回特に注目したのは飯田市新井原2号墳出土の円筒埴輪片に線刻された鹿の絵と、長野市篠ノ井遺跡群高速道地点出土の平安時代土器に墨書きされた鹿の絵である。

なお、2008（平成20）年に中野市柳沢遺跡の発掘調査において弥生時代中期の土器に描かれた鹿の線刻画が発見されたが、現在整理作業中であるため今回は扱うこととしなかった。

## 2 日本の鹿

雄に枝角の生ずるほ乳類の偶蹄類に属し、イノシシやカモシカも同じ偶蹄類に属する。

日本の鹿は総称としてニホンジカと呼ばれているが、生息地により体格が異なり、いくつかの亜種にわけられる。その体長はだいたい1.1 mから1.6 m、肩の高さは0.8 mから



第1図 雄鹿の成長（文献2より）

0.9 m程度となる。

亜種については、南からケマラジカ・ヤクシカ・キュウシュウシカ・ツシマシカ・ホンシュウシカ・エゾシカなどいくつかに分けられ、体長は南に住む鹿ほど小形化傾向となる。

角の枝数もホンシュウシカ・エゾシカなどは4本で、ケマラジカ・ヤクシカなどは3本である。

角は春から夏にかけてピロード状の毛のある袋状皮膚で覆われた柔らかい袋角となっているが、秋の発情期頃になると、ピロード状の皮膚がとれて骨質の硬い角となる。この角は冬から春にかけての時期に自然に根元からとれ、春になると再び新たな袋角がはえてくる。

この角は鹿の年齢によって異なる。ニホンジカの場合、たとえば5月から6月頃に生まれた鹿は翌年の5月から6月頃に袋角がはえ始め、7月から8月頃に枝角のない1本まっすぐにのびた袋角（1尖・ごぼう角）となり、9月から10月頃に硬い角に変わる。この変化が毎年繰り返されるが、2年目の5月から6月以降の角には1本の枝角が加わり（1叉・2尖）、3年目の5月から6月以降の角には2本の枝角が加わり（2叉・3尖）、4年目の5月から6月以降の角には3本の枝角が加わる（3叉・4尖）。5年目以降は3本の枝角が継続する（第1図）。

出産や子育てについてはどうか。

9月あるいは10月から2月頃が交尾期となり、この頃に雄鹿は雌鹿をしたって早朝や夕方にピウーウ、ピウーウと2回から3回連続で鳴く。妊娠期間は7ヶ月から8ヶ月で、翌年の5月から7月頃に出産となり、ふつうは1回の出産で1頭の子どもが生まれる。そして母鹿はその年に生まれた子鹿と前年に生まれた子鹿の二頭を連れて日々を過ごすようである（文献1・2）。

### 3 長野県内で発見された鹿に関わる二例

新井原2号墳は飯田市座光寺石行に所在し、5世紀後半の築造と考えられる直径40 mの円墳である。埋葬施設は組合式箱型石棺であり、周溝の北側外縁に接して構築されていた。さらに周溝西側では馬を埋葬した土坑が3基検出されている。出土遺物は土師器・須恵器・馬具・円筒埴輪がある。この内円筒埴輪片3点に雌雄の鹿がヘラ状工具によって描かれていた（文献3・4・5）（第2図）。

篠ノ井遺跡群高速道地点は長野市篠ノ井塩崎字宗土旨坊ほかに所在する。高速道地点では約19,000㎡の調査が行われた。篠ノ井遺跡群は千曲川によって形成された自然堤防上に立地し、高速道地点では



第2図 新井原2号墳出土の鹿の絵（文献3より）

縄文時代晩期から中世に至る時代の遺構や遺物が調査された。

今回の鹿に関わる資料は、奈良時代から平安時代前半にかけての大溝（SD7080）の埋土中から出土したものであり、通称「黒色土器・内黒土器」と呼ばれる平安時代の土師器で、土器の特徴から9世紀中頃から後半の杯外面に墨によって描かれていた（文献6・7・8）（第3図）。新井原2号墳出土の鹿絵は、雌・雄が描かれ、ともにヘラ状工具で細い線のみ表現で描かれている。雄には3又4尖の角



第3図 篠ノ井遺跡群出土の鹿の絵（文献6より）

が描かれていることから推測するに、雄や雌が共生する秋頃を描いたものと考えられる。

篠ノ井遺跡群高速道地点のSD7080大溝から出土した鹿は、筆によって黒墨で描かれ、特に角部分については太いタッチで描かれている。胸から尻にかけてより下は表現されていない。

この鹿には1又2尖のふっくらとした袋角が描かれ、2歳くらいの春から夏にかけての鹿を描いたと考えられる。

#### 4 県内の考古学資料にみられる鹿

先土器時代以来、人と鹿の関わりは単に食料確保のために狩りをし、鹿を捕らえたものではなく、得られた角や骨などを道具や装飾品に加工しても利用した。

さらには、鹿を神として神事に登場させたり、あるいは骨を神事に用いたりする様子が文献上に多く見られ、日本人にとっては物質的にも精神的にもたいへん身近な動物であったことがうかがえる。

先土器時代や縄文時代においては、特に食料として肉を食べ、さらには石器を作る道具として角を用いたり、あるいは角や骨を利用して釣り針やヤスなどの道具や装飾品を多く作ったりもした。

縄文時代における鹿角を用いた道具等の出土例で代表的なものは、南佐久郡北相木村栃原岩陰遺跡や上田市真田唐沢岩陰遺跡などがあり（文献9）、その他の遺跡からの出土例も多く見られる。

弥生時代になると、道具への利用が多様化する。千曲市生仁遺跡からは鹿角製の鑿や鹿角製の篋・針・尖頭器などが出土しており、ほかにも佐久市月明沢遺跡、東御市桜畑遺跡、長野市屋地遺跡、諏訪市中浜町から同様な遺物が出土している（文献10）。

また、稲作や農耕が生活の基盤となり、それに伴う祈りや祭りが行われるようになると、この祈りの中で用いる卜骨は鹿の肩甲骨を利用する。卜骨により卜占を行った骨には穴が

あけられていたり、あるいは焼いた跡が残るものがある。

これらの例も生仁遺跡から出土している。

また、銅鐸や土器には線を刻むことによって描いた鹿の線刻画が描かれ、鹿を描く表現の多くは線による単純化したものであった。

古墳時代になると、道具への用いられ方も多様化し、刀子の柄を鹿角で作ри、柄の装飾的效果を意図した鹿角柄刀子（鹿角製刀装具）なども作られるようになる。

これらの県内出土資料は、上田市鳥羽山洞穴遺跡や、諏訪市フネ古墳などからの出土例が知られる（文献 11）。

また土器への線刻画に加え円筒埴輪への線刻画も見られるようになる。さらには鹿の形そのものを形取った形象埴輪や土器への装飾として立体化した鹿が作られるようになる。

県外で代表的な例をみると、宇都宮市塚山古墳より線で描かれた雄雌の鹿が列をなして描かれている。また奈良県磯城郡三宅町石見遺跡からは鹿の形象埴輪が出土しており、奈良県五条市大塚山古墳からは新羅焼の土器を思わせるような鹿を形取った須恵器の台付装飾壺が出土している（文献 12）。

全国的にはいくつもの鹿を表現した資料がみうけられるが、飯田市新井原 2 号墳出土の円筒埴輪片に描かれていた鹿の線刻画は県内唯一の例と言える。

ちなみに、朝鮮半島の新羅や加耶地域において、5 世紀代を中心に猪・熊・鴨などとともに鹿が表現されている。

奈良時代・平安時代の鹿とのかかわりについては古文献に残された記載や民俗例などにたいへん多くみられるが、考古学的資料の土器などへの表現は宮城県多賀城遺跡で出土した埴に写実的に描かれた鹿と（文献 13）、今回紹介した篠ノ井遺跡群高速道地点より出土した土器に描かれた鹿が全国的にも代表的なものと言えよう。

ただ文献資料には様々な形で鹿は登場するが、狩り・食肉・薬物・神事に関連したことでその存在が示されている。

## 5 古文献にみられる鹿

ここで鹿にかかわる代表的な例をいくつか抽出してみることにする。

まず古事記からみてみることにする。

①＝古事記では、日本武尊が蝦夷を平定した後、相模国の足柄の坂下で、坂の神が白鹿となって現れ、日本武尊が食べ残りの蒜のかたはしをもってこれを打つと、鹿の目にあたって死んでしまったとある。

『足柄の坂本に到りて、御粮食す處に、其の坂の神、白き鹿に化りて來立ちき。爾に即ち其の昨ひ遺したまひし蒜の片端を以ちて、待ち打ちたまは、其の目に中りて乃ち打ち殺したまひき。』（中巻 景行天皇 小碓命の東伐）（文献 14）

日本書紀ではどうであろうか。

②＝日本書紀では、古事記での「相模国」が「信濃国」と記され、また「坂の神が白鹿

となった」ことが、「山の神が白鹿となった」とされている。

『則ち日本武尊、信濃に進入しぬ。是の國は、山高く谷幽し。翠き嶺萬重れり。人杖倚ひて升り難し。巖嶮しく磴紆りて、長き峯數千、馬頓轡みて進かず。然るに日本武尊、烟を被け、霧を凌ぎて、遙に大山を徑りたまふ。既に峯に逮りて、飢れたまふ。山の中に食す。山の神、王の苦びしめむとして、白き鹿と化けりて王の前に立つ。王異びたまひて、一箇蒜を以て白き鹿に弾けつ。則ち眼に中りて殺しつ。』(卷第七 大足彦忍代別天皇、景行天皇 四十年是歳) (文献 15)

③=同じく日本書紀には、天武天皇四(676)年に発せられた「殺生禁斷の詔」があり、この中で、牛・馬・犬・猿・鶏の肉を食べることを禁止しているが、猪や鹿は除外されている。

『諸國に詔して曰はく、「今より以後、諸の漁獵者を制めて、檻穽を造り、機槍の等き類を施くこと莫。亦四月の朔より以後、九月三十日より以前に、比彌沙伎理・梁を置くこと莫。且牛・馬・犬・猿・鶏の肉を食ふこと莫。以外は禁の例に在らず。若し犯すこと有らば罪せむ。」とのたまふ。』(卷第二十九 天淳中原瀛真人天皇 下 天武天皇四年四月) (文献 16)

風土記の中にも多くの鹿が登場する。

④=尾張国風土記逸文には、尾張国葉栗郡の川嶋社の神が白鹿になって現れたとある。『尾張の國の風土記に云はく、葉栗の郡。川嶋の社河沼の郷の川嶋の村にあり。奈良の宮に御宇しめしし(聖武の)天皇のみ時、凡海部の忍人、「此の神、白き鹿と化爲りて、時々出現れます」と申ししかば、詔ありて、齋き奉りて、天社と爲しき。』(文献 17)

⑤=播磨国風土記には、捕えた鹿の腹をさき、その血に稲粃を播いたら一夜にして苗のはえたので、それをとって植えたとある。

『讃容といふ所以は、大神姉妹二柱、各、競ひて國占めましし時、妹玉津日女命、生ける鹿を捕り臥せて、其の腹を割きて、其の血に稻種きき。仍りて、一夜の間に、苗生ひき。則ち取りて殖ゑしめたまひき。』(讃容郡 讃容の郡)

この他にも鹿の記載は多く出てくる(文献 17)。

⑥=豊後国風土記には、田の苗を食い荒らす鹿を捕えて殺そうとしたが、鹿の願いを聞いて逃がしてやると、その後田圃に豊作が続いたとある。

『本の名は宅田なりき。此の田の苗子を、鹿、恆に喫ひき。田主、棚を造りて伺い待つに、鹿到来たりて、己が頸を擧げて、棚の間に容れて、即て苗子を喫ふ。田主、捕獲りて、其の頸を斬らむとしき。時に、鹿、請ひて云ひしく、「我、今、盟を立てむ。我が死ぬる罪を免したまへ。若し、大き恩を垂れて、更存くことを得ば、我が子孫に、苗子をな喫ひそと告らむ」といひき。田主、ここに大く恠異しと懷ひて、放免して斬らざりき。時より以來、此の田の苗子は、鹿に喫はれず、其の實を獲しむ。因りて頸田といひ、兼、峯の名と爲す。』(速見郡) (文献 17)

次に万葉集をみてみよう。

⑦＝万葉集では狩猟の対象として鹿や猪が多く出てくる。その中で2例を示すと、  
『赤駒を厩に立て黒駒を厩に立ててそれを飼ひわが行くがごと思ひ妻心に乗りて高山の峰  
のたをりに射目立てて鹿猪待つがごと床敷きてわが待つ君を犬な吠えそぬ。』（巻十三の三  
二七八）

この長歌は男女唱和の歌とされ、前半は男の思いで、後半は女の願いを歌っている。こ  
の中に狩猟の対象として鹿や猪が登場してくる（文献18）。

⑧＝同じく万葉集の中にある額田王と大海人皇子とが唱和した、  
『天皇、蒲生野に遊獵したまふ時、額田王の作る歌「あかねさす紫野行き野守は見ずや君  
が袖振る』』（第一の二十）

『皇太子の答へましし御歌 明日香宮に天の下知らしめしし天皇、諡して天武天皇といふ  
「紫草のにはえる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ戀ひめやも』』（巻一の二一）

の左注に

『紀に曰はく、天皇七年丁卯、夏五月五日、蒲生野に縦獵したまふ。時に天皇弟・諸王・  
内臣と群臣、悉皆に従そといへり』とあり、薬獵（＝強精剤として使われた鹿の袋角や薬  
草を採る行事）の折の歌であるとされている。なお、この薬獵は五月五日の行事であり、  
男が中心となる鹿狩りと、女が中心となる薬草採集とがあったようである（文献18）。

延喜式には調や中男作物として、狩猟生産物としての鹿皮や鹿肉などの記載がみられる。

⑨＝延喜式卷二十三、民部式下の交易雑物（こうえきぞうもつ＝律令制下において、中  
央諸官司の需要に応じ、諸国が正税を以て購入し進上した品物。毎年一定品目の一定量を  
交易進上する。）として「鹿革」（＝毛をとった皮）、「鹿皮」（＝毛のついた皮）、「鹿角」  
などの品々がみられ、尾張国・相模国・美作国などでは3品の進上がみられ、武蔵国・伊  
予国などでは2品の進上がみられる。三河国・甲斐国・上総国・その他の国々からそれぞ  
れ1品ずつの進上があるが、信濃国からの「鹿皮九十張」は突出した進上数となっている  
（文献19）。

また、

⑩＝延喜式卷二十四、主計式上の特に中男作物（ちゅうなんさくもつ＝律令制下の租税  
の一種。畿外の諸国を対象とするものであったらしい。）の中に甲斐国「鹿脯」（＝鹿肉の  
干肉）、紀伊国「鹿脯」・「鹿鮓」（＝鹿肉の塩漬け）、筑前国「鹿脯」・「鹿鮓」、肥後国「鹿  
脯」、豊前国「鹿鮓」、豊後国「鹿鮓」の記載がみられる（文献19）。

さらに、

⑪＝延喜式卷三十二、大膳式上の釋奠祭料にも「鹿醢一升」（醢＝干肉を麴や塩を混ぜ  
た酒につけて作ったもの）、「鹿五藏一升」（五藏＝臓物）などがみられ、麴や塩を混ぜた  
酒につけた鹿の干肉や臓物がついた鹿肉を食べたことがうかがわれる（文献19）。

## 6 出土木簡での記載

⑫＝藤原京跡の東面大垣の東約20mを北流する南北溝（宮東面外濠）から出土した付

札に、

「科野国伊奈評（鹿か）大贅」

と記され、大贅の前に記された文字は鮮明ではないが、「鹿」と判読でき、伊奈評（＝伊那郡）より贅として鹿が都に貢納されたことが知られる。

この木簡は、藤原京遷都の持統8（694）年から大宝令の施行大宝2（702）年の間に用いられたものと考えられている（文献20）。

⑬＝平城京跡出土木簡中には、「鹿穴在五蔵」や、「鹿穴」などの記載があり、鹿の穴（＝鹿の肉）のみならず、五蔵（＝五臓の臓物）までついていたことが記され、食されたり、用いられていたことがわかる（文献21）。

このような記載は前に記したように延喜式内にもみられる。

## 7 民俗例にみられる鹿

日本国内には鹿にかかわる諸事例が多く残されていると考えられるが、ここでは狩猟神として崇敬された諏訪大社での事例についてみてみたい。

⑭＝諏訪大社では年中様々な神事が催されるが、中でも重要なものが御狩神事（＝みかりしんじ）とされ、年に4度の神事が行われる。狩りで獲得した生贅が神前に捧げられるが、中でも三月酉の日に行われる御頭祭は特に重ぜられ、江戸時代には鹿と猪の頭首が七五も備えられている（文献22）。

これは鹿頭の神供として名高いものである。

⑮＝鹿や猪などを中心とするある程度の食肉習慣は、仏教が民衆の間に浸透するにしたがい「殺生禁断」の教えに反する狩猟とともにすたれたが、むしろ諏訪大社では仏教を意識して、「寿命の尽きた生きものは放してやっても生きられないから、いっそ人の腹の中に入れて、その功德で成仏するがよい」という『諏訪ノ勘文』というものがあり、このような信仰を作って狩猟や食肉を合理化した。中世末以来、食肉の免罪符たる「鹿食免（＝かじきめん）」といわれる守札や、獣肉を食べても穢れないという「鹿食箸（＝かじきばし）」をも作り、教義を広め、狩猟や食肉を正統化した（文献22）。

この他、社寺への祈願のための絵馬にも、「馬」のみならず、鹿の多い地域では「鹿」を絵馬ならぬ「絵鹿」として用いたようである。

これは鹿を獲った後、これからも多くの鹿が獲れますようにとする願いを込めて神様（オスワサマ）に捧げたようである。

また、栃木県の日光二荒神社・茨城県の鹿島神宮・奈良県の春日大社・広島県の安芸宮島の厳島神社など、各地の神社で「鹿」を神様（御神鹿）のお使いとして祭っている（文献12）。

## 8 シナノ（信濃）での鹿

以上、考古資料・歴史資料・民俗資料のいくつかをみてきたが、これらから考えられる



ことは、先土器時代・縄文時代以来、狩猟を通しての食肉のための鹿のみならず、神の使いとして、あるいは神への供物として神事にかかわる鹿として、2つの性格をそなえて、人々と深いかわりがあったことがうかがえる。

信濃という地域、あるいは信濃人とも②の日本書紀・⑨の延喜式・⑫の藤原京出土木簡・⑭や⑮の諏訪大社での事例をみる限り、たいへん密接なかかわりがあることがうかがえる。

ところで、飯田市新井原2号墳出土の「鹿の絵」と長野市篠ノ井遺跡群高速道地点の平安時代大溝から出土した「鹿の絵」は、いったい何を私たちに語ってくれているのだろうか。

新井原2号墳出土の「鹿の絵」については、岡田正彦氏が、「…鹿絵の埴輪は狩猟対象物としての鹿を供献したと言うより、埋葬者との連絡をする霊異をもつ神鹿としての性格が考えられそうである。」と（文献3）、その性格を考えている。

筆者もその性格付けには異論はないが、4歳以上の雄や雌を描いていることを考慮し、さらに付け加えるならば、「子孫繁栄」への願いも込められているものとする。

線による単純な絵ではあるが、古墳に用いる埴輪の性格を考えるならば、単なる埴輪工人による「落書き」とは思えない。

それでは篠ノ井遺跡群高速道地点の土師器に描かれた「鹿の絵」はどうであろうか。

この「鹿の絵」が描かれた時代は、土師器や須恵器に文字が描かれた「墨書土器」が非常に多く用いられた時代である。

土器への墨書絵は、平城京をはじめ、ごく限られた場所において発見されることが多く、たいへん稀少な資料といえる。

それではなぜ文字ではなく「鹿の絵」であったのか。

ここ数年の研究では、土器に文字を墨書することを単に土器の所属や所有、あるいは共通表示としてとらえるだけでなく、村々における神や仏に対する信仰にかかわるものと考えられ、祭祀や儀礼に伴って書かれたという点も重視されている（文献23）。

このことから、単に「落書き」としてこの「鹿の絵」を評価するのではなく、祭祀や儀礼にかかわって描かれたものと考えられる。

これまでみてきた諸事例から考えて、やはり食肉にかかわる狩猟への願いと考えられ、さらには、やわらかい袋角を表現したものとするならば、それは春における若々しい再生を願うものであり、これらにかかわる祭りの中で用いられた一つであったと考えられる。

## 9 おわりに

信濃は山々に囲まれた土地で、おそらくは他地域よりもずっと多くの鹿が生息し、より身近な動物であったと考えられる。それはこれまでみてきた信濃と鹿とのかわり合いを示す資料からもうかがえる。

このような事々を考えている折、

平成6（1994）年12月1日、下伊那郡大鹿村で71年ぶりにニホンジカ（オス）猟が解禁となった。これは大正12（1923）年に当時の農商務省が乱獲で減少した鹿を保護するために、下伊那郡上村・大鹿村の全域と南信濃村の一部を禁猟区にして以来のことであった。

近年、生息数が増え農林業被害が平成元（1989）年以降拡大したことによるとのことであった。捕獲頭数については、平成6（1994）年以来年間7千頭から1万頭であったのが平成23（2011）年には年間3万5千頭もの鹿を捕獲することとなった。

昔から狩猟も人々と鹿のお付き合いの中では大切なことであったことは下伊那郡天龍村に伝わる選択無形民俗文化財の「シカオイ」（＝わらで作った鹿に矢を放った行事で、1年間豊作を祈るものである。古くから鹿などによる食害になやまされてきた土地ならではのものであろう。）などの民俗例や、これまでの資料をふり返っても理解できる。

新井原2号墳出土の埴輪への「鹿の絵」や篠ノ井遺跡群高速道地点出土の平安時代土器への「鹿の絵」は、5世紀後半や9世紀中頃から後半における資料としてのみならず、歴史資料として日本人と鹿との関わり的一端を語りかけてくれるものである。

#### 参考文献

- 1 三浦慎悟「ニホンジカ」『動物大百科』4 平凡社 1986年
- 2 伊藤健雄「ニホンジカ」『動物のくらし 学習研究社』1974年
- 3 岡田正彦「口絵 埴輪に線刻された鹿絵」『伊那』1986・6月号 伊那史学会 1986年
- 4 岡田正彦「V信仰と葬制 3古墳時代の信仰と葬制 （6）埴輪」『長野県史 考古資料編 全一卷（4） 遺構・遺物』長野県史刊行会 1988年
- 5 小平和夫「第三編補遺 第1章農業社会の発展－古墳時代－ 新井原2・4・5・15・16・17号」『下伊那史』第一巻考古編 下伊那誌編集会 1991年
- 6 西山克己 他『篠ノ井遺跡群』（助）長野県埋蔵文化財センター 他 1997年
- 7 樋口昇一「信州の大遺跡（巻頭カラー写真P 23）」郷土出版 1994年
- 8 北條朝彦「出土遺物に描かれた動物－奈良・平安期の東日本における諸例－」『動物考古学』第3号 動物考古学研究会 1994年
- 9 宮下健司「Ⅲ生産と生活の道具 2縄文時代の道具 （3）骨角器・牙器・具器」『長野県史考古資料編 全一卷（4） 遺構・遺物編』長野県史刊行会 1988年
- 10 神村 透「Ⅲ生産と生活の道具 3弥生時代の道具 （3）木製品・骨角器・金属器」『長野県史考古資料編 全一卷（4） 遺構・遺物編』長野県史刊行会 1988年
- 11 岩崎卓也・松尾昌彦「Ⅲ生産と生活の道具 4古墳時代の道具 （2）武器・武具」『長野県史考古資料編 全一卷（4） 遺構・遺物編』長野県史刊行会 1988年
- 12 『第26回企画展 鹿 人とのかかわりの歴史』栃木県立博物館 1989年
- 13 佐々木光雄 他「8多賀城の瓦」『多賀城と古代東北』東北歴史資料館 他 1985年
- 14 倉野憲司・武田祐吉『日本古典文学大系1 古事記 祝詞』岩波書店 1958年
- 15 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋『日本古典文学大系67 日本書紀 上』岩波書店 1967年
- 16 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋『日本古典文学大系67 日本書紀 下』岩波書店 1965年
- 17 秋本吉郎『日本古典文学大系2 風土記』岩波書店 1958年
- 18 高木市之助・五味智英・大野 晋『日本古典文学大系4 萬葉集 1』岩波書店 1957年

- 19 黒坂勝美・国史大系編修會『新訂増補国史大系 延喜式 後篇』吉川弘文館 1957 年
- 20 福島正樹「第三章第三節一律令の租税制度 二信濃関係の木簡」『長野県史通史編 第一巻原始・古代』長野県史刊行会 1989 年
- 21 関根真隆「第四章奈良時代の食料素材（二）」『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館 1989 年
- 22 笹本正治「諏訪大社と御頭」『図説長野県の歴史』河出書房新社 1988 年
- 23 平川 南「はくしよどき 墨書土器」『国史大辞典』12 吉川弘文館 1992 年

# 信濃国出土の富本銭と皇朝十二銭

## 1 はじめに

日本で最初の鑄造貨幣は藤原京が都であった和銅元（708）年に鑄造された「和同開珎」とされていたが、平成 11（1999）年 1 月 20 日の奈良県明日香村の飛鳥池遺跡での発掘調査・研究成果の発表から、「富本銭」であることが明らかとなった。天武 12（683）年以降に鑄造されたと考えられる「富本銭」、そして和銅元（708）年に鑄造された「和同開珎」以来、天徳 2（958）年に鑄造された「乾元大寶」までの 250 年間に皇朝十二銭と言われる銅銭 12 種類、銀銭 2 種類、金銭 1 種類が鑄造された。

長野県内では、下伊那郡高森町の武陵地 1 号墳出土の「富本銭」、そして飯田市恒川遺跡群出土の「和同開珎（銀銭）」をはじめ、100 枚ほどの古代銭貨が確認されている。

## 2 長野県内での研究概略

長野県内の古代銭貨で最も注目されるのが下伊那郡高森町の武陵地 1 号墳出土の「富本銭」（文献 1・2）や飯田市座光寺地域出土の「富本銭」（文献 3）、そして飯田市恒川遺跡群出土の「和同開珎（銀銭）」であろう（文献 4）。この 2 枚の「富本銭」については、飛鳥池遺跡での調査・研究成果が発表された 2 ヶ月後の平成 11 年 3 月以降にその所在が公表されることとなった。また「和同開珎（銀銭）」の発見は、恒川遺跡群の昭和 52 年度調査の田中・倉垣外地籍 44 号竪穴住居跡床面からの出土であった。

武陵地 1 号墳出土の「富本銭」については、すでに昭和 30（1955）年に刊行された「下伊那史」（文献 1・2）に記載されていたものの、飛鳥池遺跡での成果が公表されるまでは、江戸時代の絵銭、あるいは不明銭としての扱いであった。座光寺地域出土の「富本銭」（文献 3）については、飛鳥池遺跡、あるいは武陵地 1 号墳出土「富本銭」が公表されたことにより、同じ古代の「富本銭」であることが判明した。

飯田市恒川遺跡群出土の「和同開珎（銀銭）」の発見に際しては、昭和 53（1978）年に、小林正春氏（文献 4）や佐々木嘉和氏（文献 5）が「和同開珎（銀銭）」についてふれ、また昭和 54（1979）年には小林正春氏（文献 6）が恒川遺跡群の概報として「和同開珎（銀銭）」他について論究している。

第 1 表 富本銭と皇朝十二銭

（文献 103 より）

銭文（銭種）	初 鑄 年	天 皇	典 拠
富本銭（銅銭）	天武12（683）年以降	天武天皇	日本書紀
和同開珎（銀銭）	和銅元（708）年	元明天皇	続日本紀
和同開珎（銅銭）	和銅元（708）年	元明天皇	続日本紀
萬年通寶（銅銭）	天平宝字 4（760）年	淳仁天皇	続日本紀
大平元寶（銀銭）	天平宝字 4（760）年	淳仁天皇	続日本紀
開基勝寶（金銭）	天平宝字 4（760）年	淳仁天皇	続日本紀
神功開寶（銅銭）	天平神護元（765）年	称徳天皇	続日本紀
隆平永寶（銅銭）	延暦15（796）年	桓武天皇	日本後紀
富壽神寶（銅銭）	弘仁 9（818）年	嵯峨天皇	日本紀略
承和昌寶（銅銭）	承和 2（835）年	仁明天皇	続日本後紀
長年大寶（銅銭）	嘉祥元（848）年	仁明天皇	続日本後紀
錦益神寶（銅銭）	貞観元（859）年	清和天皇	三代実録
貞観永寶（銅銭）	貞観12（870）年	清和天皇	三代実録
寛平大寶（銅銭）	寛平 2（890）年	宇多天皇	日本紀略
延喜通寶（銅銭）	延喜 7（907）年	醍醐天皇	日本紀略
乾元大寶（銅銭）	天徳 2（958）年	村上天皇	日本紀略

以後、発掘調査報告書や県史・市町村史に皇朝十二銭に関わる事実報告が散見しうるものの、その性格まで論究したものはあまり多くない。しかしその中で注目すべきものとして、昭和 63 (1988) 年の桐原健氏 (文献 7) の長野県史での成果、平成 2 (1990) 年の石上周蔵氏 (文献 8) による松本市下神遺跡出土皇朝十二銭への論考、平成 9 (1997) 年の筆者 (文献 9) による長野市篠ノ井遺跡群出土の「承和昌寶」に関する報告や皇朝十二銭の集成がある程度であった。

以後、これまでの出土資料の集成に重点を置きながらも、若干の論考を行った平成 9 (1997) 年の直井雅尚氏 (文献 10) や小松学氏 (文献 11) の成果をあげることができる。

今回示した古代銭貨出土遺跡については、以上の論考や集成、さらには遺跡個々の報告書を参考にしたものである。

### 3 古代銭貨が出土した遺跡概要 (第 2 表、第 1 ~ 5 図)

#### (1) 田麦・江本庄一郎宅 中野市田麦 (文献 12) (第 3 図 - 17・28)

昭和 21 (1946) 年 12 月 8 日、江本氏がカマドの修理の際、住宅南側の崖斜面に植えられた柿の木の根元の土を採掘した時に地下約 2 尺の所から中世備蓄銭が発見され、幅 3 尺、長さ 2 尺 6 寸、深さ 3 尺の木製の箱に入っていたと考えられている。総計 153 貫 (概算 18 万枚) が当時発見されたと考えられ、現在でも 15 万枚以上が残存し、銭種は数百種類と考えられている。

古代銭貨はこの 15 万枚以上の備蓄銭の中に「萬年通寶」1 枚、「隆平永寶」1 枚が混在していた。

#### (2) 西条・岩船遺跡群 中野市岩船西条 (文献 13)

扇状地末端に位置する弥生時代中期から後期にかけての集落跡が中心となる遺跡であるが、平安時代から中世にかけての集落も一部確認されている。平成元年度から 7 年度にかけて調査が行われた結果、元年度の調査では木箱に入った 34,162 枚もの備蓄銭が発見されている。平成 7 年度の調査では埋納銭遺構が 2 基確認され、1 つは珠洲焼の甕に、もう 1 つは木箱に埋納されたものであった。

古代銭貨は、平成 7 年度に調査された直径 0.9 m × 0.8 m、深さ 0.6 m の土坑内に、南に傾いて埋められていた口径 40cm、胴部最大径約 50cm、高さ 47cm の珠洲焼の甕内に他の備蓄銭とともに、「神功開寶」1 枚が混在していた。備蓄銭の総数については不明である。

#### (3) 屋地遺跡 長野市松代町東条 (文献 14) (第 4 図 - 30)

長野市松代町のシンボリックな山である皆神山の北西麓に位置し、蛭川による扇状地扇央部の東側にあたる。古墳時代から平安時代にかけての集落跡で、竪穴住居跡は 80 軒以上検出されている。

古代銭貨は「富壽神寶」1 枚が 11 世紀代の B 1 号竪穴住居跡の埋土中より出土している。

#### (4) 御所遺跡 長野市栗田 (文献 15)

中世信濃守護小笠原氏の館跡と推定されている「御所」地籍一帯に含まれ、裾花川旧流

路に沿って発達した微高地上に位置している。奈良・平安時代の竪穴住居跡は14軒調査されている。

古代銭貨は「富壽神寶」1枚が出土しているが、出土状況等は不明である。

(5) 篠ノ井遺跡群（高速道地点） 長野市篠ノ井塩崎（文献16）（第4図－37）

千曲川左岸の自然堤防上に立地する弥生時代中期から古代にかけての竪穴住居跡が800軒以上発見された大集落遺跡である。古墳時代終末から古代にかけての竪穴住居跡は489軒、掘立柱建物跡29棟他が調査されている。

古代銭貨はSB7404 竪穴住居跡の床面にわずかに入った状態で「承和昌寶」1枚が出土している。

(6) 榎田遺跡 長野市若穂綿内（文献17）（第4図－39）

千曲川右岸の自然堤防上及び後背湿地に立地し、弥生時代中期から古代にかけての竪穴住居跡が1,000軒以上確認された大集落遺跡である。奈良時代から平安時代にかけての遺構は竪穴住居跡36軒、溝跡7条などが調査された。

古代銭貨は「長年大寶」1枚が8世紀第2四半期から9世紀第4四半期のSD47 溝跡から木製品・墨書土器180点などとともに出土しているが、出土状況は不明である。また遺構外から「饒益神寶」1枚が出土している。

(7) 松原遺跡 長野市松代町東寺尾（文献18）（第4図－42・44）

長野盆地南東部の北側を金井山、南側を愛宕山によって限られた千曲川右岸の三角形の自然堤防上に位置する。縄文時代前期から中世にかけての竪穴住居跡が700軒以上調査された大集落遺跡である。古代の遺構については竪穴住居跡408軒他が調査されている。

古代銭貨は8世紀代から9世紀代と考えられるSD1173 溝跡の埋土中から「貞観永寶」1枚が出土し、また10世紀前半頃と考えられるSB196 竪穴住居跡の埋土中から「延喜通寶」1枚が出土している。

(8) 生仁遺跡 千曲市雨宮（文献19）（第2図－1・2）

千曲川右岸の自然堤防上の後背地で、五十里川や沢山川等の東西南北に流れる小河川群によって形成された中州状の微高地にある。

古代銭貨が出土したのは、第2地点といわれる調査地で「和同開珎」2枚が出土している。出土状況の詳細は不明である。

(9) 諏訪南沖遺跡 千曲市栗佐（文献20）

千曲川右岸の自然堤防上にあり、栗佐遺跡群に属する。平安時代の遺構は竪穴住居跡10軒他が調査された。

古代銭貨は平安時代の集落内から「和同開珎」1枚が出土している。出土遺構は不明である。

(10) 更埴条里遺跡 千曲市雨宮（文献21）

千曲川右岸の自然堤防背面から後背湿地にかけて広がる遺跡で、9世紀代から13世紀代にかけての条里水田跡や集落跡等が調査されている。

古代銭貨は9世紀後半の千曲川による洪水前の9世紀代の面より「隆平永寶」1枚が出土している。

(11) 国分寺周辺遺跡群  
上田市国分（文献22）（第2図-4）

千曲川右岸の最下位段丘に位置し、信濃国分寺跡がある段丘よりもさらに下位の段丘となる。弥生時代後期から平安時代にかけての集落跡で、194軒の竪穴住居跡他が検出されている。

古代銭貨は「和同開珎」1枚が包含層から出土している。

(12) 信濃国分寺跡 上田市国分（文献23）

千曲川によって形成された第3段丘上にある。聖武天皇の詔勅によって創建されたが、その年代は明らかにされていない。

古代銭貨は「和同開珎」1枚が西回廊跡より出土している。

(13) 殿田遺跡 上田市常磐城（文献24）（第2図-3）

千曲川によって形成された段丘上にあり、奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡5軒他が調査された。

古代銭貨は「和同開珎」1枚が調査グリッド内より出土している。

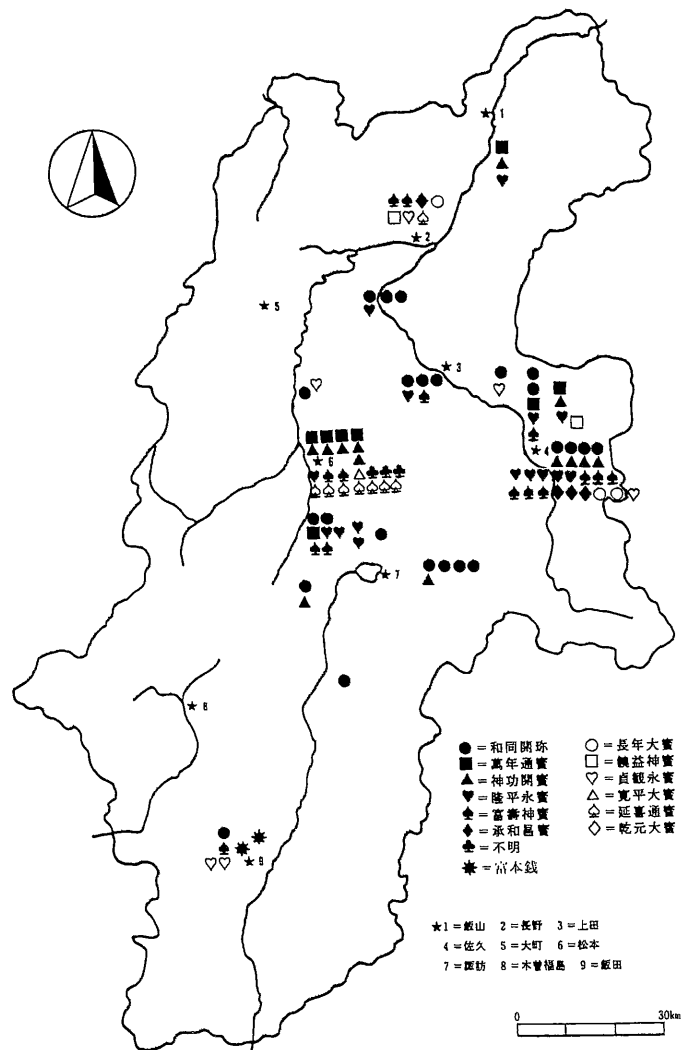
(14) 宮平遺跡 上田市住吉（文献25）

東太郎山南麓の山裾にあり、古墳時代後期から中世にかけての遺跡で、竪穴住居跡86軒他が調査された。

古代銭貨は「隆平永寶」1枚が遺構外より出土している。

(15) 常田堀ノ内遺跡 上田市常田（文献26）

大正13（1923）年2月、蚕糸専門学校に水道管を布設のおり、地下3尺ほど掘り下げ



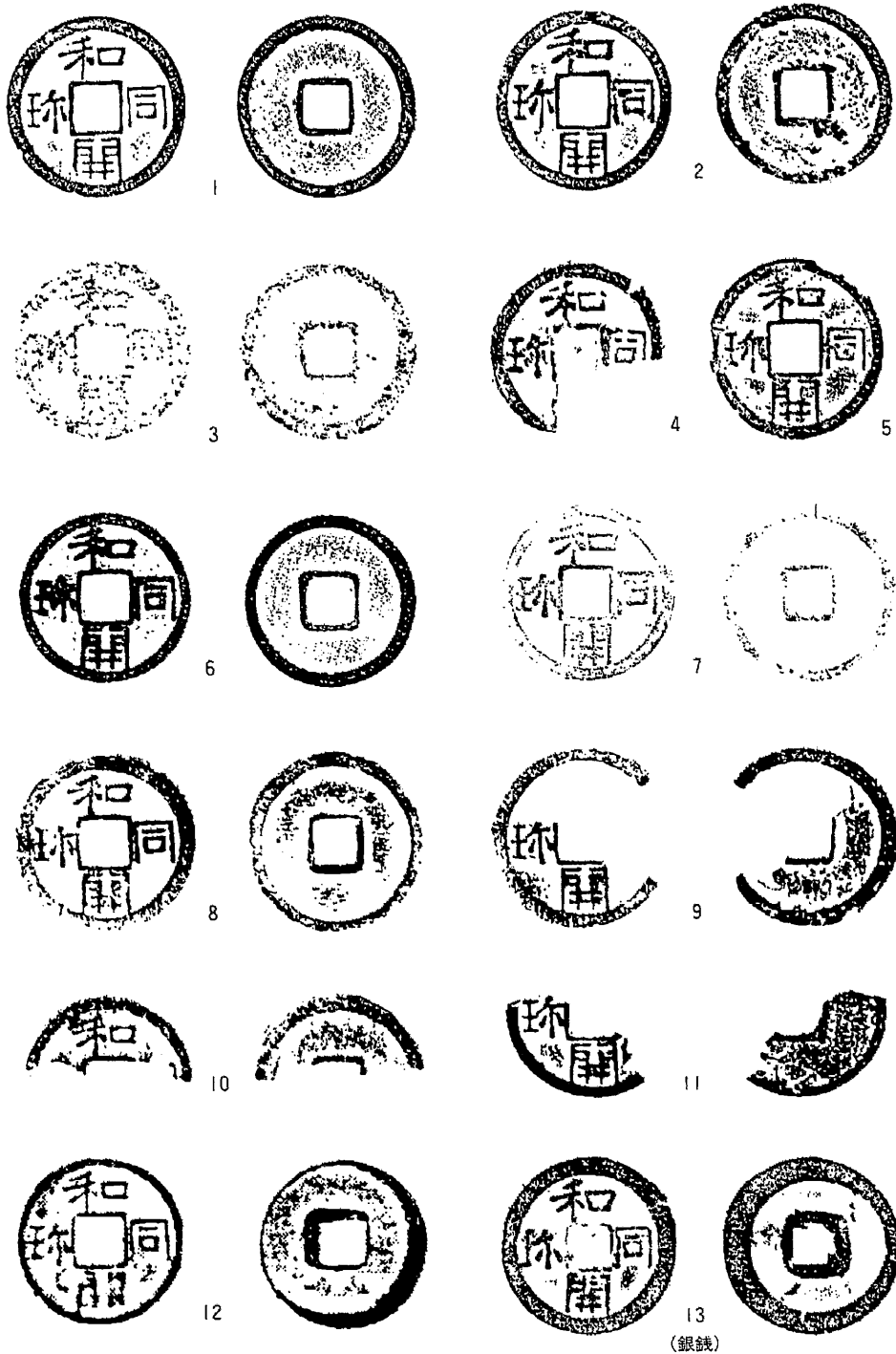
第1図 長野県内の富本銭・皇朝十二銭出土分布図  
（文献103より）

第2表 長野県内の富本銭・皇朝十二銭一覧（文献103より）

遺跡名	所在地	出土銭貨	出土遺構	遺跡名	所在地	出土銭貨	出土遺構
田麦・江本庄一郎宅	中野市田麦	萬年通寶	中世備蓄銭	三角原遺跡	安曇野市温	延喜通寶	竪穴住居跡床
田麦・江本庄一郎宅	中野市田麦	隆平永寶	中世備蓄銭	宮本の神社東側	安曇野市宮本	和同開珎	埋納銭か
西条・岩船遺跡群	中野市岩船西条	神功開寶	中世備蓄銭	下神遺跡	松本市神林	萬年通寶	土坑内
屋地遺跡	長野市松代町東条	富壽神寶	竪穴住居跡埋土中	下神遺跡	松本市神林	萬年通寶	土坑内
御所遺跡	長野市栗田	富壽神寶	集落内	下神遺跡	松本市神林	萬年通寶	土坑内
篠ノ井遺跡群	長野市篠ノ井塩崎	承和昌寶	竪穴住居跡床	下神遺跡	松本市神林	萬年通寶	土坑内
榎田遺跡	長野市若穂綿内	長年大寶	溝跡	下神遺跡	松本市神林	神功開寶	土坑内
榎田遺跡	長野市若穂綿内	饒益神寶	遺構外	下神遺跡	松本市神林	神功開寶	土坑内
松原遺跡	長野市松代町東寺尾	貞観永寶	溝跡埋土内	下神遺跡	松本市神林	神功開寶	土坑内
松原遺跡	長野市松代町東寺尾	延喜通寶	竪穴住居跡埋土中	下神遺跡	松本市神林	神功開寶	土坑内
生仁遺跡	千曲市雨宮	和同開珎	詳細不明	下神遺跡	松本市神林	神功開寶	溝跡内
生仁遺跡	千曲市雨宮	和同開珎	詳細不明	下神遺跡	松本市神林	不明	土坑内
諏訪南沖遺跡	千曲市栗佐	和同開珎	詳細不明	下神遺跡	松本市神林	不明	土坑内
更埴条里遺跡	千曲市雨宮	隆平永寶	9世紀代の面	果町遺跡	松本市果	隆平永寶	検出面
国分寺周辺遺跡群	上田市国分	和同開珎	包含層	三間沢川左岸遺跡	松本市和田	富壽神寶	竪穴住居跡床
信濃国分寺跡	上田市国分	和同開珎	西回廊跡	三間沢川左岸遺跡	松本市和田	延喜通寶	竪穴住居跡内詳細不明
殿田遺跡	上田市常盤城	和同開珎	調査グリッド内	三間沢川左岸遺跡	松本市和田	延喜通寶	竪穴住居跡内詳細不明
宮平遺跡	上田市住吉	隆平永寶	遺構外	三間沢川左岸遺跡	松本市和田	延喜通寶	竪穴住居跡内詳細不明
常田堀ノ内遺跡	上田市常田	富壽神寶	中世備蓄銭	三間沢川左岸遺跡	松本市和田	延喜通寶	竪穴住居跡内詳細不明
前田遺跡	佐久市小田井	和同開珎	竪穴住居跡床	三間沢川左岸遺跡	松本市和田	延喜通寶	竪穴住居跡内詳細不明
中道遺跡	佐久市前山	和同開珎	竪穴住居跡カマド	三間沢川左岸遺跡	松本市和田	延喜通寶	竪穴住居跡内詳細不明
栗毛坂遺跡群B	佐久市岩村田	神功開寶	遺構外	三間沢川左岸遺跡	松本市和田	不明	竪穴住居跡内詳細不明
下聖端遺跡	佐久市長土呂	隆平永寶	竪穴住居跡内詳細不明	小池遺跡	松本市寿小池	富壽神寶	竪穴住居跡内詳細不明
高師町遺跡	佐久市新子田	富壽神寶	竪穴住居跡内詳細不明	一ツ家遺跡	松本市内田	寛平大寶	竪穴住居跡内詳細不明
聖原遺跡	佐久市長土呂	和同開珎	竪穴住居跡トレンチ内	川西開田遺跡	松本市神林	延喜通寶	溝跡内詳細不明
聖原遺跡	佐久市長土呂	神功開寶	竪穴住居跡埋土中	吉田川西遺跡	塩尻市広丘吉田	富壽神寶	竪穴住居跡床
聖原遺跡	佐久市長土呂	隆平永寶	竪穴住居跡カマド	丘中学校遺跡	塩尻市広丘野村	隆平永寶	廃土中
聖原遺跡	佐久市長土呂	隆平永寶	竪穴住居跡検出時	小沼田遺跡	塩尻市宗賀洗馬	萬年通寶	中世備蓄銭
聖原遺跡	佐久市長土呂	隆平永寶	掘立柱建物跡内	吉田若宮遺跡	塩尻市広丘吉田	和同開珎	中世備蓄銭
聖原遺跡	佐久市長土呂	隆平永寶	掘立柱建物跡内	吉田若宮遺跡	塩尻市広丘吉田	富壽神寶	中世備蓄銭
聖原遺跡	佐久市長土呂	富壽神寶	竪穴住居跡埋土中	下境沢遺跡	塩尻市広丘南内田	隆平永寶	竪穴住居跡埋土中
聖原遺跡	佐久市長土呂	富壽神寶	溝跡内	洗馬駅跡	塩尻市宗賀洗馬	和同開珎	不明
聖原遺跡	佐久市長土呂	富壽神寶	遺構外	榎垣外遺跡	岡谷市長池	隆平永寶	竪穴住居跡床
聖原遺跡	佐久市長土呂	承和昌寶	竪穴住居跡埋土中	榎垣外遺跡	岡谷市長池	隆平永寶	火葬蔵骨器内
聖原遺跡	佐久市長土呂	承和昌寶	竪穴住居跡掘方中	一の釜遺跡	下諏訪町東山田	和同開珎	不明
聖原遺跡	佐久市長土呂	長年大寶	遺構外	乞食塚古墳	茅野市宮川	和同開珎	古墳横穴式石室
芝宮遺跡	佐久市芝宮	和同開珎	溝跡内	乞食塚古墳	茅野市宮川	和同開珎	古墳横穴式石室
芝宮遺跡	佐久市芝宮	神功開寶	溝跡内	乞食塚古墳	茅野市宮川	和同開珎	古墳横穴式石室
上ノ城遺跡	佐久市岩村田	神功開寶	詳細不明	乞食塚古墳	茅野市宮川	神功開寶	古墳横穴式石室
円正防遺跡	佐久市岩村田	貞観永寶	竪穴住居跡埋土中	下手良中原遺跡	伊那市手良	和同開珎	竪穴住居跡埋土中
深堀遺跡	佐久市瀬戸	長年大寶	竪穴住居跡カマド	ミサモリ古墳	辰野町平出	和同開珎	古墳横穴式石室
反田遺跡	佐久市小田切	富壽神寶	竪穴住居跡内詳細不明	猿小場遺跡	飯田市松尾	貞観永寶	竪穴住居跡内詳細不明
上久保田向遺跡	佐久市琵琶坂	富壽神寶	竪穴住居跡内か	猿小場遺跡	飯田市松尾	貞観永寶	不明
上久保田向遺跡	佐久市琵琶坂	承和昌寶	不明	恒川遺跡群	飯田市座光寺恒川	和同開珎（銀銭）	竪穴住居跡
中原遺跡群	小諸市御影新田	和同開珎	竪穴住居跡床	恒川遺跡群	飯田市座光寺恒川	富壽神寶	竪穴住居跡
中原遺跡群	小諸市御影新田	萬年通寶	竪穴住居跡床	座光寺地区	飯田市座光寺	富本	不明
大塚原遺跡	小諸市御影新田	隆平永寶	竪穴住居跡内詳細不明	武陵地1号古墳	高森町下市田	富本	古墳横穴式石室
竹花遺跡	小諸市御影新田	富壽神寶	遺構外				
郷土遺跡	小諸市甲	和同開珎	遺構外				
十二遺跡	御代田町御代田	萬年通寶	竪穴住居跡カマド付近埋土				
野火付遺跡	御代田町御代田	神功開寶	竪穴住居跡床				
根岸遺跡	御代田町御代田	隆平永寶	竪穴住居跡内詳細不明				
根岸遺跡	御代田町御代田	饒益神寶	竪穴住居跡内詳細不明				
桜畑遺跡	東御市祿津	和同開珎	土坑埋土内				
中田遺跡	東御市祿津	貞観永寶	不明				



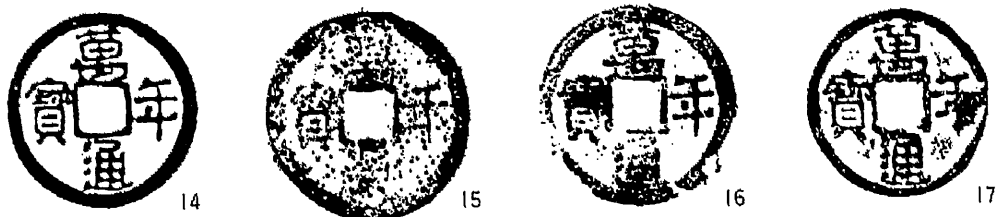
1. 和同開珎



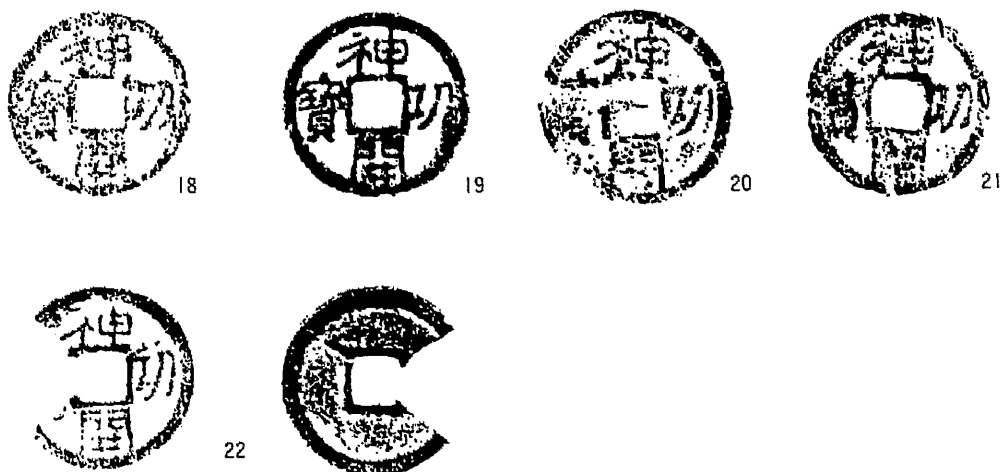
- 1 = 生仁遺跡 2 = 生仁遺跡 3 = 殿田遺跡 4 = 国分寺周辺遺跡群 5 = 中原遺跡群  
 6 = 宮本の神社東側 7 = 前田遺跡 8 = 乞食塚古墳 9 = 乞食塚古墳 10 = 乞食塚古墳  
 11 = 乞食塚古墳 12 = 一の釜遺跡 13 = 恒川遺跡群

第2図 長野県内出土の富本銭と皇朝十二銭 (S = 1 / 1) (文献 71 より)

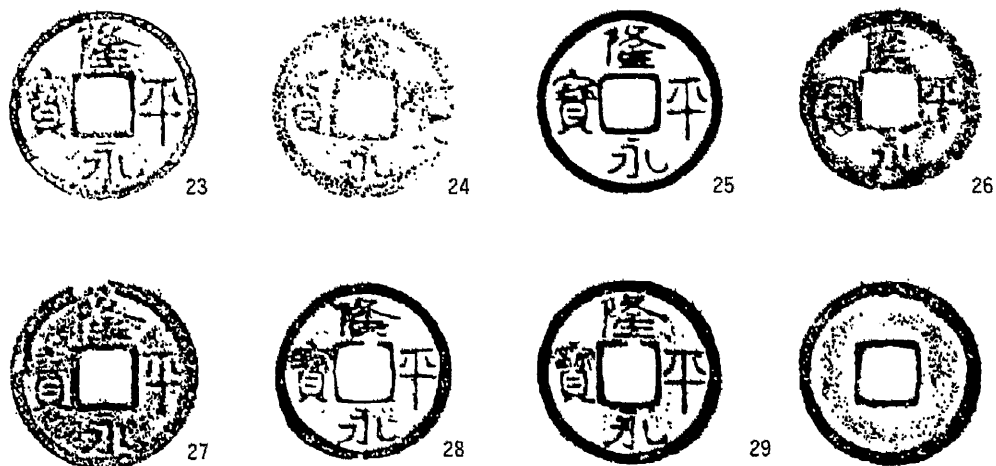
2. 萬年通寶



3. 神功開寶



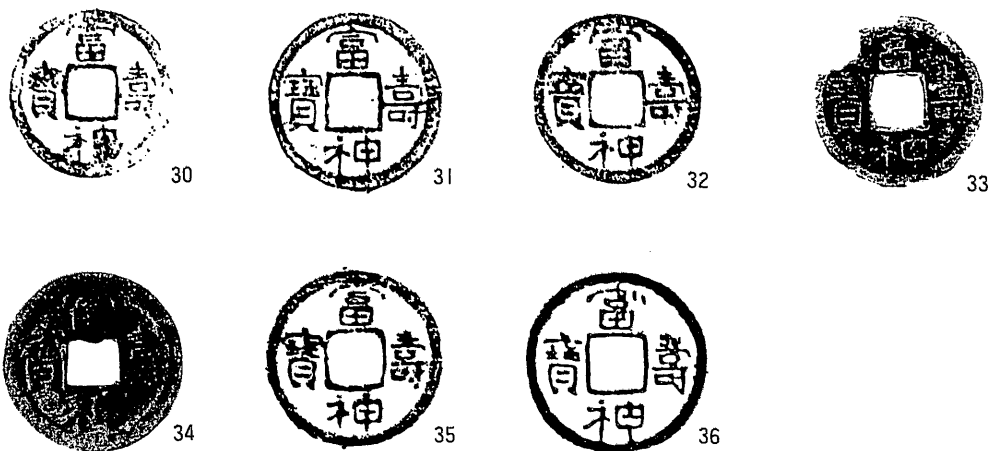
4. 隆平永寶



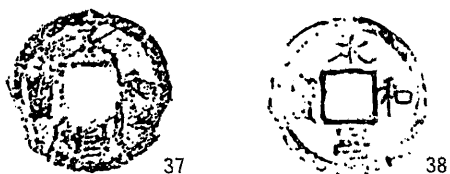
14 = 十二遺跡 15 = 中原遺跡群 16 = 下神遺跡 17 = 田麦・江本庄一郎宅 18 = 野火付遺跡  
 19 = 栗毛坂遺跡群B地区 20 = 下神遺跡 21 = 下神遺跡 22 = 乞食塚古墳 23 = 下聖端遺跡  
 24 = 大塚原遺跡 25 = 根岸遺跡 26 = 県町遺跡 27 = 下境沢遺跡 28 = 田麦・江本庄一郎宅  
 29 = 榎垣外遺跡 (金山東遺跡)

第3図 長野県内出土の富本銭と皇朝十二銭 (S = 1 / 1) (文献71より)

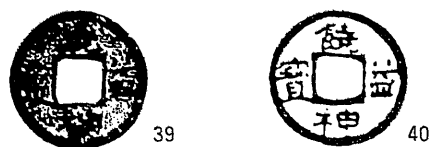
5. 富壽神寶



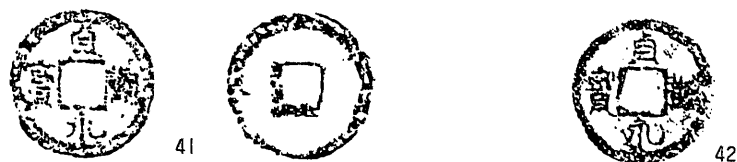
6. 承和昌寶



8. 饒益神寶



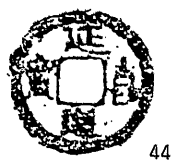
9. 貞觀永寶



10. 寛平大寶



11. 延喜通寶



30 = 屋地遺跡 31 = 高師町遺跡 32 = 竹花遺跡 33 = 三間沢川左岸遺跡 34 = 小池遺跡  
 35 = 吉田川西遺跡 36 = 恒川遺跡群 37 = 篠ノ井遺跡群 (高速道地点) 38 = 上久保田向遺跡  
 39 = 榎田遺跡 40 = 根岸遺跡 41 = 猿小場遺跡 42 = 松原遺跡 43 = 一ツ家遺跡 44 = 松原遺跡

第4図 長野県内出土の富本銭と皇朝十二銭 (S = 1/1) (文献71より)

たときに穴が発見され、藁むしろに包まれていたと考えられる状態で、重さ 11 貫 600 匁余の銭貨が、絹縄は朽ち銭が固まった状態で発見された。枚数を調査すると 12,000 枚余であり、中世備蓄銭と考えられる。

古代銭貨は「富壽神寶」1 枚が混在していた。

(16) 前田遺跡 佐久市小田井 (文献 27) (第 2 図 - 7)

十二遺跡・根岸遺跡・野火付遺跡とともに鋳物屋遺跡群に属する。鋳物屋遺跡群は佐久市・御代田町・小諸市にまたがり、前田遺跡は浅間山南麓緩傾斜面上に位置している。調査は 1 次から 3 次まで行われ、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡 172 軒、掘立柱建物跡 184 棟他が検出されている。

古代銭貨は「和同開珎」1 枚が H 152 竪穴住居跡のカマド東脇床面直上から出土している。

(17) 中道遺跡 佐久市前山 (文献 28)

野沢平の中央部に位置する。古墳時代の竪穴住居跡 2 軒、平安時代の竪穴住居跡 4 軒が調査された。

古代銭貨は「和同開珎」1 枚が平安時代の H - 1 号竪穴住居跡のカマド内から出土している。また平安時代の H - 2 号竪穴住居跡の床面からは、二彩蓋が出土している。

(18) 栗毛坂遺跡群 B 地区 佐久市岩村田 (文献 29) (第 3 図 - 19)

浅間山南麓末端部の田切地形に挟まれた台地上に位置する。縄文時代後期から中世以降までを包含する遺跡で、奈良・平安時代の竪穴住居跡 79 軒、掘立柱建物跡 89 棟他が調査された。

古代銭貨は「神功開寶」1 枚が遺構外から出土している。

(19) 下聖端遺跡 佐久市長土呂 (文献 30) (第 3 図 - 23)

浅間山南麓末端部の谷に挟まれた田切地形の帯状台地上に位置する。古墳時代後期や平安時代の遺構が中心となり、平安時代の竪穴住居跡 15 軒他が調査されている。

古代銭貨は「隆平永寶」1 枚が平安時代中期の H 45 号竪穴住居跡より出土している。出土状況の詳細は不明である。

(20) 高師町遺跡 佐久市新子田 (文献 31) (第 4 図 - 31)

佐久市のほぼ中央に位置し、浅間山南麓末端部の 2 本の田切低地に挟まれた帯状台地に位置する。

平安時代の遺構が中心となり、竪穴住居跡 24 軒他が調査され、整然と並んだ掘立柱建物跡を囲むように竪穴住居跡が並んでいた。

古代銭貨は「富壽神寶」1 枚が平安時代前期の H 4 号竪穴住居跡より出土している。出土状況の詳細は不明である。

(21) 聖原遺跡 佐久市長土呂 (文献 32)

浅間山南麓末端部の平坦な台地上に位置し、古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡が 818 軒調査された大集落跡である。奈良時代から平安時代の竪穴住居跡は 663 軒

が調査された。

古代銭貨は「和同開珎」1枚、「神功開寶」1枚、「隆平永寶」4枚、「富壽神寶」3枚、「承和昌寶」2、「長年大寶」1枚の計12枚が出土している。

「和同開珎」1枚は8世紀第4四半期から9世紀初頭頃のH 795号竪穴住居跡から出土している。調査上のトレンチからの出土であり、出土状況は不明である。「神功開寶」1枚は9世紀前半頃のH 309号竪穴住居跡から出土している。埋土中からの出土である。「隆平永寶」4枚の内、1枚は8世紀第4四半期から9世紀初頭頃のH 118号竪穴住居跡から出土している。カマド流出土からの出土であり、住居廃棄時にカマド内に置かれた可能性が考えられる。1枚は9世紀前半頃の竪穴住居跡H 489号から出土している。調査検出時の出土である。残り2枚は10世紀前半頃のF 498号掘立柱建物跡からの出土である。詳細な出土状況は不明である。「富壽神寶」3枚の内、1枚は9世紀前半頃のH 489号竪穴住居跡から出土している。埋土中からの出土である。1枚は9世紀後半以降のM 40号溝跡から出土している。出土状況は不明である。1枚は遺構外からの出土である。「承和昌寶」2枚の内、1枚は8世紀第4四半期から9世紀初頭頃のH 198号竪穴住居跡から出土している。埋土上層からの出土であり、竪穴住居埋没後の混入と考えられる。1枚は9世紀前半頃のH 688号竪穴住居跡から出土している。堀方からの出土であり、竪穴住居構築時の地鎮に関わるものか。「長年大寶」1枚は遺構外からの出土である。

当遺跡での出土枚数や銭種の多さは、他遺跡では見られないものである。

当遺跡での集落は8世紀第4四半期から9世紀前半にピークを迎える。研究者からは調査以来佐久郡衙に比定される考えも示されている。しかし調査主体者である佐久市教育委員会は伊那郡衙に比定されている飯田市恒川遺跡群との検討や、当遺跡の遺構や遺物の状況から郡衙の中核とは考えていない。

## (22) 芝宮遺跡群 佐久市芝宮（文献33）

浅間山南麓末端部の田切谷に挟まれた台地上に位置する。古墳時代後期から平安時代の集落跡が調査され、竪穴住居跡245軒、掘立柱建物跡約90棟他が調査された。

古代銭貨は「和同開珎」1枚・「神功開寶」1枚が7世紀後半以降のSD 3大溝跡から出土している。ともに埋土からの出土で詳細は不明である。

## (23) 上ノ城遺跡 佐久市岩村田（文献34）

佐久盆地を流れる湯川の北に臨んだ田切地形の台地縁辺部に位置する。古墳時代後期から平安時代にかけての遺構が調査され、竪穴住居跡49軒他が検出された。

古代銭貨は「神功開寶」1枚が出土しているが、詳細は不明である。

## (24) 円正防遺跡 佐久市岩村田（文献35）

西・南方向に低湿地が広がる台地端部に位置する。6次におよぶ調査が行われ、弥生時代から中世にかけての集落遺跡であることが確認されている。古代銭貨が発見された第6次の調査でも弥生時代から中世の遺構が調査されたが、平安時代の遺構は竪穴住居跡14軒他が検出された。

古代銭貨は「貞観永寶」1枚が古墳時代後期のH9号竪穴住居跡覆土から出土し、調査時の混入と考えられる。

(25) 深堀遺跡 佐久市瀬戸（文献36）

深堀遺跡が含まれる深堀遺跡群は東方に志賀川を望み、西方は田切に挟まれる台地状に位置する。古墳時代から古代にかけての竪穴住居跡が56軒確認された集落遺跡であり、奈良時代から平安時代にかけての遺構は竪穴住居跡46軒他が調査された。

古代銭貨は「長年大寶」1枚がH38号竪穴住居跡のカマド内から出土している。

(26) 反田遺跡 佐久市小田切（文献37）

蓼科山麓から流れ出た片貝川により形成された小規模な沖積地上に立地する。縄文時代から平安時代にかけての遺跡で、平安時代の遺構は竪穴住居跡17軒他が調査された。

古代銭貨は「富壽神寶」1枚が10世紀前半のH5号竪穴住居跡より出土しているが、出土状況は不明である。

(27) 上久保田向遺跡 佐久市琵琶坂（文献38）（第4図-38）

浅間山南麓に位置し、田切地形に挟まれた台地上に位置する。遺跡は台地全面に広がり、平安時代の竪穴住居跡17軒他が調査された。北には聖原遺跡がある。

古代銭貨は「富壽神寶」1枚が10世紀前半のH25号竪穴住居跡あるいはD12号土坑より、どちらからの出土でもよい状況で出土している。また「承和昌寶」1枚が出土しているが、出土状況の詳細は不明である。

(28) 中原遺跡群 小諸市御影新田（文献39）（第2図-5・第3図-15）

浅間山南麓斜面末端部の平らな台地上に位置する。古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡で、竪穴住居跡140軒、掘立柱建物跡100棟他が調査された。

古代銭貨は「和同開珎」1枚が9世紀前半頃と考えられる7号竪穴住居跡床面より出土し、また「萬年通寶」1枚が9世紀初頭頃と考えられる29号竪穴住居跡床面より出土している。

(29) 大塚原遺跡 小諸市御影新田（文献40）（第3図-24）

浅間山南麓緩傾斜地の田切地形に挟まれた台地上に位置する。古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡で、平成5年度の調査では、平安時代の竪穴住居跡が22軒検出された。

古代銭貨は「隆平永寶」1枚が第20号竪穴住居跡より出土している。出土状況の詳細は不明である。

(30) 竹花遺跡 小諸市御影新田（文献41）（第4図-32）

浅間山南麓緩傾斜地の田切地形に挟まれた台地上に位置する。大塚原遺跡と同様の遺跡群に属する。古墳時代後期から平安時代までの遺構を中心に、竪穴住居跡118軒、掘立柱建物跡86棟他が調査された。

古代銭貨は「富壽神寶」1枚が遺構外から出土している。

(31) 郷土遺跡 小諸市甲（文献42）

浅間山南麓裾部の緩傾斜地上に位置する。縄文時代前期から後期の集落跡であるが、平

安時代の竪穴住居跡も2軒検出されている。

古代銭貨は「和同開珎」1枚が遺構外から出土している。

(32) 十二遺跡 北佐久郡御代田町御代田 (文献43) (第3図-14)

前田遺跡・根岸遺跡・野火付遺跡とともに鋳物屋遺跡群に属する。この地帯は浅間山南麓緩傾斜地上に位置する。

古代を中心に竪穴住居跡71軒、掘立柱建物跡75棟他が調査された。

古代銭貨は「萬年通寶」1枚が平安時代のH-28号竪穴住居跡のカマド付近の埋土中より出土している。

(33) 野火付遺跡 北佐久郡御代田町御代田 (文献44) (第3図-18)

前田遺跡・根岸遺跡・十二遺跡とともに鋳物屋遺跡群に属する。この地帯は浅間山南麓緩傾斜地上に位置する。古代を中心に竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡8棟他が調査された。

古代銭貨は「神功開寶」1枚が平安時代のH-13号竪穴住居跡のカマド南側の床面より出土している。

(34) 根岸遺跡 北佐久郡御代田町御代田 (文献45) (第3図-25・第4図-40)

前田遺跡・野火付遺跡・十二遺跡とともに鋳物屋遺跡群に属する。この地帯は浅間山南麓緩傾斜地上に位置する。古代を中心に竪穴住居跡32軒、掘立柱建物跡40棟他が調査された。

古代銭貨は「隆平永寶」1枚が平安時代のH-18号竪穴住居跡より出土している。また「饒益神寶」1枚が平安時代のH-13号竪穴住居跡より出土している。ともに出土状況の詳細は不明である。

(35) 桜畑遺跡 東御市祢津 (文献46)

烏帽子岳西南麓、求女沢川の左岸に立地する。縄文時代から近世にかけての遺跡で、平安時代前半期の遺構は竪穴住居跡5軒他が調査された。

古代銭貨は「和同開珎」1枚が不整形のSK016土坑の埋土中から出土している。土層から中世と判断されているが、出土土器から古代の遺構に遡る可能性が指摘されている。

(36) 中田遺跡 東御市祢津 (文献47)

烏帽子岳と三方ヶ峰の谷間から流れる所沢川左岸、烏帽子岳南麓の複合扇状地上に立地する。平安時代の竪穴住居跡11軒他が調査された。

古代銭貨は「貞観永寶」1枚が平安時代前半のSB05竪穴住居跡から出土している。出土状況は不明である。

(37) 三角原遺跡 安曇野市温 (文献48)

黒沢川左岸に位置する。縄文時代から平安時代の遺跡で、平安時代の遺構は竪穴住居跡56軒他が確認された。

古代銭貨は「延喜通寶」1枚が10世紀後半から11世紀前半頃の平安時代後半の34号竪穴住居跡内の北西焼土中床面から出土している。

(38) 宮本の神社東側 安曇野市宮本 (文献 49) (第 2 図 - 6)

安曇野市の旧明科町宮本の神社東側から宋銭とともに「和同開珎」1 枚が出土している。中世以降の埋納銭の中に混在していたものと考えられる。

(39) 下神遺跡 松本市神林 (文献 50) (第 3 図 - 16・20・21)

奈良井川と鎖川との合流地点の南側に立地し、鎖川により形成された扇状地端部に位置している。古代の遺構は竪穴住居跡 142 軒、掘立柱建物跡 58 棟他が調査された。信濃の初期荘園である「草茂庄」の存在を明らかにした遺跡である。

古代銭貨は合計 11 枚が出土している。その内「萬年通寶」3 枚・「神功開寶」4 枚・不明銭 2 枚の計 9 枚が 54cm×40cm のやや楕円形をした 8 世紀末頃の SK490 土坑から出土している。この遺構については、近接する SB126 竪穴住居跡の建築時に伴う地鎮行為によるもの、あるいは溝で区画された土地に初めて占地した時に行われた地鎮行為によるものと考えられている。また「萬年通寶」1 枚が SK554 土坑より出土し、「神功開寶」1 枚が SD108 溝跡から出土している。

(40) 県町遺跡 松本市県 (文献 51) (第 3 図 - 26)

薄川の度重なる氾濫によって急速に堆積した扇状地上にある。

古代銭貨は「隆平永寶」1 枚が遺構検出中に出土している。

(41) 三間沢川左岸遺跡 松本市和田 (文献 52) (第 4 図 - 33)

三間沢川左岸の台地上に立地する。平安時代の竪穴住居跡が 250 軒以上調査されている。

古代銭貨は「富壽神寶」1 枚が平安時代の第 16 号竪穴住居跡の床面から出土し、「延喜通寶」6 枚が平安時代の焼失住居である第 161 号竪穴住居跡から溶着した状況で出土しているが、詳細は不明である。また劣化し文字が読み取れない古代銭貨と考えられるものが第 55 号竪穴住居跡から 1 枚出土している。

(42) 小池遺跡 松本市寿小池 (文献 53) (第 4 図 - 34)

東から西に緩やかに傾斜する片丘丘陵の麓、塩沢川により形成された台地上に位置し、一ツ家遺跡と近接している。平成 2 年度の調査では、奈良時代の竪穴住居跡が 13 軒、平安時代の竪穴住居跡 62 軒他が調査されている。

古代銭貨は「富壽神寶」1 枚が平安時代の 59 号竪穴住居跡より出土している。出土状況の詳細は不明である。

(43) 一ツ家遺跡 松本市内田 (文献 54) (第 4 図 - 43)

東から西に緩やかに傾斜する片丘丘陵の麓、塩沢川により形成された台地上に位置し、小池遺跡と近接している。平成 7 年度の調査では平安時代の竪穴住居跡が 37 軒、戦国時代の館関連の遺構他が調査されている。

古代銭貨は「寛平大寶」1 枚が戦国時代の館に関わる遺構内より出土している。出土状況の詳細は不明である。

(44) 川西開田遺跡 松本市神林 (文献 55)

奈良井川と三間沢川に挟まれるように立地し、三間沢川の対岸には三間沢川左岸遺跡が



ある。平安時代の竪穴住居跡 8 軒他が調査されている。

古代銭貨は「延喜通寶」1 枚が 9 溝跡から出土している。出土状況の詳細は不明である。

(45) 吉田川西遺跡 塩尻市広丘吉田 (文献 56) (第 4 図 - 35)

田川中流域左岸の段丘面で、南北に伸びる東西幅 300 m ほどの舌状台地上に位置する。古代の竪穴住居跡 266 軒他が調査され、SK128 墓からは緑釉陶器・土師器・八陵鏡がセットで出土している。

古代銭貨は「富壽神寶」1 枚が 10 世紀初頭の 159 号竪穴住居跡の床面付近から出土している。

(46) 丘中学校遺跡 塩尻市広丘野村 (文献 11)

田川左岸の段丘上に位置する。昭和 52 年度の調査では、平安時代の竪穴住居跡 14 軒他が調査されている。

古代銭貨は「隆平永寶」1 枚が廃土中から発見されている。

(47) 小沼田遺跡 塩尻市宗賀洗馬 (文献 57)

明治 17 (1884) 年に畑地開墾中に埋納銭が発見された。埋納銭は 2 つの甕に埋納されており、中世によくみられる備蓄銭と考えられ、唐銭や宋銭を主体に 51,649 枚もの銭が埋納されていた。

古代銭貨は「萬年通寶」1 枚が備蓄銭内に混在していた。

(48) 吉田若宮遺跡 塩尻市広丘吉田 (文献 58)

昭和 56 (1981) 年に宅地造成が行われた際に、地表下約 35cm から 45cm に常滑の大甕と木製容器に入った 7 万数千枚の埋納銭が発見された。中世によくみられる備蓄銭と考えられる。

古代銭貨は「和同開珎」1 枚と「富壽神寶」1 枚が備蓄銭内に混在していた。

(49) 下境沢遺跡 塩尻市広丘南内田 (文献 11) (第 3 図 - 27)

東山麓から流れる境沢川と小場ヶ沢川により形成された幅の狭い台地上に位置する。平安時代の竪穴住居跡 32 軒他が調査された。

古代銭貨は「隆平永寶」1 枚が平安時代と考えられる住居中最大規模の南北 6.8 m × 東西 8.3 m の 21 号竪穴住居跡の埋土中より出土している。

(50) 洗馬駅跡 塩尻市宗賀洗馬 (文献 59)

「和同開珎」1 枚が出土しているが、詳細は不明である。

(51) 榎垣外遺跡 岡谷市長地 (文献 60・61・62) (第 3 図 - 29)

沖積低地にあり東西 1,300 m、南北 1,500 m にわたって帯状に広がる遺跡で、古墳時代末葉から平安時代までの竪穴住居跡が 308 軒発見され、他の検出遺構や出土遺物から諏訪郡衙推定地とも考えられている。

古代銭貨は「隆平永寶」が 2 枚出土している。1 枚は大正 14 (1925) 年に金山地籍の畑の耕作中に壺 (蔵骨器) が偶然に発見され、その中に少量の土や骨粉とともに混在していた。壺の上には皿状の杯が被されていた。もう 1 枚は同じ金山地籍で調査された 9 世紀

中頃の14号竪穴住居跡の床面直上から出土している。

(52) 一の釜遺跡 下諏訪町東山田 (文献7) (第2図-12)

出土状況等の詳細は不明である。

古代銭貨は「和同開珎」1枚が出土している。一の釜古墳からの出土であろうか。

(53) 乞食塚古墳 茅野市宮川 (文献7, 63) (第2図-8~11・第3図-22)

扇状地の中央を流れる下馬沢川の東に位置し、昭和7(1932)年5月に道路改修で取り壊され、出土品が地方新聞に報じられた後に調査が行われた。その結果、横穴式石室の長さ9m、石室幅約4mで、羨道のない長方形石室であることがわかった。

古代銭貨は「和同開珎」4枚、「神功開寶」1枚の計5枚が、直刀2本、鉄製鐔6点、鉄鏃30本、馬具轡1点、馬具鋌付金具1点、勾玉2個、ガラス丸玉・小玉65個・金環6点、銀環1点とともに石室内より出土している。

この古代銭貨5枚については、後世の奉斎品と考えられ、「このような後世の奉斎品の出土する例は、古墳の主に対して後裔者による手厚い尊崇の続いた証拠とみられるものである」としている。

(54) 下手良中原遺跡 伊那市手良 (文献64)

当地域は「和名抄」での郷名「亘良」郷の比定地と考えられている。奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡17軒が検出されている。

古代銭貨は「和同開珎」1枚が奈良時代末から平安時代初頭と考えられる第3号竪穴住居跡の埋土中から出土している。

(55) ミサモリ古墳 上伊那郡辰野町平出 (文献65)

「和同開珎」4枚、「神功開寶」1枚の計5枚が出土した茅野市乞食塚古墳の文献に、國學院大学生藍川清人氏の実査談として紹介され、古代銭貨は「和同開珎」1枚が出土しているようであるが詳細は不明である。

(56) 猿小場遺跡 飯田市松尾 (文献66・67) (第4図-41)

沖積中位の伊那谷第6段丘上に位置し、平安時代の竪穴住居跡25軒他が調査された。

古代銭貨は「貞観永寶」2枚が出土している。1枚は平安時代の38号竪穴住居跡から出土しているが出土状況等の詳細は不明であり、もう1枚は出土遺構や出土状況等不明である。

(57) 恒川遺跡群 飯田市座光寺恒川 (文献3・4) (第2図-13・第4図-36)

伊那盆地第9段丘上に位置し、古代銭貨が出土した遺跡群の田中・倉垣外地籍では、古代の竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡10数棟が調査された。

古代銭貨は「和同開珎(銀銭)」1枚が奈良時代の44号竪穴住居跡の床面より裏返った状態で出土し、また「富壽神寶」1枚が平安時代の2号竪穴住居跡のカマド右にある穴底部焼土・灰下から出土している。

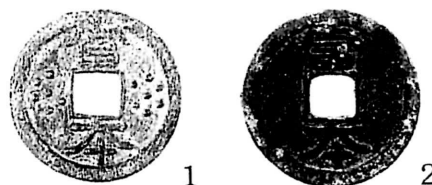
(58) 飯田市座光寺地域出土 飯田市座光寺 (文献3) (第5図-2)

平成11(1999)年1月の奈良国立文化財研究所による飛鳥池遺跡の調査・研究成果に

よる「富本銭」の発表を受けて、同年3月に下伊那郡高森町武陵地1号墳にも同様の「富本銭」1枚が出土していたことが判明し、その後さらに飯田市座光寺の個人宅にも座光寺地籍内で発見されたとされる「富本銭」1枚が所在することが判明した。飛鳥池遺跡出土「富本銭」と武陵地1号古墳「富本銭」と同型のものである。

(59) 武陵地1号墳 下伊那郡高森町下市田 (文献1・2) (第5図-1)

平成11(1999)年1月の奈良国立文化財研究所による飛鳥池遺跡の調査・研究成果による「富本銭」の発表を受けて、同年3月に下伊那郡高森町武陵地1号墳にも同様の「富本銭」が発見されていたことが明らかになった。当古墳は明治30年から40年の間に発掘が行われたと推定される。径18.9mの円墳で、全長8.6mの横穴式石室の前庭部から発見されたとされている。出土遺物から古墳は7世紀前半に構築され、7世紀後半と8世紀中頃以降に追葬が行われたと考えられ、「富本銭」は8世紀中頃以降の追葬時のものと考えられている。



1 = 武陵地1号墳出土

2 = 座光寺地域出土

第5図 下伊那地域出土富本銭  
(文献2・3より)

#### 4 長野県内出土古代銭貨の性格

篠ノ井遺跡群(高速道地点)SB7404 竪穴住居跡、信濃国分寺跡西回廊、前田遺跡H152 竪穴住居跡、中道遺跡H-1号竪穴住居跡、聖原遺跡H118号竪穴住居跡・H688号竪穴住居跡・F498号掘立柱建物跡、深堀遺跡H38 竪穴住居跡、中原遺跡群7号竪穴住居跡・29号竪穴住居跡、野火付遺跡H-13 竪穴住居跡、三角原遺跡34号竪穴住居跡、下神遺跡SK490 土抗、三間沢川左岸遺跡第16号竪穴住居跡、吉田川西遺跡159号竪穴住居跡、榎垣外遺跡14号竪穴住居跡・蔵骨器、乞食塚古墳横穴式石室内、恒川遺跡群2号竪穴住居跡・44号竪穴住居跡、武陵地1号墳からは、古代銭貨が竪穴住居跡床面や墳墓など良好な状況で出土している。

これらの出土状況を考えると、埋土中などから出土した銭貨についても何らかの意図のもとに用いられたが、時の経過の中で本来の状況とは異なった発見や出土となった可能性が高いと考えられる。地方での銭貨は流通貨幣ではなく厭勝銭であったがゆえに、中世備蓄銭以外の古代銭貨は落とし物ではなく、明確な意図のもとに、その地に残されたものであると考えられる。

このことを前提に信濃出土古代銭貨の意味を考えてみたい。

また信濃における住居と古代銭貨との関わりを考えるにあたっては、都での諸事例を参考に信濃でのその性格を探ってみたい。

栄原氏(文献68)は、平城京左京三条二坊十五坪の調査でのSB970 掘立柱建物跡の身舎西北隅の柱穴から、「和同開珎」2枚が礎板下面に付着して出土していることや(文献

69)、平城京左京四条四坊九坪の調査でのSB2390 掘立柱建物跡東北隅の柱穴の根巻石下から「和同開珎」1枚が出土していること(文献70)、さらに大阪府や石川県での調査例を引用しながら、京畿内やその周辺では、建物の柱を立てる前後に祭祀を行い、その際に銭種や枚数は関係なく埋納する行為が行われたとし、これは地鎮のための行為であり、他の物品とともに土地神にささげ、その怒りを鎮める力を持っていたとしている。これらは立柱行為や立柱祭と強く関わるものであるとした。

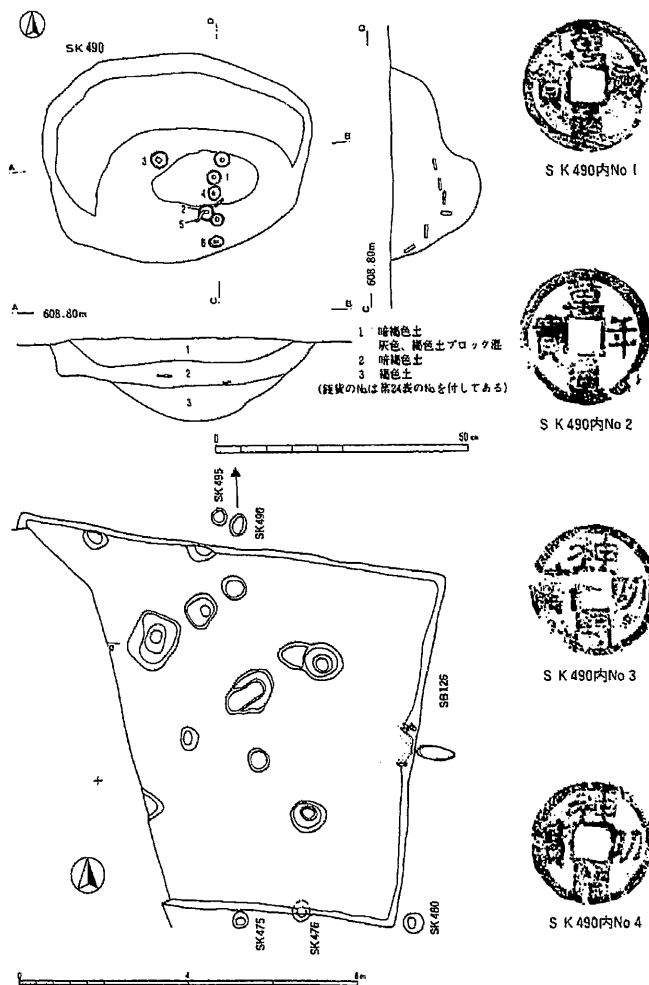
それでは竪穴住居跡から出土する皇朝十二銭はどのようなものであったのであろうか。

栄原氏は(文献68)、関東地方や東北地方での竪穴住居跡床面から皇朝十二銭が出土している遺跡をあげ、掘立柱建物の場合のような土中への埋納ではなく、上棟祭や屋固祭に関わるものとした。

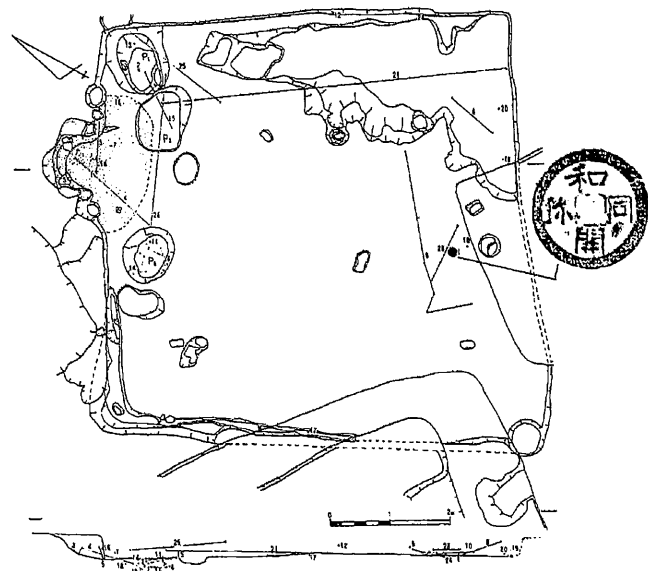
この指摘は、今回示した長野県内の竪穴住居跡にも同様な事が言える。

しかし、下神遺跡でのSK490土坑でのあり方や、恒川遺跡群2号竪穴住居跡でのあり方はどのように考えたらよいのであろうか。

下神遺跡SK490土坑について、石上氏が指摘しているように、「初めて占地したときに行われた地鎮である可能性」(文献8)も考えられるが、報告書でもふれて



第6図 下神遺跡 竪穴住居跡 SB126 と土坑 SK490 の位置関係と銭貨出土状況 (文献103より)



第7図 恒川遺跡群田中・倉垣外地籍44号住居跡和同開珎銀銭出土状況 (文献103より)

いるように、「上屋構造を考えると SB126 の一部とみなすことができ　－中略－　一番安定した北壁のすぐ脇に埋納された」（文献 8）との所見や、「SB126 の建築時における地鎮のための埋納遺物と考えたい」（文献 8）とする所見、さらに恒川遺跡群 2 号竪穴住居跡に関わる小林氏の報告による「カマド右の穴底部に焼土・灰の下から出土した」（文献 4）とする出土状況を考えあわせると、栄原氏（文献 68）の言う上屋構造のみへの行為だけとは言い切れないことを過去に述べた（文献 71）。

下神遺跡や恒川遺跡群での調査例は、地方での皇朝十二銭と集落、皇朝十二銭と竪穴住居の関係を考える上で、今後課題を与えた良好な資料と言える。

それでは次に榎垣外遺跡や乞食塚古墳のような墳墓からの出土資料について見てみたい。

信濃では榎垣外遺跡のように蔵骨器内に皇朝十二銭を埋納する事例はあまり多くない。しかし神坂峠西側の美濃国では、不破郡垂井町宮代の四ツ辻古墳内の蔵骨器から和同開珎が 5 枚出土（文献 72・73）、不破郡垂井町宮代字市の傾斜地にて発見された灰色素焼の二個体の蔵骨器から和同開珎が 5 枚ずつ 10 枚出土（文献 74）、不破郡垂井町府中字大石の蔵骨器内から和同開珎銀銭が 2 枚出土（文献 72）、大垣市青墓町（不破郡）では旧国分寺跡南隣古墳が破壊された折に二個体の蔵骨器からそれぞれ和同開珎が 5 枚ずつ 10 枚の出土が確認されている（文献 72）。

美濃国における蔵骨器からの出土については、古墳に埋納された蔵骨器を含め、その埋納方法などから、都での埋納形態に類似していることがうかがえる。

美濃国の出土傾向としては、和同開珎はいずれも不破郡内の出土であり、四ツ辻古墳は不破駅家、垂井町府中字大石の蔵骨器は美濃国府、青墓町の古墳から出土した二個体の蔵骨器は美濃国分寺、不和関跡は不破関の出土であり、いずれも不破郡内の奈良時代の主要な施設からの出土である（文献 75）。

また福岡県汐井掛墳墓群 5 号古墳のように（文献 76）、皇朝十二銭を並べ置き、その上に蔵骨器が置かれるような事例もみられるが、長野県内では確認されていない。

また乞食塚古墳のように横穴式石室への副葬例は、群馬県勢多郡宮城村の白山古墳や（文献 77）、山口県萩市の積石塚古墳（墳墓）群として著名な見島ジーコンボ古墳群 56 号古墳などに見られる（文献 78）。

これらについて栄原氏は、「死者のあの世における安全と平穏を保証する呪力や、死者の眠る土地を鎮める呪力をもつと信じられ、一定の祭祀・儀礼行為とともに副葬されたとみられる」としている（文献 68）。

墳墓における皇朝十二銭の性格については、ある意味では古墳時代における珠文鏡や重圈文鏡など小型倣製鏡の性格に類似していたと考えられる（文献 79）。

以上、竪穴住居や墳墓での古代銭貨の性格をみてきたが、このような古代銭貨の流通貨幣以外の性格をさらに裏付けるものとして注目したいのが、平成 19（2007）年に藤原宮大極殿院南面西回廊で発見された「富本銭」の性格である。この「富本銭」は平瓶の口縁部に 9 枚が納められ、内部には水晶の原石 9 点が納められていた。この「富本銭」は飛鳥

池遺跡で鑄造された「富本錢」とは文字や七曜文の表現が異なり、藤原京内の鑄錢司により鑄造された「富本錢」の可能性が指摘され、地鎮行為に用いられたと考えられている（文献 80）。藤原京期からすでに錢が厭勝錢として用いられていたことを考えれば、我国で鑄造貨幣を使用するにあたり、当初から流通貨幣に加え、厭勝錢としての性格をそなえ持っていたことが理解できる。

また奈良時代の代表的な事例として、寛政 6（1794）年に、大和国西大寺西塔跡の土中約 2.1 m の所より「開基勝寶」・「萬年通寶」・「神功開寶」が発見されたり（文献 81・82）、明治 9（1876）年 3 月には、大和国旧法華寺跡の金堂跡から鍔金・鍔銀・水晶の念珠 43 個とともに「和同開珎」・「萬年通寶」・「神功開寶」、そして唐錢の「開元通寶」が掘り出されている（文献 81・83）。

これらの例は宮都や伽藍造営時の地鎮を意図したものであり、これらの事例からも鑄造貨幣が当初より流通貨幣以外に重要な性格をおびていた事が理解できよう。

## 5 古代錢貨の分布が意味すること

長野県内の出土分布については、第 1 図や第 2 表に示したが、これまでも直井氏（文献 10）が指摘しているように、「和同開珎」が千曲川流域に多く、それ以降の皇朝十二錢は松本盆地に多いことがわかる。さらにこの指摘に付け加えるならば、東信の佐久地域では「和同開珎」から「承和昌寶」までの前半 6 錢までの錢貨が多く出土し、北信の長野市域では「富壽神寶」以降のものがみられることがわかる。

千曲市から上田市域にまず注目してみたい。

平川南氏他（文献 84）が屋代遺跡群出土木簡の研究の中で、千曲市を中心とする埴科郡屋代地域の初期国府の存在を指摘したことから、その後これまで考えられていた上田市域を中心とする小県郡に国府が置かれ、さらにその後松本市域を中心とする筑摩郡に国府が置かれたと考えられている。屋代木簡の研究や、これまでの国府所在地の研究を整理すると、8 世紀前半に埴科郡屋代地域→8 世紀中頃から 9 世紀頃に小県郡（上田市内）→9 世紀代以降に筑摩郡（松本市内）と国府所在地の推移が考えられる。これに皇朝十二錢の出土分布を考えあわせると、屋代地域や上田市内には「和同開珎」が集中し、少なくとも「萬年通寶」以降の錢貨がほとんどみられないことから、8 世紀前半から 8 世紀中頃までの限った時期に都との往来関係が活発であったことがうかがえる。

松本市内には「萬年通寶」以降、特に「富壽神寶」までの錢貨が集中することがわかる。8 世紀中頃から 9 世紀中頃までの時期に都との往来関係が活発であったことがうかがえる。

国府所在地の推移と皇朝十二錢の出土分布の推移が同じ経過をたどることが単なる偶然でなければ、地方において、これら皇朝十二錢を持ち得た人々の性格を考え合わせた時、その背景には、都から国府への役人の往来、あるいは都と国府とを介する人々の往来が考えられ、国府所在地を考える上で、一つの重要な考古学資料となりうるものと考えられる。

それでは佐久地域での出土状況は何を示すものであろうか。

佐久地域については、現在の小諸市東端、御代田町西端、佐久市北端が接する地域に古代の遺跡が集中し、多くの遺構や遺物が発見されるなど、信濃の古代史解明に重要な地域である。また東国へ向かうための要所として重要な地域であったことは言うまでもなく、筆者が指摘（文献 85・86）のように 7 世紀代から畿内暗文土器等が県内では多く発見される地域であることから、律令国家形成時期の早い段階から飛鳥諸宮以降の宮都での生活や文化を知り得た人々の往来が多かった地域であったと考えられる。

しかし古代における文献史料上、空白な部分が多い地域であり、古代史上不明なことが多い地域でもある。

佐久地域では佐久市聖原遺跡（文献 32）をはじめ「和同開珎」から「富壽神寶」までの銭貨が非常に多く出土している。上記 2 市 1 町が接する地域に佐久郡衙が所在していた可能性が高いと考えられ、また都と東国を結ぶ玄関口として長い期間重要な役割を担っていたことがうかがえる。千曲市屋代地域周辺～上田市信濃国分寺跡周辺～佐久地域 2 市 1 町が接する地域までの出土資料を検討することにより、東山道の果たした役割を考えた上での東山道ルートの推定に役立つものと考えられる。

長野市域（更級郡・埴科郡北域）はどうであろうか。御所遺跡の「富壽神寶」（文献 15）や篠ノ井遺跡群の「承和昌寶」（文献 16）の出土は、麻積駅～（八幡遺跡群＝更級郡衙推定地）～（篠ノ井遺跡群）～（御所遺跡）～日理駅～多古駅～越国への支道としての役割が重要となった時期を示し、また松原遺跡（文献 18）の「貞観永寶」・「延喜通寶」や榎田遺跡（文献 17）の「饒益神寶」・「長年大寶」の出土は、9 世紀以降千曲川右岸へ渡った東山道からの松原遺跡や榎田遺跡に所在した埴科郡や高井郡のムラが、都との往来関係を強めたことをうかがわせ、これに伴う伝路の整備が進んだことが出土銭貨から推察できる。このように更級郡から水内郡、埴科郡から高井郡といったルートが「富壽神寶」鑄造以降に新興地域として、都との新たな関係が生まれた地域として理解できそうである。

さらに県内全体での出土分布を考えるならば、筆者が指摘したように、「出土銭の多くは和銅元（708）年の「和同開珎」・天平宝字 4（760）年の「萬年通寶」・天平神護元（765）年の「神功開寶」と奈良時代の貨幣に集中し、9 世紀以降のものについては極端な減少傾向を示す。このことは国家レベルでの貨幣経済を確立・浸透させることに積極的であった時代と、9 世紀以降の、特に地方における貨幣経済の確立・浸透の挫折となる時代を象徴する現象」としても注目すべきことであろう（文献 71）。

## 6 下伊那郡出土の「富本銭」と「和同開珎（銀銭）」について

武陵地 1 号墳横穴式石室前庭部や座光寺地域出土の「富本銭」と恒川遺跡群 44 号堅穴住居跡の床面出土の「和同開珎（銀銭）」がどのような資料であるかを確認したい。

現時点で全国の「富本銭」出土遺跡は、奈良県の藤原京跡を中心に 11 遺跡の出土や発見であり、下伊那郡高森町武陵地 1 号墳出土「富本銭」や飯田市座光寺地域発見の「富本銭」はその内の 2 ヶ所の 2 枚となる（文献 80）。また「和同開珎（銀銭）」については、

東日本では秋田県の出羽国秋田城跡の遺構外から1枚が出土し（文献80・87・88）、千葉県我孫子市の下総国相馬郡郡家正倉推定地と考えられている建物跡から、塹のようなもので半裁された状態で1枚が出土している（文献80・89）。また千葉県香取市の稻生大神から、昭和11（1936）年の「稻生大神社宝台帳」の記録によれば賽銭の中から1枚が発見されていることから（文献80・90）、恒川遺跡群出土「和同開珎（銀銭）」を含め現在3遺跡他の4枚が確認されている（文献80）。

上記のように、全国的にも非常に限られた出土状況を示している「富本銭」と「和同開珎（銀銭）」が、下伊那郡において出土遺構が異なるものの非常に近接した地域に集中して出土していることの歴史的意味は大きい。

このような資料であることをふまえ、下伊那郡出土の「富本銭」と「和同開珎（銀銭）」についてその意味を考えてみたい。

「和同開珎」の発行以前には、主として額稻や布が貨幣同様に広く用いられていた。また遅くても天武朝期には地金の銀や無文銀銭が鑄造貨幣的な存在であったようである。まずこれら鑄造貨幣出現以前の様子を弥永貞三氏（文献91）の論文や栄原永遠男氏（文献92）の論文を参考に簡単にふれてみることにする。

栄原氏（文献97）によると、「社会に広く貨幣として機能していた額稻や布は、材質や品質、価格の不安定性、また計量などの諸側面で、価値体系の基軸に位置するうえで、きわめて重大な弱点をもっていた」としている。そしてこの弱点を克服するためには、金属が重要な位置をしめ、「金属によってはじめて定量的な価値体系が安定的に成立しうる条件が生じるのであり、貨幣経済が発展するための重大な要因の一つを満たすことができるのである」としている。

それではいつ頃から金属が貨幣的な存在として用いられたのであろうか。

弥永氏（文91）や栄原氏（文献92）は、史料②（文献93）と史料③（文献93）という二つの史料を関連させることによって、銀銭の流通は禁止するが、地金の銀の使用はさまたげないと理解し、地金の銀が少なくとも天武朝前後や古代社会において、価値体系の基軸となっていたことを明らかにしている。

それでは古代における価値体系が地金の銀を基軸としていたものを、どのように富本銭や十二種類の銅銭へと移行させたのであろうか。

先ほどの史料②（文献93）に示されているように、天武朝期には銀銭は用いず、銅銭を使用することとし、また史料⑤（文献94）にも銀銭をやめ、銅銭を使用することから、この後、律令国家の基軸となる流通貨幣は一貫して銅銭と方向づけされていたことがわかる。その結果藤原京造営に伴い必要とされた貨幣として「富本銭」が鑄造されたことは飛鳥池遺跡での調査・研究で明らかにしている（文献80）。

また「和同開珎」については、栄原氏は、史料④（文献94）から、和同銀銭も和同銅銭も品位が低かったにもかかわらず、「和同開珎」への私鑄銭禁止は和同銀銭だけであったことから、その当時、主に流通していたのは和同銀銭であったと推定している。



また史料⑤（文献94）から、律令国家は和同銀錢を廃止し、和同銅錢の流通促進に力を入れはじめたことを示すものとしている（文献95）。

さらに史料⑥（文献96）から、和銅2（709）年当時、よく使用されていたのは和同銀錢ではなかったかと推定している。

以上、史料④（文献94）・⑤（文献94）・⑥（文献96）から、「和同開珎」鑄造当初は、和同銀錢が主に流通していたであろうことを明らかにしている（文献95）。

しかし、先ほどの史料②（文献93）や史料⑤（文献94）から律令国家の基軸となる流通貨幣は一貫して銅錢と方向づけられていたこ

とは先に示したが、それではどうして銀錢をやめ、一貫して銅錢にしたのであろうか。その大きな理由は、その原材料となる銀の不足と、7世紀から始まる長門国での銅生産以降、武蔵国（和銅）や西日本を中心に分布する銅山の発見に裏付けられた（文献98）銅の豊富さからの安定性という事情が大きかったと考えられる。

それでは和同銀錢、和同銅錢が併用されていた頃の換算はどのようなものであろうか。

史料⑦（文献99）によれば、和同銀錢1文を銅錢25文に、銀1両を銅錢100文に換算使用するというものであった。

しかしこの記事には、律令政府が示した政策と矛盾する内容がみられる。先にも史料⑤（文献94）で示したが、遅くとも和銅2（709）年には銀錢を廃止していたにもかかわらず、それから10年が経過してもいまだに銀錢-銅錢、地金の銀-銅錢の換算が示されているのである。いかに当時の都や畿内を中心とする貴族や庶民にとって、地金の銀や銀錢への価値認識が高く、律令国家の法的禁止とは裏腹であったかが理解できよう。また、律令国家が銅錢への移行にどれほど苦労していたかが察せられる。

このようなことから、鑄造貨幣の基軸を銅錢と考えながらも、銅錢への移行を円滑に進

#### 史料③

詔曰、用銀莫止、（『日本書紀』天武十二年四月乙亥〔十八日〕条）

#### 史料②

詔曰、自今以後、必要銅錢、莫用銀錢、（『日本書紀』天武十二年四月壬申〔十五日〕条）

#### 史料①

丁丑、勅、錢之為用、行之已久。公私要便、莫甚於斯。頃者、私鑄稍多、偽濫既半。頓將禁斷、恐有騷擾。宜造新樣、與旧並行。庶使無損於民、有益於國。其新錢文曰「萬年通宝」。以一当旧錢之十。銀錢文曰「大平元宝」。以一当新錢之十。金錢文曰「開基勝宝」。以一当銀錢之十。（『統日本紀』天平宝字四年三月丁丑〔十六日〕条）

#### 史料⑦

令天下百姓以銀錢一当銅錢廿五、以銀一兩当二百錢、行用之。（『統日本紀』養老五年正月丙子〔二十九日〕条）

#### 史料⑥

和銅元年。始用銀錢。三年始用銅錢。（『令集解』第四職員令二ノ三大藏省）

#### 史料⑤

廢銀錢、一行銅錢。（『統日本紀』和銅二年八月乙酉〔二日〕条）

#### 史料④

壬午、詔、國家為政、兼濟居先。去虛就實、其理然矣。向者頒銀錢以代前銀。又銅錢並行。比奸盜逐利、私作濫鑄、紛亂公錢。自今以後、私錢銀錢者、其身沒官。財入告人。行濫逐利者、加杖二百。加役當徒。知情不告者、各與同罪。（『統日本紀』和銅二年正月壬午〔二十五日〕条）

#### 古代錢貨関連史料（文献71より）

めるために和銅銀錢の鑄造が必要であったことが理解されよう。

「和同開珎」鑄造以前には、地金の銀の価格が高く、社会の中でその価値が根強く残っていたことから、地金の銀→銅錢から銀錢→銅錢という円滑な移行を行うために、和同銀錢は重要な役割をはたしたのである。

栄原氏は（文献 95）、「和同開珎」（銀錢）・（銅錢）について、史料①（文献 100）にみられる、「萬年通寶」（銅錢）・「大平元寶」（銀錢）・「開基勝寶」（金錢）との貨幣的役割を比較し、「和同開珎に銀錢と銅錢の 2 種類があったことと、天平宝字 4（760）年の開基勝寶（金錢）、大平元寶（銀錢）、萬年通寶（銅錢）の発行（『続日本紀』同年三月丁丑〔十六日〕条）とは、まったく意義をことにすることがわかる。後者の三錢は、貴金属の金銀銅を錢貨として並べただけにすぎず、その発行には、和同銀錢が果たしたような役割は、もはや課されていなかったとみるべきである」と、和同銀錢の鑄造意義を評価している。

以上、「富本錢」と「和同開珎（銀錢）」の流通貨幣としての歴史的役割をみてきたが、武陵地 1 号墳出土の「富本錢」・座光寺地域発見の「富本錢」（＝以後「下伊那富本錢」）、飯田市恒川遺跡群出土の「和同開珎（銀錢）」（＝以後「恒川銀錢」）は、どのような性格のものであったのであろうか。

奈良時代前半、「下伊那富本錢」・「恒川銀錢」もこれまでみてきたように、都を中心に鑄造貨幣としての役割を大いに果たしたそれぞれ 1 枚であったにちがいない。

この「恒川銀錢」は、伊那郡内の公民が仕丁あるいは衛士として都で仕えた際に養錢として入手しえたか、あるいは税を都へ運んだ際に入手しえたものと考えられるが、「和同開珎銀錢」の価値レベルや、恒川遺跡群の性格を考慮すると、都から役人が信濃国伊那郡（伊那郡衙）へ派遣された際に持参した可能性が高いと考えられる。

都で流通していた貨幣も、地方では律令国家の政策とは裏腹に、流通貨幣的価値はほとんどなかったものと考えられ、また都から伊那郡へ派遣された役人は、都での生活を経験していたことによって、寺院や家屋等の建物を造る際の地鎮具、あるいは墳墓への埋納品としての使用を知りえたことから、「下伊那富本錢」・「恒川銀錢」はもはや流通貨幣としての価値は失っていたものと考えられ、その性格は本論「3 長野県内出土古代錢貨の性格」で示したものであったといえよう。

## 7 中世備蓄錢への混在が意味すること

最後に中野市田麦・江本庄一郎宅、同西条・岩船遺跡群、塩尻市小沼田遺跡群、同吉田若宮遺跡のような中世備蓄錢内での混在は何を意味しているのであろうか。

「富本錢」、「和同開珎」に始まった鑄造貨幣は年月が経過し、新しい錢文の鑄造を繰り返すたびに旧錢は流通貨幣としての価値を失っていく。

それを示す資料として、史料①（文献 100）や以降の新錢鑄造時の史料にみられるように、旧錢の 10 倍もの価値を与えて新旧の入れ替えをはかったのである。

それではなぜそれほどに 12 種類もの新旧錢の入れ替えを行ったのであろうか。

史料①（文献100）にみられるように、「萬年通寶」を新銭として造る際に、誇張はあろうが、私鑄銭が流通貨幣の半分に達していたようである。

しかし、この対策も政府銭と私鑄銭の区別が難しいこと、旧銭を停止し新銭に旧銭の10倍の法定価値を与えて、下落した銭貨価値を高い水準に戻そうとしても、結果的には新銭も再び私鑄銭が出まわることとなり、このくり返しが新銭の品位低下をまねくこととなった。

奈良国立文化財研究所の研究成果（文献101）（第3表）が示すように皇朝十二銭は徐々に銭径が小形化し、重量の軽量化や原材料の粗悪化をたどることとなる。

また、甲賀宜政（文献102）の成分分析によると、「和同開珎」・「萬年通寶」・「神功開寶」などの成分は、銅が約80%近くで、鉛が約5%前後、「隆平永寶」・「長年大寶」などは、銅約70%、鉛約10～20%、「貞観永寶」・「延喜通寶」・「乾元大寶」などは、銅約40～50%、鉛約40～50%となり、見た目も成分的にも品位低下は一目瞭然となる。

このような状況の中、特に地方では旧銭になればなるほど、より本来の1枚単位としての流通貨幣の価値を失い、先にも述べたような呪力を持つものとしてその価値を見出され所有されたものと考えられる。

そして平安時代後期の11世紀以降その価値をも失い再び米や絹を中心とする経済構造となり、やがて平安時代末・中世を迎えて、多くの渡来銭とともに用いられる結果となったものと考えられる。

それにしても、長野県内における中野市や塩尻市に中世備蓄銭（埋納銭）が集中することとは興味深い。

## 8 まとめにかえて

長野県内出土の古代銭貨は「富本銭」や「和同開珎（銀銭）」をはじめ、出土状況や出土数において東国では豊富な出土内容となっている。

これらをふまえ、平成9（1997）年の論考（文献71）以来これまでの県内出土資料から、竪穴住居跡・墳墓・土坑・中世備蓄銭から発見された古代銭貨の性格をある程度確認しえたものとする。

長野県内の古代銭貨出土状況は、発掘調査の成果としてすべてではないが竪穴住居跡床面からの出土、建物や土地に関わる祭祀行為に用いられたと考えられる出土、古墳石室内への追葬品としての出土等を考えれば、埋土中や遺構外から出土した銭貨についても何らかの意図のもとに用いられたが、時の経過の中で、本来の状況とは異なった発見や出土となった可能性が高いと考えられることはすでに述べた。長野県（信濃国）内のみならず地

第3表 皇朝十二銭計測値比較表

（文献103より）

銭名	銭径 (mm) 平均値	重量 (g) 平均値
和同開珎	24.53	2.27
萬年通寶	26.10	3.94
神功開寶	25.15	3.14
承和昌寶	20.74	1.51
饒益神寶	18.95	1.51
寛平大寶	19.13	2.12

方での錢貨は流通貨幣ではなく厭勝錢であったがゆえに、中世備蓄錢以外の古代錢貨は落とし物ではなく、明確な意図のもとに、その地に残されたものであると考えられる。

また、長野県（信濃国）内の下伊那地域といった限られた地域での「富本錢」や「和同開珎（銀錢）」の出土、さらには下伊那地域や佐久地域での飛鳥諸京や藤原京で用いられた畿内暗文土器などの出土傾向（文献 85・86）を考えたとき、東国での律令体制整備に関わる重要な地域を担っていたことがうかがえる。

さらには錢貨他の宮都との往来を考えさせられる資料の出土状況や分布を検証することにより、東山道や支道・伝路の所在やその役割を明らかにすることも可能ではないかと考える。

以上当論を進めるにあたり、考古学的資料の検証については長野県内の研究者や松村恵司氏による論考を参考にし、また文献史料からの古代錢貨への論究については榮原永遠男氏の研究に拠るところが大きい。

今後良好な資料の報告が増すことにより、さらにその性格が明らかにされ则认为る。

#### 参考文献

- 1 市村咸人 他『5 武陵地古墳群 秋葉塔の塚（武陵地1号）』『下伊那史』第二巻 原始時代上下伊那誌編纂會 1955 年
- 2 松島高根『武陵地1号古墳出土の富本錢』『出土錢貨』第12号 出土錢貨研究会 1999 年
- 3 小林正春『飯田市出土の富本錢と和同開珎銀錢』『出土錢貨』第12号 出土錢貨研究会 1999 年
- 4 小林正春『恒川遺跡出土の和同開珎銀錢』『伊那』1978. 3月 伊那史学会 1978 年
- 5 佐々木嘉和『銀の和同開珎』『伊那』1978. 3月 伊那史学会 1978 年
- 6 座光寺バイパス遺跡調査団『飯田市座光寺恒川遺跡群発掘調査概報』『信濃』Ⅲ－31－4 信濃史学会 1979 年
- 7 桐原 健『奈良・平安時代の道具』『長野県史 考古資料編 全一卷（4） 遺構・遺物』長野県史刊行会 1988 年  
※一の釜遺跡についての詳細は『下諏訪町史』においても不明。
- 8 石上周蔵『第4章第2節 3 金属製品（2）銅製品・錢貨 イ錢貨』『下神遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター 他 1990 年
- 9 西山克己『第4章成果と課題 第6節金属製品について 2 皇朝十二錢』『篠ノ井遺跡群』（財）長野県埋蔵文化財センター 他 1997 年
- 10 直井雅尚『長野県の状況』『遺物からみた律令国家と蝦夷』東日本埋蔵文化財研究会北海道大会準備委員会 1997 年
- 11 小松 学『松本平出土の皇朝十二錢』『平出博物館紀要』第14集 塩尻市立博物館 1997 年
- 12 日比野丈夫『附録 長丘村出土古錢調査』『下高井』長野県教育委員会 他 1976 年
- 13 藤沢高広『長野県中野市西条・岩船遺跡群出土の備蓄錢』『出土錢貨』第8号 出土錢貨研究会 1997 年
- 14 矢口忠良 他『屋地遺跡』Ⅱ 長野県教育委員会 1990 年
- 15 青木和明『御所遺跡』『長野市埋蔵文化財センター所報』No.6 1995 年 長野市埋蔵文化財センター
- 16 西山克己 他『篠ノ井遺跡群』『（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』22 （財）長野県埋蔵文化財センター 他 1997 年

- 17 広田和穂 他「榎田遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』37 長野県埋蔵文化財センター 他 1999 年
- 18 上田典男 他「松原遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』53 長野県埋蔵文化財センター 他 2000 年
- 19 岩崎卓也「城の内遺跡・灰塚遺跡・生仁遺跡・馬口遺跡」『長野県史 考古資料編 全一卷（2）主要遺跡（北・東信）』長野県史刊行会 1982 年
- 20 佐藤信之「1 諏訪南沖遺跡 発掘調査」『平成2年度更埴市埋蔵文化財調査報告書』更埴市教育委員会 1991 年
- 21 鳥羽英継 他「更埴条里遺跡」『（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』50 長野県埋蔵文化財センター 他 2000 年
- 22 川崎 保 他「国分寺周辺遺跡群」『（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』31 （財）長野県埋蔵文化財センター 他 1998 年
- 23 川上 元「信濃国分寺跡」『長野県史 考古資料編 全一卷（2）主要遺跡（北・東信）』長野県史刊行会 1982 年
- 24 尾見智志「殿田遺跡」『上田市文化財調査報告書』第27集 上田市教育委員会 1986 年
- 25 若林 卓「宮平遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』41 長野県埋蔵文化財センター 他 1999 年
- 26 藤澤直枝「社寺古蹟及人物誌 第二篇第一章 第三節発掘古銭」『上田市史』下 上田市 1940 年
- 27 林 幸彦 他『前田遺跡』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 佐久市教育委員会 1989 年
- 28 佐久市教育委員会中道遺跡調査団『佐久市前山中道遺跡緊急発掘調査概報』1972 年
- 29 寺島俊郎 他「栗毛坂遺跡群」『（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』30 （財）長野県埋蔵文化財センター 他 1991 年
- 30 羽毛田卓也『長土呂遺跡群 下聖端遺跡』Ⅰ・Ⅱ『佐久市埋蔵文化財調査報告書』第9集 佐久市教育委員会 他 1992 年
- 31 羽毛田卓也 他『高師町遺跡』Ⅱ 佐久市教育委員会 他 1997 年
- 32 小林眞寿 他『聖原第1分冊から第5分冊 - 佐久市埋蔵文化財調査報告書第103・107・115・122・126集-』佐久市教育委員会 他 2002 から 2005 年
- 33 藤原直人 他「芝宮遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』39 長野県埋蔵文化財センター 他 1999 年
- 34 佐久市教育委員会『うえのじょう 佐久市岩村田上ノ城遺跡緊急発掘調査概報』1974 年
- 35 小林眞寿「円正防遺跡Ⅵ調査報告書-その1- -その2-」『佐久市文化財 年報15 平成17年度・年報16 平成18年度』佐久市教育委員会 2007 年から 2008 年
- 36 出澤 力『深堀遺跡』Ⅳ 佐久市教育委員会 他 2002 年
- 37 富沢一明『反田遺跡』佐久市教育委員会 他 2008 年
- 38 森泉かよ子『上久保田向』Ⅲ 佐久市教育委員会 他 1994 年
- 39 藤原直人 他「中原遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』39 長野県埋蔵文化財センター 他 1999 年
- 40 星野保彦 他『大塚原（第2次）』小諸市教育委員会 1994 年
- 41 花岡 弘「竹花遺跡」『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』小諸市教育委員会 1994 年
- 42 桜井秀雄 他「郷土遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』52 （財）長野県埋蔵文化財センター 他 2000 年
- 43 堤 隆『十二遺跡』御代田町教育委員会 1988 年
- 44 羽毛田伸博『野火付遺跡』御代田町教育委員会 1985 年
- 45 堤 隆『根岸遺跡』御代田町教育委員会 1989 年

- 46 川崎 保「桜畑遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』40 長野県埋蔵文化財センター 他 1999 年
- 47 川崎 保「中田遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』40 長野県埋蔵文化財センター 他 1999 年
- 48 広田和穂「三角原遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』76 長野県埋蔵文化財センター 他 2005 年
- 49 倉科明正 他「奈良・平安時代 宮本出土の古銭」『明科町史』上巻 明科町史刊行会 1984 年
- 50 石上周蔵 他「下神遺跡」(財)長野県埋蔵文化財センター 他 1990 年
- 51 荒木 龍 他『県町遺跡』X I 松本市教育委員会 1997 年
- 52 竹原 学 他『三間沢川左岸遺跡』I 松本市教育委員会 1988 年
- 53 松本市教育委員会『小池遺跡』1991 年
- 54 太田圭郁 他「一ツ家遺跡」『松本市文化財調査報告』No.126 松本市教育委員会 1997 年
- 55 竹原 学 他「川西開田遺跡 I・II」『松本市文化財調査報告』No.130 松本市教育委員会 1998 年
- 56 小松 望 他「吉田川西遺跡」(財)長野県埋蔵文化財センター 他 1989 年
- 57 小林康男「塩尻市宗賀小沼田出土の埋蔵銭」『平出博物館紀要』第 14 集 塩尻市立博物館 1997 年
- 58 大沼田三好 他「塩尻市広丘吉田若宮出土の埋蔵銭」『平出遺跡考古博物館(歴史民俗資料館)紀要』2 塩尻市立博物館 1985 年
- 59 東京古泉会『東京古泉会報告』3 1895 年
- 60 戸沢充則「金山東遺跡」『岡谷市史』上巻 岡谷市 1973 年  
※現在 金山東遺跡は榎垣外遺跡の一地籍としてとらえられている。
- 61 藤森栄一「隆平永宝を伴出せる蔵骨器」『考古学』1-2 東京考古学会 1930 年
- 62 山田武文 他「榎垣外官衙遺跡」岡谷市教育委員会 2008 年
- 63 守矢昌文 他「乞食塚古墳」『茅野市史』上巻 茅野市 1986 年
- 64 伊那市教育委員会 他『下手良中原・大原・松太郎窪遺跡』2001 年
- 65 宮崎 糺「信濃宮川村の一古墳-和同開珎・神功開寶等出土-」『考古学雑誌』26-1 考古学会 1936 年
- 66 小平和夫「律令社会の崩壊-平安時代-」『下伊那誌』第 1 巻 下伊那誌編纂会 1991 年
- 67 山下誠一「古代の役所-律令時代のイナとシナノ-」飯田市上郷考古博物館 2010 年
- 68 栄原永遠男「第 7 章日本古代銭貨と呪力」『日本古代銭貨流通史の研究』塙書房 1993 年
- 69 町田 章 他『平城京左京三条二坊 奈良市庁舎建設地発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1975 年
- 70 奈良国立文化財研究所(松村恵司)編『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』奈良県教育委員会 1983 年
- 71 西山克己「信濃の皇朝十二銭」『長野県埋蔵文化財センター紀要』6 (財)長野県埋蔵文化財センター 1997 年
- 72 岐阜県教育委員会『美濃不和関』I 第 1 次・第 2 次発掘調査概報 1975 年
- 73 矢崎正治『不和郡史』上巻 不破郡教育会 1925 年
- 74 考古学会「和同開珎の発掘」『考古学雑誌』第 2 巻第 12 号 1912 年
- 75 西山克己「中部地域(山梨県・岐阜県・長野県)の和同開珎」『和同開珎をめぐる諸問題』(一) 松村恵司・栄原永遠男 編 2007 年
- 76 上野精志「VI 汐井掛墳墓の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XX 福岡県教育委員会 1978 年
- 77 尾崎喜左雄「群馬県勢多郡白山古墳」『日本考古学年報』7 日本考古学協会 1958 年

- 78 斉藤 忠 他『見島古墳群－山口県萩市見島文化財総合調査報告書別刷』 山口県教育委員会 他 1965 年
- 79 西山克己「第 4 章成果と課題 第 6 節金属製品について 1 青銅鏡」『篠ノ井遺跡群』(財)長野県埋蔵文化財センター 他 1997 年
- 80 松村恵司「出土銭貨」『日本の美術』512 至文堂 2009 年
- 81 藤井一二「第 10 章埋銭の風習と祈り」『和同開珎－古代貨幣事情をさぐる』 中央公論社 1991 年
- 82 穂井田忠友「中外銭史」『日本経済叢書』29 日本経済叢書刊行会 1916 年
- 83 柏木貨一郎「上代板金考」『学芸志林』第 5 巻 東京大学出版会 1879 年
- 84 平川 南 他「第 5 章考察」『長野県屋代遺跡群出土木簡』(財)長野県埋蔵文化財センター 他 1996 年
- 85 西山克己 他「信州の 6 世紀・7 世紀の土器様相－現時点での概略として」『東国土器研究』第 4 号 東国土器研究会 1995 年
- 86 西山克己「信濃における 7・8 世紀の暗文土器－恒川遺跡群へ運ばれて来た都の食器－」『伊那』2000. 4 月号 伊那史学会 2000 年
- 87 西谷 隆「秋田城跡出土の「和同開珎」について」『出土銭貨』第 2 号 出土銭貨研究会 1994 年
- 88 秋田市教育委員会『平成 6 年度秋田城跡調査概報』1995 年
- 89 (財)千葉県文化財センター編『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』1980 年
- 90 平野 功「和同開珎銀銭の一例」『史館』27 号 史館同人 1996 年
- 91 弥永貞三「奈良時代の銀と銀銭について」『日本古代社会経済史研究』 岩波書店 1980 年
- 92 栄原永遠男『日本古代銭貨流通史の研究』 塙書房 1993 年
- 93 坂本太郎 他「日本書紀」卷第二十九『日本書紀』下 岩波書店 1965 年
- 94 青木和夫 他「続日本紀」卷第四『新日本古典文学大系』12 岩波書店 1989 年
- 95 栄原永遠男「第 1 章和同開珎の誕生 4 和同開珎銀銅銭」『日本古代銭貨流通史の研究』 塙書房 1993 年
- 96 黒坂勝美 他「令集解」第一『新訂増補国史大系』 吉川弘文館 1992 年
- 97 栄原永遠男「第 1 章和同開珎の誕生 3 地金の銀」『日本古代銭貨流通史の研究』 塙書房 1993 年
- 98 池田善文「長門の産銅と採掘・製錬技術」『和同開珎をめぐる諸問題』(一) 松村恵司・栄原永遠男 編 2007 年
- 99 青木和夫 他「続日本紀」卷第八『新日本古典文学大系』13 岩波書店 1990 年
- 100 青木和夫 他「続日本紀」卷第二十二『新日本古典文学大系』14 岩波書店 1992 年
- 101 佐藤興治 他「別表 9 銭貨計測値一覧表」『平城京発掘調査報告』VI 奈良国立文化財研究所 1975 年
- 102 甲賀宜政「古銭分析表」『考古学雑誌』第 9 卷第 7 号 考古学会 1919 年  
※栄原永遠男「和同開珎の誕生」『週刊朝日百科 日本歴史』51 朝日新聞社 1987 年 も参考にした。
- 103 西山克己「信濃出土の古代銭貨の用いられ方とそれが意味すること」『長野県立歴史館 研究紀要』第 17 号 長野県立歴史館 2011 年

# 下伊那地域の古墳群形成の推移と伊那郡衙の成立

## 1 はじめに

1999年1月20日に奈良県飛鳥池遺跡出土の「富本銭」が最古の鑄造流通貨幣であることが報道されたことにより、3月23日には長野県下伊那郡高森町の武陵地1号墳の石室からも1枚の富本銭が出土していたことが改めて公表され、さらに6月7日には飯田市座光寺地域でも以前に富本銭が発見されていたことが報じられた。

なぜ高森町武陵地1号墳の石室より富本銭が1枚出土したのか、この点について、今回の論考をまとめるにあつたての予察を簡単にまとめたが（文献1）、当論では前方後円墳を中核とする古墳群形成や甲冑・馬具などの出土遺物などから、5世紀後半から7世紀後半頃にかけての地域統合の推移や在地有力豪族達の盛衰を通して、下伊那地域の先進性と重要性について考察してみたい。

## 2 前方後円墳を中核とした5世紀後半以降の古墳群形成（第1表・第1図）

下伊那地域には現在5世紀中頃以降の帆立貝形古墳を含めた前方後円墳が30基確認されている。これらは天竜川東岸の郭1号墳を除いてすべてが天竜川西岸に分布し、立地状況などからおおよそ前方後円墳を中核とする古墳群は6群に分類可能と考えられることから、天竜川西岸の様相を中心に考察してみることとする。

6群とは、北から座光寺地域・上郷地域・松尾地域・駄科地域・桐林地域・川路地域である。

これらの古墳群形成にあたって核となるのが以下の5点である。

- ① 5世紀中頃から在地豪族達が武人的地域統括者として成長し始めるが、そのあらわれ  
が、大形円墳や帆立貝形古墳への甲冑の副葬化である。
- ② 前方後円墳が古墳群構成の中核をなすこと。
- ③ 中核となる古墳の石室は竪穴式石室から横穴式石室に移行し、横穴式石室は当初から  
有力在地豪族達の埋葬施設として採用される。
- ④ 馬の生産・管理による畿内豪族層との紐帯関係が背景となる。
- ⑤ 馬の生産・管理などの新来文化の受容に渡来人あるいは渡来系の人々の存在を想定で  
きる。

これらのことから、5世紀後半からの前方後円墳の築造や、6世紀初頭以降の前方後円墳への横穴式石室の採用は、大和政権における東国支配の拠点づくりによる結果であり、この拠点づくりには、畿内有力豪族層のみならず5世紀後半代より馬生産を中核とした畿内豪族層との紐帯関係によって力を蓄えてきた下伊那地域の在地豪族達、さらには馬生産に直接関わった渡来人・渡来系の人々によるものであることは、当地域の以後の成り立ち



第1表 下伊那地域の前方後円墳（前方後方墳・帆立貝形含む）（文献62より）

図No.	古墳名	所在	規模	石室	時期	文献	備考
1	高岡1号	飯田市座光寺	72.3m	横穴式石室	6C前	30・58・60	
2	新井原12号	飯田市座光寺	36.0m	竖穴式石室	5C中	30・58・60	帆立貝形
3	北本城	飯田市座光寺	28.0m	横穴式石室	6C初	30・58・60	
4	雲彩寺	飯田市上郷飯沼	74.5m	横穴式石室	6C前	30・58・60	
5	番神塚	飯田市上郷別府	? m	?	6C?	30・47・60	伝・消滅
6	溝口の塚	飯田市上郷別府	50.0m	竖穴式石室	5C後	5・30・60	
7	御射山獅子塚	飯田市松尾	63.0m	竖穴式石槨	6C前	30・58・60	
8	茶柄山3号	飯田市松尾	? m	横穴式石室	6C?	30・60	
9	八幡山	飯田市松尾	28.5m	横穴式石室	5C末～6C初	30・47・60	帆立貝形?
10	代田山孤塚	飯田市松尾	42.0m	横穴式石室	4C後	30・58・60	前方後方墳
11	おかん塚	飯田市松尾	41.8m	横穴式石室	6C後	30・58・60	
12	上溝天神塚	飯田市松尾	45.0m	横穴式石室	6C前	30・58・60	
13	姫塚	飯田市松尾	35.0m	横穴式石室	5C末～6C初	30・58・60	
14	羽場獅子塚	飯田市松尾	44.3m	横穴式石室	6C?	30・58・60	
15	代田1号	飯田市松尾	61.0m	横穴式石室	6C前	30・58・60	
16	水城獅子塚	飯田市松尾	50.0m	?	6C前	30・58・60	
17	塚越1号	飯田市駄科	72.7m	横穴式石室	6C後	30・58・60	
18	権現堂1号	飯田市駄科	60.0m	?	5C末～6C初	30・58・60	
19	丸山	飯田市桐林	35.0m	?	5C後	30・58・60	
20	大塚	飯田市桐林	56.0m	?	5C後	30・58・60	
21	兼清塚	飯田市桐林	63.6m	竖穴石槨?	5C中	30・58・60	
22	塚原二子塚	飯田市桐林	67.5m	?	5C後	30・58・60	
23	塚原3号	飯田市桐林	38.0m	竖穴式石槨	5C後	30・58・60	帆立貝形
24	鏡塚	飯田市桐林	33.0m	横穴石室?	5C末～6C初	30・58・60	帆立貝形
25	鎧塚	飯田市桐林	50.0m	竖穴式石槨	5C後	30・58・60	帆立貝形
26	金山二子塚	飯田市桐林	後円20m?	横穴式石室	6C前	30・58・60	
27	馬背塚	飯田市上川路	46.4m	横穴式石室	6C前	30・58・60	横穴石室2
28	御猿堂	飯田市上川路	66.4m	横穴式石室	6C前	30・58・60	
29	正清寺	飯田市上川路	約60.0m	横穴式石室	6C初	16・30・58・60	
	郭1号	喬木村阿島	38.2m	横穴式石室	6C前	30・58・60	

を考える上で非常に大きな意義があることと言える。

これらの様相を踏まえて、各古墳群の性格について、簡単に触れてみることにする。

座光寺地域の特徴は、甲冑が副葬された全長 36 m の帆立貝形古墳である新井原 12 号墳を中核とした 5 世紀後半代からの古墳群形成と（文献 2）、5 世紀末葉から 6 世紀前半頃の前方後円墳である北本城古墳に下段（腰石）に平石を立て、上段には平石を 1・2 段平積みにした横穴式石室が構築され、同様な石室が、近接しほぼ同時期の円墳である畦地 1 号墳や前方後円墳である高岡 1 号墳にも採用されることである。白石太一郎氏は、韓国全羅北道の錦江河口南岸付近の沃溝将相里屯 1 号墳やいくつかの横穴式石室に類似していることを指摘し（文献 3）、また土生田純之氏は、その系譜を大邱周辺の加耶古墳に求められる可能性を指摘した（文献 4）。このようにその系譜については意見がわかれるところだが、5 世紀後半代からの古墳群形成と期を一にして、馬の殉葬が行われるのは確かである（文献 2）。

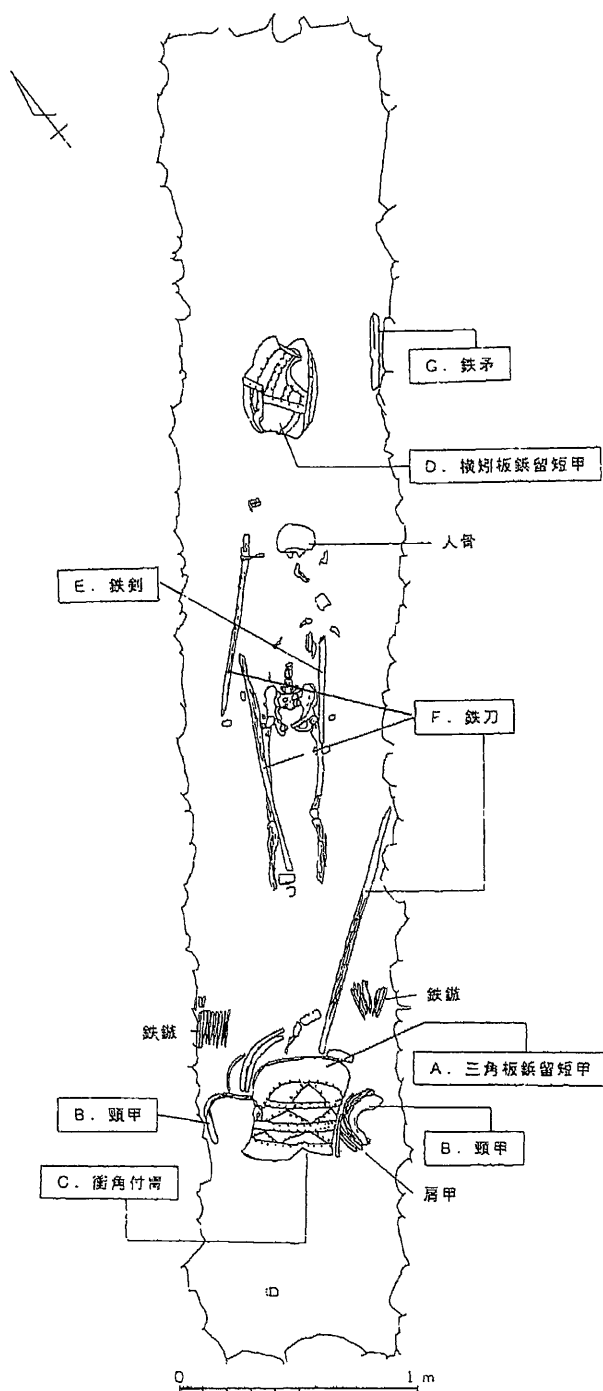


第 1 図 下伊那竜西地域の前方後円墳分布図（前方後方墳・帆立貝形含む）（地図＝国土地理院 1/25000 飯田・時又より）番号は第 1 表内古墳 A＝武陵地 1 号古墳 B＝畦地 1 号古墳（文献 62 より）

上郷地域の特徴は、5世紀後半の竪穴式石室を持つ全長約60mの溝口の塚古墳が造られ、石室内には衝角付冑や横矧板鋌留短甲・三角板鋌留短甲などが副葬されていた（文献5）（第2図）。溝口の塚古墳築造以降、前方後円墳である雲彩寺古墳や番神塚古墳が散発的に造られることとなる。また5世紀後半代から前方後円墳築造と期を一にして、宮垣外遺跡（文献6）で馬の殉葬が行われるようになる。

松尾地域の特徴は、4世紀代に前方後円墳で全長42mの代田山狐塚古墳が築造されるが、善光寺平での状況のように以後継続して前方後円墳が造られる状況とはならず、5世紀中頃に眉庇付冑が副葬されていた径29.5mの大形円墳である妙前大塚古墳が畿内勢力との関係を示す初現的古墳として築造され（文献7）、6世紀代に入り姫塚古墳や上溝天神塚古墳などの横穴式石室を持つ前方後円墳が継続的に多く造られることとなる。この地域でも5世紀後半代から妙前大塚古墳築造以降、寺所遺跡（文献8）や茶柄山古墳群（文献9）・物見塚古墳（文献10）などで馬の殉葬が行われるようになり、これを受けて、以後前方後円墳が6世紀代を通して継続的に築造され続けることとなる。前方後円墳の築造数では、南隣の竜丘地域と二分することとなる。

竜丘地域は本来は駄科地域・桐林地域それぞれの在地豪族の存在を示していたが、桐林地区が上川路地区へ拡張展開し、さらには駄科地域を吸収することによって成立する。



第2図 溝口の塚古墳竪穴式石室内の副葬品出土状況  
(文献5より)

駄科地域では、当地域の在地勢力と畿内勢力との繋がりの中で、5世紀末葉から6世紀初頭頃に長約60mの権現堂1号古墳が築造され、6世紀後半に全長72.7mの塚越1号古墳が築造される。両古墳の年代観に誤りがなければ古墳築造の継続性はみられない。

桐林地域では5世紀中頃以降、帆立貝形古墳、そして前方後円墳が築造されることとなる。5世紀中頃以降の畿内有力豪族層との関係の中で、ようやく5世紀後半になって竪穴式石室に横矧板鋌留短甲が副葬されていた全長約50mの鎧塚古墳などの帆立貝形古墳が築造され（文献11）、これらの延長線上に竪穴式石室に斜縁式二神二獣鏡・変形四神四獣鏡変形・四獣鏡・内行花文鏡他が副葬されていた全長63.6mの前方後円墳である兼清塚古墳が畿内勢力との関係を示す古墳として築造される（文献12）。以後6世紀代に入り横穴式石室を持つ前方後円墳が造られるようになる。6世紀前半以降、南隣の上川路地区に畿内の影響を受けた東濃型大形横穴式石室を持ち四仏四獣鏡が副葬されていたとされる全長66.4mの御猿堂古墳（文献13）や後円部に東濃型大形横穴式石室と前方部に畿内型大形横穴式石室それぞれ一基ずつを持つ全長46.4mの馬背塚古墳が続く（文献14）。6世紀代に入り大形の横穴式石室が前方後円墳に継続的に造られる状況は、畿内での動向に類似している。このように前方後円墳は桐林地域のみならず、川路地域を意識してか南隣の上川路地区に、松尾地域を意識してか北隣の駄科地域にも展開し、竜丘地域では5世紀後半から6世紀初頭にかけて桐林地域や駄科地域の古墳群形成期と、竜丘地域として成長する6世紀前半以降の古墳群拡張期が見られる。この結果前方後円墳の築造数では、北に隣接する松尾地域と二分することとなる。

川路地域では、5世紀後半に地域南端に位置する月の木1号墳が築造される。月の木1号墳には横矧板鋌留短甲他が木棺直葬内に副葬され（文献15）、武人的な地域在地豪族の存在を示し、この系譜の中で前方後円墳の正清寺古墳が築造されることとなる。正清寺古墳は5世紀末葉から6世紀初頭頃に集落を移動させて墓域が設定されて築造され、二重の周堀に造出しを持つ全長約60mを測る古墳である。周堀を含めると全長約90m以上の規模を有することとなる。二重の周堀も何らかの理由で、造り替えられたことが調査から判明している。以後6世紀後半まで正清寺古墳を中心に古墳祭祀が行われ、6世紀後半に至っては北に隣接する径約26mの大形円墳である閻魔王塚古墳が築造され祭祀域が拡大するものの、竜丘地域に吸収されて行く過程が想定される（文献16）。

### 3 5世紀後半以降の集落形成

東国古墳時代の大陸や朝鮮半島からの新来文化の受容の時期は、大きく2時期に分けることができる。その1つは5世紀中頃から6世紀代にかけてのことであり、その内容はカマドの構築と使用および住居構造の変化・馬の飼育と活用・須恵器生産と使用・日常使用する土器組成の変化・金銅製品の使用・横穴式石室の受容と埋葬観念の変化等があげられ、もう1つは7世紀代における律令国家誕生前夜の頃と言えよう。

ここでは5世紀中頃から6世紀代にかけての竪穴住居構造についてふれて見たい。

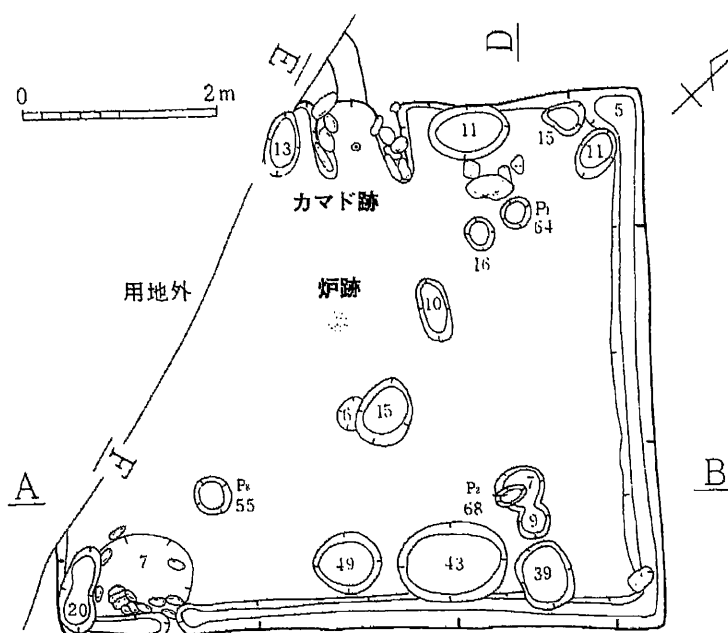
長野県内のカマドの出現については、すでに筆者が明らかにしているが（文献17・18・19）、あらためてその具体例を見てみたい。下伊那地域でカマドを早い段階で多く取り入れた遺跡として、飯田市鼎地域の切石遺跡群の中核となる天伯B遺跡（文献20）や山岸遺跡（文献21）をあげることができる。両遺跡の遺跡名は異なるものの、松川右岸沿いに細長く続く同一段丘上に位置する集落である。ここではカマドが付設された住居跡が63件（天

伯B = 30件・山岸 = 33件）確認され、このうち5世紀後半の時期と考えられる住居跡は45件ほど見られる。集落全体に早い段階でカマドが付設された特筆すべき遺跡であり、当地域における5世紀後半から6世紀前半にかけての拠点集落と考えられるが、前方後円墳を中核とする古墳群との関係については今のところ確認できていない。この他に長野県内でいち早く5世紀後半にカマドを付設した集落は長野市本村東沖遺跡である（文献22）。

下伊那地域における天伯B・山岸遺跡以外でのカマドの初現例としては、飯田市伊賀良小垣外遺跡の25号竪穴住居跡や26号竪穴住居跡（文献23）、飯田市龍江大平遺跡3号竪穴住居跡などがあげられ、龍江大平遺跡3号竪穴住居跡では2枚の床面が確認され、初めの床には炉が付設され、作り替えられた後の床にはカマドが付設されていた。炉からカマドへと移行する良好な資料となっている（文献24）（第3図）。このような炉からカマドへと移行する良好な資料は善光寺平での千曲市屋代遺跡群SB5136号竪穴住居跡でも確認され、SB5136号竪穴住居跡では同一床面に炉とカマドが併設されていた（文献25）。

このように下伊那地域や善光寺平南域の5世紀後半から6世紀前半にかけての先進文化を積極的に受け入れたいわゆる拠点集落と考えられるムラでは、須恵器TK208型式、年代的には5世紀第3四半期から第4四半期の移行期頃には確実にカマドが付設され始めている。シナノの集落全体にカマドの普及が6世紀代になってからであることを考えるなら、下伊那地域や善光寺平南域の先進性をうかがうことができよう。

カマドの付設と同様に住居内構造の変化として、間仕切り構造を持つ住居があらわれる。ここで言う間仕切り構造とは、住居床面に壁から柱穴にかけて浅い溝を掘り、その溝に間



第3図 炉からカマドへ 大平遺跡3号竪穴住居跡  
（文献24より）

仕切り材を据えたと考えられるものである。

この間仕切り遺構については、善光寺平における長野市本村東沖遺跡において多くみられる（文献22）。本村東沖遺跡では5世紀後半と考えられる住居にカマドが付設され、これらの住居跡からは地元で生産されたとも考えられる須恵器が出土し（文献26・27）、また調査された竪穴住居跡の約半数から間仕切り遺構が確認されている。下伊那地域でも点々といくつか確認されているが、その中でも特に

良好な資料として5世紀末葉頃と考えられる飯田市伊賀良殿原遺跡88号竪穴住居跡（文献28）（第4図）や飯田市桐林前の原26号竪穴住居跡（文献29）をあげることができる。このようなことから渡来系の人々やその末裔、あるいは新来文化を積極的に摂取した在地豪族層達の集落とも考えられ、このような例は善光寺平での本村東沖遺跡や下伊那の殿原遺跡や前の原遺跡などの数例以外ではほとんど確認されていない。

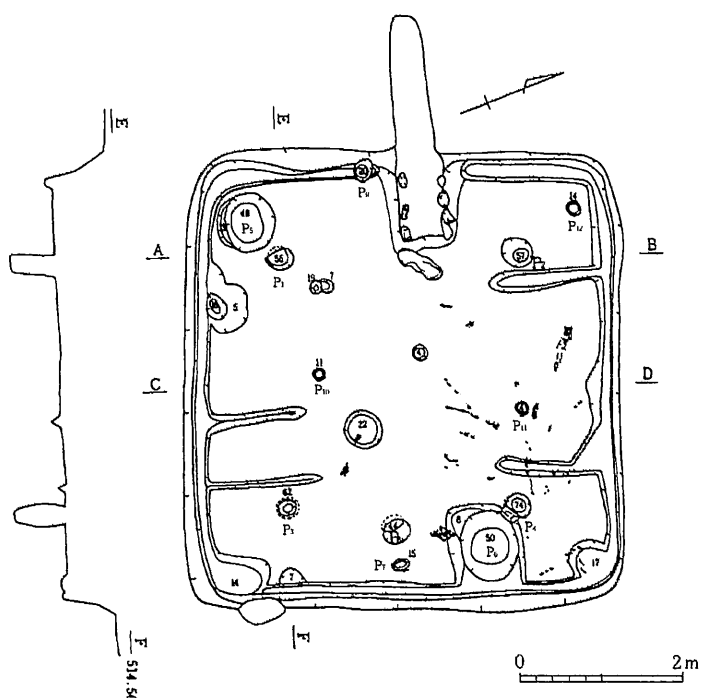
このように間仕切り構造はカマドとともに家屋構造の一つとして同じ頃に伝えられたものと考えられる。

以上、住居構造に関わる先進性を示したが、古墳群との関連はどうであろうか。

長野市本村東沖遺跡の5世紀後半の集落については、西に近接する長野市地附山古墳群との関連が指摘されている。地附山古墳群上池ノ平2号墳や3号墳の周溝内からは須恵器が多量に出土し、また5号墳の合掌形石室からは鑊轡が出土している（文献27）。

下伊那地域では前の原遺跡が桐林地域に位置し、古墳群形成との関わりが直接的に理解し得るものの、天伯B・山岸遺跡や殿原遺跡、さらには天竜川を挟んだ龍江地域にある5世紀後半から6世紀代の集落が調査された細新遺跡でのカマドの付設や須恵器の搬入を考えれば、5世紀後半以降の帆立貝形古墳や前方後円墳を築造しえた座光寺地域、上郷地域、松尾地域、桐林地域の在地豪族達は、かなり広い範囲を治めていたものと考えられる。

また、現段階では詳細な検討はできないが、飯田市教育委員会作成の飯田市内遺跡分布図によれば（文献30）、6世紀代から8世紀代にかけての集落分布は座光寺地域、上郷地



第4図 間仕切りを持つ竪穴住居 殿原遺跡88号竪穴住居跡  
（文献28より）

域、鼎地域、松尾地域、桐林地域に集中し、特に7世紀代から8世紀前半にかけては座光寺地域の恒川遺跡群に集中していることがわかる。

#### 4 横穴式石室の導入と地域差

これまでに下伊那地域の横穴式石室の分類や系譜については白石太一郎氏、楠本哲夫氏、土生田純之氏によって論じられている。

白石氏は石室を4分類し、6世紀前半期においては美濃（東濃）的な石室の影響下によるものを含めて少なくとも5系統の石室が導入されたとしている。また6世紀中頃から後半にかけては畿内中枢部の影響によって、畿内的な石室が構築されていることを明らかにした。これらについて異なる系統の石室や技術集団の影響によるものであるとし、また畿内と関東を結ぶ東山道ルートにおける拠点としての重要性を論じた（文献31）。

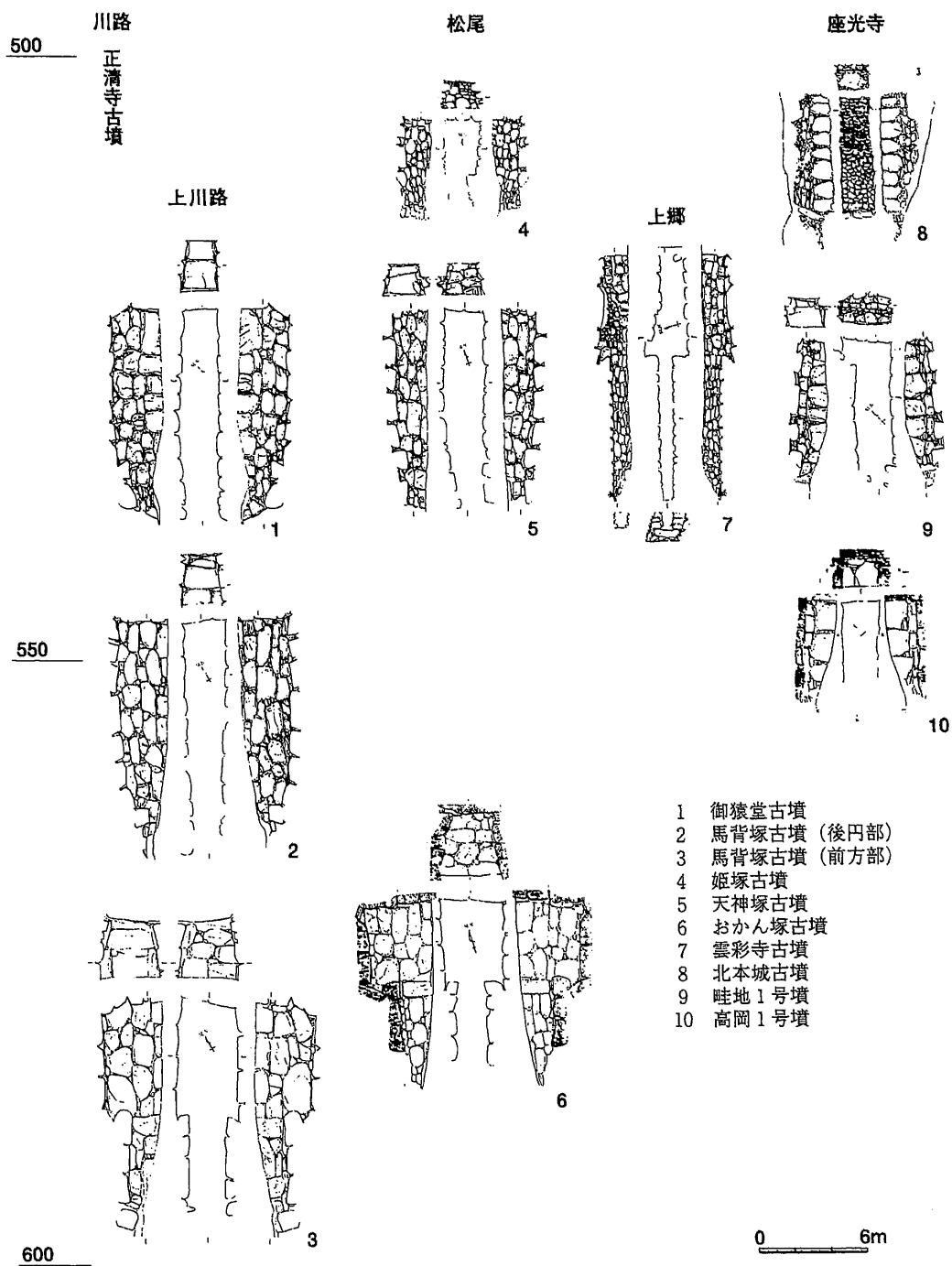
楠本哲夫氏は下段（腰石）に平石を立て、上段には平石を1・2段平積みにした横穴式石室が高岡1号墳・畦地1号墳・北本城古墳の座光寺地区にのみに見られる特徴的な石室（第2図）についての分析を行い、これらの石室を朝鮮半島の大邱飛山洞古墳群に類例を求めている。またこれら3石室は、6世紀初頭には構築され、これを持ち込んだ集団個々の出自・本貫りを象徴しているものとし、これらは馬匹生産や流通を含めた地域諸開発、さらには東国支配の再編に参入した畿内豪族・在地豪族・渡来人等々各集団の錯綜を反映したものであるとした（文献32）。

また白石太一郎氏は、高岡1号墳・畦地1号墳・北本城古墳の3古墳の横穴式石室について韓国全羅北道の錦江河口南岸付近の沃溝将相里屯1号墳やいくつかの横穴式石室に類似していることを指摘している（文献3）。

さらに土生田純之氏は、高岡1号墳、畦地1号墳、北本城古墳石室の系譜について、白石氏の言う韓国全羅北道の錦江河口南岸付近の古墳に付設された石室に系譜を求めることに、時代背景など解決しなければならない事柄が存在することを指摘し、竪穴式石槨をもち5世紀代と考えられる漆谷郡の若木古墳や6世紀前半に下るが板石を同様に隙間なく縦位に並べ、天井石との間に若干の平積み石材を置いたことがうかがえる竪穴系横口式の石室をもつ金泉の帽岩洞古墳1号墳例をあげて、より高岡1号墳、畦地1号墳、北本城古墳石室の形状に近い事を指摘し竪穴や横口を問わず板石をほとんど隙間なく縦位に並べた構造が、大邱周辺の古墳石室の特徴的構造であることから、その系譜を大邱周辺の加耶古墳に求められる可能性を指摘した（文献4）。

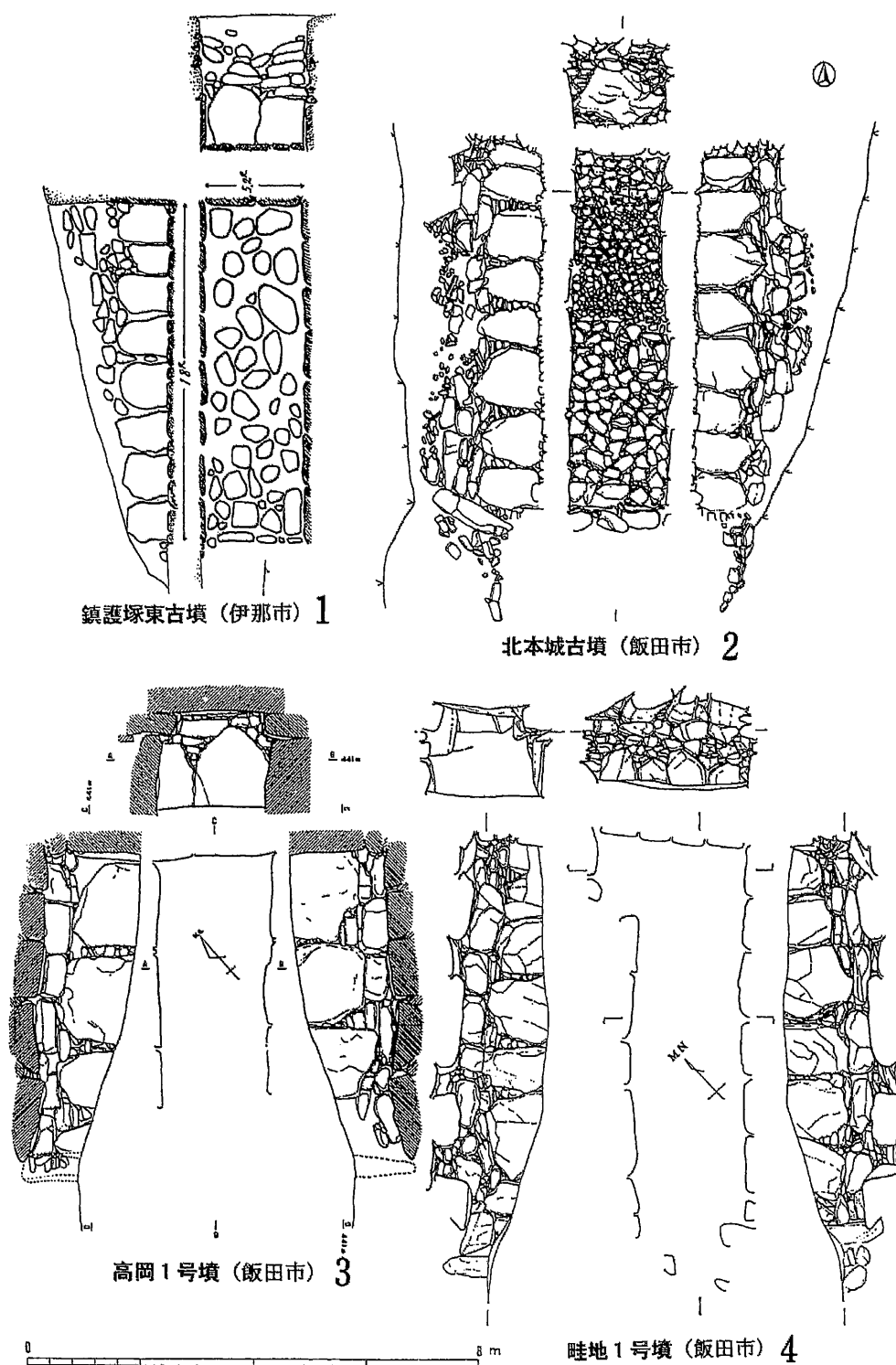
この指摘は、高岡1号墳、畦地1号墳、北本城古墳石室の系譜について、これまでの楠本氏や白石氏の研究での石室構造や築造時期と言った問題点を解決しうる方向性を示したものである（第6図）。

以上のことから、高岡1号墳、畦地1号墳、北本城古墳の石室の系譜についてはさらに検討が必要となろうが、6世紀初頭以降の前方後円墳への横穴式石室の構築は、大和政権における東国支配の拠点づくりによる結果であり、この拠点づくりには、畿内豪族のみな



第5図 下伊那の地域別横穴式石室の変遷 (文献62より) (各図=文献56より)





第6図 伊那谷の腰石を建てる石室 (文献61より)

図内1 = (文献63より)

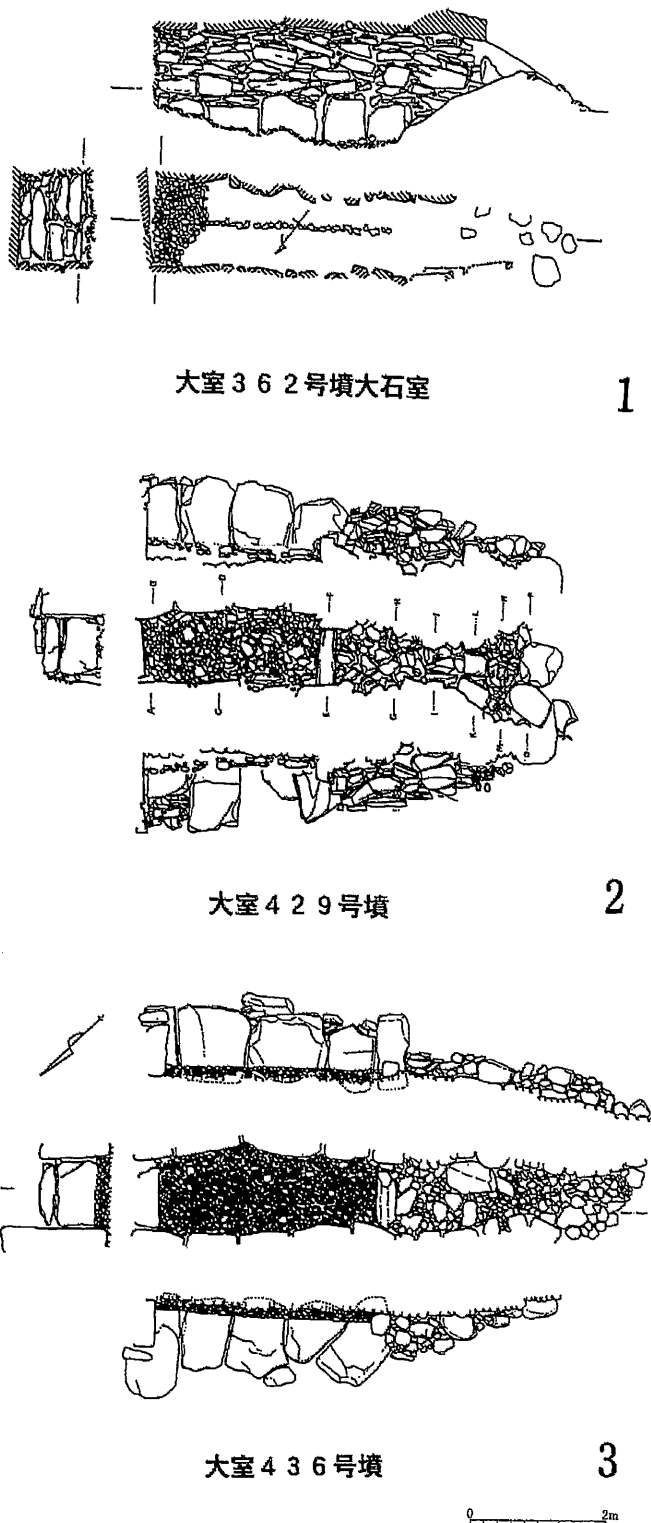
図内2・3・4 = (文献32より)

らず5世紀後半代より馬生産を中核として畿内豪族との紐帯関係によって力を蓄えてきた下伊那地域の在地豪族、さらには馬生産に直接関わった渡来人・渡来系の人々によるものであることは、当地域の今後の成り立ちを考える上で非常に大きな意義があることと言える（第5図）。

白石氏の分類（文献31）を参考に地域相や石室の地域的変遷をみてみたい。

座光寺地域では、5世紀末葉から6世紀初頭頃と考えられている北本城古墳に下段（腰石）に平石を立て、上段には平石を1・2段平積みにした横穴式石室が構築される（白石氏d類）。同様な石室は、ほぼ同時期の円墳である畦地1号墳や前方後円墳である高岡1号墳にも採用され、さらに平成17（2005）年に下伊那郡高森町でも北原4号墳（文献33）に同様な石室が採用されていることが確認されたが、この4古墳以外の石室構造は、近接する武陵地1号墳を含め、大形の自然石を架構した無袖式の細長いもので、平面的には玄室と羨道の区別がなく、立面的に羨道部の天井を下げて玄室との区別をしているものである（白石氏a類）。

なお、シナノ地域における腰石を建てる石室の類似例として、北信地域に5例（大室古墳



第7図 善光寺平の腰石を建てる石室（文献61より）  
図内1 = （文献64より）  
図内2・3 = （文献65より）

群 348 号墳・362 号墳・429 号墳・436 号墳＝長野市・葭水 2 号墳＝千曲市）（第 7 図）、中信地域に 2 例（丸山古墳＝松本市・魏磯城窟古墳＝安曇野市）（第 8 図）、南信に 1 例（鎮護塚東古墳＝伊那市）（第 6 図）などがあげられるが、今後高岡 1 号墳、畦地 1 号墳、北本城古墳の石室との関連についてはさらに検証が必要である。

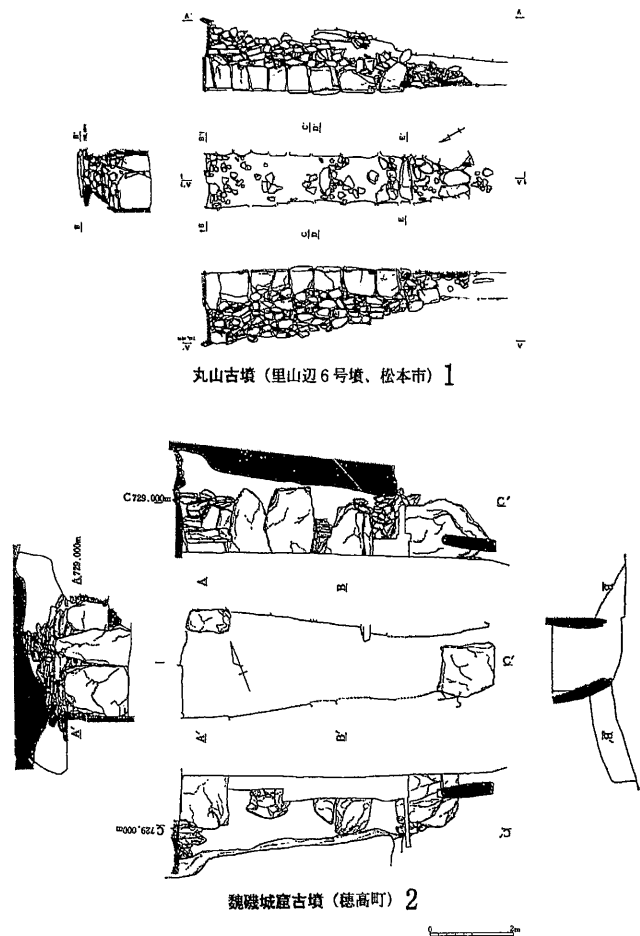
いずれにしても北本城古墳などに見られる石室は、下伊那地域の座光寺及び近隣以外では確認されておらず、当地域での最も特徴的な石室であることはまちがいないが、以後継続性があるか否かについては現段階では断定できない。

また、北本城古墳はじめ他 3 古墳の石室は、白石氏が指摘するように、朝鮮半島の錦江河口南岸付近の古墳に付設された石室に系譜を求められそうであるが、錦江河口南岸付近の古墳よりも北本城古墳・畦地 1 号古墳・高岡 1 号古墳の年代が古いという問題点も残している。

上郷地域では、小形の河原石あるいは河原石に近い石材を用いた両袖式石室で、平面的にも立面的に玄室と羨道が区別され、玄室に対していちじるしく細い羨道をもつ横穴式石室（白石氏 c 類）が当地域で最大級の全長 74.5 m を測る前方後円墳である雲彩寺古墳に採用される。雲彩寺古墳は 6 世紀前半から中頃の構築と考えられ、羨道から玄室にかけてすべてが人頭大の河原石によって構築され、玄室の長さ約 5 m、羨道の長さは約 8 m もある長大な横穴式石室が構築されている。雲彩寺古墳以外については、白石氏 a 類の石室が一般的である。

松尾地域では、白石氏 c 類と考えられる石室が姫塚古墳に採用されている。姫塚古墳の石室は当地域での初現的な石室であろうと考えられ、6 世紀初頭から前半頃の構築と考えられる。また大形の自然石を用い、両袖式で平面的にも立面的にも玄室と羨道の区分が明確な石室（白石氏 b 類）が、おかん塚古墳に見られ、6 世紀後半代の構築と考えられる。

駄科地域では、塚越古墳がおかん塚古墳に近い構造をしている。



第 8 図 松本平の腰石を建てる石室（文献 61 より）

図内 1 =（文献 66 より）

図内 2 =（文献 67 より）

桐林地域では横穴式石室を持つ古墳は顕著ではない。むしろ南へ墓域を拡張させてからの上川路地区に特徴的な石室が構築される。まずは白石氏 a 類の石室が採用されるが、他地域の石室に比べ非常に大形の横穴式石室が構築されている。まずは御猿堂古墳に玄室長さ 10.25 m、幅 2.3 m、高さ 2.85 m、羨道長さ 2.7 m、幅 2.15 m、高さ ? m の石室が採用され、次いで馬背塚古墳後円部に玄室長さ 8.4 m、幅 2.1 m、高さ 2.7 m、羨道長さ 3.3 m、幅 2 m、高さ 1.8 m の石室が採用される。時期的には 6 世紀前半から中頃にかけて構築されたと考えられる。また 6 世紀後半になると白石氏 b 類の石室となる馬背塚古墳前方部に玄室長さ 6.4 m、幅 3.3 m、高さ 3.3 m、羨道長さ 5.5 m、幅 2 m、高さ 1.6 m の石室が構築される。

御猿堂古墳石室（白石氏 a 類）、馬背塚古墳後円部石室（白石氏 a 類）、馬背塚古墳前方部石室（白石氏 b 類）に見られるこれほどの巨大な石室は下伊那地域のみならず、シナノにおける他の横穴式石室採用古墳には見られず、畿内有力豪族との関係や御猿堂古墳石室や馬背塚古墳を築造しえた在地豪族の力量が想像される。

川路地域では 5 世紀末葉から 6 世紀初頭にかけて正清寺古墳に横穴式石室が構築される。古墳の墳丘および周辺調査から下伊那地域における出現期の横穴式石室であることはまちがいなさそうであるが、江戸時代に石室は破壊されたため詳細は不明である。

## 5 馬の殉葬と馬具（第 2 表・第 9～14 図）

それでは馬についてはどうであろうか。

竪穴住居にカマドや間仕切り構造が採用された頃、すなわち 5 世紀後半代に下伊那地域に馬の墓が集中して造られるようになる。

現在、長野県における最も古い馬の存在は、長野市篠ノ井遺跡群 SK6042 土壙から出土した 4 世紀後半の馬歯から考えられる馬の存在である（文献 34・35）。

この発見と相前後して山梨県甲府市塩部遺跡の方形周溝墓からも同時期の馬の歯が確認され（文献 36）、中部高地においてはすでに 4 世紀後半には馬が存在したことがわかってきている。しかしこの馬はどのような目的で人間と接していたかについては不明な点が多く、今後の類似例の発見に期待が寄せられる。

それでは伊那谷の馬の存在はどのようなものなのであろうか。

シナノでは日本全国から出土している馬具の 2 割以上が出土しており、またこの内の 3 割以上が飯田市を中心とする下伊那地域に集中している（文献 37）。このような馬具の出土に注目し、東国舎人との関係で論じた岡安光彦氏の論考や（文献 37・38）、シナノ国造と馬の生産や管理を論じた桐原健氏の論考は注目すべきものである（文献 39）。

また、さらに注目したいのが 5 世紀第 3 四半期から第 4 四半期の移行期頃を初現とし、5 世紀後半代を中心に、座光寺地域・上郷地域・松尾地域と言った 3 地域に 28 例もの馬の墓（埋葬）が確認されている（文献 5・40・41）。この馬の墓は殉葬されたものであろうと考えられている。これらについての研究は、全国的視野からの桃崎祐輔氏（文献

第2表 下伊那地域の古墳時代馬の墓（文献62より）

遺 跡	遺 構	出土部位	所 在 地	時 期	文献	註
新井原遺跡	馬の墓1	歯	飯田市座光寺	5世紀後半	59・60	A
	4号土坑	歯・骨	飯田市座光寺	5世紀後半	59・60	
	S K47	歯	飯田市座光寺	5世紀後半	8・60	
新井原2号墳	周溝内70号土坑	歯	飯田市座光寺	5世紀中～後	9・60	
	周溝内71号土坑	歯	飯田市座光寺	5世紀中～後	9・60	
	周溝内72号土坑	歯	飯田市座光寺	5世紀中～後	9・60	
高岡4号墳	周溝内1号土坑	歯	飯田市座光寺	5世紀中～後	42・60	
宮垣外遺跡	S K10	歯・骨	飯田市上郷別府	5世紀後半	8・60	B
	S K11	歯	飯田市上郷別府	5世紀後半	8・60	
	S K42	歯	飯田市上郷別府	5世紀後半	8・60	
	S K68	歯	飯田市上郷別府	5世紀後半	8・60	
	S M15周溝	歯	飯田市上郷別府	5世紀後半	8・60	
	S M03内S K64	歯・骨？	飯田市上郷別府	5世紀後半	8・60	
物見塚古墳	周 溝	歯	飯田市八幡町	5世紀後半	10・60	C
寺所遺跡	S K04	歯	飯田市松尾新井	5世紀後半	8・60	
	S M02周溝	歯	飯田市松尾新井	5世紀後半	8・60	
	S M03周溝	歯	飯田市松尾新井	5世紀後半	8・60	
	S M04周溝	歯	飯田市松尾新井	5世紀後半	8・60	
茶柄山9号墳	周溝内馬の墓1	歯・骨	飯田市松尾上溝	5世紀後半	9・60	
	周溝内馬の墓2	歯	飯田市松尾上溝	5世紀後半	9・60	
	周溝内馬の墓3	歯	飯田市松尾上溝	5世紀後半	9・60	
	周溝内馬の墓4	歯	飯田市松尾上溝	5世紀後半	9・60	
	周溝内馬の墓5	歯	飯田市松尾上溝	5世紀後半	9・60	
	周溝内馬の墓6	歯	飯田市松尾上溝	5世紀後半	9・60	
	馬の墓8	歯	飯田市松尾上溝	5世紀後半	9・60	
茶柄山古墳群	馬の墓7	歯・骨	飯田市松尾上溝	5世紀後半	9・60	D
	馬の墓9	歯	飯田市松尾上溝	5世紀後半	9・60	
	馬の墓10	歯・骨	飯田市松尾上溝	5世紀後半	9・60	
北林5号墳	周溝内土壇	歯	高森町	7世紀	8・60	
北林5号墳	周溝内	歯	高森町	7世紀	8・60	

註

A＝馬具（f字形鏡板付轡・剣菱形杏葉・飾鋌・責金具）出土

B＝馬具（f字形鏡板付轡・面繫金具・鞍・木芯鉄板張輪鐙・環状雲珠・剣菱形杏葉）出土

C＝馬具（轡）出土

D＝馬具（三環鈴）出土

※表の作成にあたっては、飯田市教育委員会澁谷恵美子氏・飯田市上郷考古博物館長岡田正彦氏・同学芸員山下誠一氏のご教示による。

42・43) や松井章・神谷正弘氏(文献44)の業績があり、これらの研究を参考に下伊那地域の馬の埋葬について簡単にふれてみたい。

これまで日本全国で確実に古墳時代中期の5世紀後半代の馬の殉葬と考えられている資料数は60数例に過ぎず、下伊那地域以外での発見例では熊本県に20例ほどが集中し(文献45)、残りが他地域に散在している状況である。いずれにしても全国での発見例の半数近くが下伊那地域に集中していることについては特に注目しなければならない。

この馬を埋葬する行為は5世紀初頭に東北アジア諸民族から高句麗を経て、新羅や加耶諸国に波及し、日本に

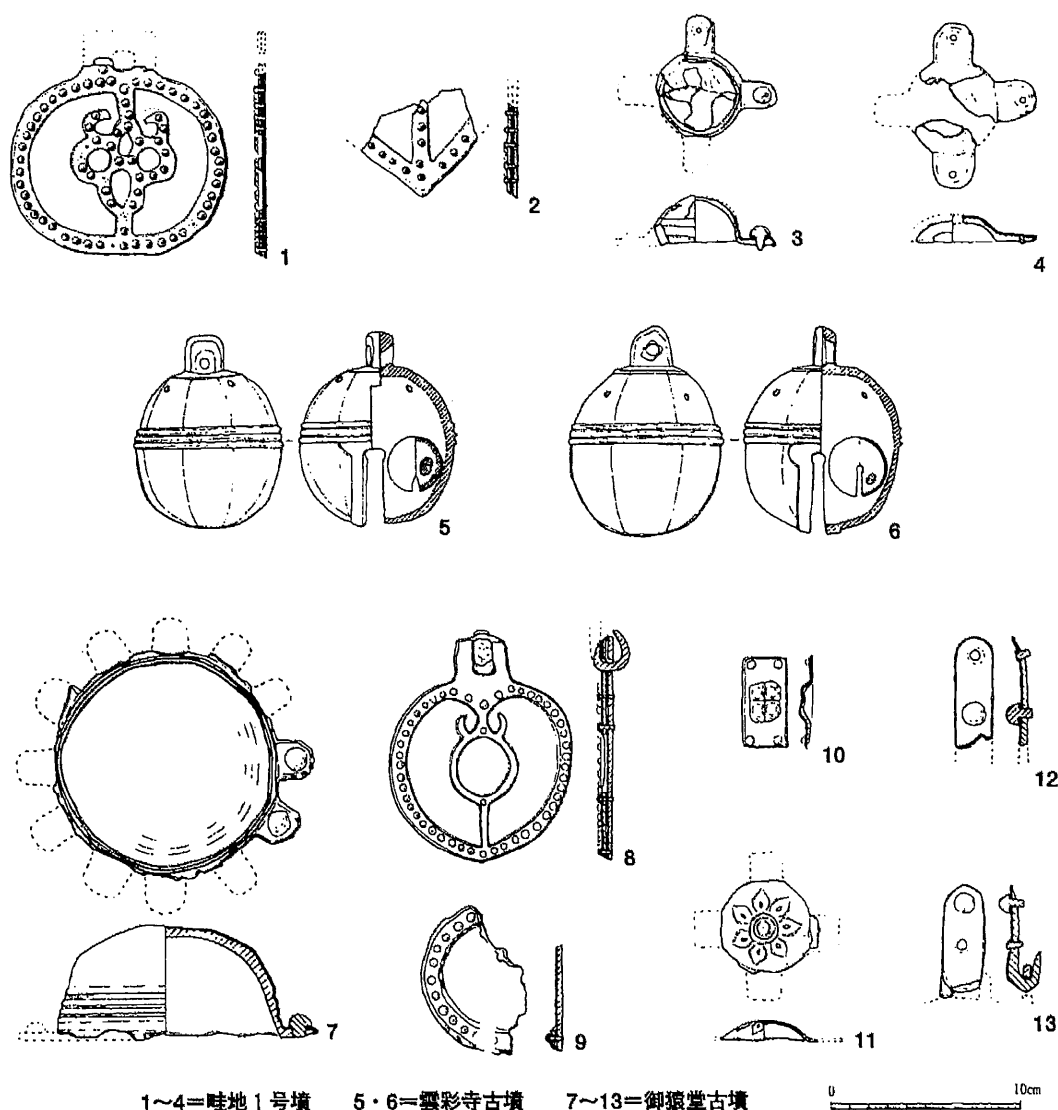
は5世紀中頃から後半にかけて伝えられたと考えられているが、これらの馬の埋葬は、基本的には死者の埋葬に伴う殉葬と考えられている(文献42・43・44)。

日本国内における古墳時代の馬の殉葬例を簡単に見てみるならば、南は宮崎から北は青森にまでおよぶが、5世紀後半代と言う限られた時期に、一地域の古墳および周溝墓の周溝内・周溝内土坑・周溝近接土坑と言った限られた類似方法で殉葬が行われ、さらには一部に馬具を装着したまま殉葬している例が見られることは、熊本県でも類似した傾向が見られるものの(文献45)、下伊那地域の特異性を示すものであろうと言える。この中で特に良好な資料としては新井原遺跡隣接4号土坑より馬の骨・歯とともに5世紀第4四半期



第9図 下伊那地域の馬の墓分布図 (文献62より)

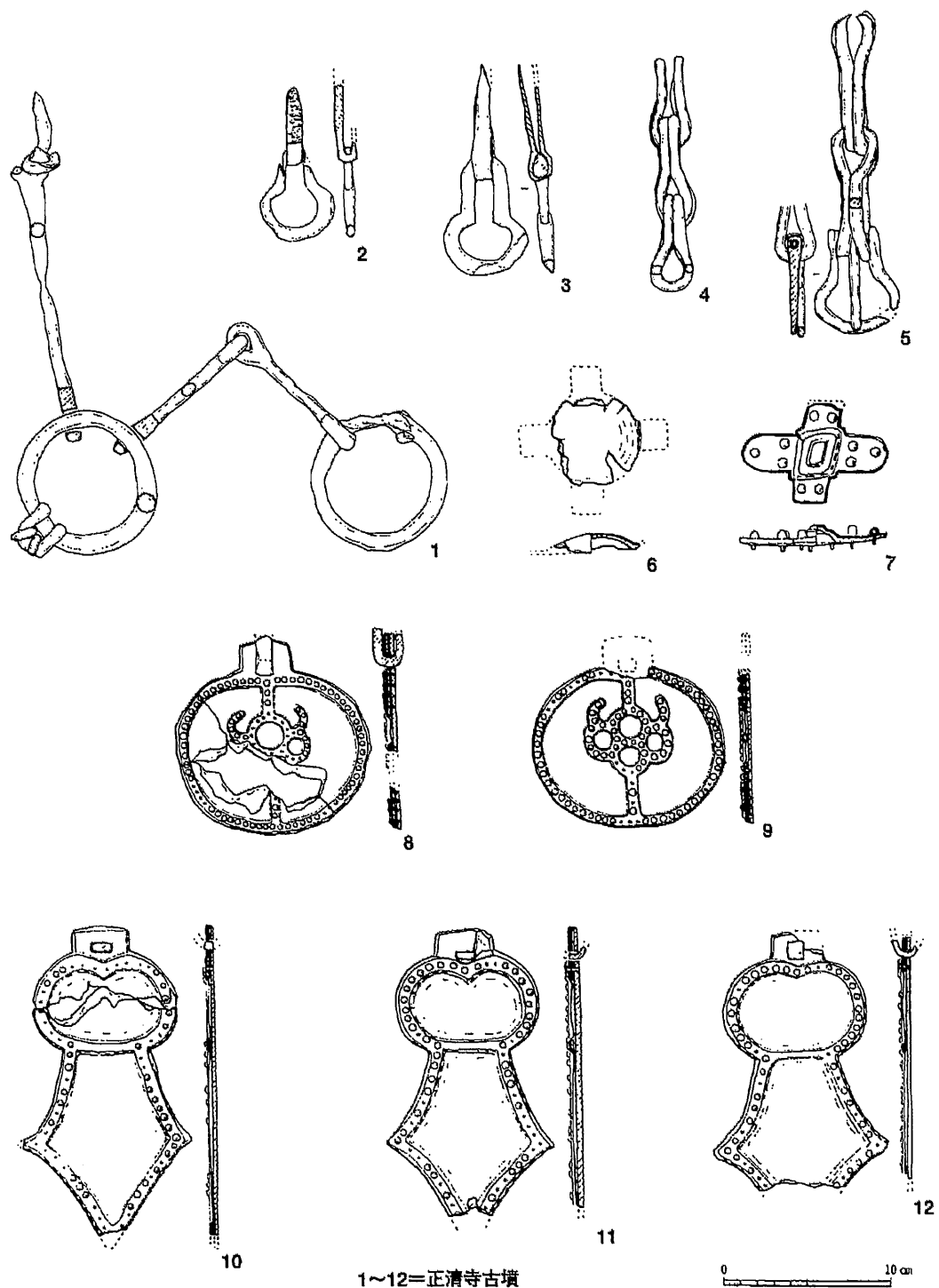
(国土地理院1/25000 飯田・時又より)



1～4=哇地1号墳 5・6=雲彩寺古墳 7～13=御猿堂古墳  
第10図 下伊那地域の古墳出土馬具① (文献62より) (各図=文献56より)

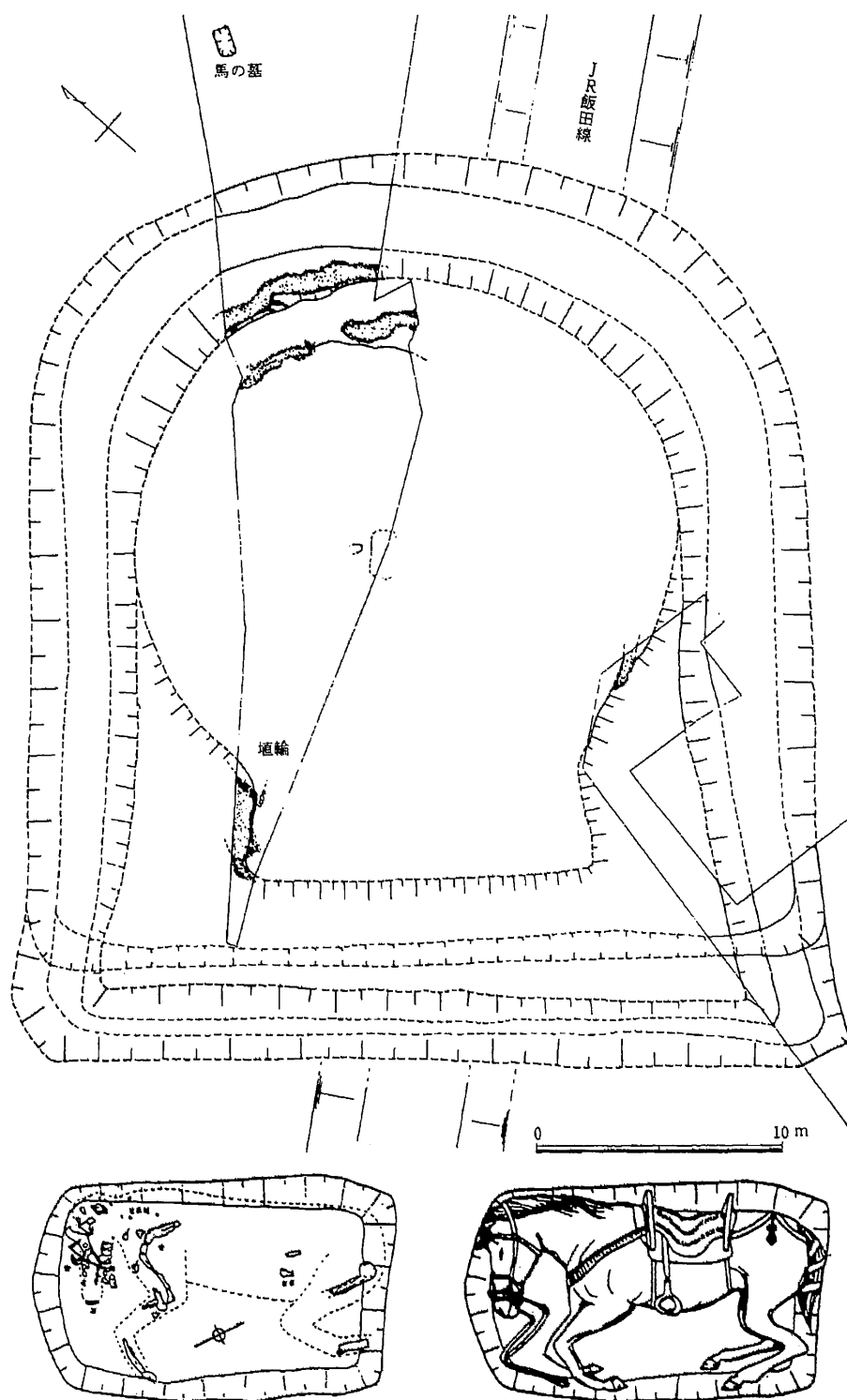
頃と考えられる f 字形鏡板付轡・剣菱形杏葉・飾鉤・責金具が出土し (文献2・40・46)、茶柄山古墳群馬の墓10からは馬の下顎骨の下部より5世紀後半頃の鉄製輪金具と三環鈴が出土している (文献40・46)。また新井原2号墳周溝内土坑3基からは馬の歯が見つかり、同周溝内から5世紀第3四半期頃のものと考えられる木芯鉄板張輪鐙が出土し (文献40・46)、物見塚古墳周溝からは馬の歯と5世紀第3四半期頃の鐙轡が出土し、装着されていた状況が想定されている (文献40・46)。

さらに馬を殉葬する風習は朝鮮半島を経由して日本に伝えられたことは先にも述べたが、新羅や加耶における殉葬例では多くが馬具などは付けず、裸馬のままの殉葬であることが確認されていることから、下伊那地域の例を含め、馬具を装着した殉葬の在り方は日本における大きな特色であると言えよう。当時、鉄と馬をより多く入手し保有することは、

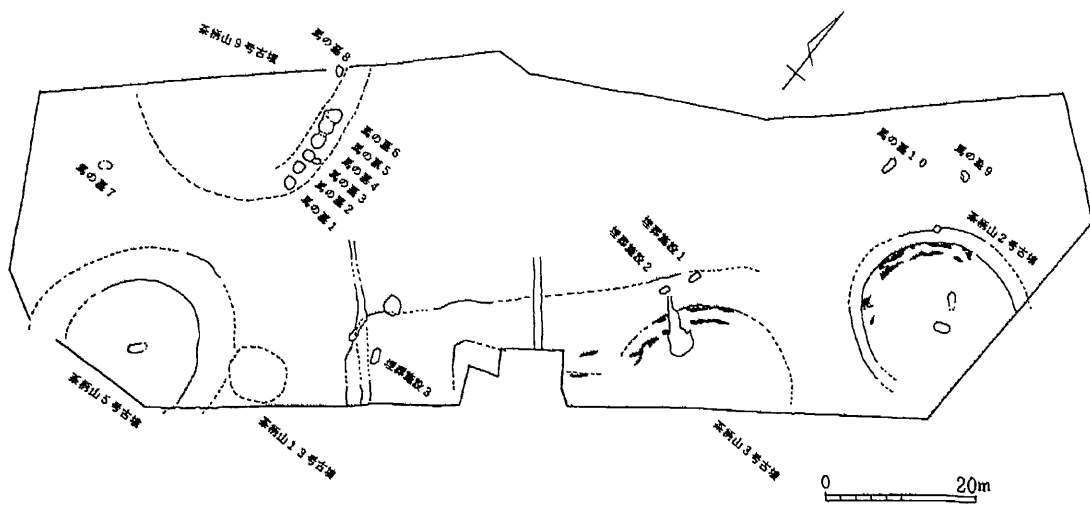


第 11 図 下伊那地域の古墳出土馬具② (文献 62 より) (各図=文献 56 より)

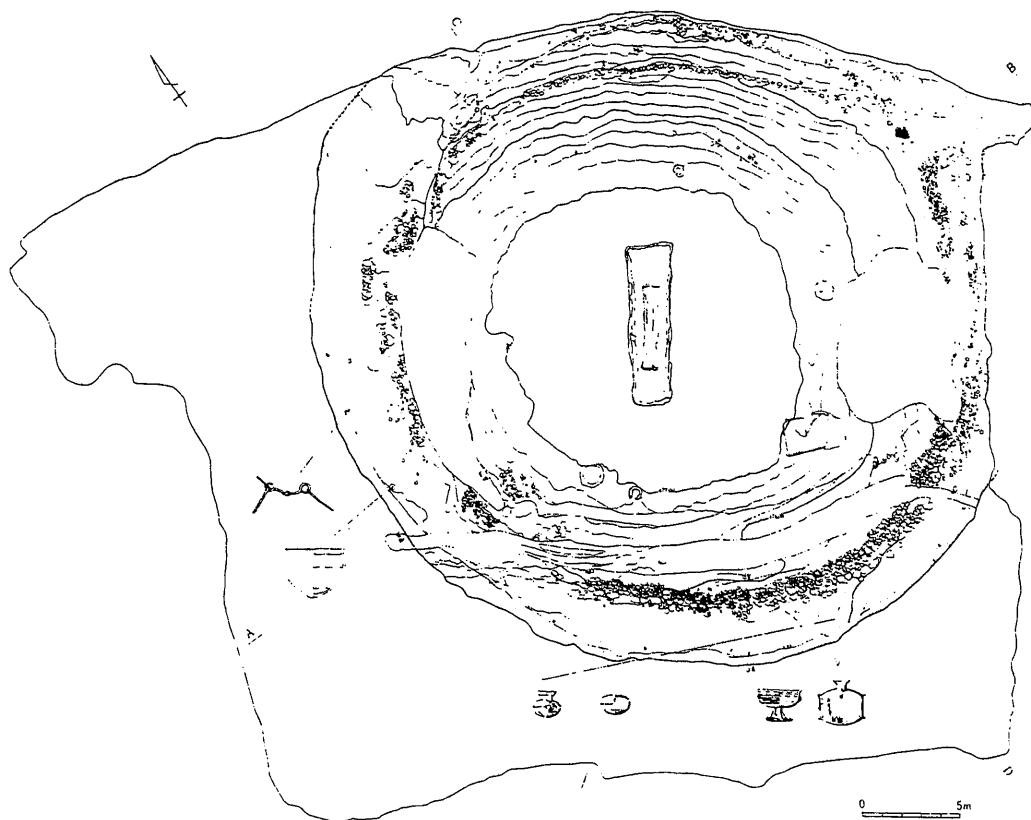




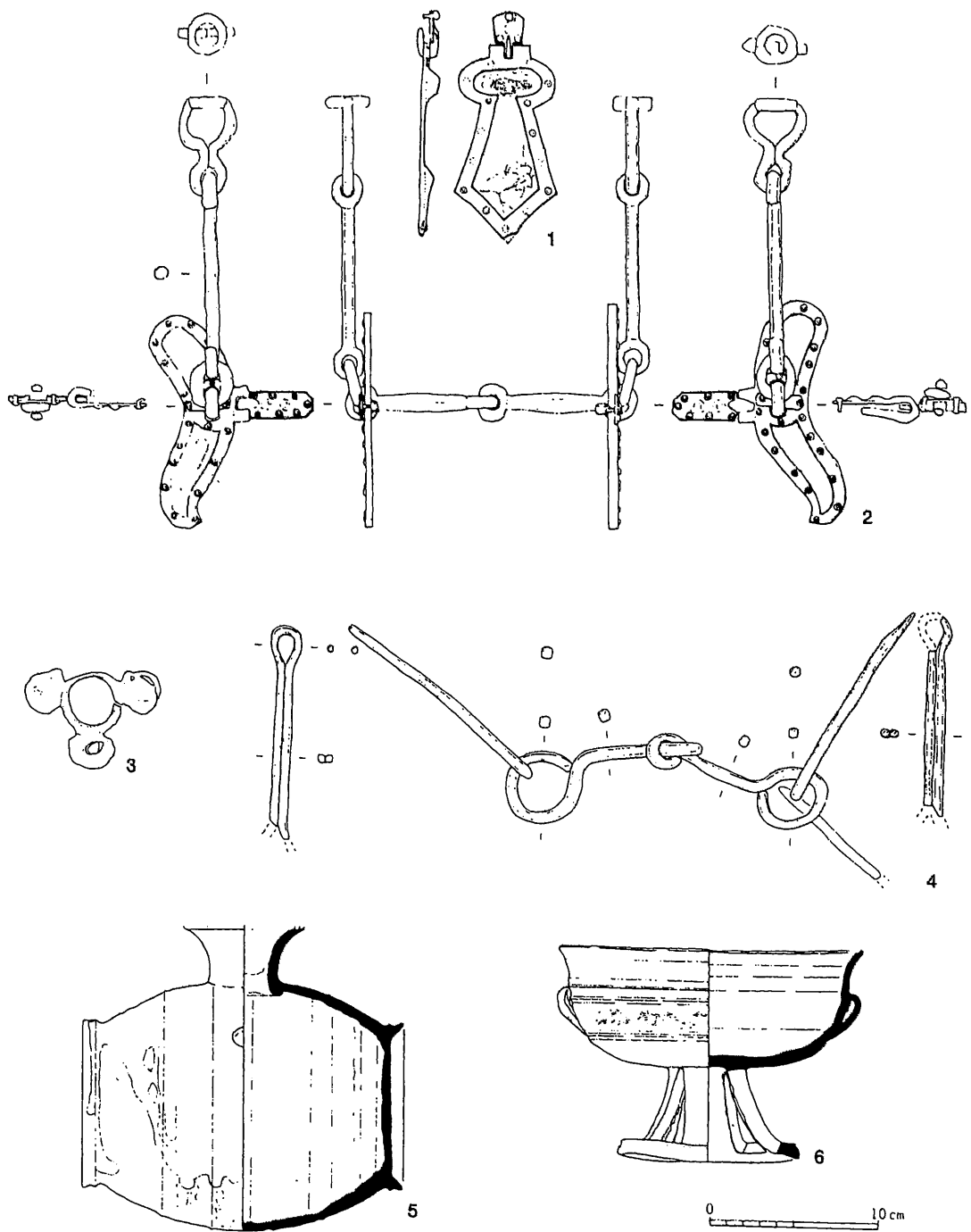
第12図 新井原12号古墳と新井原遺跡第4号土坑（馬の墓）上（文献56より）  
第4号土坑（馬の墓）と復原図 下（文献43より）



第13図 茶柄山古墳群及び馬の墓（文献9より）



第14図 物見塚古墳及び周溝内出土遺物（文献10より）



第15図 下伊那地域馬の墓出土遺物（文献62より）  
 1・2＝新井原遺跡4号土坑出土（文献56より）  
 3＝茶柄山土坑10出土（文献9より）  
 4～6＝物見塚古墳出土（文献10より）

軍備的優位な立場におかれることから、大和政権にとっては重要な任務であったにちがいない。軍馬の調達を目的とした大和政権の指示のもとに派遣された馬匹生産に秀でた渡来人あるいは渡来系の人々は、当地域の政治的・経済的効果を向上させる大きな手段となる馬匹生産に関わり、新来文化を積極的に摂取しようとした在地有力豪族達と密接な紐帯関係を保つことにより、より在地化することとなり、在地有力豪族達同様に渡来人あるいは渡来系の人々も政治的・経済的に力を蓄える結果となったと考えられる。以上のことから、当時軍備品あるいは運搬手段として貴重品であった馬にあでやかな馬具を装着させて殉葬させたことは、その主体墓に埋葬された人物との寵愛関係を示し、また彼らの威信を示すための行為であったと考えられることから、馬の殉葬を伴う古墳や周溝墓の埋葬者は、当地域の政治的・経済的効果を向上させる大きな手段となる馬匹生産に関わり、新来文化を積極的に摂取しようとした在地有力豪族達や、大和政権の指示のもと、馬匹生産に関わって当地に派遣され馬匹生産に積極的に関わって力を蓄えた渡来人あるいは渡来系の人々の墓と考えられる。

渡来人あるいは渡来系の人々については、倭人化することにより威信財としての馬具を装着させたままでの殉葬を試みたとも考えられる。またこの末裔達の一部が馬匹生産に関わる主導権を握ることにより新興在地豪族層化し、本来の在地豪族達とともに東国舎人の中心的存在として成長していったものと考えられる。

## 6 下伊那地域出土の甲冑（第3表・第16～18図）

下伊那地域では現在までに43領の甲冑が発見されている（文献47）。天竜川を挟んで北は喬木村の井ノ上古墳の横穴式石室から冑が出土し、南は飯田市立石地区（立石寺蔵・出土古墳不明）から三角板鋳留短甲と横矧板鋳留短甲が出土し、地域的には広範囲にわたっている。また時期的には5世紀中頃から後半にかけて集中している。形式的にわかっているものは甲が三角板鋳留短甲6点と横矧板鋳留短甲8点となり、冑が眉庇付冑1点で衝角付冑が4点である。

5世紀中頃から後半にかけての甲冑の古墳石室への副葬化は、当時代に古墳に埋葬される人々の社会的性格・階層を示すものであり、武人的統治者が全国的に多くいたことを示すこととして、当時の世相を反映しているものであるが、下伊那地域においては第3表・第16図のような分布を示す。しかし、それぞれの在地豪族（武人）達による畿内豪族層との個々の紐帯関係の強化によって、在地豪族（武人）達に格差が生じてくることとなる。

下伊那地域での畿内豪族層との個々の紐帯関係の強化の現れは松尾地域の径29.5mの円墳の妙前大塚古墳における眉庇付冑の副葬化であろう（文献6）。ここに、埋葬された人物は武人としていち早く畿内豪族層と紐帯関係を結び、美しく高価な冑を入手しえたものと考えられる。

松尾地域に並んで早い段階で甲冑の入手を見せるのが桐林地域である。三角板鋳留短甲が副葬されていた円墳の神送塚古墳の埋葬者や（文献54）、座光寺地域の三角板鋳留短甲

第3表 下伊那地域出土の甲冑 (文献 61 より)

図No.	古墳名	所在	出土甲冑	墳形	規模	石室	時期	文献
1	石行2号	飯田市座光寺	三角板鋳留短甲	円	18.7m	直葬	5C後	47
2	新井原2号	飯田市座光寺	三角板鋳留短甲	円	40.0m	竪穴式	5C後	11
			衝角付冑					
3	新井原7号	飯田市座光寺	三角板鋳留短甲	円	? m	?	5C後	47
4	新井原12号	飯田市座光寺	横剗板鋳留短甲	帆立貝形	36.0m	竪穴式	5C後	11・47
5	畦地1号	飯田市座光寺	挂甲片	円	19.8m	横穴式	6C前	11・47
6	溝口の塚	飯田市上郷別府	横剗板鋳留短甲	前方後円	50.0m	竪穴式	5C後	5
			三角板鋳留短甲					
			頸甲					
			肩甲					
			衝角付冑					
7	(伝)つくね塚	飯田市上郷別府	鉄の冑	半壊(円)	18.2m	?	?	47
8	高田	飯田市東野	甲	消滅(円)	13.0m	石室	?	47
9	妙前大塚	飯田市松尾	眉庇付冑	円	29.5m		5C中	11・56
10	権現堂1号	飯田市駄科	甲(A地点)	前方後円	60.0m	竪穴式	5C後	47
			冑(後円部)					
11	神送塚	飯田市駄科	三角板鋳留短甲	円	? m	石室	5C中	56
12	丸山	飯田市桐林	短甲片	前方後円	35.0m	竪穴式	5C後	47
13	梶垣外	飯田市桐林	冑	円	11.2m		?	47
14	兼清塚	飯田市桐林	甲	前方後円	63.6m	竪穴式	5C中	12・47
15	塚原二子塚	飯田市桐林	冑	前方後円	67.5m		5C後	47
16	鎧塚	飯田市桐林	横剗板鋳留短甲	帆立貝形	50.0m		5C後	47・57
17	塚原11号	飯田市桐林	短甲片	円	18.2m		5C中	47
18	塚原古墳群内	飯田市桐林	短甲片					47
19	久保尻2号	飯田市桐林	甲片	円	? m	横穴式	6C	47
20	金山二子塚	飯田市上川路	冑	前方後円	後円20m	横穴式	6C	47
21	御猿堂	飯田市上川路	挂甲片	前方後円	66.4m	横穴式	6C	13・47
22	権現3号	飯田市上川路	横剗板鋳留短甲	帆立貝形?	18.5m		5C後	47
23	もりの塚	飯田市竹佐	短甲	円	15.0m		?	47
24	島垣外	飯田市伊豆木	甲片	円	16 m		?	47
25	石原田	飯田市伊豆木	短甲	円	(9)m		6C?	47
			挂甲片					
			衝角付冑					
26	高松3号	飯田市伊豆木	横剗板鋳留短甲	消滅	? m		5C後	47
			衝角付冑					
27	高松4号	飯田市伊豆木	横剗板鋳留短甲	消滅	? m		5C後	47
28	立石寺蔵	飯田市立石	三角板鋳留短甲					47・57
			横剗板鋳留短甲					
29	明殿脇1・2・3号?	飯田市川路	短甲	円	一 m		?	47
			冑					
30	丸山	飯田市川路	冑	円	? m	横穴式	6C	47
31	月の木1号	飯田市川路	横剗板鋳留短甲	円	27.0m	木棺直葬	5C後	15
32	井ノ上	喬木村	冑	円	(7.1)m	横穴式	6C	47



第 16 図 下伊那地域の甲冑出土古墳分布図 (文献 61 より)

●=甲冑出土 ■=甲出土 ▲=冑出土

(地図=国土地理院 1/25000 飯田・時又より)

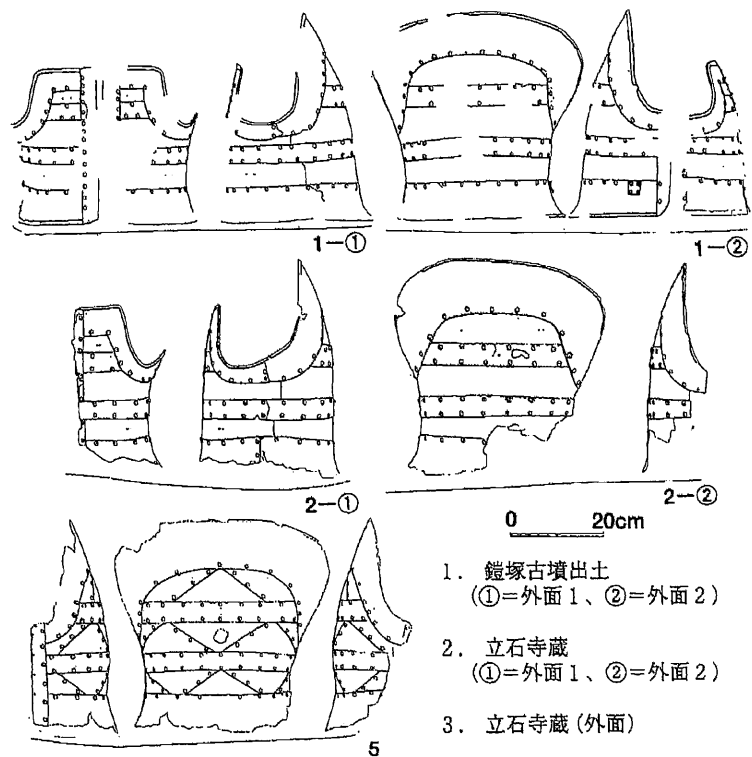
が副葬されていた円墳の新井原7号墳の埋葬者であろうと考えられる(文献10)。

このように、下伊那地域での在地豪族達の武人的成長による畿内有力豪族層との紐帯関係による甲冑類の入手は、まずは大形円墳築造者、そして帆立貝形古墳築造者へと築造レベルの推移が見られ、在地豪族達の成長ぶりがうかがえる。

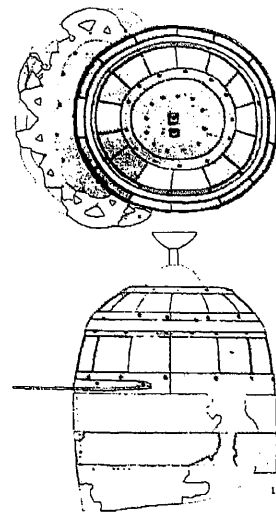
三穂地域は川路地域の西に位置し、河岸段丘上の小盆地状の地形をなすが、当地域より石田原古墳や高松3号墳・4号墳から衝角付冑や横矧板鋳留短甲が出土し(文献48)、在地豪族達の武人化および畿内有力豪族層との紐帯関係の芽生えが見られる。しかしその関係は継続せずに終わり、他地域のような前方後円墳は造られずに統合されていたと考えられる。

また、川路地域においても南端の径27mの円墳である月の木1号墳に横矧板鋳留短甲が副葬され(文献14)、この後竜丘地域を牽制するように新たな埋葬施設の初期横穴式石室を持つ前方後円墳である正清寺古墳が築造されるが、やがて竜丘地域に吸収されてしまう。

以上のように、武人としての象徴たる甲冑類の入手、そして入手以後の各地域の前方後円墳築造の動向を見ると、畿内有力豪族層との紐帯関係や在地豪族達の盛衰による地域統合の過程の一端が見えてくる。



第17図 下伊那地域出土の甲冑 (文献61より)(各図=文献57より)



第18図 妙前大塚古墳出土  
眉底付冑 (文献7より)

## 7 文献にみえるシナノ～信濃の重要性

7世紀後半代における科野の重要性については、壬申の乱に関連して、天武元（672）年6月「東山の軍を發す。私記に曰く、安斗智徳の日記を案ずるに云はく、信濃の兵を發さしむと。」（文献48）と釋日本紀には記され、この記載から東山軍とはシナノ兵のことであり、大海軍と合流すべく国司とともに神坂峠を下り、シナノ兵は東山軍として勝敗を左右するほどに活躍したとされている（文献49）。また天武13（684）年2月には「是日、三野王・小錦下采女臣筑羅等を信濃に遣はし、地の形を看しむ。將に此の地に都せむとするか。」（文献48）や、同年潤4月「三野王等、信濃國の図を進む。」（文献48）、さらには天武14（685）年10月「信濃國に行宮を造らしめ、東國の温泉に幸せんと擬す。」（文献48）とあるように、シナノを副都候補としたことからシナノが大和（飛鳥）政権にとって重要な地域であったことがうかがえる（文献49）。

さらに、天平宝字8（764）年に天皇に直結するかたちで牧を管理し、馬（特に騎馬）の生産から飼育・管理まで行う内厩寮が設定され、まずは信濃に設置されることとなった（文献50）。

類聚三代格による神護景雲2（768）年の記載では、「……略……正月廿八日の格に倂く、内厩寮の解に倂く、信濃國牧の主當伊那郡大領外從五位下勲六等金刺舍人八磨の解に倂く、課欠駒は数を計り決すべし。……略……」（文献48）とあり、内厩寮の管理に信濃牧主當伊那郡大領金刺舍人八磨呂があたっていたことがわかる（文献50）。この金刺舍人八磨呂は伊那の在地豪族と考えられる。また、延喜式による弘仁14（823）年の記載には、武蔵・甲斐・上野・信濃の4国より240疋もの馬が貢馬されたことが記され、その内訳を見ると武蔵（牧4・馬50）・甲斐（牧3・馬60）・上野（牧9・馬50）・信濃（牧16・馬80）とあり、信濃が他地域よりも馬匹生産が盛んであったことがうかがえる（文献50）。

以上のことから、下伊那の在地豪族達は5世紀後半代からの畿内有力豪族達との紐帯関係を土台に、馬（騎馬）の生産・管理を通して、より東国舍人としての成長を重ね、畿内有力豪族達にとって機動力のある非常に頼もしい存在であったものと考えられる。

また、シナノあるいは科野・信濃においては、馬の生産・管理は重要なものであるが、さらには伊那の在地豪族金刺舍人八磨呂が信濃牧主當となり、内厩寮の管理にあたったことを考えれば、下伊那地域は信濃のみならず、東国支配を視野に入れた意味での重要な拠点であったと考えられる。また、信濃牧主當となった伊那の在地豪族金刺舍人八磨呂は、5世紀後半以来、下伊那地域で馬の生産・管理にあたった渡来人あるいは渡来系の人々が新興在地豪族層化した子孫ではないかとも考えられる。

## 8 富本銭と和同開珎銀錢

武陵地1号墳から1枚の富本銭が出土し、座光寺地域で1枚の富本銭が発見されたが、長野県内の皇朝十二銭の性格を考えると、両富本銭ともに厭勝銭であることはまちがいな



い（文献 51）。このような古代銭貨の流通貨幣以外の性格をさらに裏付けるものとして注目したいのが、平成 19 年（2007）に藤原宮大極殿院南面西回廊で発見された「富本銭」の性格である。この「富本銭」は平瓶の口縁部に 9 枚が納められ、内部には水晶の原石 9 点が納められていた。この「富本銭」は飛鳥池遺跡で鑄造された「富本銭」とは文字や七曜文の表現が異なり、藤原京内の鑄銭司により鑄造された「富本銭」の可能性が指摘され、地鎮行為に用いられたと考えられている（文献 52）。藤原京期からすでに銭が厭勝銭として用いられていたことを考えれば、我国で鑄造貨幣を使用するにあたり、当初から流通貨幣に加え、厭勝銭としての性格をそなえ持っていたことが理解できる。シナノの古墳石室からの銭貨の出土例は、奈良時代の皇朝十二銭の石室への追葬として茅野市乞食塚古墳での和同開珎 4 枚と萬年通寶 1 枚の出土例が知られる。また下諏訪町一の釜古墳からもその可能性が指摘されているように、一古墳（横穴式石室）からの複数追葬品を考えれば、座光寺地域から出土した富本銭も武陵地 1 号墳からの出土とも考えられるが、あくまでも推測の域を出ない。座光寺地域の恒川遺跡群の竪穴住居跡より和同開珎銀銭が出土していることを考慮すれば（文献 53）、武陵地 1 号墳のみならず、座光寺地域の他古墳でも富本銭が追葬品であった可能性も考えられなくはない。

また、富本銭や和同開珎銀銭が鑄造、使用された 7 世紀後半から 8 世紀初頭にかけて使用された藤原宮期の畿内産土師器が恒川遺跡群から杯・皿・蓋などの器種セットとして出土しており、このような状況は長野県内の他地域には見られない（文献 54・55）。都の生活を嗜好する都人が富本銭や和同開珎銀銭を土器とともに持参して来たものと考えられる。また、飯田市松尾の天神塚古墳からも追葬品として同時期の畿内産土師器が出土している。

富本銭（貨幣）や畿内産土師器（藤原京での食器）を追葬品とするにあたっては、貨幣や食器を副葬するという行為を理解していなければならない。このことを思えば、武陵地 1 号墳や天神塚古墳に追葬もしくは都の貨幣や食器の追葬行為を行ったのは都へ舎人としての出仕や労役等で都に赴いた在地豪族、あるいは大化元年（645）年の東海・東山・北陸の諸国へ東国国司として派遣されて以来の都から派遣された人物、あるいは日本書紀に記載されている天武 13（684）年のシナノ地勢調査に関わる人物が、これまで大和政権と関わりをもっていた在地豪族の墓に追葬された結果ではないかとも考えられる。いずれにしても都での埋葬行為を十分に知りえた人物であったと考えられる。

## 9 伊那郡衙の成立

これまで現在の飯田市の天竜川西岸地域を中心に下伊那地域の 5 世紀後半以降の古墳群形成や横穴式石室の採用、新来文化をいち早く受容した集落、馬の殉葬や馬具、甲冑の出土状況、文献にみえるシナノの重要性、富本銭や畿内産土師器の出土意義などについて見てきた。

下伊那地域では、5 世紀後半になり大和政権が東国を視野に入れるための中継拠点として、そして騎馬を中心とする馬の飼育や管理に適した場所として、重要拠点として認識さ

れることとなる。このあらわれが北は天竜川を挟んだ喬木村井ノ上古墳から出土した冑、南は飯田市立石地区（立石寺蔵・出土古墳不明）での横矧板鋌留短甲と三角板鋌留短甲の出土など、多くの在地有力豪族達がそれぞれの畿内有力豪族層との紐帯関係を結ぶ中で武人的な様相を強めて行く様相がうかがえる。しかし馬の飼育や管理を中心に新たな文化や社会システムの変化の中で、しだいに地域統合の動きが見え始める。これまで見てきたように5世紀中頃以降広範囲に武人的在地有力豪族達が台頭する中で、前方後円墳の築造、横穴式石室の採用、馬の飼育や管理と言う事象から、6世紀前半には座光寺地域、上郷地域、松尾地域、駄科地域、桐林地域、川路地域にまずは集約され、さらに6世紀中頃には座光寺地域、上郷地域、松尾地域、竜丘地域（駄科地域、桐林地域、上川路地区、川路地域）の4地域に集約されることとなる。

座光寺地域、上郷地域、松尾地域、竜丘地域の4地域のうち、6世紀中頃以降にはさらに上郷地域が松尾地域に吸収されて行く様相を見せる。座光寺地域、上郷地域、松尾地域については直接的な馬の飼育や管理による畿内有力豪族層や渡来系の技術者達との関係がさらに密接になって行く過程が見られるが、竜丘地域についてはこれまで馬の生産などを考えさせられる資料が確認されていないことや、6世紀中頃に始まる御猿堂古墳や馬背塚古墳の大形横穴式石室の構築を思えば、直接的な馬生産や管理による畿内有力豪族層との関係とは異なった在地有力豪族の存在があったと考えられる。

7世紀代に入ると律令国家建設のために全国的に新たな国造りが行われるが、下伊那地域も例外ではない。北本城古墳などにみられる横穴式石室や馬の飼育と管理など新来文化を積極的に受容し力を蓄えた新興有力豪族達の台頭、さらには平坦な土地が他地域よりも広く、東西交通の中継点としての地理的環境によって座光寺地域がしだいに大和政権に注目されることとなる。7世紀中頃以降、新たな大和政権による律令体制整備に伴う状況からか、下伊那地域においては突然集落が減少し、古墳数も激減し、ほとんどが追葬状況となる。しかし座光寺地域は下伊那地域での集落密集地となり、飛鳥諸京や藤原京から派遣された役人や、都へ舎人としての出仕や労役等で都に赴いた在地豪族層の往来が頻繁であったと考えられる。そのあらわれが畿内産土師器や富本銭・和同開珎銀銭の出土であろう。

下伊那地域は5世紀後半以降、畿内有力豪族層とのつながりの中で、馬の生産や管理を中心に新来文化を積極的に取り入れることにより、在地豪族達の盛衰の中地域振興に成功した地域であったのである。そして7世紀後半から8世紀前半にかけての東国の律令国家整備に大きな役割を担うが、8世紀中頃以降にはまた新たな時代を迎えることとなる。

## 10 まとめにかえて

シナノにおける前方後円墳を中心とする古墳構築や古墳群形成は、千曲川水系の善光寺平において4世紀前半頃開始される。そして5世紀中頃を境に天竜川水系の伊那谷南域（下伊那地域）に移行する。このような5世紀中頃以降の前方後円墳を中核とする古墳群形成の地域的移行については、武蔵における南武蔵地域や比企地域から埼玉地域へ、美

濃・尾張地域での濃尾平野や犬山扇状地地域から名古屋台地方面への移行ほか、下野や三河などでもみうけられる。

それぞれの地域における様々な状況によるものと考えられるが、科野においては大和政権が国造りを進めるにあたり、‘赤い土器’に象徴される箱清水式土器文化圏の弥生時代以来の有力者達による大和政権への自己主張的権威表現の結果、地域有力者達の高遠山古墳や森將軍塚古墳を初めとする善光寺平の前方後円墳が築造され、さらにその地域有力者達の善光寺平南域への集約化により順次前方後円墳が築造されたものとする。（第1期大和政権における国造り）

しかし、5世紀中頃以降の下伊那地域での前方後円墳築造は、その前段階の大形円墳や帆立貝形古墳の築造段階から、東国を視野に入れるための大和政権独自の地域有力者の創出・擁立による結果であり、大和政権が意図的に指名した在地勢力の有力者達の墓であったと考えられる。（第2期大和政権における国造り）

7世紀代に入ると律令国家建設のために全国的に新たな国造りが行われるが、下伊那地域も例外ではない。（第3期大和政権における国造り）

これに伴い、座光寺地域では新来文化を積極的に受容し力を蓄えた新興有力豪族達が台頭し、さらには先にものべたような地理的環境によって当地域は急成長することとなる。

以上、シナノの前方後円墳を中核とする古墳群形成の背景を簡単に推察した。

最後にこの推察を背景にあらためて下伊那地域の5世紀中頃から8世紀初頭頃の考古学的資料から読み取れる歴史動向について簡単にまとめて見たい。

5世紀中頃以降、座光寺地域、上郷地域、松尾地域、駄科地域、桐林地域、川路地域、三穂地域では武人的性格の在地豪族達が、騎馬を中心とする馬の生産・管理や東国を勢力視野に入れようとする畿内有力豪族層との個々の紐帯関係の中で成長するが、それぞれの成長の中で、5世紀後半から6世紀前半頃にかけて、まずは三穂地域が川路地域に吸収され、さらに6世紀中頃以降には川路地域も竜丘地域に吸収されることとなる。また駄科地域も6世紀後半頃には完全に吸収され、広範囲な竜丘地域が形成されることとなる。

しかし、このように勢力拡張した竜丘地域では直接的に馬の生産や管理に関わる遺構・遺物が確認されていない。

座光寺地域、上郷地域、松尾地域は須恵器の搬入や馬の殉葬などの遺物や遺構を考えれば、騎馬を中心とする馬の生産・管理を核とする諸々の新来文化を積極的に受け入れ、それぞれの地域振興を遂げ勢力を維持していたものと考えられるが、6世紀中頃以降には上郷地域が松尾地域に吸収されていく結果となる。

座光寺地域や松尾地域は、直接的に馬の生産・管理を核としながら地域振興を果たし、桐林地域とはまったく異なった新興在地豪族達の勢力の台頭が進められたようである。

この結果、7世紀代に入り下伊那地域での畿内有力豪族層との直接的な紐帯関係による在地豪族達は座光寺地域、松尾地域、竜丘地域となり、それぞれがかなり広い範囲を手中にする大きな勢力範囲を維持することとなっていたようである。しかし、座光寺地域は7

世紀中頃以降、これまでの畿内有力豪族層との直接的な紐帯関係による馬の生産・管理を核とした地域振興の結果、蓄えてきた地域経済や文化に加え、下伊那地域の中では広い緩やかな平坦地であり東国ルートへの拠点とするに適した場所として大和政権に理解され、新たな律令国家建設に向けての思惑と一致することなどから、7世紀後半には大和政権が東国を視野に入れる拠点として座光寺地域が選択されたものと言えよう。

7世紀後半以降の恒川遺跡群を中心とする座光寺地域からの富本銭・和同開珎銀銭や畿内産土師器の出土や武陵地1号墳からの富本銭の出土、さらには7世紀後半代の天武朝期における日本書紀などの記載から、座光寺地域に伊那郡衙が置かれ、それが律令国家建設の初期段階では、科野（信濃）のみならず、東国を視野に入れるための重要拠点であったことが理解されよう。

そして奈良時代での伊那の在地豪族金刺舎人八麻呂が信濃牧主当となっていることを思えば、おそらくは5世紀中頃以降に座光寺地域に馬の生産・管理に携わる専門工人として当地を訪れ、地域の中で経済的にも政治的にも本来の在地豪族達に変わり成長した新興有力在地豪族化した人々の末裔であったことが想像されるのである。

以上、5世紀中頃以降の甲冑、馬、前方後円墳、横穴式石室、文献記載などの事例を紹介し在地豪族達の盛衰を見ながら、なぜ7世紀末葉から8世紀初頭頃に座光寺地域に富本銭、和同開珎銀銭、畿内産土師器が持ち込まれたかが理解されたと考える。また、下伊那地域における5世紀中頃から8世紀初頭頃にかけての考古学的な動向や当地域の重要性を理解していただけたものと考ええる。

#### 参考文献

- 1 西山克己「下伊那の馬と富本銭」『長野県埋蔵文化財センター紀要』7 長野県埋蔵文化財センター 1999年
- 2 今村善興・小林正春「新井原12号古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻（3）主要遺跡（中・南信）長野県史刊行会 1983年
- 3 白石太一郎「四 それでも騎馬民族はやってきた」『古墳の語る古代史 歴博ブックレット』⑥（財）歴史民俗博物館振興会 1998年
- 4 土生田純之「積石塚古墳と合掌形石室の再検討 -大室古墳群を中心として-」『福岡大学総合研究所報』第240号（総合科学編第3号）福岡大学総合研究所 2000年
- 5 飯田市上郷考古博物館『溝口の塚古墳の副葬品と殉葬馬』1999年
- 6 山下誠一「Ⅳ（3）③埋葬馬について」『寺所遺跡』飯田市教育委員会 1999年
- 7 佐藤甕信「妙前大塚古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻（3）主要遺跡（中・南信）長野県史刊行会 1983年
- 8 山下誠一『寺所遺跡』飯田市教育委員会 1999年
- 9 小林正春「長野の古墳 -下伊那の古墳時代の埋葬馬」『日本考古学協会 1994年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会 1994年
- 10 飯田市教育委員会『八幡原遺跡 物見塚古墳』1992年
- 11 岩崎卓也・松尾昌彦「Ⅲ4（2）武器・武具」『長野県史 考古史料編』全1巻（4）遺構・遺物長野県史刊行会 1988年

- 12 大沢和夫「兼清塚古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(3) 主要遺跡(中・南信) 長野県史刊行会 1983年
- 13 大沢和夫「御猿堂古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(3) 主要遺跡(中・南信) 長野県史刊行会 1983年
- 14 大沢和夫「馬背塚古墳」『長野県史 考古史料編』全1巻(3) 主要遺跡(中・南信) 長野県史刊行会 1983年
- 15 飯田市教育委員会『月ノ木1号墳 現地説明会資料』 1998年
- 16 飯田市教育委員会『正清寺号墳(久保田1号墳) 現地説明会資料』 1998年
- 17 西山克己「信濃国で須恵器が用いられ始めた頃」『信濃』第40巻第4号 信濃史学会 1988年  
西山克己「信州における須恵器出現の頃」『考古学ジャーナル』No.316 ニューサイエンス社 1990年
- 18 西山克己「下伊那の古墳時代における新来文化の受容」『伊那』第47巻第4号 伊那史学会 1999年
- 19 西山克己「中部高地における新来文化の受容」『第46回埋蔵文化財研究集会 渡来文化の受容と展開』埋蔵文化財研究会 1999年
- 20 今村善興 他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－下伊那郡鼎町その2・天伯A－』長野県教育委員会 他 1975年
- 21 神村 透 他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－飯田地区－』長野県教育委員会 他 1971年
- 22 千野 浩 他『本村東沖遺跡』長野市教育委員会 1993年
- 23 小林正春 他『小垣外・八幡面遺跡』飯田市教育委員会 他 1988年
- 24 下平博行 他『龍江大平遺跡』飯田市教育委員会 1995年
- 25 水沢教子 他「屋代遺跡群」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』29 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1998年
- 26 飯島哲也「第5章4 本村東沖遺跡出土の古式須恵器について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会 1993年
- 27 風間栄一「長野市地附山古墳群上池ノ平2号墳出土の須恵器」『信濃』第50巻第7号 信濃史学会 1998年
- 28 山下誠一 他『殿原遺跡』飯田市教育委員会 他 1987年
- 29 馬場保之 他『前の原遺跡』飯田市教育委員会 他 1990年
- 30 飯田市教育委員会『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告』 1998年
- 31 白石太一郎「伊那谷の横穴式石室」(1)・(2)『信濃』第40巻第7号・第8号 信濃史学会 1988年
- 32 楠本哲夫「信濃伊那谷座光寺地区の三石室」『研究紀要』第3集 財団法人由良大和古代文化研究協会 1996年
- 33 松島高根「口絵 北原4号古墳の横穴式石室 伊那2007.4月号 伊那史学会 2007年
- 34 西山克己「篠ノ井遺跡群 概要・遺構編 第2章第3節古墳時代前期の遺構」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』22 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1997
- 35 茂原信生・櫻井秀雄「篠ノ井遺跡群 成果と課題編 第8節篠ノ井遺跡 群出土の動物遺存体」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』22 (財)長野県埋蔵文化財センター 他 1997年
- 36 村石眞澄「2、塩部遺跡」『山梨考古』第55号 山梨県考古学協会 1995年
- 37 岡安光彦「馬具副葬古墳と東国舍人騎兵 考古資料と文献史料による総合的分析の試み」『考古学雑誌』第71巻第4号 日本考古学会 1986年
- 38 岡安光彦「東国舍人騎兵の成立と下伊那地方」『伊那』第42巻第6号 伊那史学会 1994年
- 39 桐原 健「科野国造の馬」『伊那』第42巻第6号 伊那史学会 1994年

- 40 小林正春「伊那谷ははたして先進地か」『長野県立歴史館 飯田・下伊那セミナー飯田下伊那の先進性』長野県立歴史館 1998 年
- 41 渋谷恵美子「馬の文化論」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版 2000 年
- 42 桃崎祐輔「古墳に伴う牛馬供儀の検討－日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して－」『古文化談叢』第 31 集 九州古文化研究会 1993 年
- 43 桃崎祐輔「日本列島における騎馬文化の受容と拡散－殺馬儀礼と初期馬具の拡散に見る慕容鮮卑・朝鮮三国伽耶の影響－」『第 46 回埋蔵文化財研究集会 渡来文化の受容と展開』埋蔵文化財研究会 1999 年
- 44 松井 章・神谷正弘「古代の朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺について」『考古学雑誌』第 80 巻第 1 号 日本考古学会 1994 年
- 45 島津義昭・高木正文「熊本の古墳」『日本考古学協会 1994 年度大会 研究発表要旨』日本考古学協会 1994 年
- 46 吉川 豊「飯田市内における随葬馬について」『伊那』第 41 巻第 6 号 伊那史学会 1993 年
- 47 市村咸人『下伊那誌』第 2 巻・第 3 巻 下伊那誌編纂会 1955 年
- 48 坂本太郎 他『信濃資料』第 2 巻 信濃資料刊行会 1952 年
- 49 平田耿二「第 2 章第 4 節信濃国へ」『長野県史 通史編 第 1 巻 原始・古代』長野県史刊行会 1989 年
- 50 牛山佳幸「第 4 章第 3 節駒と信濃布」『長野県史 通史編 第 1 巻 原始・古代』長野県史刊行会 1989 年
- 51 西山克己「信濃出土の古代銭貨の用いられ方とそれが意味すること」『長野県立歴史館研究紀要』第 17 号 長野県立歴史館 2011 年
- 52 松村恵司「出土銭貨」『日本の美術』512 至文堂 2009 年
- 53 座光寺バイパス遺跡調査団「飯田市座光寺恒川遺跡群発掘調査概報」『信濃』Ⅲ－31－4 信濃史学会 1979 年
- 54 林部 均「律令国家と畿内産土師器－飛鳥・奈良時代の東日本と西日本」『考古学雑誌』第 77 巻第 4 号 日本考古学会 1992 年
- 55 西山克己「中部高地（長野県・山梨県）出土の 7 世紀・8 世紀の畿内産土師器」『古代土師器の生産と流通－畿内産土師器の各地への展開－』奈良国立文化財研究所 2000 年
- 56 小平和夫「第 3 編第 1 章農業社会の発展－古墳時代－」『下伊那史』第 1 巻 下伊那誌編纂会 1991 年
- 57 片山祐介「飯田市美術博物館収蔵甲冑について」『飯田市美術博物館研究紀要』10 飯田市美術博物館 2000 年
- 58 北條芳隆 他「第 3 部第 2 章長野県」『前方後円墳集成 中部編』山川出版社 1992 年
- 59 飯田市教育委員会『恒川遺跡群』1986 年
- 60 飯田市教育委員会『飯田における古墳の出現と展開』2007 年
- 61 西山克己「中部高地における新来文化の受容」『第 46 回埋蔵文化財研究集会 渡来文化の受容と展開』埋蔵文化財研究会 他 1999 年
- 62 西山克己「下伊那の古墳群形成と伊那郡衙の成立」『長野県の考古学』Ⅱ 長野県埋蔵文化財センター 2002 年
- 63 友野良一・本田秀明「第 1 章第 2 編第 5 節 鎮護塚東古墳」『伊那市史』歴史編 伊那市史編纂委員会 1984 年
- 64 大塚初重「長野県大室古墳群」『考古学集刊』第 4 巻第 3 号 東京考古学会 1969 年
- 65 米山一政・倉田芳朗 他『大室古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書』長野県・大室古墳群調査会 1970 年
- 66 松本市教育委員会『松本市里山辺丸山古墳群』1993 年

- 67 西山克己 他「長野県南安曇郡穂高町所在の魏磯城窟古墳について」『信濃』第39巻5号 信濃史学会 1987年

## おわりに

長野県での生活は、昭和 61 年度に長野県埋蔵文化財センターに着任以来、早くも 25 年が経過した。大学在学中、卒業後と都県を越えて関東地方での発掘調査や勉強を重ねてきた。序でもふれたが長野県は南北約 212km、東西約 120km、面積は約 13,582㎡と広大な面積をほこり、本州のほぼ中央に位置していることから多様な環境に加え、先土器（旧石器）以来、東西南北周辺地域からの様々な文化や生活習慣を受け入れ、さらにそれらを独自の文化や生活習慣とともに周辺地域へ発信しながら、長い歴史を重ねてきた。

長野県に着任以来、古墳時代における「善光寺平（長野県北域）と下伊那地域（長野県南域）に見られる古墳時代文化の二相」、そして「渡来文化」について関心を持ち勉強を重ねてきた。このことは決して筆者自身の思いこみではなく、考古資料から読み取れる長野県内の大きな特徴であり、古墳文化を読み解く上での非常に重要な鍵となる。

また 7 世紀以降の律令国家建設に向けての全国的な動きは、長野県内の出土資料からも例外ではないことがうかがえ、最も端的に情報を伝えてくれたのが畿内産暗文土器や富本銭と和同開珎銀銭をはじめとする皇朝十二銭であった。

当論では以下ことを検証、確認することができたと考える。

- 考古学を研究するに当たって、時代の物差しとなる土器について、県内 4 地域の土器様相の違いが明らかになった。
- 篠ノ井遺跡群及び周辺地域出土の小形仿製鏡をとおして、その扱われ方や性格が見えてきた。この古墳時代における小形仿製鏡の性格が宝器として大形鏡とは異なり中小在地豪族層個人、あるいはムラ全体を守る‘儀鏡’として重宝していたことが理解できた。そしてこの小形鏡の持つ性格がこの後、律令期には富本銭や皇朝十二銭といった銭貨（厭勝銭）へと引き継がれていくことが確認できた。
- 積石塚古墳や合掌形石室について、これまでの学史を振り返り整理した結果、積石塚古墳については高句麗や百済との関わりでその起源を考えることができる状況であり、また合掌形石室については、これまでの百済との関わりだけで論ずることには現状では無理があることが確認できた。またあわせて学史で語られてきた積石塚古墳と合掌形石室のセット関係での高句麗や百済との関連についても、現状では無理があることが理解できた。
- シナノの北域である善光寺平での積石塚古墳や合掌形石室のありかた、南域である下伊那地域における横穴式石室をもつ前方後円墳を中核とする古墳群形成の推移をとらえ、これらとの関連でシナノの北域と南域での古墳時代における 5 世紀中頃から 7 世紀前半代にかけての馬の生産、カマドの構築を含めた住居構造の変化、須恵器の使用や生産等について比較検討をすることができた。このことにより、4 世紀後半、あるいは 5 世紀中頃以降に渡来人あるいは渡来系の人々を含めた「新来文化の担い手」た



ちが北域と南域を中心にシナノ全域にその足跡を残し、その在地の人との関わり方に地域毎の特徴があることが確認できた。そしてさらに「新来文化の担い手」たちの動きを確認することができた。

- 科野出土の畿内産（系）暗文土器や信濃出土の富本銭、皇朝十二銭の発見をとおして、飛鳥諸京や藤原京・平城京・平安京と地方（信濃）との関わり的一端が明らかになり、特に日本書紀の大化元（645）年や天武13（684）年の記載との関わりで、シナノ（科野・信濃）の地では都人の動きも活発であったことが理解できた。このことからこれら日本書紀の記載を明確に裏付けるものとして畿内産（系）暗文土器や銭貨が非常に重要な考古資料であることが確認できた。
- 古墳時代の埴輪に描かれた「鹿」や平安時代の土器に描かれた「鹿」の絵をとおして、考古資料、文献史料、民俗例などの検証により、古墳時代人や平安時代人の「鹿」への思いを探ることができた。山深い当地において、他地域よりも日常「鹿」との関わりが深かったことが理解できた。

以上のような「シナノ～科野～信濃」の歴史像を検証・復元することができたと考える。しかし今回の検証・復元は古墳時代から平安時代にかけての歴史のごく一部分にしか過ぎず、当論で多くが検証・復元・解明ができたとは考えていない。当論を出発点として「シナノ～科野～信濃」の歴史事実の解明に筆者自身がさらに努力しなければならないこと、そして当論をきっかけに研究者の方々の研究が進展することを期待しおわりとしたい。

平成23年（2011年）7月29日 提出